# HAPPY　CLOVER

にしだてえま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＡＰＰＹ　ＣＬＯＶＥＲ

【Ｎコード】
Ｎ８９９０Ｐ

【作者名】
にしだてえま

【あらすじ】
名門校に通う舞は成績は良いけど全然冴えない女の子。
ある日、席替えでうっかり成績優秀でイケメン男子の隣の席になってしまった！
それから始まる舞の初恋物語。
お姉ちゃんにもらったお守りが舞の運命をぐるぐる回し始めた！？
ビン底眼鏡女子と成績優秀イケメン男子の学園ラブコメ。

［この小説は「でじたる＊ぷちろわ」（管理人にしだてえま）にて連載中のものと同一のものとなります。また更新は自サイトを優先しております。ご了承くださいませ］

# 1

お姉ちゃんが結婚した！

別に驚くことじゃない。私の姉はもう２２だ。自分の意志で結婚できる年齢だ。

驚くのは、私の姉はそれまで恋愛のひとつもしたことがなく、永遠の少女のような人だったのだ。その人が突然結婚してしまった。

出会ってから１ヶ月……。

たった１ヶ月だよ！？

私は１６年（正確に言うと今年で１７年目）も姉と一緒に生活しているが、姉は今までこの世に『男性』が存在しているのを知らないのではないか？　と疑っていたくらいだ。

相手の男性は姉に一目惚れしたと言う。

確かに姉はかわいい。

……かわいいのだが、どちらかというと不思議少女系なのだ。

２２歳にもなって一人で公園に行き、滑り台に乗ってしまうような……。

そんな姉でもピアノを弾いているときは別人だった。

姉の夫になる人は姉が講師として勤めるピアノ教室の会社の人で、面接で一目惚れしたらしい。

ピアノを弾いていないときの姉もちゃんと好きになってくれたようなのが、妹としては嬉しいけど１ヶ月で結婚するというのは早計過ぎないのか心配でもあった。

なのに、姉本人はいつもと変わらず、結婚の準備もまるで公園のブランコに乗ってはしゃいでる子どものようなテンションで進めていた。

そして結婚式の前夜、姉は私の部屋にやってきて小さな封筒を差し出した。

「お姉ちゃん、なにこれ？」

姉はイヒヒと笑った。

「幸運のお守りよ」

私は悪い予感がした。

大概姉が購入するその手のモノは怪しすぎる。

「私はいいよ。お姉ちゃんのお守りなんだから、お姉ちゃんが持ってなよ」

丁重にお断りした。

しかしこのときの姉は頑固だった。

「あのね、これは恋のお守りなのよ」

「……はぁ？」

私は素っ頓狂な声を上げたと思う。

「これのおかげで私は隆史さんに出会ったの」

ちなみに隆史さんは姉のダンナさん（になる人）です。

「これはね、お姉ちゃんが公園で一生懸命探して見つけたものなのよ！」

え？　……公園で見つけた？？

私はその小さな封筒をそっと開けてみた。

中からかわいい台紙に四つ葉のクローバーを押し花にしたものが出てきた。

「……これ、お姉ちゃんが？」

「そうよぉ」

姉はちょっと自慢げに答えた。

公園に行って滑り台やブランコに乗ってるだけじゃなかったんだ！

それにしたって、大の大人が一人で公園で四つ葉のクローバーを探す図も普通じゃないけどね。

「だからね、舞ちゃんにもきっとよい出会いがありますように！」

「ちょ、ちょっと……私は別に出会いなんて！」

というか、お姉ちゃんに心配されたくないけど！　……と心の中で突っ込みながらも、姉が一生懸命探したという四つ葉のクローバーを指でそっと撫でてみた。

「きっと素敵な男性が現れるわ！　幸運を祈る！！」

そう予言めいたことを言い残して姉は去っていった。

私は残された四つ葉のクローバーをしばらく見つめていた。

姉がくれたものだから大事にしなきゃなぁ……。

そう思ってまた封筒にしまい、通学用のパスケースに入れた。

まさか、それが本当に私に運命の出会いをもたらすとは、このときは知りもしなかったのだけど……。

T市にある私の通う学校はこの地域では名門の進学校だ。

名門というだけあって制服はなんとかという世界的に有名なデザイナーさんのデザインらしい。ちなみに私はブランドモノなどには興味がないので名前すら覚えていないけどね。

ブランドモノだから制服の値段も一般の高校に比べると5倍とか！

母がお値段に仰天したが、名門校に３０番以内の成績で入学できた私にご褒美で喜んで購入してくれた。

私の住む町はT市から電車で３０分くらいかかる小さな町だ。この町から名門校に進めるのは学年で数人いるかいないか……。

だから母は密かに鼻が高いらしい。

私と言えばこの小さな町から早く出たくて一生懸命勉強しているだけなんだけどね。でも成績が良いことを怒る人っていないでしょ？

そんな小さな町だから遊ぶところもない、っていうのが本当のところだったりするんだけど。誘惑もないから勉強するしかないわけ。

それでT市の名門校に通うことになっても帰宅部だから相変わらず誘惑のない日々。

成績も常に５０番以内はキープ。……本当は１０番以内をキープしたいところなんだけど、どうも苦手な教科ができちゃって、なかなかうまくいかない。

それでも私は優等生としてクラスメイトからも一目置かれていた。

でも……どっちかというと「優等生」だから一目置かれているのではなくて……あまりにもかわいくないからみんなが近寄りたがらないのが本当のところかもしれない。

そう、私はお姉ちゃんのようなかわいらしい容姿には恵まれなかった。

おまけにとても目が悪くてビン底眼鏡が手放せない。ビン底って

わかる？　本当にレンズが厚くて重たいのよ。変なフレームしかないしね。

そんな私だから女友達も別のクラスに中学校からの友達が2人いるくらいで、クラスにはまともに話をできる友達なんかいない。

みんな成績もなかなかで、おしゃれにも手を抜かず、いつもかっこいい男の子の話で盛り上がっている。

私はそんな話題には入っていけないし、男子にも興味がなかった。

だいたいそんなお付き合いにうつつを抜かしていたら、いつまでもあの小さな町から出られないじゃない！

私はこのT市からも羽ばたいて有名大学に進学するのが夢なのだ。

そのときはみんなの鼻を明かしてやるわ！　……なんて思っているんだけど。

でも高校2年になった今、私の前に数学という難敵が現れた。前から得意ではなかったけど、最近は数字を見るのも苦痛になってきた。

そりゃ文系に進めばそれほど数学は必要ないけど、有名大学の入試には数学は依然として必須だ。

そろそろ私も塾か予備校に通わなきゃいけないのかな……。

そんなことをボーっと考えていた。

というのも、今は水曜日の6時限目。一時間のＨＲなのだ。

今日は席替えをするらしい。クラス委員が黒板に座席の図を書いて、くじ番号を記入している。

我がクラスは1年の頃から席替えをくじ引きで行うのが慣例になっていた。

そうそう、うちの学校は1年と2年は持ち上がりで3年になるとコース別にクラス替えがあるのだ。だからこの席替えは既にマンネリ化したクラスメイト達の毎月の楽しみでもあった。

私にとっては毎月のやっかいな行事だったけど。

そんな私の目の前に突然箱が差し出された。

「高橋さん、引いてよ」

呼ばれて私ははっとする。クラスメイトに名前を呼ばれたのも久しぶりでびっくりした。

丸くくりぬかれた箱の穴に手を突っ込むと四つ折になった紙の感触。

どうせどこの席になってもいつもと何も変わることはないのだし！

と、適当に選んだ紙を開くと『１６』と書いてあった。

「はい、高橋さん、１６ね」

箱を持ったクラス委員が黒板で書記係の女子に伝える。

「ええーーーーーーーーっ！！」

途端に男子からも女子からも声が上がった。

私はきょとんとして黒板を見る。

ああ、左一番後ろ。一番人気のある席だ。

突然後ろから肩をがしっと掴まれた。

「高橋さん、一生のお願い！」

後ろの席の女子が真剣な顔で私に手を合わせている。

「席、替わって！！」

いつもなら快く交換するところだけど、一度一番後ろの席にも座ってみたいと思っていたのだ。

「えっと、今回はごめん」

丁重にお断りした。

他の女子からも頼まれた。

みんなそんなに後ろの席がいいのね。居眠りできるし、内職できるし？

それでも今回は全部丁重にお断りした。

だってそんなラッキーな席を自分で引いたんだもの！

女子は普段から親しくない私が拒否すると、それほど食い下がってはこなかった。そりゃまぁ、そうでしょ。親しくない人に断わられて「それでも！」っていうのは相当図々しい。

私は自分の荷物をまとめて、左一番後ろの特等席へ向かった。

そういえば、このクラスは高校だというのに小学1年生のように男女が隣り合わせで机を並べている。

あれ？　そういえば隣の人は……

私は目的の席の隣のヤツを少し離れたところから見た。

え？

黒板を見ると間違いなくソイツの名前が左一番後ろの私の隣に書いてある。

えええええ？

男子に興味がない私でも、ソイツの名前は知っていた。

ソイツは私と視線が合うとニッコリと微笑んだ。

「高橋舞さん、よろしくね」

私はたぶん口をあんぐりと開けてマヌケな顔をしていたと思う。

「よ、……よろしく」

それだけをようやく言って、ソイツを見ないように自分の席に着いた。

ソイツの名前は清水暖人（しみずはると）。

この学年で一番成績が良く、カッコいいと言われている男子だった……。

## 2

左一番後ろの席って、私の教室では窓際の一番後ろの席でもある。

今日は朝から眩しいくらい晴れている。

こりゃ、午後からは睡魔と闘わなきゃダメかな……。

……なんて暢気なことを考えていたんだけど、1時間目でその考えはあっさり却下されてしまった。

1時間目は世界史だ。今日は先生が体調不良で欠勤したらしく自習になったのだ。

プリントが配られて自習監督の先生が教壇から見張っている。

私は世界史よりは日本史の方が好きだから、気乗りがしないけどプリントに向かった。

クラスの皆もプリントが回収されると聞いて割とまじめに取り組んでいる。

……が！！

例外がいた。そう、私の隣の席のソイツだ。

気がつくとソイツは窓の外を眺めているようだった。

ちょっと、プリントやらなくていいの？

と、私はプリントに向かったまま心の中で思う。

そしてちらりとソイツの机の上を見た。

！！！！！！！！！！！！！！

えっと、まだ授業開始から5分くらいしか経ってないと思うんだけど……

びっくりした。

もう全部解答が書き込まれていた。

……ありえない。なんで？　どうやったらそんなに早く解答できるの？？

私は急に闘争心がめらめらと燃え上がるのを感じた。

そこから頭をフル回転させて鉛筆を走らせる。

それでも終わって時計を見ると３０分はかかっていた。

私の中のプライドがちょっとばかり傷つく。

そりゃ私は学年でせいぜい良くて２０番くらいの成績ですよ……。

これでも頑張ってるつもりだった。

いや、でもさ、よく考えたら早ければいいってわけじゃないんだよね！

そう思ってまた隣の机の上をちらりと見た。

……私の負けです、はい。

間違っているわけなんかない。しかも字も男子にしては読みやすい綺麗な字だった。

なんてこった。全然勝負になってない。

でも、私は負けず嫌いなのだ。

『打倒！　清水暖人！！』

密かに心の中で叫ぶ。

いつか、お前を倒してやる！　見てろー！！

そんな私の心の中に燃え上がる炎のことなどつゆ知らず、ソイツは1時間目が終わるまでずっと窓の外を眺めていたようだった。

そして、2時間目がやってきた。

2時間目は数学だ。……私の苦手な。

嫌々教科書と黒板と先生を見る。……よくわからん。わからないけど黙々とノートに板書を書き写す。

ん？

私はずり落ちてきたビン底眼鏡を低い鼻に掛けなおす。

んん？？

……。

まずい。先生、字がだんだん小さくなってます。よく見えないんですが……。

こんな分厚いビン底眼鏡でも見えないとはどういうことだろう。

というか、席替えしたときにそのことに気がつかなかった私が迂闊だった。

どうしよう……。

そうだ、いいこと思いついた！

私は少し口元に笑みなんか浮かべながら、1時間目と同じように隣の机の上をチラ見した。幸いさっき見たときに綺麗な読みやすい字だってことは確認済みだし。

しかし……私の期待はあっけなく裏切られた。

あの……清水くん、ノートは？

ソイツの机の上にはかろうじて教科書が開いてあるだけで、肝心のノートがない！　筆記用具すら出してない。

しかも1時間目と同じくソイツはお天気の良い窓の外を眺めているらしい。

思わず私は目を上げてソイツを見た。

え？

何かの間違いかと思ったが、間違いじゃない。

目を上げるとソイツと目が合った。

びっくりして目が離せなくなった。心臓が壊れるんじゃないかと思うくらい激しく動き出す。

「やっとこっち見たね」

……はい？　今なんと？？

「ずっと『いつ気がついてくれるのかな』と思ってたんだけど」

……ずっと？　っていつからですか？

「1時間目からずっと見てたのにな」

……何を？

私はソイツと目が合ったときから硬直したように瞬きすらしてなかった。

これが『鬼に魅入られる』というヤツか？　と思う。

そこではっとして私はようやく瞬きをして、とりあえず呼吸をした。呼吸もしてなかったのか、私。死んでしまうぞ。

「えっと、板書写さないの？」

小声で言った。

ソイツはニコっとして「なんで？」と聞き返してきた。

やめて。そのニコっていうのは！　……何だか心臓が鷲づかみにされた気がする。

「高橋さんこそ、なんでそんなに一生懸命ノート取ってるの？」

「普通ノート取るでしょ？」

「そう？」

……そう？　って……じゃあ、何？　いつも取ってないわけ？

「だって教科書にも書いてあるでしょ」

「そりゃそうだけど……」

確かに、アンタの言うことは正しい。正しいが、教科書に書いてあることを読んだだけで理解できたら学校の先生は必要なくなるじゃない？

「書いて覚えるのよ！」

そう！　書くと覚えるんだよ！！　私は勝ち誇ったように答えた。

しかしソイツの答えは「ふーん」とそっけなかった。

「まぁ、いいや」

……いやいや、待てよ。全然良くない。

私はようやくソイツとコミュニケーションを取るはめになった緊急事態を思い出した。

「あの、私、黒板の字が読めないところあるんだけど」

「ああ！」

なぜだかソイツはとても嬉しそうに返事をした。顔を見るとぱーっと笑顔になって、また私は心臓が痛くなった。

「いいよ、読んであげるよ」

「ありがとう」

「いいよ、お礼なんて。ほっぺにちゅーとかで」

……は？

「……え？　スルーしちゃう？」

ていうか、ナンデスカ？　ほっぺにちゅーって？？

「じゃあ、やめた」

「ま、待って！」

慌てて私は自分の意識を現実に引き戻した。困るのだ。読んでもらわないと。

「私、数学苦手なの」

「ふーん。いいこと聞いた」

ソイツは悪魔のような笑みを浮かべた。……いや、コイツは悪魔だ、間違いない。

「まぁ、ちゅーはそのうちでいいよ」

そう言ってソイツは私のノートを覗き込んだ。

ちょ……近すぎます！！

しかもなんかいい匂いとかするし！　紅茶みたいな？　……これって香水なの？？

何だか頭がクラクラした。

私の心臓はこの何分かの間に1時間分くらいの働きをしたかもしれない。何か悪い病気かもしれないと心配になる。

それからソイツは私の書き取るスピードに合わせて黒板を読んでくれた。

しかも頼んでいないのに、次の時間からも私のノートを取る手が止まると、ノートと黒板を見比べて読み上げてくれた。

私は素直に彼に感謝した。……勿論心の中で。

だって言葉にしたらまた何か言われそうだもの。「お礼は……」とかね。

でも、あれって……その、ほっぺにちゅー？　……って、冗談だよね？

相手は私だよ？

冗談でも私にそんなこと言って楽しいんだろうか？

私はソイツの顔を見ないようにした。見ると本当に心臓が暴れ出しそうで怖い。

それでも彼が私のノートを覗き込むたび、いい匂いがしてクラクラする。お願いだからそんなに近寄らないで！

……でもなぁ、この匂い、結構好きかも……。

そんなことを思う自分が変態チックでますます私は混乱していた。

## 3

席替えから2日が経った。今日は金曜日。

私の通う名門校は残念ながら私立で土曜は休みではない。それでもようやく一週間が終わるという感じがして気分は少し軽い。

でも、今日の私はちょっと違う。

昨日から隣の清水くんが私のノートを取る手伝いをしてくれるようになって、それはそれはとても助かるのだけど、とても困ってもいたから……。

だって近すぎるんです！！

目がいいのならそんなに接近しなくても私のノートくらい見えると思うんだけど？

そしてソイツは男のクセにやたらいい匂いがするのだ。

昨日、帰宅して私は思わず母に聞いてしまった。

「ママ、最近は男性も香水なんかするの？」

……この歳になっても「ママ」と呼んでいるのがちょっと恥ずか

しいけど、私の母はとにかく「ママ」と呼んでほしいみたいなのだ。一度だけ小学生のときに「お母さん」と呼んでみたら、返事の代わりにとても恐ろしい目で睨まれた。

「舞……お洒落に無頓着なところはあなたのいいところだと思うけど、もう高校生だし無頓着すぎるのもどうかとママは思うわ」

それは質問の答えではないと思うけど、さすがに私は少し傷ついた。

「つまり、男性も香水をする時代だということ？」

「舞ちゃん……」

母は優しく微笑んだ。何だか怖い。

「あなた、何時代生まれ？」

「白亜紀くらいかしら」

「……そう。……ってそれじゃ化石じゃない！　自分で認めちゃだめよ！！」

ということは、今はそういう時代なのか。

「ママは香水なんかつけたことあるの？」

「あるわよ」

……へぇ。意外だった。

「それより舞ちゃん」

母はさっきとは違う意味ありげな微笑を浮かべていた。ますます怖い。

「誰か好きな男の子でもできたの？」

「は？　なんでそうなるの！？」

思わず私は大きな声をあげてしまった。

「だってその男の子は香水つけてるんでしょ？」

「違うよ！　……あの、隣の男子が……」

「あら、隣の席の男の子を好きになっちゃったの？」

「ちがう！！！！！」

母は何としてでも好きな人と香水を結び付けたいらしい。

「もう、いい」

私は母に聞いたのが間違いだったとようやく気が付き、苛立ちを大きな足音に変えて階段を駆け上がり自分の部屋のドアを閉めた。

それからおもむろにパソコンを立ち上げた。最初からネットで調べればよかったのだ。

そして驚いた！

男性用の香水なんてものまである。まさに目から鱗。

調べていると紅茶の匂いに模したものがいくつかあることがわかった。「男女問わず人気の香り」と書いてある。

そうそう、あれ、何だかいい匂いで……

気がつくと私は目を閉じてその香りを思い出そうとしていた。

うわっ！　ちょっと私、何やってんの？

正気に返ったあとは鬼のように勉強した。でもあまり頭に入ってこなくて、同じところを何度も読んだり、行を飛ばして読んで意味不明だったり、散々だったけど……。

そして、今日も昨日と変わらずソイツはご丁寧に私のノートを覗き込んで黒板を読み上げてくれた。

私はその匂いがするとおかしな気分になりそうなので、ソイツが近寄ってくると同じ距離だけ避けるようになってしまった。

ソイツは私の様子を見て少し不機嫌そうな顔をしたが、何も言わなかった。

しかし、事件はすぐに起こった。

ソイツは私の態度を逆手に取って、不意にこっちへ近寄ってきた。

私は驚いて同じ距離だけ飛び退った。

でも驚いた分、勢いがついて私のお尻が着地したところは椅子ではなく……

ガッターン！！

……床だった。

「っぶ！」

ソイツは笑いを噛み殺そうとしているようだが、目尻に涙まで浮かべてウケている。

先生も含めてクラス中の視線を一気に受けて、私はどこかに消えてしまいたいくらい恥ずかしかったが、痛みとショックで間抜けな格好のまま腰が立たなくなってしまった。

「ごめん、立てる？」

ソイツは私が立ち上がれないことに気が付き、手を差し伸べてきた。でもまだ目が笑っている。

私は自力で何とか椅子に座った。もう意地でね。

「高橋、どうした？」

先生が驚いた顔で近づいてきた。そりゃ驚くだろう。居眠りしていたとしても授業中にいきなり椅子から転げ落ちる生徒なんか滅多にいない。

「先生、すみません。僕がからかったせいです」

私が言葉を発する前に隣のソイツが言った。

「高橋さん、ごめんね」

私は猛烈に腹が立っていた。

そういうことか！　私を笑いものにして楽しいか！！

先生はソイツの言葉に納得したのか、すぐに踵を返し授業に戻った。クラスのみんなは何となくヒソヒソと私のことを話しているようだ。気分が悪い。

「……怒った？」

私はソイツの言葉を無視した。これで怒らない人間がいるか！？

「ごめん。本当は忠告しようと思ったんだ、『落ちるよ』って」

……それはご親切にどうも！　落ちてから言われても遅すぎるけど！！

「だって高橋さんが俺のこと避けるから」

……え？　何？　私が悪いとおっしゃるんで？？

「ちょっと傷ついたな」

……はい？　被害者は私ですけど？

「そんなに俺のこと嫌いなわけ？」

「嫌いです」

私は反射的に言った。

「即答かよ」

頬杖をついてソイツはため息をついた。

……もしかして、本当に傷ついてる？　どうして？？

「あの……」

私は思わず口を開いてしまった。何を言おうとしたのか自分でもわからない。でもとにかく何か言わないといけない気がしていた。

「それ、香水？」

自分の顔が赤くなるのを感じた。

「あ、これ、嫌いかな？　クサい？」

ソイツは自分の襟元を掴んだ。何だかその仕草は色っぽい。……って何考えてるの、私？

「えっと、そうじゃなくて……」

私は言葉を選ぶのに苦労した。

「嫌いじゃなくて、むしろ……」

マテマテ。私は何を言おうとしているんだ？

私がしどろもどろになっているのを見て、ソイツはニッコリとした。

「そう。それならよかった」

その笑顔は男の人でもこんな綺麗な顔の人がいるのか、と思うくらいまぶしかった。胸の奥が何かにぎゅっと掴まれたような感じがして、途端に心臓がまた激しく動き出した。

「ごめん、痛かったよね」

心配そうな口調でソイツは言った。さっきは思い切りウケてたく

せに。

「別に、もういいです」

私はぶっきらぼうに言った。うるさいくらいの鼓動を気が付かれないように表情を能面のようになくそうと努力する。思えば私も必要以上に避けたのがいけないのだ。

「そんなに近寄らなくても見えるでしょ」

「うん、気がついてた？」

……わざとですか。でも何のために？

「私に近寄っても何もいいことありませんよ。いい匂いがするわけでもないし」

私は自虐的な笑みを浮かべて言った。

「わかってないね、高橋さんは」

思わず眉に皺が寄る。意味がわからない。

「でもそういうところが……」

ソイツは意味ありげに笑った。

……その続きは？

私はしばらくソイツの言葉を待っていたが、結局その続きを聞くことは出来なかった。

## 4

席替えから3日が経った。今日は土曜日。

やっと土曜日が来た！　と感じるくらい席替えからの毎日は私にとって長かった。隣の席の人間がヤツになっただけでこんなに毎日疲れるとは……。

今日も無駄にお天気がいい。T市は今の季節が天候も安定していて一番いい季節だと思う。

休み時間にそんなことを窓の外を眺めながらぼーっと考えていると、突然聞いたことのない女子の声が聞こえてきた。

「あら？　……あなた」

他のクラスの生徒が教室に入ってくることはそれほど多くはないが、全くないわけでもない。大して気にせず、読みかけの本の続きを読もうかと鞄の中に手を突っ込んだときだった。

「高橋さん……よね？」

「は、はい！」

私はいきなり名前を呼ばれて驚いた。まるでこそこそ内職をしていて不意に先生に当てられた生徒のようにびくびくと返事をしてしまった。

「英理子、いきなり呼んだら高橋さんびっくりして椅子から落ちち

ゃうよ」

隣のソイツは英理子さんとやらに余計な助言をする。

「なにそれ？」

と言いながら英理子さんとやらは上品な笑顔を浮かべた。私はようやく彼女の顔を正面から見た。

「お姉さん、ご結婚されたんですって？」

「あ、そ、そうなんです。ゴケッコン……いや、結婚しました」

英理子さんにつられて丁寧な言葉を使おうとして思い切り失敗してしまった。

「おめでとうございます、って伝えてくださいね。母も喜んでたわ」

「……はぁ……」

その前に、英理子さんって……どなた？

私の疑問が清水くんには伝わったらしく「英理子、高橋さんに自己紹介しないと」と言った。

「え？　高橋さん、私のこと覚えてない？」

英理子さんは目を見開いて口に手を当てた。英理子さんの目は大きくて、そんなに見開いたら落ちちゃうんじゃないかと心配になった。

覚えて……？

私は一生懸命記憶をたぐり寄せたが残念ながら英理子さんのことは思い出せなかった。

「英理子のお母さんがピアノ教室をやってるんだけど」

隣のソイツの一言でようやく私は頭に電球マークがついた。

「神崎さん！」

お姉ちゃんが以前通っていたピアノ教室が神埼ピアノ教室だった。ということは、英理子さんのお母さんが先生だったのね。

それにしても英理子さんの顔をいくら見ても何も思い出せない。記憶力は悪い方じゃないのにな……。

「そうです。小さい頃だけど、あなたと一緒に遊んだことあったのよ。もう忘れちゃったのね」

少し残念そうに英理子さんは言った。

「もう戻るわね。はるくん、それ、ありがとう」

それ……とは隣の机の上に乗っかっているやたらと難しそうな本のことらしい。なになに？　『フーコー入門』……？　聞いたこともない単語だった。

そういえば神崎英理子という名前は、テスト後に廊下に貼り出さ

れる順位の上のほうにある。勿論、いつも一番は隣の席のソイツ、清水暖人なんですけどね。

「英理子」に「はるくん」か。

清水暖人という人は私が見る限り誰にでも分け隔てなく接している。いわば八方美人。だから私なんかにも普通に話し掛けてきたりするのだろうけど。

でも英理子さんとは普通以上に仲がいいようだ。

……別にだから何だってこともないんだけど。

ふーん。

……。

……付き合ってるとか？

こういうとき友達がいない自分が少し悲しくなる。情報は全く入ってこないから、誰と誰が付き合ってるかなんて知る術がなかった。

今までそんなことを気にしたこともなかった、というのも事実なんだけど。

……って、あれ？

私、何を気にしているんでしょうか？

そうだ。隣の席のソイツが誰と付き合っていようが私には何の関係もないのだ。そう、全く無関係。

でも、なぜか少し胸が痛い。……やっぱり私の心臓、病気になっちゃったのかも……。

放課後、掃除当番だったので丁寧に掃除した。土曜日に真面目に掃除している人間なんて私くらいなものだ。でも綺麗になると心も洗われるようで掃除は大好きだ。

のんびりと帰宅準備をして下校した。どうせ急いでも電車の時間は決まっているからだ。ローカル電車は2時間に1本くらいしか走っていない。

でも少しのんびりしすぎたようで、このまま普通に歩いて間に合うかな？　という時間になってしまった。掃除を頑張りすぎただろうか。

私はいつになく急ぎ足で歩いた。既に他の生徒の姿はほとんどない。学校の周りには部活動のランニング集団くらいしかいなかった。

駅までは住宅街の小道を通る。ここは小走りで過ぎた。

少し大きな道路に出て、一息ついた。

そこに後ろから白い車が来た。私の近くに来るとスピードを落とし背後からついてくる。

……なんだ？

私は無視するようにまたスタスタと歩き出した。

すると車の窓が開く音がした。

「ねぇ、駅まで行くんでしょ？　乗っていかない？」

……うわっ！　気持ち悪い！！

私は一応振り向いて車を運転している男を見た。正確には、睨んだ。でも言葉は発しない。こんな男に返事をする義理はない。

「ねぇってば！　乗っていきなよ。急いでるんでしょ？」

男は若そうだが身なりは作業員風でお世辞にも小奇麗とは言えなかった。しかも何だか冴えない顔で……って私に言われたくないだろうけど、たぶん彼女などいないだろうと思われる風貌だった。

さすがに私もこんな男には関わりたくはない。無視して更にスタスタと歩いた。

「ちょっと！」

男はしつこく私の側に車を寄せてきた。窓から手を伸ばしてくる。

……ぎゃっ！　腕をつかまれた！！

ど、ど、どうしよう……。怖い！！

こんなとき大声を出すべきだと思うが、声すら出ない。

車に乗せられたら最後、何されるかわからない。いや……本当に最期かもしれない……。

絶対絶命！！！

離せ！　こらっ！！　はなせーーーーーっ！！

腕をねじったり、身体だけ車から遠ざかったりしてみたけど、男の人の力にはかなわなかった。

……もう、ダメ……。

抵抗する力がなくなりかけたそのときだった。

「高橋さん」

最近よく聞きなれた声が後ろからした、と同時に私の腕はパッと男から解放され、反動で私は道端によろめいた。

「危ない！」

車は突然スピードを上げて去った。

私は倒れる寸前、自転車の清水くんに何故か抱きとめられていた。……というか、抱きついていた。

「うぎゃっ！　……ご、ごめんなさい！！」

「大丈夫？　ていうか、何あれ？」

「ひ、ひ、ひっ……」

「……？」

「人さらいっ！！！！！」

一瞬、清水くんの目は大きく見開かれた。すぐに彼はお腹を抱え

て爆笑し始めた。

……あ、あの……。私、今、恐怖体験をしたばかりなんですが……。

ぽかんとしている私の顔を見て、ようやく「いや、ごめん」と彼は笑いを無理に収めたようだ。

「高橋さんが『人さらい』なんていうから可笑しくて……。でも危ないところだった。怖かったよね？」

清水くんは心配そうな顔で尋ねてきた。

「えと……声も出なくて……」

うんうん、と彼は自転車から降りて、押しながら私に歩調を合わせた。

「大声って咄嗟には出ないらしいよ。普段から練習しておくといいみたい……って今は練習しなくていいけど。俺が疑われるから」

「そうなんだ」

私は少し気持ちが落ち着いてようやく脳みそが回転し始めた。

「あ？　……あーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

「だから、今練習しなくても！」

清水くんは慌てて周囲を見渡した。

「ち、違う！　電車が……」

「ああ。もう行っちゃった？」

もう駅が見える場所に来たが、今から走っても改札を通って電車に乗るまでには5分はかかるだろう。

「……もう間に合わないわ」

がっくりと肩を落として私はトボトボと歩いた。

「じゃあさ、お昼一緒に食べない？」

「へ？」

清水くんはニコニコと眩しい笑顔で言った。あまりにも思いがけない提案に私は間抜けな返事をしてしまう。

「駅の近くに美味しい定食屋さんがあるんだけど、どう？」

「定食……」

彼のイメージと定食はなかなか結びつかなかった。でもお腹が空いてきたのは確かだった。

「どうせ電車しばらくないんでしょ？」

「よくご存知で」

「じゃなきゃ、あんな大声で電車に乗り遅れるのをがっかりしないんじゃ？」

「さすが、学年一番」

言った後で少し嫌味だったかな、と心配になっておそるおそる隣を見た。

すると彼はにっこりしながら少し肩をすくめて見せた。

「で、どうする？」

「でも私なんかと一緒だと迷惑じゃ……」

私はついクセで下を向いた。清水くんと私とではあまりにも釣り合いが取れない。こうして並んで歩いているのも、清水くんにすれば恥ずかしいんじゃないかと心配になるくらいだ。

「高橋さんって、俺のことそんなに嫌いなわけ？」

……その質問の仕方はずるい、と思う。「好き」か「嫌い」の二択で答えろということなの？

「……嫌い……とかじゃない……けど」

私は口の中でもごもごと言った。

「じゃあ……」

清水くんが言いかけた言葉にかぶせるように少し大きな声を出し

た。

「どうして私のことを構うのかわからない！」

彼は言葉を飲み込んだようだ。そして私の目をじっと見つめた。

私はだんだん自虐的な気持ちが強くなってきた。この際だ、思っていたことを言ってやる。

「私をからかうと楽しいから？　どうせ面白い玩具か何かだと思ってるんでしょ？　そして……み、みんなで私を笑って……た、楽しいですか？」

言いながら気持ちが高ぶって最後は涙声になってしまった。

別にそこまで清水くんが憎いわけじゃなかった。でも、なぜ彼が自分に必要以上に構うのかが私には全然わからない。

考えられる理由は……それくらいしか……。

「楽しいのは、当たってるかな」

ああ、やっぱりそうなんだ……。

私は俯いたまま唇を噛んだ。涙が零れ落ちそうになる。泣くな、こんなことくらいで。

「でもちょっと違うな」

……ん？

「気になるんだ、高橋さんのこと」

……今、なんて言った？

私は思わず顔を上げた。その勢いで涙がぽろぽろと頬を伝った。

「うわぁ、俺が泣かせちゃったんだよね……ごめん」

清水くんはティッシュペーパーをくれた。

「からかったわけじゃなくて……あーでも今更何言っても遅いか」

涙は止まったが、鼻水になって出てきたので慌ててもらったティッシュペーパーで鼻を押さえる。

「高橋さんをついからかいたくなったのは確かです。ごめんなさい」

ふん、やっぱりそうなんだ。

「でも、高橋さんって他の人と違うから楽しい……っていうか、嬉しかったんだよね」

……は？　嬉しいとはどういう意味……？

私の表情で彼は私の疑問を理解したようだった。

「思ったことがストレートに言動に現れるでしょ？」

……うっ！　なぜか席替えしてからそういうことになってるけど、普段の私は違う！　……はず……。

「なんていうか……他のヤツらはワンクッションあるんだよね、俺に対して」

「それは清水くんが学年一番でカッコいいからじゃ？」

「俺は、そんないいもんじゃないよ」

初めて見るシニカルな笑い顔だった。心の奥がきゅーっと痛くなる。なんだろう……。

「さて、駅に着いたけどどうする？」

気がつけばもう駅に着いていた。時計を見ると次の電車までまだ1時間半以上ある。お腹空いてきたなぁ……。

グウゥゥゥゥゥ……

思わず私はお腹を押さえた。清水くんがちらっとこっちを見る。

「……行くよね？　定食屋」

私の顔は真っ赤になっていると思う。俯いて小さく頷いた。

こりゃもう……笑われても仕方ないよ、私……。

## 5

駅の近くの定食屋はお昼時ということもあって繁盛していた。

清水くんの後ろからおそるおそる入るともわ～んと湿った空気が襲ってきて、私のメガネは一瞬で使い物にならなくなった。

それに気がついたらしい清水くんが私の腕を掴んだ。

うわっ！

ドキっとした。

よく考えればさっきの私のほうが反動とはいえ、いきなり抱きついたりして……

ギャーっ！！！

今更思い出して恥ずかしくなった。

しかもお礼も言わず、逆に「私をからかって楽しいのか？」なん

て問い詰めた挙句、勝手に泣き出したり……

……はぁ。

ため息が思わず漏れた。

清水くんに腕を引っ張られて席に着いた。

私はようやくメガネを外してハンカチで拭くことができた。よかった、これで見える。

メガネを掛け直すと向かい側に座った清水くんと目が合った。

いつも隣の席のソイツが真正面にいるのは妙な感じだった。落ち着かなくて視線を外してしまう。

「あの……さっきは本当にありがとう」

やっとまともにお礼を言えた。

「別に、俺は何もしてないよ」

清水くんは少し身体をずらして頬杖をついた。

彼はよくそのポーズをする。身長が高い分、椅子が小さく見える。

たぶん他の人がこんな格好をしていても「何カッコつけてるんだ？」と思ってしまうだろうが、彼は……違った。

正直に言って、私はしばし見惚れていたと思う。

「えっと、高校生って私たち以外いないみたいだけど……」

わざとらしく周りを見渡しながら話題を振った。だって何か話していないとまたボケーっと見惚れてしまいそうだったから……

「そうだね。普通はファストフードとかだろうね」

清水くんは面白くなさそうに言った。

「だけどいつも混んでるから苦手」

そうなんだ。私はあまり利用しないからわからない。ちなみに定食屋なんて初めてかも。

「でも清水くんと定食屋さんってギャップが……」

「そう？　高橋さんって俺をどういうイメージで見てるんだろう」

クスリと笑った。この顔はちょっと悪魔っぽいな、と自分勝手に分類する。

「どういう……と聞かれても……」

答えにくい。

勿論名前もロクに覚えていない他のクラスメイトに比べれば、清水くんについての情報はこの私にも多少は入ってくる。でもそれは

学校の誰もが知っているようなことばかりだ。

ちょうどその時注文したものが運ばれてきた。

清水くんはフッと笑って「ま、食べようか？」と言った。

彼の表情を見ていると、たぶんこういうシチュエーションに慣れているんだろうなと思う。つまり女の子を誘ったり、一緒に食事をしたり、デートをしたり……

で、で、デート……！！

「あちっ！」

私は味噌汁の温度を確かめずに具をいきなり飲み込んでしまった。

「大丈夫？」

「らいびょーふ……れす」

一応「大丈夫……です」と言ったつもりだけど、自分でもそうは聞こえなかった。口の中がひりひりする。

よくわからないが、彼が近くにいると私の思考回路がおかしくなってしまう。

冷静に、冷静に……

「それで、清水くんはもう進路とか決めているの？」

うん、我ながら高校生らしい話題！

「進路ね……」

そう。私たちは高校2年生だからもう進路について考えなくてはいけない時期なのだ。

「高橋さんは決めてるの？」

うっ！　また質問返しか！　ずるいぞ、清水暖人！！

「ウチは貧乏だから、親に『国立しかお金を出せない』って言われてるの」

「なるほどね」

これは本当のことだった。私が四大を目指すと宣言したら、ママは「できれば地元の四大に入ってちょうだい」と簡単に言い放ったのだ。

「高橋さんは文系なの？　確か数学苦手って言ってたよね」

「……そうです」

「行きたい学部はあるの？」

「あると言えばあるような……」

言葉を濁すのは訳がある。行きたい学部を言えば、地元の国立大の中でその学部がある大学は一つに絞られてしまうからだ。

その大学は正直なところ、今の私の成績で合格するのは難しい。

うちの高校は地元では名門校だが、それでもその大学を受験して合格するのは毎年１０人に満たない。それくらいの難関大学だ。

県外なら私でも楽に狙える大学はたくさんあるし、本当はあの小さな町から飛び出したいところなんだけど……

「文学部でしょ？」

清水くんはズバリ断定した。

私は驚いてメガネの奥から穴が開くほど彼の顔を凝視したと思う。

「……どうして？」

彼は「当たった！」とにっこり微笑んだ。

「高橋さんっていつも小説読んでるから、そうかな？　と思っただけ」

学校では特に話をする人もいないから休み時間はほとんど小説を読んでいた。読書のおかげで友達がいなくても学校でそれなりに生活できているとも言える。勿論、読むのは大好きなんだけどね。

「俺は……まだ迷ってる」

清水くんは漬物をぽりぽりと食べた。彼と漬物……これまた不思議な組み合わせだ。

「そういえば」

私は彼の家が確か歯科医院だという話を思い出した。

「清水くんの家は歯医者さんだと聞いたことがあるけど」

「よく知ってるね。オヤジが歯医者なんだ」

私の中で歯医者さんは痛いイメージしかない。あまり行きたくない場所だ。あのキーンという音がもうたまらない。

「後を継がないの？」

ありきたりな質問をしてしまったな、と清水くんの顔を見て少し後悔した。たぶん皆に言われるのだろう。「また？」というような表情だった。

「いい仕事だと思うけど、歯医者は過剰気味でしょ。それに俺に弟がいるんだけど、そっちの方が優秀だからさ」

え？　弟の方が優秀って……清水くんより優秀ってどんな人！？

「俺は数学に興味があるから、そっちに進みたいんだよね」

そうなんだ……。あの憎い数学に興味があるというだけで、私は

この人には敵わないという気持ちになってしまう。

「高橋さんの嫌いな数学」

そう言って清水くんはニコニコした。それそれ！　まさに悪魔の笑顔！！

「よかったら教えてあげようか？」

「いえ、結構です」

私ははっきりときっぱりと丁寧にお断りした。

「つれないなぁ」

彼は苦笑して前髪をかきあげた。ちょっと長めの前髪はくせ毛なのだろうか。無造作にかきあげても変にならないから羨ましい。

「ま、いいや。まだ時間もあることだし」

ん……？　まだ時間もある？？　……

ハッとした。

私は電車の時間を全く忘れていたことに気がつく。

「うわっ！　時間！！」

私は慌てて立ち上がった。清水くんも腕時計をちらっと見て「もうこんな時間か」と呟く。

急いで会計を済ませて私たちは駅へと走った。

清水くんはついて来なくてもいいのに、と内心思っていたけど、それは言わなかった。

改札口で一息つく。

「今日は本当にいろいろありがとう」

私はかなり息が上がっているのに、彼は同じ距離走っても涼しい顔をしていた。

「どういたしまして。いつでも大歓迎」

また悪魔の微笑みで私を見た。

……いつでも大歓迎？　何のことだ？？

たぶん私の顔に「？」と書いてあるのが見えたのだろう。悪魔は更にニコニコと笑顔を作った。

そして私の耳元に顔を寄せた。

「高橋さんって意外とナイスバディだし」

ボンッ！！！！！

私の頭の中で何かが爆発したような気がした。

「な、な、な……何をーーーーーっ！！」

「ほらほら、乗り遅れるよ」

背中を押されて改札口を通る。

階段を降りる前に振り返ると、清水くんはさっきとは違う穏やかな笑みを浮かべていた。

私は何故か恥ずかしくなって急いで階段を駆け降りた。

……からかわれてるだけだよ。

自分に何度も言い聞かせる。

きっと私は今まで彼の周りにいなかったタイプの人間なんだ。だからからかって楽しんでいるだけ。

じゃなきゃ私のことなんか構うわけないもの。

私は不意に清水くんに抱きついてしまったときのことを思い出した。

ボンッ！！！！！

またどこかが爆発した。

たぶん耳まで真っ赤になっていると思う。

非常事態だったとはいえ、初めて男の子に抱きついてしまった。しかも自分から！！

……なんだろう。あの不思議な感覚。

清水くんは女の子みたいに柔らかくはなかったけど、私の身体がすっぽり収まるくらい大きくて、パニックだった私は一瞬で安堵し

ていた。

しかも隣のいるときとは違って、彼のいい匂いが私を包んで……

……ダメだ。あのときのことを思い出すと、変な気分になる。

もっとああしていたい……

ちょっ！　私、今、何か変だよ！！

心臓が激しくドキドキし始めた。

私は自分を落ち着かせようと鞄の中から本を引っ張り出した。

ふと、パスケースが目に入る。

開いて中に入っている四つ葉のクローバーを出してみた。

……まさか、ね？

私はお守りの効力なんて信じたことがない。この世にそんな不思議な力なんかあるわけないもの。

じゃなきゃ努力するのがバカバカしいじゃない！

そう、私のように恵まれた容姿も脳みそもコネもないような人間には努力あるのみ。

見ていろ！　清水暖人！！

今に数学だって……数学だって……

やっぱりそれはムリかな……と思いながら、私はパスケースを大事にしまい、読みかけの本を開いた。

でも揺れる電車内ではさっぱり文章が頭に入ってこなくて、結局１ページも読み進まないうちに３０分が経った。

ホームグラウンドの駅に降り立つと、ドッと今日の疲れが肩にのしかかってきた気がする。

私はトボトボと帰路についた。

## 6

月曜日になるとさすがにこの席にも慣れてきたと感じた。

特に隣の清水くんに対しては土曜日のハプニングのおかげか、傍に寄られても椅子から転げ落ちるほどの過剰反応はもうしない。

見よ！　この余裕。

そんなことを思いながら昼休みは優雅に読書をしていた。

お昼はお弁当か学食か売店で何か買うか、の三択なのだけどクラスの半分以上の人はお弁当持参だ。部活の朝練がある人や家庭の都合で学食・売店派もいるけれど、我が家にはそんな余裕があるはずもなく当然私はお弁当持参派。

特に一緒に食べる友達もいないから一人で読書しながらお弁当を食べた。寂しくないと言えば嘘になるけど、これはこれで気ままでいい部分もある。

しかし、今日の昼休みは一味違った。

「あの……私と付き合ってください」

優雅に読書をしていた私の耳に、突然その言葉が飛び込んできた。女子の声だから、告白されたのはおそらく、いや間違いなく隣の席のソイツだ。

私は本のページをめくるときにチラッと隣を見た。

隣のソイツはクラスメイトに借りた漫画を読んでいたらしい。首だけ横に立つ女子に向けて優しい声でこう言った。

「俺、今気になる人がいて、キミとは付き合えないよ。ごめんね」

あらあら……かわいそう……。

あっさりと断る隣のソイツの態度は、こんなシチュエーションに慣れているのかスマートすぎるくらいだと思う。

それにしてもショックだよね……。勇気を出して告白したのに「気になる人がいるから付き合えない」なんて即答されたら……。

……へぇ。清水くん、気になる人がいるんだ。……気になる人？

私は一瞬のうちにそこまで考えて「あれ？」と思った。一応、目は本の文章に戻っているが、脳はまったく別のことを考えている。そこに更に衝撃的な言葉が飛び込んできた。

「その気になる人って、私よりもかわいい人なんですか？」

「うん」

！！！！！

脳が完全にフリーズした。

その間も隣のソイツの言葉は不思議と私の脳の中に刻み込まれていく。

「あそこにいるサッカー部のヤツ、知ってる？」

「はい。人気ある人ですよね」

「そう。例えばさ、キミがもし今、アイツに『付き合って』って言われたら、キミはどうする？」

「お断りします。私は清水先輩が好きなんです」

「つまり、そういうこと」

「……わかりました。でも私、諦めませんから」

そう強い口調で言った女子の顔を、私は好奇心に負けて見てしまった。

……まるでお人形のように綺麗に整った目鼻立ち。

大きな黒い瞳は隣のソイツを射竦めるように見開かれていて、彼

女がとても強い意志をもった女の子なんだということがチラッと見ただけの私にも嫌というほど伝わってきた。

言いたいことを言い終えたのか、その女子はくるりと踵を返して教室を颯爽と後にした。

隣のソイツは何事もなかったようにまた漫画を読み始めた。

……すごすぎる。

白昼堂々、告白に来た女子もすごいが、平然と断るコイツもすごい。密かにクラス全体が清水くんに注目していた。

「おい、清水。あれ、1年で一番かわいいって子だろ？　フっちゃって勿体ねぇな。いいのかよ？」

隣のソイツの前の席に、彼と一番親しいと思われる男子がドカっと座って言った。私は本を読む振りをしているが、目ではなくて耳に全神経が集中しているといっても過言ではない状態だ。いわゆる「耳がダンボ」になっているわけ。

「いいも何も、興味ない」

清水くんは漫画から顔も上げずにぶっきらぼうに言った。

「珍しいな。1年のときはかわいい子なら即オッケーだったろうが」

この男子の名前何だったかな……。私はかなり真剣に考えてみた

が、もともと覚えていないのだから思い出せるはずもなかった。

「人聞き悪いこと言うなよ」

答える隣のソイツの声が少し低くなった。機嫌が悪くなったのだろうか。

「本当のことだろ？　とっかえひっかえ……」

バンっ！

大きな音に私までビクっとした。

隣のソイツは読んでいた漫画をわざと音を立てて閉じたのだ。

「これ、ありがとう。面白かった」

思わず私は隣を見てしまった。……まさに悪魔の笑顔！

漫画を渡された男子も気圧されたようで「お、おう」と短く返事することしかできなかった。

それから隣のソイツは怖いくらいの笑顔のままこう言った。

「俺、高橋さんと話がしたいから、どこか行ってくれる？」

……わ、私？

清水くんの友達はすごすごと自分の席に戻った。その背中は小さくなっているようでかわいそうだった。

「高橋さん」

私は改めて名前を呼ばれてドキドキした。なぜかはわからない。私に話があると言っていたけど、私には全く心当たりがないのだ。何を言われるのかと期待と不安で心臓が口から飛び出しそうな勢いだった。

「全部聞いてたよね？」

「い、いえ、何も聞いてないよ。私、本読んでたし」

私はバレバレだとは思いながらも嘘をついた。ここで普通は「うん」と言えないと思うけど。

「さっきから同じページを行ったり来たりしてるみたいだけど」

うっ！　何気に見てたのね。器用なヤツ。確かに文章が頭に入ってこないから、前に読んだところまで戻ってみた。それでもさっぱり進まなかった。

「私、カタカナの名前ってなかなか覚えられなくて『この人誰だっ

たかなぁ』と思ってね」

「それ、カタカナの名前の人出てこないでしょ」

……タラリ。冷や汗が背中を伝った。

「夏目漱石の『明暗』って表紙に書いてあるように思うんだけど」

あああああ！！！！！

こんな日にこんなわかりやすい本を持ってくるんじゃなかった！

せめてアガサ・クリスティとかにしておけば……！

私はゆっくりとおそるおそる隣を見た。清水くんは意外にも少し困ったような表情をしていた。

「さっきアイツが言ったみたいに、女の子をとっかえひっかえするような男って最低……だよね？」

なるほど、それを気にしていたんだ。確かにさっき機嫌が悪くなったのは「とっかえひっかえ」という単語が出てきたときだった。

「……別にいいんじゃない？」

私は最初から他人のことにはあまり興味がないのだ。清水くんが今まで何人の女子をとっかえひっかえしようが、私には何の関係もないこと。そもそもなぜ彼がそんなことを気にするのか、よくわからない。

「それはどういう意味？」

清水くんは私の答えが予想に反していたのか、小首を傾げて聞き返してきた。その動作にちょっとドキッとする。

「どうって……それは人それぞれだと思うから。私が好む好まないは関係ないことだと思っただけ」

私の答えを聞いて考え込むように清水くんは片肘で頬杖をついた。

「つまり、高橋さんは俺に興味がないということ？」

ん？　どうしてそういう方向に持っていくんだろう……。

「きょ、興味って……」

ある、と言えばかなりの問題発言だと思うし、ない、と言えば機嫌悪くなりそうだし……。

「答えにくいでしょ？」

清水くんはにっこりと悪魔の微笑みを見せた。知っていてわざと答えにくい質問をしているのか！　見かけとは違って、きっとコイツの中には何か黒い生き物がいるに違いない。

「じゃあ、好きな人がもしそういうヤツだったら？」

「別に……」

「気にしないの？」

「まぁ……」

「浮気されるかもしれないよ？」

「それは、そういう人を好きになったんだったら仕方ないんじゃない？」

私は正直な気持ちを言った。だけど本当はそんな経験がないから、実際はわからない。本を読んで擬似恋愛のようなことは体験できるけど、それはやっぱり現実とは違うだろうと思う。

清水くんは私をじっと見ていた。恥ずかしくなって私は視線をそらした。

「高橋さんってやっぱり変わってるね」

その言葉は少なからず私の心に衝撃を与えた。事実だけど改めて言われたくなかった。

「あ、悪い意味じゃなくて」

清水くんは慌てて付け足した。私は悔しい思いが込み上げてくるのをこらえるので精一杯だった。

「普通は『そんな男はイヤ』って思うからさ。俺だって自分の好きな人がそんなだったらやっぱり嫌だし」

へぇ……。

私は何だか意外な気がして思わず清水くんの顔を見てしまった。

「今、意外だと思ったでしょ？　俺は独占欲が強いよ」

「そうなんだ」

私ってそんなに感情がわかりやすく出るんだろうか。どうも心を読まれているようで困る。

「私は……経験がないから、本当はよくわからない」

正直な気持ちを言った。なぜだかわからないけど。

「でも好きな人くらいいたでしょ？」

自分の過去を思い返してみると、幼稚園や小学生のときに何となく「お気に入り」の男の子はいたが、その後は誰かを異性として好きになることはなかった。

「……考えてみれば、いない……かも」

「ええ！？」

清水くんは本気で驚いたようだ。でも本当のことだった。

「……変、かな？」

私はやっぱり自分が変なのかと思う。確かに周りの男子も女子も「恋」に忙しい。高校生になれば恋の一つや二つを経験するのが普通なのだろうか。その基準で考えると私は自分がオコサマなのを認めざるを得ない。

「変じゃないよ」

そう言った清水くんは穏やかな優しい笑顔だった。

「恋はしようと思ってできるものじゃないからね」

私はこくんと頷いた。

「あ、そうだ。昨日英理子がうちに来てて、土曜日の話をしたら今日から高橋さんと一緒に帰るって言い出してさ。たぶん放課後迎えに来ると思う」

……英理子さん。

私は何かとても重要なことを思い出した気分になった。そうだ、清水くんの「気になる人」って……。昨日清水くんの家に英理子さんが……ってことは？

「本当は英理子じゃなくて俺のほうがいいと思うんだけど、アイツ言い出したら絶対引き下がらないからさ」

……やっぱり二人は、つ、つ、付き合ってるってこと？

「って、高橋さん、聞いてる？」

「は？」

「いきなり自分の世界に入ってるし……」

「ご、ごめん」

「とにかく今日だけでも英理子と一緒に帰ってやってほしいんだ」

「はぁ……」

そう返事をしたものの、なぜか私の胸中は複雑だった。どうしてだろう……。

昼休み後の2時間はいくら先生の話に集中しようと思っても頭がボーっとして無理だった。相変わらず板書を読んでくれる清水くんも、しばしば私の手が止まるので訝しんでいたと思う。

そして放課後。

「高橋さん！　一緒に帰りましょう」

本当に英理子さんが私の教室までやってきた。なにごとかと周りのクラスメイトが好奇の目で私たちを見ている。けれども英理子さんは全くそんな視線は気にせず、鞄を持った私を引っ張る。

「あの、英理子さん。一緒に帰るのは私とじゃなくて清水くんの間違いじゃ？」

私は小声で言ってみる。よくわからないけど、もし私が二人の邪魔をしているなら申し訳ないと思ったのだ。

英理子さんは私の顔を正面からまじまじと眺めた。そして「ああ、そういうこと」と何かを一人で納得したようだった。

「ま、いいから一緒に帰りましょ。そうしたらわかるから」

「何が？」

「ウフフ。いろんなことが、ね」

……「ウフフ」って、何だか怖いですが！

こうして私は英理子さんと駅まで一緒に帰ることになった。思えば、こんなふうに女の子と一緒に下校するなんて久しぶりだった。

土曜日の「人さらい事件」について英理子さんから聞かれることを答えながら、私は彼女を密かに観察する。小顔なのにとにかく目が大きい。女の私でもじっと見つめられると恥ずかしくなってしまうほどだ。

昼休みに清水くんに告白していた1年生の女子も美人だったが、英理子さんはそれ以上にかわいいかもしれない。

――その気になる人って、私よりもかわいい人なんですか？

――うん。

その言葉が何度も頭の中をぐるぐると回った。その人が今、私の隣にいる。

私は言いようのない痛みを感じた。胸の奥が痛い。何だろう、これ。初めて感じる痛みだった。

そのとき英理子さんが何かを感じて後ろを振り返った。私もつられて振り返る。

英理子さんの視線の先には、土曜日と同じように自転車に乗った清水くんがいた……。

## 7

「はるくんって……ストーカー？」

英理子さんは眉をひそめて小声で言った。

そうじゃなくて英理子さんを追ってきたのでは？　と思ったが口には出来なかった。

清水くんは英理子さんが振り返ってからは私たちとの距離を保ちながらゆっくりとついてくる。こちらの様子を伺っているようだった。

「ああ、もう！　何だか気持ち悪い！」

そう言うと英理子さんは勢いよく後ろを向いて仁王立ちした。ちゃんと腰に手を当てているところが何だか男らしい。……ってかわいい女子なんですけどね。

そして清水くんを真っ直ぐ指差した。

ちなみに私たちと清水くんの距離は、大声でなければ声は聞こえないくらい離れている。

私は何が起きるのかわからず無意味にドキドキしていた。

英理子さんは清水くんに向けた指を大きく振り上げてもう一度彼を指差す。

そしてその指はすぐに左の方角を指差した。

……これは何かのジェスチャー？

更に英理子さんは左手を腰に当てたまま、指差していた右手でシッシッと犬でも追い払うようなジェスチャーをした。

それを見た清水くんはまるで飼い主に酷く怒られた犬みたいに肩を落として引き返した。

私は茫然としてその光景を見ていた。

「よし！　邪魔者は帰ったわ」

英理子さんは満足げに微笑んで私を見た。それはすぐに怪訝そうな表情になる。

私はようやく我に返って「今のは？」と尋ねた。

「そうね、『アンタの家はあっちでしょ？　Ｇｏ　ｈｏｍｅ！』……という感じかしら？」

え、英理子さんって……。

私は口を開けたまま一瞬放心していた。

「ウフフ、高橋さんってはるくんの言うとおりね」

え？　私は清水くんに一体何を言われているんでしょうか？　どうせからかうと楽しいとかそういうことだろうけどさ。

でも英理子さんは少し身をかがめて私の顔を下から覗き込むような仕草でこう言った。

「か・わ・い・い！」

――は？

「わかるなぁ。はるくんがつい構いたくなるのも」

おっしゃる意味が私には全然わかりませんけど……。

「ねぇねぇ、高橋さんの名前って『舞ちゃん』だよね？」

「そう……です」

なぜか丁寧語になってしまう私。どうも英理子さんのテンションについていけない。清水くんといい、英理子さんといい、この何日か私は他人に振り回される運勢のようだ。

「じゃあこれからは『舞ちゃん』って呼ぶわね」

「はぁ……。そう呼ぶのは家族だけですが、よければどうぞ」

「私のことは『英理子』でいいわよ」

いきなりそれは無理ですよ、英理子さん。

「『英理子さん』でもいいですか？　何となく脳内ではそうお呼びしてたので」

英理子さんは私の言葉を聞いてとても嬉しそうに頷いた。

「あとね、その丁寧語はやめましょう？　……私の言葉遣いも少し変だけど、これはなかなか変えられなくって」

「……努力します」

「だから！」

「あ、えっと、『努力するね』……とか？」

「そうそう」

英理子さんは思い切り私の肩をバシッっと叩いた。痛いよ！　本気で！

「舞ちゃんとはとってもいい友達になれそうな気がするの。よろしくね」

「こちらこそ、よ、よろしく」

正直な気持ち、かなり複雑だった。英理子さんが私のことを友達と言ってくれたのはものすごく嬉しい。こんなにかわいくて素敵な人が友達になろうと言ってくれるのは、何かの間違いじゃないかとさえ思う。

でも、英理子さんがどうして突然そんなことを言い出したのかよくわからない。それは……その……清水くんと関係あることなのだろうか。

そういえば昨日英理子さんは清水くんの家に行っていたらしいけど……。

そんな私の悶々とした想いなど知るはずもない英理子さんは、スキップでもしそうな軽やかな足取りだった。

「もう待ってるかしら」

……待ってる？　誰が？

不思議そうにしている私の顔を見ると、英理子さんは悪戯っ子のようにニタっと笑った。そして時計を見る。

「電車が遅れてなければもう着いたわね。急ぎましょう」

……一体何のこと？

私の心の中を見透かすように英理子さんはまた「ウフフ」と笑う。

駅に着いた私たちは何となく急ぎ足で階段を上った。英理子さんは改札口の方をちらちらと気にしながら私を急かすように早足になる。

「いたいた！」

英理子さんの視線の先には大学生らしい男の人がいる。こちらに気がついて手を上げた。

「お帰りなさい」

「ただいま、英理子。こちらは？」

その男性は長身で少しがっちりタイプ。でも顔はとても優しそうな好青年だった。

「紹介します。友達の高橋舞さん。はるくんのクラスメイトで、今、隣の席の……」

英理子さんがそこまで言うと、その男性は「ああ、君が」と私を改めてまじまじと見る。見るというよりは観察されているようだけど……。

「それで舞ちゃん、こちらは私がお付き合いしている遠藤哲史（えんどうてつし）さんです。大学生なの」

「ど、どうも。よろしく……」

私は恐縮しながら頭を下げた。

――って！？　お付き合い？　英理子さんの彼氏！？

「あの……」

私は英理子さんに清水くんのことを聞こうとして口を開いたが、なんと聞けばいいのかわからず言葉が続かない。なので口をぱくぱくする羽目になった。

英理子さんは私の言いたいことがわかったようで、艶然な笑顔でひとこと……

「はるくんと私はイトコなのよ」

と、種明かしをした。

「何？　友達なのに言ってなかったの？」

英理子さんの彼氏の遠藤さんは不思議そうに私と英理子さんを見比べた。

「だって、舞ちゃんが勝手に勘違いしてるんだもの」

「勘違い？」

「私とはるくんが付き合ってると思ってたんでしょ？」

そう意地悪そうな笑みを浮かべて英理子さんは私を見た。遠藤さんは「なるほど」と納得したような顔でまた私を見る。

二人に見つめられて、私の顔は発火するのではないかと思うくらいかーっと熱くなった。

――って、勘違いしてたの知ってたのか！

英理子さんをちょっと冷たい目で睨む。

「ごめんね、舞ちゃん。騙すつもりじゃなかったのよ。でも哲史さんも紹介したかったからちょうどいいかなと思ったの」

「いえ、勝手に勘違いしていたのは私ですから……」

口調に刺があるな、と自分でも思った。英理子さんは少し悲しい顔で俯いてしまった。

「勘違いするのも無理ないさ。英理子の家の親戚ってすごく仲がいいんだ。昨日もはるくんの誕生日で皆んな集まっていたからね。俺もお邪魔したし」

遠藤さんはフォローするように優しくそう言った。とても感じのいい人だと思う。英理子さんも気を取り直したのか、遠藤さんを見上げて頷いた。

「そうなの。昨日ははるくんの家でお誕生日パーティーだったの。そこではるくんから舞ちゃんの災難の話を聞いて、哲史さんと駅で待ち合わせのときは舞ちゃんと一緒に帰ろうって思ったのよ、……ね？」

英理子さんの問いかけに遠藤さんも頷いた。二人の様子はとっても仲睦まじくて見ているほうが恥ずかしくなりそうだ。

私は英理子さんの好意に、先ほどの自分の態度を少し反省する。

「英理子さん、ありがとう」

小さな声で言った。英理子さんの顔にパーっと笑顔が戻る。本当にかわいい人だ。女の私でもドキドキしそうだ。

その後少し遠藤さんの大学の話を聞いた。そうこうしていると私の電車の時間になったので二人に見送られて改札を通る。

――英理子さんと清水くんはイトコだったのか……。

勝手に二人が付き合っていると早とちりした自分が滑稽で、誰もいないところでこっそり苦笑した。

そして何故だか私はほっとしている自分に気が付く。

――ん？

でも、また疑問が湧いてきた。

――じゃあ、清水くんの「気になる人」って？

英理子さんじゃないということは、他にいるということだ。また私の中にもやもやした変な気持ちが渦巻いてくる。

何故そんなことを気にするのだろう？　自分でもよくわからない。これじゃあまるで私が清水くんのことを気にしているみたいだ。

――え？

自分で自分の思考にびっくりする。

つまり私は……その、なんだ？　清水くんのことを気にしているわけ？

――えええええ！？

嘘！？　ありえない！　違う。それこそ勘違い。おかしいぞ、高橋舞。

自分の中で一生懸命自分の想いを否定してみる。

でも、もう遅い。

私はようやく自分の気持ちを自覚したようだった。

電車の窓際でボーっと流れる景色を見ながら、初めて自分の中に現れた気持ちに戸惑う。今まで誰かのことをこんなに気にしたことなどなかった。どんな人が隣の席になろうと私にとっては何の変わりもなかったのだ。

なのに、どうして？

……自分に問うても答えなど出ては来ない。

それでも私は帰宅してからも一晩中答えのない問いを自分に繰り返していた……。

## 8

翌朝、目覚めた私は全身が鉛になってしまったかのように身体が重く、起き上がるのにとても苦労した。

目覚めた……と言っても、ほとんど眠ることは出来なかった。たぶん私の脳内では今まで感じたことのない自分の気持ちを、何とかどこかに整理しようと頑張っていたのだろう。

でもそれは徒労だったようだ。たぶん昨日より悪化している。とにかく何をするにもそのことが頭から離れない。

無理矢理起き上がった私は、頭がガンガンし足元もふわふわすることに気がついた。

これは……もしかして、熱がある！？

「はぁ……」

自分しかいない部屋で大きなため息をついた。

でも学校に行かなくてもいいと思うと少し気が楽になる。こんな気持ちのままで学校に行ったらどうなってしまうのか。最近何かと失態の多い私のことだから、自分でも想像もつかないようなことをやらかしてしまいそうだ。

彼が隣の席でさえなければ……。

――って、また隣の席のアイツのことを考えてる！！

「だめだ、こりゃ……」

「何がだめだって？」

「うわぁ！」

私のほかには誰もいないはずの部屋で、誰かが返事をした。びっくりして振り返るといつの間にか部屋のドアが開いていて、母が不思議そうに私を見ていた。

「舞ちゃん、顔が赤いけどもしかして熱がある？」

さすが母。すぐに気がついた。

「そうみたい。頭痛いし身体だるいし……」

母は私の額に手を当てて自分の額の温度と比べた。

「うん、これはあるわね。今日は学校、お休みしなさい」

そう言ってすぐに部屋を出て行った。

私は起きているのが辛いのでまたベッドに潜りこんだ。夜にほとんど眠れなかったせいか、今度は三秒もしないで夢の世界へと旅立つことができた。

「こんなものがあるからいけないんだわ！」

私は自分のてのひらを見つめていた。何かが乗っている。なんだろう、これ？

「こんなもの、捨ててしまえ！！」

私は自分の意志とは無関係にてのひらに乗っているものを窓から捨てようとする。

「舞ちゃん、そんなことしたって無駄よ。イヒヒ」

「うぎゃぁ！」

私は自分の叫び声で目が覚めた。文字通り「飛び起きた」のだ。

「おはよう、舞ちゃん」

ベッドサイドには姉がニコニコして座っていた。夢の最後に「イヒヒ」と笑ったのはやっぱりお姉ちゃんだったのか……。

「お姉ちゃん、来てたんだ」

姉は軽く頷くと急に立ち上がり窓を開けた。もうお昼近いので太陽が空の高い位置で強い日差しを注いでいた。

私は背を向けている姉に思い切って質問を投げかけた。

「お姉ちゃんは隆史さんのどこか好きなの？」

姉は「うーん」と顎の下に人差し指をかざした。ちなみにしつこいようですが隆史さんは姉の旦那サマです。

「優しいところかな」

なるほど。確かにこの姉と生活できるのだから相当な忍耐力があるに違いない。

「あとね、かわいいって言ってくれるよ」

「……」

それはどうもごちそうさま。

「舞ちゃん、好きな人できた？」

「す、好きな人なんてできてないよ！」

私は突然の問いかけに驚いてカミカミになってしまった。姉はニコニコしながらベッドサイドに戻ってくる。

「ママに聞いたよ。隣の席の男の子なんでしょ？」

……余計なことをペラペラと！

でも私はもうこれ以上は否定できなかった。

「どんな人なの？」

清水くんのことを思い浮かべる。それだけで心臓がドキドキとうるさく動き始める。たぶんまた熱が2、3度上がっただろう。

「それが……学年で一番頭良くて、カッコいいって言われてる人……」

姉はふむふむと頷いた。

「で、どんな人？」

……いや、だから！　ともう一度同じセリフを繰り返そうとしたが、私はふと気が付いた。

確かに清水くんは学年で一番成績が良く、カッコいいと言われているが、それは彼の一面であって彼の性質ではないのだ。姉は彼の表面的な評価を聞きたかったわけではないらしい。

私は一生懸命言葉を探した。清水くんを説明する言葉を……

「……いい匂いがする」

「へ？」

姉は素っ頓狂な声を上げた。それはそうだろう。でも仕方ない。今すぐ浮かぶのはそれだけなのだ。

「その人がつけてる香水がいい匂いなの」

「その匂いが好きなの？」

「……うん」

これじゃまるで変な人だな、と自分でも思う。だけど私が清水くんのことをす、す、好き？　だと気が付いたのは昨日なのだ。どこが好きなのかなんて考えたこともなかった。

「そうなんだ」

姉はまたニコニコして、私の妙な返答にも納得したようだった。こういうとき、姉がこういう人でよかったなと思う。ここで突っ込まれても私は明快な答えを出すことはできないだろうから。

この日、私は家でのんびりと過ごし、夕方には熱も下がってすっかり元気になった。風邪でもなさそうだし一体なんだったのだろう。母は知恵熱じゃないかと言うが、まさか初めてのれ、れ、恋愛感情？　に自分の身体と脳がパニックになった、なんてこと……ないよね？

とにかく元気になってしまったので翌日は重い足取りで登校する。

「おはよう、高橋さん。元気になった？」

私の隣の席には当然だが清水くんがいた。

私は心臓がドキドキしすぎて胸が痛いのをこらえながら、できるだけ平静を装ってそっけなく返事をした。

「おはようございます。もう元気です」

これだけ言うのも冷や汗ものだった。朝からこんな調子じゃ、今日一日どうやって過ごしたらいいのか！？

「滅多に休まないのにどうしたのかなって心配だった」

私は驚いて隣の席を見た。私が滅多に休まないことをなぜ知っているんだろう。しかも「心配だった」って……

「ちょっと、大丈夫？　まだ熱あるんじゃない？」

清水くんの顔を見たら頭がぼーっとなってしまった。まずい。これはかなりまずい！

「だ、大丈夫。……たぶん」

「ホント？」

そう言って清水くんは何気なく私の額を触った。

「……！！」

私の表情を見た清水くんはすぐに手を引っ込めた。そして顔をこわばらせる。

「ごめん」

私はたぶん泣きそうな顔をしていたんじゃないかと思う。

どうしよう。どうしていいのかわからない。

もう清水くんを見ているのが辛かった。自分の席についた私は、彼が自分の視界に入らないように不自然に窓のほうへ身体を向けた。

なんとなく清水くんが私を気にしている気配がした。こんなときにこんなことを思うのも変かもしれないが、人間の五感はかなり鋭いものだな、と私の脳の一部が妙に感心する。

別に見たくもないが他に見るところもなく、仕方なく窓の外を見た。今日はあまり天気がよくない。私の心の中も空いっぱいに広がる雲と同じように重苦しい色になっている気がする。

さて、どうしようか。

いくらなんでもこのままでは授業もまともに受けられそうにない。それは困る。テストが近いのだ。

私はまず頭の中で問題点を整理することにした。

今、わかっていることは「私はどうも清水くんが好きらしい」ということ。

でも「清水くんのどこが好きなのか」とか「清水くんってどんな人？」と聞かれると答えられないということ。

そして「隣の席を意識しすぎて普通に座っていられない」ということ。

うーん……。

とりあえず早急にどうにかしないといけないのは三番目だな。この授業を受ける気がないとしか思えない姿勢で座っているのは腰も痛いし。

私は一つ大きな深呼吸をした。そして机の横にかけた鞄から教科書やノートを出すついでに勇気を振り絞って普通に座った。

おお！　やればできるじゃないか！

視界の隅に清水くんがちょっぴり見える。だめだ、意識するとドキドキしてしまう。深呼吸、深呼吸！

ふぅ……。

そうこうしていると担任が朝のホームルームのために教室に姿をあらわした。いつもは全然冴えない感じの担任が、今日はまるで救

世主のように見える。自分の意識がそちらに集中すると胸のもやもやから気がそれて少し楽になるのだ。

それじゃあ、次の問題点を考えてみよう。

「私はどうも清水くんが好きらしい」が「清水くんのどこが好きなのか」とか「清水くんってどんな人？」がわからない、ということだけど……それってつまり本当に清水くんのことが好きなんだろうか？

本当ってなんだろう？　本当に好き？

そんな疑問にぶち当たった私の目の前には、ひらひらとプリントがぶら下がっていた。……なんだこりゃ？

訳がわからずポカンとした私の横から手が伸びて、プリントは私の机の上に着地した。清水くんが私の代わりにプリントを受け取ってくれたのだ。

私はプリントに目を落とす。

「昨日休んだから知らないと思うけど、今日数学のテストなんだ」

清水くんが私に少し身体を寄せて小声で教えてくれた。

「そう……なんだ」

私はプリントから目を離すことが出来なかった。まずい。全然出来そうにない。どうしよう。

テストが始まった。これは複素数というヤツだったな、と（a＋bi）を見て思う。そういえば普段ものすごく真面目な数学の先生がこの虚数「i」について

「数学にもi（愛）があるんです」

なんて言って笑いを取っていた。愛ね、……愛。

それにしてもこの愛は二乗するとマイナス1になってしまうのだ。そこから既に訳がわからない。

虚数の虚という字は空虚の虚。うつろということだ。……つまり、愛とは虚ろなものだということだろうか？　愛だの恋だのとは無関係だった私には、それがどんなものかを想像することすら難しい。

じゃあ、私のこの気持ちは一体何なんだろう……

――って、うおっ！　もう残り時間5分ってどういうことですか！？

私は時間が足りないのとわからないのとで、自分の手がぶるぶると震え始めるのを感じて更に焦った。しかも手が震えるから字が上手く書けない。

「はい、そこまで」

先生の無慈悲な声が静かな教室に響いた。仕方なくシャープペンシルを置いた。解答を書き込めた箇所だけでやっと半分というところだろうか。もう絶望的だ。

解答用紙を提出した後、私は思わず頭をかかえてうつむいた。

「大丈夫？　具合悪いんじゃない？」

隣から清水くんの心配そうな小さな声が聞こえた。

「大丈夫です」

私は頭をかかえたままちらっと隣の席を見た。肘をついた腕の隙間から清水くんの綺麗な顔が見えた。

！！！！！

一度目が合うと、自分の意志とは関係なく視線がそこから動かせなくなってしまった。

心臓がドキドキとうるさい。頭の中にガンガン響くようだ。

「全然書けてなかったでしょ？」

うわっ、テストできてなかったの、見られてたのか……。

「全然わからなかったんです」
「だってあんなにきちんとノート取ってたじゃない？」
うっ！　嫌味だなぁ。
「だから数学苦手だって言ってるでしょ！」
私は思わず身体を起こして真正面から清水くんを睨んだ。清水くんも同じように背筋を伸ばしてニッコリと笑顔を見せた。
「やっと、俺を見たね」
――なんだ、そのセリフは！？
息が止まった。この人は誰にでもこういうこと言うの？
「さっき触ったの、そんなに嫌だった？」
と、自分の額を触るしぐさをした。前髪が少し上がってぱらぱらと落ちてくる。その様子につい見惚れてしまった。
「……びっくり……したんです」
だって普通、隣の席の人にそんなことしないもの。

「そっか。驚かせてごめん」

清水くんは素直に、そしてとても申し訳なさそうに謝ってくれた。少し胸が痛い。なんでだろう。誰か教えて。

「お詫びに数学教えてあげるよ」

「……はぁ」

――って、えええええ！？

隣の席のソイツはあの悪魔の微笑をたたえていた。こ、怖い！しかも私、肯定しちゃってるし。

「じゃあケータイ教えてよ」

そう言ってズボンのポケットに手を突っ込んだ。……待て待てマテ！！

「私、持ってないから」

語尾がだんだん小さくなった。言いながら自分でも恥ずかしくなって背を丸めて小さくなろうとする。

「え？」

清水くんは驚いたようだった。私はまた彼の顔を見ることが出来なくなってしまった。

「だからケータイ、持ってない……」

もうほとんど消え入りそうな声で私はやっとそう言った。

「あ、そう……なんだ」

そんな申し訳なさそうな声出さないでよ！　だってケータイなんか私には必要ないんだもの。

「それじゃあ、どうしようか？　ちょっと考えとくね」

「……はぁ」

不思議と私は素直に返事をしてしまっていた。よくわからないが、いつの間にか清水くんに数学を教えてもらうことになったらしい。それは確かにありがたい。このままだと赤点になりそうだ。

でも問題は教えてくれる人が隣の席のソイツだということだ。

私は改めて横目で隣の席を見た。途端に心臓が過剰反応する。これって条件反射なんだろうか？　隣の席になる前にも清水くんを見たことはあるが（そりゃ同じクラスだから当然だけど）、こんなに心臓がドキドキして苦しくなることはなかったはずだ。ということは、過去のある時点から私はパブロフの犬になってしまったというわけだ。

……いつから、す、す、好きになっちゃったんだろう。

その日の授業は私にとってほとんどＢＧＭ状態だった。一応ノートは清水くんが読んでくれるから頑張って取っていたけれど、内容は書きながらどんどん忘れていった。

放課後、教室の前に英理子さんが立っていた。私を待っていてくれたようだ。英理子さんの姿を見て私はなぜかとても安心する。

先日と同じように駅までの道を英理子さんの話を聞きながら歩いた。英理子さんの話も私にとってはほとんどＢＧＭ状態だったけれど……

「……ちゃん？　舞ちゃん！」

「はい？」

――うわっ！　前から自転車！！

狭い歩道のド真ん中をボケッと歩いていた。英理子さんに声を掛けられなかったら手前の角から曲がってきた自転車に激突するところだった。危ない、危ない……

「何考えてたの？」

英理子さんが私の顔を覗き込むように見ながら尋ねてきた。

「え……、あの、いまどきケータイ持ってないって変？」

「変ということはないけど、持っている人が多いのは確かよね。私も持ってるし」

英理子さんは私に気を遣うように言葉を選んで答えてくれた。

私がケータイを持っていないのは必要がないからというのが一番の理由だけど、それはつまり持っていても電話やメールが来ないということを意味する。なんと寂しいことか。自分には連絡を必要とする友達すらいないということらしい。悲しいけどそれが事実だった。

「私、連絡を取るような友達がいないの」

情けないけど私は白状した。英理子さんはとても真面目な顔で私を見た。

「それは今までの話でしょ？　舞ちゃんの相談相手、私じゃダメかな？」

ダメ、なんてことがあるわけがない。

「……いいの？」

「舞ちゃんこそ、後で後悔しても知らないけどね」

と、英理子さんはありえないことを言って笑った。

「それで、舞ちゃんは何を悩んでいるの？」

やっぱりバレてるよね。今日の私は明らかに挙動不審人物だし。

私は一つ深呼吸して、思い切って英理子さんに疑問をぶつけてみた。

「英理子さんは遠藤さんのどういうところを好きになったの？」

英理子さんは私の顔をじいっと見る。そして小首を傾げた。

「舞ちゃん、何言ってるの？」

……え？

「好きになるのに理由なんかないよ」

……は？　それ、どういう……

「強いて言えば、哲史さんに初めて会ったときに『あ、この人、タイプだな』って思ったんだけど、もうそのときからたぶん好きだったと思う。どういうところとか説明なんかできないよ」

私はその言葉にかなりの衝撃を受けた。まさに目から鱗……。

英理子さんは私の顔を見て笑う。
「舞ちゃん、そんなんじゃすぐバレちゃうよ」
「何が？」
「本人に」
――ひぇーーーー！　それは困るっ！！！！！
「こういうのは相手から言わせなきゃ」
――そんなこと無理、絶対無理！！
「あ、今、無理って思ったでしょ？」
――ひぃ！　バレてる。
「だって顔に書いてあるもん」
――なんですと！？
私は慌てて頬をこすった。その様子を見て英理子さんはプッと吹き出した。
「じゃあ自分から言ってみる？」
「無理無理、絶対無理。それに……好きだと気がついたの、一昨日だもん」

英理子さんは少し考える表情になった。

「一つ質問していい？」

「うん」

「それとケータイと何か関係ある？」

――うっ！　それは……

「……あるのね。了解」

いや、勝手に了解しないでほしいんですが。

内心青くなっている私のことなどおかまいなしに、英理子さんは更に思案顔をしている。

「そうだなぁ……」

そう言って「うーん」と英理子さんは唸った。私には英理子さんが何を考えているのか見当もつかない。

「ケータイはもうちょっと様子見てからでいいと思うわ」

「……はぁ」

「いい？　少しでも『好き』みたいな態度を見せちゃダメよ。相手は手練（てだれ）の悪魔なんだからね」

「……はぁ」

手練なんて普段あまり使わない言葉だな、と思いながら私は英理子さんの言葉の意味をようやく理解する。

――って、もしかして英理子さん、知って……る？

また私の顔に書いてあるのを読んだのか、英理子さんはニッコリと微笑んだ。

「大丈夫。私に任せといて！」

そしてバシッと私の背中を叩いた。痛い！

「いい？　舞ちゃんはなるべく好きだと気がつく前と同じようにふるまうのよ。二人っきりになっても、だからね？」

「はぁ、努力してみるけど……」

――って、二人っきり！？

そんな状況を想像しただけで頭の中がパンクしそうだ。自覚する前は、事故とはいえ抱きついたり定食屋さんに一緒に行ったりしてもここまでドキドキすることはなかったのに、もしかしてこれが恋心というヤツなの？

今度は赤くなった私を英理子さんがニヤニヤと不敵な笑みを浮かべて見ていたのだった。

## 9

二人っきりという状況は案外あっさりとやってきた。

いつも通りに登校した私の机の上に「日誌」なるものが乗っかっていた。

「今日、日直だね」

私の後から登校してきたらしい隣の席のソイツが、私の机の上を見てそうひとこと言った。

黒板を見ると「日直：清水・高橋」と書かれている。

――うわぁ！　心臓に悪いよ！！

と、心の叫びは心の中だけにとどめておくように努力しながら、私は日誌を隣の机の上にすうーっと移動させた。

ちらりと私を見た清水くんは、私がやったのと同じようにすうーっと日誌を押し戻した。

……日誌書くのって面倒なんだよ？

そう思いながら小さくため息をついた。すると清水くんがニコッと笑って、小さくガッツポーズを作った。くうっ！　負けた……。

「その代わり黒板消しは任せてよ」

と言って清水くんはまた綺麗な笑顔を見せた。

考えてみれば黒板消しのほうが嫌な仕事かもしれない。チョークの粉が制服にかかるのがやっかいだし、背があまり高くない私には上のほうを消すのが大変だったりする。

もしそれを知っていて引き受けてくれたのなら、もしかして清水くんってものすごく優しい人なのでは？　もしかして、わ、わ、私のためにわざわざ嫌なことを引き受けてくれたとか……！？

――……ないない。ありえない！

ああ、もう！

こんな些細なことですら、いちいち彼の行為の意味を考えて一喜一憂する私はバカだ。そんなことにいちいち深い意味などあるはずない。

そもそも私はたまたまくじ引きで清水くんの隣に席になっただけで、彼が私を構うのは今まで彼の周りにいなかったタイプの人間だからで、他意などあるはずもないのだ。

だいたい私はこの容姿だ。まず、この眼鏡！　これがイケてない。それに髪型も小学生のときからほとんど変わっていない。さすがに

オカッパではないけれど、限りなくそれに近い。それにスタイルも……たぶんよくない。だから流行の服なんか着ても似合うわけない。

はぁ……。

ため息をついた私に、つんつんと清水くんが腕を突っついてきた。

「……？」

「呼ばれてるよ。ほら、数学のテスト」

ひぃ！　昨日やったテストがもう返ってくるとは！？

私は渋々立ち上がりのろのろと教壇の前に出る。

「高橋、……次は頑張れよ」

その言葉で点数がかなり悪いことが解答用紙の赤字を見なくてもわかってしまった。何かが胸の中にうっとこみ上げてきてこらえるのが辛い。

そして受け取った私の目に飛び込んできたのは２８という赤い数字と数えるほどしかない丸……。

自分の席に戻りながら、唇を噛んで更にこみ上げてくるものを懸命に押しとどめようとしたが、腰を下ろした途端視界がうるんだ。

「どうだった？　ん？　……にじゅう」

私は慌てて解答用紙を裏返して机の上に伏せた。一度だけキッと

隣のソイツ睨んで自分もその解答用紙の上に突っ伏した。

――……くやしいっ！

今までこんなに悪い点数を取ったことがなかった。涙が勝手にあふれてくる。

だがしかし。

ここで気がついたのは眼鏡が邪魔だということだ。突っ伏したところまではよかったが、このままでは眼鏡に水溜りができてしまう。……というか、既にできているというべきか。

私は窓のほうに首を捻じ曲げ、顔を少しだけ上げて眼鏡を取った。もう授業などどうでもよかった。眼鏡を乱暴に机の端に置いてまた突っ伏した。

朝、あんなに浮かれていた私は本当にバカだ。

恋だの愛だのに惑わされてはいけない。そんなものに心を奪われて、いつまでもこの小さな世界から抜け出せないのは嫌なのだ。

私はこんな点数を取った自分が許せなかった。次こそは絶対挽回してやる！

そんなことを頭の中で繰り返し自分に言い聞かせているうちに授

業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。

もう涙もほとんど乾いていたので鼻をすすりながら顔を上げた。

隣の席のソイツが大きな声で

「起立！」

と言った。そういえば授業の始めと終わりの号令は日直の仕事だった。眼鏡を拭きながら立ち上がった。何気なく隣を見ると、一瞬彼もこちらを見た。

視線が合って、ドキッと心臓が跳ね上がった。

清水くんも驚いた顔をしている気がした。……眼鏡をかけていないから自信はないのだけど。

――いかんいかん！　今の私に色恋は無用。むしろ邪魔。そんなことしてる場合じゃない。

そう思った瞬間、胸がぎゅっと切なく縮んだ気がした。

昼休みに私は思い立って図書室へ足を運んだ。図書室は校舎の二階の突き当たりに位置している。

古い本の背表紙を眺めながら、本棚の間をゆっくり進む。

本棚の通路が途切れて校舎の端の窓辺にたどり着いた。今日は蒸し暑いせいか窓が開け放たれていた。

私は窓から少し顔を出して周囲を確認した。最後に下を見る。

――うん。ここなら大丈夫。今なら風もないし。

それからスカートのポケットにこっそり忍ばせてあったパスケースを取り出した。ゆっくり開いて小さな封筒を引っ張り出す。

封筒をちらりとのぞいた。確かにそこにはお姉ちゃんがくれた四葉のクローバーが入っている。

――お姉ちゃん、ごめんね。でも私には必要ないの。

心の中でそうつぶやいたが、それでもしばらく踏ん切りがつかなかった。

――よし！

私は覚悟を決めて窓から少し身を乗り出した。

「高橋さん」

――……え？

「こんなところで何してるの？」

――その声は……

「窓から落ちても知らないよ」

そう言った声の主はクスッと笑った。私は反射的に持っていた小さな封筒をポケットにねじ込み振り返る。

「なんでこんなところにいるの？」

「さぁ？」

とぼけた表情をして私のほうへ近づいてきた。清水くんだった。

――なんでこんなときに現れるんだーーー！！

何を隠そう、私はお姉ちゃんにもらった四葉のクローバーを窓から捨てようと思っていたのだ。なんて絶妙なタイミング。

「それより俺に教えてほしくない？」

何ですか？　その誤解を招きそうな表現？　しかも日本語としておかしいでしょ。目的語を端折るな！

「数学……でしょ？　それは……」

――……教えてほしいけど。

清水くんは意味ありげな笑みを浮かべた。こ、怖い！　私の顔に書いてある本心を読まれたのだろうか。

「じゃあさ、俺のウチと図書館とどっちがいい？」

――そんなの……

「図書館！」

――に決まってるじゃないか！

私は迷わず即答した。冷や汗が背中に垂れる。逆に心臓はオーバーヒートしていた。

清水くんはまたクスッと笑って

「そう言うと思った」

と言いながら私の隣に立った。外を見たかったのか、窓枠に手をかけて遠くを見ているようだ。

「じゃあ、土曜日ね。期末テストは来週だから間に合うでしょ？」

私のほうを見ずにさらりと言った。

今日は木曜日だ。ということは、明後日……。

「ＯＫ？」

「……うん」

清水くんが私を見下ろす気配がした。うわー！　そう思っただけで勝手に顔が赤くなる。誰か止めて！

彼が去っていく後姿を見てホッとしたところに、誰かが近づいてくる気配がした。

「高橋さーん！　ぐふっ」

と、清水くんと入れ違いで現れたのは同じクラスの高梨（たかなし）まゆみさ

んだった。「ぐふっ」というのは彼女の笑い声らしい。

「清水くんと仲いいんだね。隣の席になってから？」

高梨さんは屈託のない笑顔で話しかけてきた。彼女はクラスの中で唯一私に普通に話しかけてくる女子だ。長い髪を三つ編にして両脇に垂らしているが、真面目そうな容姿とは裏腹に親しみやすいひょうきん者で、男女問わず気軽に絡む人が多い。

私は彼女の問いにぎこちなく頷いた。

「そうなんだ！　清水くんって授業中寝てばかりじゃない？」

――え？

少なくとも私は隣の席になってからの一週間で彼が居眠りするのを見たことがない。

「私は寝てるの見たことない」

「ホント？　私が隣の席になったときは一日中ずーっと寝てたよ。だからあまり話したことないんだ」

高梨さんはそう言って「ぎゃは」と笑った。たぶん彼女はしゃべらなければものすごく大人っぽい美人だと思うが、しゃべっていなければ口を開けてぼーっとしている人なので、そういう顔を見ることができるのはまれだった。

私は高梨さんの笑う顔につられて思わず笑ってしまった。周りを明るい雰囲気にさせる不思議な力を持った人だなと思う。

「ま、清水くんはカッコいいけど私のタイプじゃないからな～」

「高梨さんってどういうタイプが好きなの？」

つい、余計なことが口から出た。

でも彼女は真剣に考える顔をしてうーんと唸った。そして考えた末の答えは

「私ね、マッチョ系が好きなんだよね。熊みたいに身体が大きい人とか」

だった。つくづく世の中にはいろいろなタイプの人がいるものだと思う。

「高橋さんは？」

――え！？　わ、私……？

なんと答えてよいのかわからなかった。そもそも何日か前まで好きな人すらいなかったのだし。

「わ、私は……え、えーと……頭のいい人、かな？」

適当に思いついたことを言ってみた。

高梨さんはとても感心したような表情になって何度も頷いた。

「わかるー！　高橋さんってそういう人好きそうだもんね」

――そ、そうかな？

「真面目な人好きそうだもん」

「そうかも」

「清水くんみたいな人は苦手っぽい」

「そうかも」

――……って、えええええ！？

「あの人、頭はいいかもしれないけど全然真面目じゃないからな～。授業はほとんど聞いてないし、女の子はつまみ食いばっかりしてるし」

――つまみ食い……

「ま、でも彼は相当面食いっぽいから私には関係ない話なんだけどね」

――面食い……

そうだよね。私にも全然関係ない話なんだ。

胸のどこかに棘が刺さったようだった。チクチクと痛いがなかなか取れない。そんな痛みが私をしばらく苛んだ。

高梨さんは普段から表情の乏しい私の微妙な変化には気がつかなかったようで、別のクラスの友達に声をかけられ忙しそうに去っていった。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

スカートのポケットに手を突っ込んでみる。指にカサカサと小さな封筒の感触。結局捨てることはできなかった。

「……はぁ」

小さくため息をついて私は図書室を後にした。

その日の午後の授業はぼんやりとやり過ごした。時折隣の席をチェックしてみる。眠ってはいない様子だ。

面食いにつまみ食い……。

私の頭の中ではその二つの言葉が数珠つなぎになってぐるぐると

回っている。

思えば今日は朝からアップダウンの激しい一日だった。心がぽーんと高く投げ上げられたかと思うと、そのまま何にも誰にも受け止められることなく、勢いよく地面にズボッとめり込んでしまったような感覚だ。

誰かこのかわいそうな私の心を拾い上げて、ぽんぽんと土埃も払って、ついでに元の場所に戻してくれないだろうか。

こんなに心が揺れていると何も手につかない。これじゃ来週の期末テストは昨日の数学のテストの二の舞になりそうだ。

私の名前も舞。……全然関係ないけれども！

結局この日、私は日誌以外の日直の仕事を清水くんに押し付けて、呼吸の八割をため息でまかないながら、史上最低点の数学の解答用紙を持って家に帰った。勿論、その解答用紙は親には見せず、びりびりにちぎってゴミ箱行きになったんだけどね。

でも、ベッドにもぐりこんだ私はふと思う。

土曜日は明後日だ。いや、今夜寝て、目が覚めたら金曜日で、土曜日はその翌日だ。当たり前の話だけど……。

そしてその土曜日は図書館で清水くんに数学を教えてもらうのだ。

――じゃあさ、俺のウチと図書館とどっちがいい？

「ぎゃーーーっ！」

私は思い出して飛び起きた。一人で悶えているのはかなりオカシイが、このセリフに悶えずしていられようか？　いや絶対無理。

だいたいいきなり「俺のウチ」に誘いますか？

どういうことなんだろう。私なんか箸にも棒にもかからないから、家に呼んだところで誰も何も言わないだろうということ？　ま、それは事実だよね。

そもそも数学を教えてくれるのだって、他意はないのだから彼にとってはボランティアなんだよね。そう、ボランティア。

……でも、どうして私にボランティアなんかする必要あるんだろう？

あれ？　何故こんなことになったんだったっけ？

こうしてまた私は眠れぬ夜を過ごしたのだった……。

# 10

清水くんが数学を教えてくれると言った土曜日まで、私はとにかくいつでもどこでも襲ってくる不安と戦っていた。

気を抜くと口から不安が何かの形になって飛び出てきそうだった。

こんなときどうしたらいいのかを誰かに相談したかった。英理子さんの顔が浮かんだが、あいにく連絡先を知らない。やはりケータイがないのは不便だな、と思う。

よっぽど母親に相談しようかと思ったが、またあれこれ勘ぐられるのが目に見えているのでやめた。それに英理子さんももう少し後でって言ってたし。どうしてなのかはわからないけど……。

しかも金曜の放課後は英理子さんのお迎えがなかった。きっと彼氏さんを迎えに行かなくてもいい日なのだろう。

長い一日だったが、何とか一人でやり過ごすことに成功した。帰宅する頃にはもう精根尽き果てて抜け殻のようになっていたけれども。

だが、勝負は土曜日なのだ。

そして、ついにその日、その時がやってきた。

掃除当番を終えて教室を後にした。清水くんとは特に待ち合わせをしていない。これからどうなってしまうのだろうか、と思いながら玄関で靴を履き替えた。

そして玄関のドアを開けようとしたとき

「ねぇ」

と横から、正確には左斜め下から声が聞こえてびっくりした。

「ひぃ！？」

思わず間抜けな声を上げてしまう。

左斜め下を見ると、清水くんが下駄箱に背中を預けてしゃがんでいた。

私の返事にクスッと笑って面倒くさそうに立ち上がる。

「『ひぃ』って何？」

何、と問われても困るんですが。

「人がいると思わなかったんで」

私は自分が鈍いほうだとは思わないが、気配を全く感じなかったのだ。考え事をしていたからかもしれないけれど。

ふーん、という表情をして、清水くんは玄関のドアを開けた。

「俺、自転車取ってくるから先歩いてて」

そう言い残すとスタスタと行ってしまった。

私は少し唖然としたけれども、ああそうか、と突然いろいろなことを理解して急ぎ足で学校から離れた。

――そうだよね。私なんかと一緒に帰るの、誰かに見られたくないよね。

どーんと胸の中が暗くなるのを感じたが、私はとにかく少しでも遠くへとほとんど走り出しそうな勢いで歩いた。

学校からかなり離れたところで一息つく。

そこに後ろから自転車の清水くんがやってきた。

「ずいぶん歩くの早いね」

私は澄ました顔で「まぁね」と言いたいところだったが、実はかなり息が上がっていて返事をするのがやっとだった。

その様子を見てなにやら笑いを噛み殺した清水くんは、ニヤニヤと意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「そんなに早く図書館に行きたい？」

「は！？」

急に顔が赤くなった。違う！　違うんです！！　と心の中で叫ぶが、じゃあなぜ？　と問われると困るので結局目をぱちくりとさせただけだった。

「じゃ、後ろに乗って」

「え？」

――えええええ！！！！！

後ろって、自転車の？

「だ、だめ！　二人乗りは違反だもん」

清水くんは私の言葉を鼻で笑った。

「本当は後ろに乗るのが怖いんでしょ？」

「違います！」

「じゃあ、どうぞ」

「それでは失礼しますっ」

ああもう、ヤケクソだ！

荷台に横座りする。後輪のタイヤが凹んでないか少し心配だったが、大丈夫そうだ。よかった。

「ちゃんとつかまっててね」

――ど、ど、ど、どこにっ！？

……あ、そうだ、ここがいいわ。

と、私は荷台をつかむ。うん、なかなかよい。

でも振り返った清水くんの顔は怖かった。

「落ちても知らないから」

何故脅迫口調なんだ！？　でも私もこれ以上は譲れない。

清水くんは一つため息をついて自転車を漕ぎ出した。

自転車の後ろに乗るのは実は初めてだった。スピードが出てきて少し安定したが、それにしても怖い。

「ここ渡るよ」

そう言って清水くんは歩道から横断歩道へとハンドルを切った。

――ぎゃっ！　落ちる！！

気がついたら、私の片手は清水くんのシャツの背中を思い切りつかんでいた。

「ほらね」

風に乗って清水くんの勝ち誇った嫌味な声が聞こえてきた。バランス的に私が荷台だけをつかんでいると清水くんも運転しにくいのかもしれないな、と思う。仕方がないからそのままシャツをつかんでおくことにした。

T市の図書館は新しく建て替えたばかりで外観はピカピカと輝いていた。

「こっちこっち」

と手招きする清水くんに連れられて入り口からすぐに階段を上がり、図書館の二階と思われる場所へ来た。

階段ホールからフロアへ足を踏み入れた私は眼鏡の奥で目を丸くした。

中央には一階からガラス張りで吹き抜けになっているドーム状の温室らしきものが見える。その周りにはところどころにテーブルと椅子が置いてあって、これで飲み物が売っていたらちょっとしたカ

フェのような雰囲気だ。

「よかった。今日は空いてるね」

そう言って清水くんは人気のないほうへ歩いていく。私も彼の後を追った。

少し奥まったところの空いているテーブルに決めたらしく、椅子の上に鞄をドサッと置いた。

「さて、この前のテストは持ってきた？」

椅子に座った私は清水くんの言葉に一瞬固まった。

「そんなものはもう灰になったと思う」

「えっ！？」

隣に座っている清水くんは驚いて私をまじまじと見つめた。

――近すぎ！

その視線を何秒か受け止めた私は、至近距離の清水光線に心臓をぶち抜かれたようで、ものすごい勢いでドキドキし始めてしまった。こんなに近いと心臓の音が聞こえてしまうんじゃないかと心配だ。

「高橋さんって意外と大胆だね。テストとかきちんと整理して取っておくタイプかと思った」

本当に意外そうな顔で清水くんは私をじろじろと見る。

「私はそれほど几帳面じゃないし、あんな縁起の悪いものは取っておくよりびりびりにちぎって捨てたほうがいいかと」

「びりびり……」

清水くんは苦笑した。その顔を見ながら、この人にはあの悔しさがわからないんだろうなと少し忌々しく思った。

私は激しく負けず嫌いなのだ。本来ならライバルの清水くんに教えてもらうなど、私のプライドが許さないはずなのに！

「じゃあ、問題集やろうか」

清水くんは涼しい顔でそう言って、授業でも使っている副教材の問題集を出した。これが進学校で採用されるだけあって難しい問題ばかり載っている。見ただけで私の脳は拒否反応を示した。

だがこんな機会は滅多にない。清水くんは大学も数学をやりたいと言っていたくらいだから、きっと得意なのだろう。ここは恥を忍んで教えてもらおう。

それから私たちは一時間ほど真面目に勉強した。

私が問題を解いて、つまづいたところで清水くんが解説してくれるという方式でやっていたが、彼の説明がわかりやすくてびっくりした。正直、授業を聞いていてもちんぷんかんぷんだったのに、彼の説明を聞くと何故理解できなかったのか不思議なくらいだ。

つまり清水くんは深く理解しているということなんだろうな……。でなければ他人にわかりやすく説明することはできないだろうから。

キリのいいところで清水くんが問題集を閉じた。

「お腹空かない？」

そういえば昼食抜きで勉強していたのだった。それほど空いていなかったが、またお腹が鳴ったら困るので何か食べたほうがいいと思った。

「下に食べるところあるから行こうか」

私は頷いてまたおとなしく清水くんの後をついて行った。

階段を降りると気になっていた温室が目の前にあった。真ん中に大きな木が生えていて何かな？　と思って目を凝らすと枝に黄色いものが見える。

「あれ、バナナの木らしいよ」

私の視線に気がついて清水くんが教えてくれた。

「こんなところに？」

「一応、小さい植物園らしい」

図書館と植物園という組み合わせは想像していなかったので、こんなところがあったのか、と妙に感心してしまった。しかも食事を

するところまであるとは……。私の田舎町の図書室とは大違いだ。

きょろきょろしている私にかまわず、清水くんは食堂と喫茶店の両方を足して二で割ったような店に入った。

今度は向かい合わせで座る。

隣同士も落ち着かないが、向かい合わせも目のやり場に困るな、と思いながら意味もなくテーブルを見つめていた。

「人に勉強を教えるなんて、高橋さんで二人目だよ」

清水くんは両手で顎を支えて言った。

――二人目……。

「意外と少ないね」

と平常心を装って言ってはみたが、私は一人目が誰なのか気になって仕方がなかった。前に付き合っていた人だろうか？

清水くんはフッと笑って

「高橋さんはやっぱりもともと出来がいいよね。きっと苦手意識が強すぎるんだよ。数学的思考はちゃんと出来てるのにな。それに比べてアイツは……」

と言った。

その言葉が嬉しくて顔に火が付いたようになってしまった。

……でもその「アイツ」って？

その人が一人目なのだろう。私は息を詰めて彼の次の言葉を待った。

「酷いんだよね。考え方が性格と同じでひねくれててさ。教えたくないけど仕方ないよね、妹じゃ……」

「妹……サン？」

「あ、そうそう。俺、妹もいるんだ」

――なーんだ！　妹さんか。

清水くんが私を見てクスッと笑った。

まずい！　今、思わず顔が緩んでしまった。

「何考えてたの？」

「いえ、何も……」

「ふーん」

清水くんはニヤニヤしながら私をじっと見つめた。私はうつむい

てとにかくテーブルを見続ける。

「あんまりからかって嫌われたくないからな」

――……え？

思わず顔を上げて真正面のきれいな顔を見てしまった。

ニヤニヤしていたはずの彼の顔からは笑みが消えていた。そして私から視線をはずして少し遠い目をした。

「前にものすごく泣き顔がきれいな女の子を見たことがあって、ずっと忘れられないんだ」

清水くんが突然何を言い出したのかわからず戸惑った。わかるのは、おそらく彼がその女の子を好きなんだろうということ……。

「いろんな女の子と付き合ったりしたけど、俺、泣かれると冷めちゃってダメなんだよね。でも、その人の涙は特別だったな。全然知らない他人のために泣いててさ」

ますますわけがわからない。何故そんな話を私にするの？

「まだわかんない？」

清水くんが私の怪訝な表情を見て少し微笑んで言った。

「全然」

「高橋さん、中学生のとき、お姉さんのピアノの発表会を見に来たでしょ？」

少し考えて頷いた。姉の発表会はもれなく見に行っている。でも、それが？

「俺もね、見に行ったことがあるんだ。あるとき小さな男の子が演奏途中でつまづいて泣き出しちゃって、一度ステージの袖に逃げちゃったんだ」

――……そういえばそんな場面を見たことがあったような……

私はかすかな記憶を一生懸命手繰り寄せた。

「でも先生に励まされたんだろうね。もう一度出てきて、最初から今度は間違えずに弾き終えたんだ」

そうだ。その子、演奏が終わるとお辞儀もしないで一目散にステージから去ったんだ。

「それを見ていた、俺の斜め前に座ってた女の子が泣いてて、びっくりしたんだ。最初はその男の子の身内なのかと思ったけど、話し声を聞いていると違ったんだよね。それで……」

そう言って清水くんがにっこりと笑顔を見せた。そして私のほうへ手を伸ばす。

――な、な、何すんの！？

清水くんの両手が私の眼鏡をつかんで無造作にはずした。

「ちょっ……と！」

「その人が涙を拭くのに眼鏡を取ったんだ」

――……え？

――それ、もしかして……

「どう？　思い出した？」

――嘘！？

私は呆然と清水くんを見ていた。

確かにお姉ちゃんの発表会を見に行って、小さな男の子の演奏に感動して泣いてしまったことがある。

でもまさか、それを見ていた人がいるなんて……。

しかもそれが清水くんだったなんて……。

「それが俺の『気になる人』だったりするんだけど」

――……えええええ！？

――し、信じられないっ！！

「でもさ、この前も高橋さんに言ったよね？」

「何を？」

「高橋さんのこと気になるんだ、って」

私はものすごい勢いで席替えをしてからのことを思い返した。そんなこと言われたっけ？

「あーやっぱり！　俺、結構勇気出して言ったのにな。聞き流されたような気がしてたけど、その後どうも様子が変だし、もしかした

ら……」

「ちょ、ちょっと待って！」

何を言おうとしているのかわからないが、嫌な予感がしてとにかく彼の言葉をさえぎった。裸眼だとテーブルを挟んでいるだけの距離でも清水くんがぼやけてはっきりと見えない。眼鏡を返してもらわねば！

「眼鏡返して」

「教えてくれたら返してあげる」

その続きを聞くのが怖い。私の様子が変なのはいつものことで……

「俺のこと、そんなに嫌い？」

「ち、違う！」

反射的に口から否定する言葉が出てしまった。慌てて口を押さえたがもう遅い。

清水くんはニヤッと笑った。

――出た！　悪魔の微笑み！！

「じゃあ……」

そのとき突然、私と清水くんの空間にオバさんが割り込んできた。

「はい、お待たせ。野菜ラーメン！」

「あ、そちらです」

ドン！　と野菜ラーメンが私の前に置かれた。麺より野菜のほうが多いのではないかと思うくらい野菜がこんもりと乗っている。

「ヘルシーだね」

清水くんも驚きを隠せない声だ。それにしても眼鏡がないと彼の表情がよく見えなくて困る。ラーメンを食べるときは必要ないけどね。

そしてすぐに清水くんが頼んだチャーシューメンもやってきた。今日は清水くんがラーメンを頼んだので私も合わせたのだ。ラーメン屋じゃないからここでラーメン食べなくてもいいのに、と思いつつ。

しばらく二人とも無言でずるずるとラーメンをすすりながら食べた。

さっきまでのちょっといいムードはすっかりどこかへ行ってしま

った。私は少し寂しく思いながら箸を置いてティッシュで鼻をかんだ。

全くラーメンなんか食べるから鼻水は出るし、せっかくいいところだったのに！　とぶつぶつ脳内で文句を言いながら、清水くんのほうを見た。

「出ようか」

私は頷いた。だが一向に眼鏡を返してくれる気配がない。仕方なく目を細めて清水くんの背中を追いかけた。

清水くんは結局また階段を上り、さっき勉強していたテーブルへ戻った。

「眼鏡返して」

私は隣のソイツを睨みながら手のひらを差し出す。

「まださっきの続きを聞いてないからダメ」

隣に座っているのでかろうじて清水くんの顔は見える。でもやっぱりぼんやりしている。また視力下がったかな？

「俺のこと、嫌いじゃないんだよね？」

――ぎゃっ！　ど、どうすればいいの？

私は顔をそむけて目を閉じた。もう、どうにでもなれ！

ゆっくりとぎこちなく首を下に振る。

「じゃあ、……好き？」

――そ、そ、それは……

耳まで真っ赤になっていると思いながら、もう一度首を真っ直ぐ下に振った。

クスッと隣から笑う声が聞こえた。もう穴があったら入りたい。できれば埋めてほしいくらいだ。

「眼鏡、返すよ」

私の前に眼鏡がコトンと置かれた。急いで装着する。

「眼鏡取ったほうがかわいいけど」

隣を見ると怖いくらいの笑顔で清水くんが私を見ていた。その顔でかわいいと言われても複雑だ。

「無理しなくていいよ。そんなお世辞」

私は小さくため息をついて言った。そりゃ嬉しいけど、私はこれでも一応身の丈をわきまえているつもりだ。

でも清水くんは不思議そうな顔をした。

「高橋さん、知らないの？　自分の顔」

「嫌っていうくらい知ってるつもりだけど」

「すごくかわいいよ」

「からかわないでよ」

「本当だって。目がきれいでかわいい」

「清水くんにそんなこと言われても嬉しくない」

「なんで？」

「誰にでもそういうこと言うんでしょ？」

言ってからしまった、と思った。清水くんの顔つきが厳しくなってそのまま固まってしまった。

「……やっぱり、高橋さんも俺のこと、そういうふうに見てたんだね」

静かにそういう清水くんの声が少し震えているようで、私は胸がズキズキと痛んだ。

いまさら否定したところで、前言撤回できるわけではない。

「だって、清水くんみたいな人からかわいいと言われるような容姿じゃないってことくらい、自分でもよくわかってるから……」

言い訳のようにつぶやいた。

「俺が思ってもいないことを言うと思ってる？」

少し怒ったような響きが感じられて、私は下を向いた。

「そんなことは……ないけど」

「じゃあ、俺の言うこと、信じる？」

おそるおそる隣を見た。

清水くんは私と目が合うと少しだけ表情を緩めた。そして……

「高橋さんのことが好きなんだ」

と言って、にっこりと笑った。

頭の中が真っ白になった。……今、彼は何て言った？

「……ウソ？」

「あーもう！　やっぱり信じてない」

清水くんがぐったりと首を後ろに倒して椅子にのけぞった。

――だって、そんなこと、あまりにも突然で、しかもありえない話だし！！

私はドキドキを通り越えてポカンとしていた。

そんな私を見て清水くんは気を取り直したのか、ニヤリと笑った。

「まぁいいや。これからゆっくりじっくり俺のこと知ってもらうから」

――ひょえーーー！！！

どういうことだ！？　もう私にはわけがわからない。とりあえず考えるのはやめた。

「あ、そうだ。これから高橋さんのことは舞って呼ぶから」

「え？」

いきなり呼び捨てですか！？

「でもさ、舞っていい名前だよね。俺、大好き」

「は？」

彼の考えは私の理解の範疇を逸脱している。思わず「この人、大丈夫だろうか？」という目で見てしまった。

だが、彼の次の一言で、今度こそ完全に私の全思考が停止することになった。

「だって『舞』って呼ぶたび、『俺の』って意味でしょ？」

舞＝ｍｙ……って言いたいんでしょうか？

いや、それ、ちょっと違うと思うけど……。

こうして私の初恋は突然始まり、突然想いが叶うというありえない展開になった。

しかし、前途多難な日々はまだ始まったばかりということを、このときの私はまだ知らずにいたのだ。

そう、まだこれは私と清水くんの恋のほんの序章……。

〈「好きになる理由」ＥＮＤ〉

## 11

それは忘れられない一瞬の出来事。

この一年間その場面を何度も脳内で再生したが、記憶というのは時間の経過とともに劣化していくものらしい。

俺は記憶力という点では他人よりも抜きんでていると思うが、それでも時間は容赦なくその一瞬の映像を古い過去のものへと書き換えていった。

でも、もう一度その人に出会うことがあれば、きっとわかる。

俺はずっとそう思っていた……。

俺がこのT市内で名門校と呼ばれる高校に進学したのには訳がある。本来ならここではなく県内の上位校を受験するつもりだった。両親もそれを当然と思っていたし、俺自身もそのことに何の疑問も持っていなかった。

事実、一つ下の弟はS市の県内有数の進学校へ入学した。

だが俺は自転車で通える市内の高校に通っている。自転車で通学したかったわけじゃないが、これはこれで便利だ。弟のように早起きしなくてもいいし、後ろに女の子を乗せることもできるという利点がある。

「はるくん、また新しい彼女になってる！」

今日は俺の祖母の誕生会で、祖母の家に親戚が集合していた。いとこの神崎英理子が俺の姿を見つけると部屋の隅へ引っ張ってきて、早速尋問を開始した。

「今度はうちのクラスの子じゃない。でもまた本気じゃないんでしょ？　そういうの、もうやめなよ。かわいそうじゃない」

――かわいそう……か。

「じゃあ最初に断ればよかった？」

「そりゃそうよ！　付き合ってすぐ別れるよりはマシでしょ。そんなふうに他人の心を弄ぶのやめなよ」

「弄んでるつもりはないよ。『私のこと好きじゃなくてもいいから付き合って』って言うから仕方なく付き合ってるわけだし」

「『仕方なく』って、そこがおかしいのよ！」

「でも断る理由がない」

「じゃあどうして本気になれないのよ。はるくんのやってることは

結局サヤカさんに対する当て擦りじゃない！」

――サヤカさん……ね。

俺は英理子を軽く睨んだ。さすがに英理子はハッとして失敗した、という表情をした。

「ごめん。言い過ぎた」

「いいんだ。実際そうだしね。あの人はそれでも俺のことなんかどうとも思ってないし」

「そんなことないよ！　サヤカさんはね……」

「もうあの人のことは聞きたくない。今更『泣いてる』とか言われても遅いよ」

英理子が口に手を当てた。

「知って……たんだ」

「そりゃね。だけど仕方ないだろ？　どうにもならないんだよ、今更」

「はるくん、もしかしてまだ……」

俺は首を横に振った。

「ていうか、サヤカさんって誰？」

わざととぼけて見せた。英理子は俺の腕をバシバシと叩いた。ものすごく痛い。どんな怪力なんだ？

「……きっといいことあるよ！」

英理子なりに俺を励ましてくれているようだ。心の中で素直に感謝した。

実際、今更どうにもならないことだ。

サヤカさんはもういない。

それにもう一年も前に終わったことなのだ。

それでも俺は彼女を追いかけてこの学校に入学した。未練がなかったとは言い切れない。遠くからひとめでも彼女を見ることができたらいいと思っていたから。

でも結局それは叶わなかった。

なぜなら彼女はウィーンに留学してしまったからだ。

――ま、知ってたんだけどね。

俺はいつもどおりに登校して、玄関から続く廊下の掲示板の前で足を止めた。

そこにはサヤカさんがとあるピアノコンクールで入賞したニュースの記事が貼ってある。もう半年くらい経つから既に紙は色褪せているし、今更気に留める人もいないだろう。

――頑張れよ。

毎朝こうやって心の中でエールを送る。

最初は写真を見るのもつらかったが、今ではすっかり形式的なものになって特別な感情というのはない。ただ彼女が元気で頑張っていればいいと思うだけだ。

「よぉ、清水。今日学校の中ずいぶん寒くないか？」

後ろから同じクラスの田中弘樹（たなかひろき）が声をかけてきた。振り向くと田中は首を縮めてマフラーの中に顔を埋めている。

「そういえば寒い」

「しかし今年は寒いよなぁ」

「異常気象らしいね」

「温暖化はどうしたんだ？　清水、頭いいんだからどうにかしてくれよ」

「どうにかなるわけないだろ。それより学校の中の暖房をどうにかしてくれって先生に頼んだほうがいい気がする」

教室に入ったがやはり暖房が入っていないようだ。みんな上着を着たままぶるぶると震えていた。

俺は自分の席に鞄を置いて何気なく前を見た。

教室の前のドアから眼鏡をかけた女子が入ってきた。えーと、名前なんだったかな？　かなり存在感の薄い人だが、確か成績はいいほうだったと思う。

普段は視界に入っても意識すらしないのに、なぜか俺の目は彼女の姿を追っていた。

――あれ？

よくわからないが俺は違和感を感じた。

彼女は俺の斜め前方の席だ。教室に入ってきて眼鏡が白く曇ってよく見えないらしい。困ったようにおどおどしながら自分の席へ向かう。

ようやく自分の席にたどり着いた彼女は安堵して椅子に座った。
俺もホッと胸を撫で下ろす。
そして彼女はおもむろに眼鏡を外した。

――……え？

――えーーーーー！？

俺は眼鏡を拭いてかけ直す三十秒ほどの間、彼女に釘付けになってしまった。

――ウソだろ？

眼鏡をかけ直した彼女は取り立てて特徴のない動作で淡々と授業の準備をする。俺はしばらく呆然とその様子を見ていた。

「おい、清水？　何、突っ立ってんの？」

田中に声をかけられて、やっと我に返る。

「あ、いや、世の中には不思議なことがあるものだな、と思ってさ」

「何わけわかんねーこと言ってんの？　寒さでおかしくなったか？」

――何故だ？　何故みんな気がつかない？　あのやたら分厚い眼鏡のせいか？

――そうだよな。俺だってさっきまで気がつかなかったんだ！

「ていうか、電灯も点かないらしい」

田中は俺の動揺などどうでもいいのか、上を指差してそう告げた。今日はあいにく黒っぽい雲が低くたれこめていて、教室の中も朝とは思えぬ暗さだ。

「……つまり停電？」

「かもなー。今時停電なんて珍しいよな」

――あ、そうか。

俺は思い出した。何故今日に限って彼女に目が行ったのか不思議だったが、彼女を初めて見たのが薄暗い会場だったからだ。

忘れもしない中学三年生の冬。

それがサヤカさんを見た最後の日だった。

## 12

こんな暗い教室でどうやって授業するんだ？　とクラスメイトは騒然となっていたが、俺には全く関係ない話だった。板書をノートに書き写すなんて面倒なことはしたことがないからだ。

朝のホームルームが始まる前に俺がしたことと言えば、彼女の名前を調べることだ。まず教壇の上に置いてある座席表を何気なく見に行く。この「何気なく」というのが難しい。だが今日はクラス内が停電のおかげで騒がしいのでこれは割と簡単にできた。

――高橋さんか。そういえばそうだったかも。

この国ではかなりメジャーな姓だから忘れてしまったんだろう。うちの隣も高橋さんだしな。

姓はわかったが下の名前がわからない。壁に貼り出してあるクラスの各委員の表を見たが彼女は何の委員にもなっていないらしい。

――さて、どうする？

俺は日誌に目をつけた。確か日直の名前を書く欄があったはずだ。今日の日直の席へ向かう。

「ねぇ、ちょっと日誌見せてくれない？」

「いいけど、何するの？」

日直は高梨というこのクラスでは少し変わった女子だった。余計な詮索をしそうなタイプだからやっかいだ。

「暇だから先生のコメント読もうかと思って」

「こんな暗い中で？」

「そう。俺、視力いいから平気だし」

「ふーん。どうぞ」

何とか日誌を奪い取ることに成功する。俺は高梨の席から少し離れて日誌をパラパラとめくった。

――あった！

「高橋　舞」

と、おそらく彼女のものだろうと思われる丁寧な文字を目で追っ

た。意外と達筆で感心した。書写の手本みたいな筆跡だ。

――そうか。舞ちゃんね。

――……ん？　タカハシマイ……ちゃん？

俺は記憶の片隅に何か引っかかるものを感じて、日誌から目を上げた。

「何か面白いことでも書いてあった？」

高梨が俺の脳内過去検索に割って入ってきた。正直、俺はこの高梨が苦手だ。妙に勘がよくて言葉に棘がある。

「まぁね。高梨さんって面白い文章書くね。先生も『ユーモアがある』って書いてるけど」

「そう？　せっかくだから面白おかしく書いたほうがいいかと思ってるだけ」

三つ編にした左右のおさげを両手で弄びながら高梨は俺の顔を覗き込んだ。

「清水くんって、クセ毛？」

「そうだけど」

「いいなー。私もそんな感じのクセならよかったのにー！」

いつもきっちりと三つ編おさげにしているな、と思ったらどうにもならないクセ毛らしい。しかも彼女はかなりの剛毛に見える。お気の毒に。

ここで話を切り上げて自分の席に戻った。斜め前方の高橋さんをもう一度見てみると文庫本を読んでいた。目の悪い彼女はあんな分厚い眼鏡をかけているくせに、本を眼鏡の手前まで引き寄せている。

――こんな暗い中で活字なんか見たらもっと視力が悪くなるよ？

それにしてもあの眼鏡は変装効果抜群だな、と俺は妙に感心した。そしてあのおかっぱ。いつ見ても同じ長さのような気がするから不思議だ。まるでこけしのようだと思う。

――……こけし？　待てよ、どこかで聞いた気がする。

俺はまた脳内過去検索を再開した。こけし、こけし、こけし……

『本当にかわいい子ね！　英理子がフランス人形なら、マイちゃんはこけしみたい。でもお目目がぱっちりしてるから、きっと将来美人になるわよ！』

英理子のおばさんの声だ。あれは確か小学一年生だっただろうか。

夏休みに英理子の家に遊びに行ったら、知らない女の子が英理子と一緒に遊んでいた。

当時おばさんの趣味で英理子はパーマをかけていた。フランス人形のようだとよく大人たちが評していたが、実際はそんなおしとやかな性格ではない。しかもなぜか怪力だ。

それに対して、初めて会ったその知らない女の子はおとなしくて、黙っていると本当にこけし人形のようだった。俺が英理子の部屋に入った瞬間、その子は大きな目を更に見開いて俺を凝視した。

――そうか。あのときの……。俺たちはもっと幼い頃に会っていたんだ。

だが俺の気持ちは複雑だった。なぜかと言うと彼女に会ったことがあるということ以外何も覚えていない。何をして遊んだのかなんてまるで思い出せない。

――あのときは本当に人形みたいでかわいかったのにな。

別に今がかわいくないと思っているわけではないが、まさかこんな姿になっているとは……なんて言ったらやはり失礼だな。ごめん

ね、高橋さん。

だが考え方を変えてみるとあの姿は非常に効果的だ。少しかわいいというだけで周りにちやほやされて、どうしようもない男と付き合って穢れていく女の子は多い。もったいない話だ。

――そのどうしようもない男の筆頭が俺なんだけどさ……。

知らないうちにため息が出る。

『はるくんのやってることは結局サヤカさんに対する当て擦りじゃない！』

――英理子もはっきり言いやがって。

サヤカさんにふられてかなりの痛手を負ったのは確かだった。そもそもサヤカさんから好きだと告ってきたくせに、半年足らずで「留学することが決まりました」というのはいくらなんでも酷すぎる。俺もサヤカさんを好きになって、二人はこれからというところだったのだ。

初恋なんてそんなもの、と割り切るには俺は幼すぎて、行き場のない気持ちをどうにかして処理しなくてはならなかった。そのために他の女の子を利用したと非難されれば反論できない。

――俺、サイテー……。

高橋さんの後ろ姿を見ながら一年前のことを思い出す。

演奏の途中でつまづいてしまった男の子が、もう一度ステージに戻って弾き始めたのを見た彼女は涙を浮かべた。

「あら、どうしたの？　涙なんか流して」

隣に座っている彼女の母親らしき人が小声で言った。すると彼女は眼鏡をはずして涙を拭ったのだ。それから静かに言った。

「だってあの子はこの曲を今日の発表会で演奏するために毎日練習してきたんでしょ？　だから最初は失敗しちゃってかわいそうだなと思ったけど、今度はちゃんと弾けてよかったなって思ったら……」

――「毎日練習」……か。

俺だって本当は知っていたんだ。サヤカさんが毎日何時間もピアノに向かっていることも、本気でその道に進みたいと思っていることも。

突然、電気が復旧した。

高橋さんは急に明るくなった教室に驚いたのか、本から目を離し電灯を見上げた。だがすぐにまた小説の世界へ戻る。

彼女の周りだけはまるで別世界だ。静謐な空気が彼女を守っているかのようだ。不躾にそこへ踏み込むことは許されない気さえする。

その後ろ姿を見ていると俺は自分の愚かさを嫌というほど思い知らされた。本当に俺はどうしようもない男だ。

もし、高橋さんがこのどうしようもない俺の醜態を知ったらどう思うだろう？　軽蔑するだろうか。それとも慰めてくれるだろうか。

――たぶん、どっちでもないな。……軽くシカト、とか。

その考えが一番しっくりきた。俺は自分の考えに思わず苦笑する。

時間より遅れて担任が教室に入ってきた。そこで俺は高橋さんのことを考えるのを中断した。

それから俺は日々高橋さんを観察するようになった。

彼女の生活は単調だ。単調すぎて美しいくらいだ。

だが、たまに彼女らしくない行動もある。ある日の昼休み、担任が放送で高梨を職員室へ呼んだ。

いつもと同じように静かに本を読んでいた高橋さんは、その放送が終わるや否や立ち上がり、急いで教室を出て行った。俺はその姿をチラリと見て首を傾げたが、すぐに合点がいった。

数分後、がっくりとうなだれた高橋さんが教室へとぼとぼと戻ってきた。そして真っ直ぐ自分の席に戻る。「はぁ……」というように大きくため息をついて、また読書を再開した。

このとき俺はよほど高橋さんに声をかけようかと思ったが、結局やめた。

彼女は担任の放送を「たかなし」ではなく「たかはし」と聞いてしまったのだ。慌てて職員室へ行ったが人違いだったというわけだ。失敗を一緒に笑ってあげたほうが気が楽になるだろうと思ったが、いきなり俺が声をかけたら今は逆効果になりそうだ。

俺は突然悲しくなった。

クラスメイトが高橋さんをいてもいなくても同じとしか思ってい

ないのと同様、彼女も俺などいてもいなくても同じくらいにしか思っていないのだ。それどころか、俺の存在を認識しているかどうかすら怪しい。

だいたい、こんなに観察しているのに高橋さんと目が合ったことがない。あの分厚い眼鏡だからどこを見ているかわからないというのもあるが、どうも俺は彼女の視界にすら入っていないようだ。

――ちょっと悔しいな……。

俺はそう思う自分に驚いた。

そりゃ一年前に見た「その人」にもう一度出会えたら、俺はその人に恋をするかも、とは思っていた。

でも「その人」が高橋さんだとわかってからはそれが俺の勝手な思い込みで、何か運命的な出会いを期待していた自分がおかしくて仕方がなかった。

それが、だ。

こうして日々彼女を観察していると、いつの間にか「こっち向かないかな？」とわずかに期待している自分がいる。

――そして俺に気がついて。

――そのときはきっと初めて会った幼い頃と同じように驚いた顔をするよね？

人間ってヤツは失恋しても懲りもせずまた恋ができるからタフな生き物だ。やっぱりこれって恋だろうな、とぼんやり思う。しかも自ら誰かを好きになったのは初めてかも……。

それにしてもあのときどうしてあんなに驚いた顔をされたんだろう。いつか絶対思い出させて問いただしてやろうと俺は密かに思う。

チャンスは必ずやってくるはずだ。何と言っても同じクラスだしね。

俺は辛抱強くただひたすらそのときを待った。

## 13

季節は廻り春がやってきた。俺もついに高校二年生になってしまった。

チャンスは毎月一回必ずやってくるのだが、俺はどうもくじ運が悪いらしい。高橋さんとは席が近くになれないまま初夏に突入した。

クラスで一番仲がいい田中が朝のＨＲで突然発言した。

「先生！　今日の６時間目は席替えしようよ」

「お、そういえばそろそろ席替えの時期か」

来た来た来た！！

待ち焦がれていた一ヶ月に一度のお楽しみの時間がついに来た。

ありがとう、田中。お前もたまにはいいこと言うじゃないか！

俺は６時間目が待ちきれないくらいワクワクしていた。ワクワクしすぎて授業のほとんどを居眠りしてしまった。寝ているほうがあっという間に時間が経つというものだ。

「では恒例の席替えくじ引きを行いまーす」

男のクラス委員が間延びした声でそう宣言して、サッカーボールが入りそうな大きさの箱を持って男子の席をまわり始めた。女子は女子のクラス委員がくじを持って反対方向からまわっている。

「ほい、清水」

クラス委員が目の前に立った。

俺はかなり気合を入れて箱に手を突っ込んだ。少し迷って指に触れた紙をつかむ。開いて見ると『7』だった。

――これは幸先いいぞ！

「7番。うわー！　一番後ろのいい席だ！」

周りからブーイングのような声が上がった。黒板を見ると確かに窓際の一番後ろの席だ。

――……今回もハズレか？

本来喜ぶべき座席だが、俺は瞬時にこれはもう絶望的だと思った。

あの分厚い眼鏡の高橋さんが万が一この隣の１６番を引いたとしても、おそらく誰かと交換してしまうに違いない。

何しろ彼女は隣の席が誰だろうと関係ないのだ。何だか悔しい。

それ以前に彼女が１６番を引く確率は相当低そうだが……。

「うおーっ！　一番前かよ！」

後ろから田中の雄叫びが聞こえた。自分から席替えを提案したのに一番前とは気の毒な話だ。

どんな顔をしてるのか見てやろうと思い振り返ると、突然田中の目が輝いた。

「清水くぅーん」

「気持ち悪い……」

「そう言わずに、俺と交換しよう」

「断る」

「俺たち親友だろ？」

「それとこれとは別だろ。不正をしたらくじの意味がない」

俺がそう言うと何人かがこそこそと自分の席へ戻った。席の交換交渉をしていたのだろう。

女子のくじは男子よりゆっくり進行していた。

もうすぐ高橋さんの順番だ。自分のくじ引き以上に緊張してきた。

ふと田中の申し出を保留しておくべきだったかと後悔する気持ちがわき上がってきた。

いや、そこまでしてどうこうしたいわけじゃない。それにそれは俺の信条に反する。

「高橋さん、引いてよ」

クラス委員の女子が高橋さんの前に立っていた。

少し驚いた顔の高橋さんはためらいがちにくじが入っている箱に手を入れる。すぐに一枚の紙片が取り出された。

「はい、高橋さん、１６ね」

「ええーーーーーーーーーっ！！」

――１６って……

俺は思わず他人の目など気にせず高橋さんを見つめてしまった。

彼女は突如として騒然となったクラスの雰囲気に唖然としていた。黒板を見ても顔色ひとつ変えない。

本当に高橋さんは俺のことなど髪の毛一本分も気にしていないよ

うだ。その淡々とした様子が憎いくらいだ。

案の定、彼女の後ろの席の女子が席を替われと交渉し始めた。

俺は小さくため息をついて机に肘をつく。

こんな嬉しい展開だというのに、俺の心の中は複雑に揺れ動いていた。

「えっと、今回はごめん」

高橋さんのはっきりした声が聞こえてきた。

――……え？　今、なんて？

俺はにわかには信じられなかった。

どういうことだ？

そんな分厚い眼鏡なのに一番後ろの席に座っちゃって大丈夫なのか？

本を読むときだってかなり近づけて読んでるのに。

真面目な高橋さんが居眠りをするために一番後ろに座りたいわけじゃないだろ？

じゃあ、どうして……？

「はい、じゃあお引越ししてくださーい」

またクラス委員ののんきな声が聞こえてきた。

俺はさっさと荷物をまとめて窓際の一番後ろの席へ向かう。まだ信じられない。珍しくワクワクした。

新しい席に座ってクラス全体を眺め回す。ここは最高の席だよ。しかも隣は……！

高橋さんを見るといつもと変わらぬ何の特徴もない動作で荷物をまとめて席を立ち上がったところだった。

そして振り返って俺のほうを見た。

すぐに黒板を確認するために前を見る。

――うん、間違ってないよ。

俺は笑いを噛み殺すのに苦労した。普段全く表情のない高橋さんが突然わかりやすい行動を取り始めたからだ。

しばらく黒板を凝視していた高橋さんは、まだ信じられないというような顔でこちらを向いた。

目が合う。

俺はできる限り自然に笑おうとした。が、……ヤバイ！　かなり不自然な顔だろ、これ！！

だが、俺はすぐに心を引き締める。

近づいてきた高橋さんはまるで怯えた小動物のようだった。かわいそうなくらい動揺している。

それってどういう意味なんだろう？　まぁ、いい。これからじっくり教えてもらうからね。

「高橋舞さん、よろしくね」

名前をわざとフルネームで呼んだ。

高橋さんはこれ以上ないくらいポカンとした顔で俺を見つめた。

「よ、……よろしく」

そして俺からあからさまに視線を外してこそこそと隣の席へ移動

してきた。

――何だかその態度、傷つくな。

それって嫌がってるの？　……どこからどう見ても喜んでいるようには見えない。

――ふーん。そっちがそういうつもりなら、俺も手加減しないから。

俺は隣の席に向かって心の中で宣言した。俺にだってプライドがある。

次の席替えまでに俺にそんな態度取ったことを後悔させてみせる。

こんな千載一遇のチャンスを俺が逃す訳ないってことを嫌というほど思い知ってもらうさ。

明日からが楽しみだね、高橋さん！

# 14

毎日朝がやって来るのは当然のことだが、それがこんなに嬉しいことだと感じられる俺は相当お目出度い頭になっているようだ。

何しろ低血圧なのか目覚めてからしばらくは全く使い物にならない俺が、起き上がってすぐに思考活動を開始しているのだから今までなら信じられない話だ。

勿論、考えることは一つ。

――さーて、今日はどうしてやろう？

今までの自分は一体何をしていたのだろうと思う。毎日毎日、ただ学校に行って、ただ授業を受けて、ただ友達と適当に話を合わせて、ただ帰ってくる。

退屈でつまらない学校生活だったことは間違いない。

だけど、今の俺は違う。学校に行く目的がある。まさに生徒の鏡と言ってもいい。

――いや、さすがにそれは違うな。

そう自分にツッコミを入れつつ、自室から出てリビングに降りた。

「お兄ちゃん、おはよう」

妹がパジャマ姿でうろうろしていた。酷い寝ぐせで髪の毛が重力に思い切り反発している。

「おはよう。それにしても笑佳(えみか)、お前の髪は毎朝爆発して大変だな」

半分しか目が開いていない妹は、首だけを俺のほうに向けてニヤッとゆるい笑顔を見せた。

「お兄ちゃん、今日はどうしたの？」

「……ん？」

「朝から私に話しかけるなんて、ずいぶん機嫌いいね」

鋭い指摘にドキッとしたが、表情を変えずにフンと鼻だけ鳴らす。

「俺はついに朝が弱いのを克服したんだ！」

「偉そうに言うことか？」

父が呆れたような声で割り込んできた。新聞で顔が隠れて見えないが、この人はいつも朝からピシッとしている。ということは、低血圧は母親譲りなのだろうか。

「暖人。ずいぶん匂うな」

新聞をめくるついでに父が顔を見せて俺を睨んだ。この父親は古

い考えの持ち主で、高校生はいわゆる硬派な格好をすべきだと信じている。当然俺は毎朝服装やら髪型などを注意されていた。

「父さんの鼻も正常に働いているみたいで安心だね」

「お前は外見を飾るだけの能しかないのか」

「ダサい格好で真面目なのがいいって、いつ、どこの、何の基準？」

「口だけは一人前だな」

「ぎゃーーーーっ！！」

突然キッチンから悲鳴ならぬ絶叫が聞こえた。

父が諦めたように目を瞑り新聞を膝の上におろした。妹がふらふらとキッチンへ消える。すぐに絶叫の理由が判明した。

「はい、目玉焼きとソーセージが炭になりましたー！」

妹の手には元が何だったのかもわからない黒い物体が載せられた皿……。

後ろから母が鼻をすすりながらサラダを山盛りにしたボールを持ってきた。勿論、嘘泣きだ。

「だってー、お母さんは二つのことを同時になんかできないんだものー！」

そう言い訳し始めた。ほぼ毎日聞く台詞だ。母の脳には残念ながら学習能力というものは備わっていないらしい。

この家庭は平和だ、と食パンを頬張りながら思う。ちなみに我が家の朝食はパンだ。

「ねー、ねー、聞いてよ」

母が席に着くなり口を開く。料理を失敗したことなどきれいさっぱり忘れたらしく、いつになくハイテンションだ。

「パンパカパーン！　なんと、ひろちゃんに彼女ができましたー！」

「はぁ！？」

俺は思わず素っ頓狂な声を上げた。妹の笑佳にいたっては、飲もうと思って口に含んだ牛乳を向かい側に座っている父親めがけて勢いよく噴射した。

「ウソだろ？」

「ひろちゃんって、寛人（ひろと）お兄ちゃんのことだよね？」

「他に誰がいますか？」

母は父におしぼりと間違って台ふきんを渡しながらにこやかに答えた。案外間違いじゃなくて本気で渡しているのかもしれない。この人ならあり得る。

「お母さん、寛兄ちゃんから聞いたの？」

「いいえ。でもわかるの。だって私、母親ですもの」

――おい、待て。憶測でそんなことを大々的に発表するな！

でもこの母の言うことは侮れない。俺は顔を引きつらせたまま食事を続けた。

「えー、証拠は？　なんで彼女ができたって思ったの？」

「うん。昨夜お夜食持って行ったらひろちゃんがメールしてたの。あら、と思って覗き込んだらなんと、ハートの絵文字がいっぱいでー」

――……ありえん！　あのクソ真面目で冗談も通じないようなダサ男が！

俺は焦げたソーセージに箸を突き立てた。炭になった部分がぽろぽろと剥がれ落ちる。

「というわけで、はるちゃん、あなたも頑張って！」

「なんで俺が頑張らなきゃならないんだよ！」

母は真向かいからニタニタと笑いかけてきた。この人は本当に侮れない。

「だってはるちゃん、いつになく気合入ってるから。……ターゲットロックオン？」

――……一体、どういう母親だよ？

俺は無言で立ち上がった。

「ちゃんと『ごちそうさま』くらい言いなさい」

あからさまに不機嫌な態度を取る俺のことなど全く意に介せず、母は毅然と言い放った。この人には威圧や脅しは一切通用しない。

「どこがご馳走かわからないけど、ごちそうさま！」

俺はもう半ばやけくそで言い捨てて家を出た。

俺の気持ちとは裏腹に今日は朝から快晴だ。

隣の席には高橋さん。いや、もうこの際だ。舞ちゃんでいいよね？

舞ちゃんは相変わらず朝からそっけない。挨拶も仕方なくしてやったという感じで、俺は初っ端からかなり落ち込んだ。

一時間目は世界史の自習だった。

プリントが配られると俺はすぐさまやっつける。やり終えると弟の寛人の顔が浮かんできて無性に腹が立った。

もともと俺は他人への興味が薄い。誰が誰と付き合おうが別れようがどうでもよかった。

だが、寛人だけは別だ。

弟と俺は年子だ。だけど兄弟なのに似ているところは少しもなく、何もかもが正反対だった。

寛人は幼い頃から非凡な学力で注目され、今はＳ市の進学校に通っている。ムカつくことにそこでも常に最上位に君臨しているらしい。

でも残念なことに弟は容姿が凡庸だった。身長はついに妹にも追い越され、体重も注意しなければＢＭＩ指数が「肥満」の域になってしまう。当然運動が苦手だ。

これらのことは言うまでもないが俺の優位で、兄としてのプライドを鼻にかけていられる部分でもある。容姿については遺伝子の気まぐれだろうからお気の毒としか言いようがないけどね。

そんなわけで俺たちは小さな頃からことごとく比較されてきた。両親は直接言葉にはしないものの、暗に俺と寛人を競わせてきたのだ。

ぶっちゃけ俺は、勉強に関してはもう諦めていた。

でも色恋沙汰まで弟に負けるのは兄としてどうにも許せない。

俺は隣の席の舞を見た。

……もう「ちゃん」付けもやめてやる！

非常に几帳面な字で解答を丁寧に書いている。なんというか、彼女らしい。

朝、父には「ダサい格好で真面目」の何がいいのかと噛み付いてきたが、本当は俺も「ダサい格好で真面目」はそれほど嫌いじゃない。清潔感がないのは論外だけどね。

舞の場合はこの無頓着加減が逆にいい。あまり頑張りすぎてると見てるだけでも痛々しいし、無頓着すぎるとこれまた別の意味で注目の的になる。そういう点で舞は非の打ちどころがないくらいだ。

この眼鏡がどうかと思うこともあるが、眼鏡を外したらたぶん舞の評価は激変するだろう。……特に男どものね。

そう考えると、眼鏡はこのままでいいなと思う。むしろ眼鏡がいいような気がしてくる。俺って案外眼鏡フェチだったりするのか？

ふと舞が首を動かす。

どうやら俺の机の上を見たようだ。カンニングかと思ったがどうやら違う。すぐに今度は鬼のような速さで問題を解き始めた。

――なーんだ。見てもいいのに。

俺は内心がっかりしながら更に舞を観察していた。こんな近くで見てるのに気がつかないとはどういう神経をしているんだ？

しばらくすると解答が出来上がったらしく、満足げな表情で姿勢を正した。そしてまたちらりと俺の机の上を見る。今度は少し険しい顔になった。

――なんなんだ、一体？

そうこうしているうちに一時間目は終わってしまった。俺は首をひねる。

――俺ってそんなに避けられるべき存在？

こうなりゃ、根気比べだ。こっちを見るまでずっと見つめてやる。

二時間目は数学だった。

またもや舞は一生懸命ノートに向かっている。黒板とノートを往復する視線が俺のほうに向けられる気配はまるでない。

ところが板書をとる手が突然止まった。

顔を上げた舞は下がってきた眼鏡を元の位置へ戻す。だが、困ったような顔でそのまま黒板を見つめていた。

――どうしたんだろう？

しばらく何かを考えていたようだが、その表情が変化したと思うとこちらをちらりと見た。

――お？

でも舞が見たのはやっぱり俺の机の上だった。ちなみに俺の机の上には教科書しかない。元からノートを取る習慣もないし、今は舞の観察に忙しくて黒板を見ている暇がないのだ。

それに気がついた舞はようやく目を上げて俺の顔を見た。

みるみるうちに舞の顔に驚愕の色が広がる。

「やっとこっち見たね」

――この瞬間をどれほど待ち侘びたことか。

舞は問い返すように眉をピクッとさせた。

「ずっと『いつ気がついてくれるのかな』と思ってたんだけど」

俺はわざとゆっくり言う。いじめるつもりはないけど、こんなに待たされたんだから少しくらいはいいよね？

「一時間目からずっと見てたのにな」

舞のびっくりした顔がその後も何秒か続いて、それからようやく我に返ったようだ。大きく息をついて遠慮がちに口を開いた。

「えっと、板書写さないの？」

「なんで？」

彼女の小さな声がかわいいので思わず笑顔になった。でもなぜか舞は少し気まずい表情になる。

「高橋さんこそ、なんでそんなに一生懸命ノート取ってるの？」

一応「高橋さん」と呼ぶ。さすがにいきなり名前で呼ぶ勇気は俺にはない。

「普通ノート取るでしょ？」

「そう？　だって教科書にも書いてあるでしょ」

「そりゃそうだけど……」

舞はそこで言葉に詰まった。嬉しい。内容はどうでもいいから舞ともっと会話を続けたいと思った。

「書いて覚えるのよ！」

突然舞は得意げにそう答えた。内心プッと噴き出したが、別にバカにしているわけじゃない。舞の態度がおかしいんだよ！

だが、それは表に出さないようにした。

「ふーん。まぁ、いいや」

ていうか、こんなことで喜ぶ俺って相当ヤバいな、と少し気を引き締める。

そこに舞の弱気な声が聞こえてきた。

「あの、私、黒板の字が読めないところあるんだけど」

「ああ！」

――神様！　（……って今までほとんど信じてなかったけど！）

俺は舞の視力が悪いことさえ神に感謝したい気持ちになっていた。

「いいよ、読んであげるよ」

お安い御用だよ。

「ありがとう」

いえいえ。

「いいよ、お礼なんて。ほっぺにちゅーとかで」

俺はにこやかに、爽やかに言った。ここ、言い方が重要だから！

だが、舞はいきなり固まった。

「……え？　スルーしちゃう？」

――あちゃー！　失敗したか？

そうだよな、相手は舞ちゃんだった。もう少し手加減しないと本気で嫌われかねない。俺は後悔したが、今更ここで巻き戻しができるわけでもない。

――それなら、一か八か。

「じゃあ、やめた」

「ま、待って！　私、数学苦手なの」

舞はとても困った顔をしていた。本当に数学が苦手らしい。奇遇だね、俺は数学が好きだけど？

「ふーん。いいこと聞いた」

一瞬のうちに俺の頭の中にはいろいろな計画が持ち上がった。そりゃもう、いろいろと……ね。

「まぁ、ちゅーはそのうちでいいよ」

――まぁ、そのうち絶対してもらうけどね！

それじゃあ恩を売らなくっちゃ、と張り切って俺は大胆に舞の腕に自分の腕がくっつくくらい接近した。

隣で舞がまたしても固まった。おかしくて仕方ないが、知らないふりをする。彼女には刺激が強すぎただろうか？

でもこれ以上は逃げられまい！

ふはははは！！

笑いが止まらない。……いや、心の中だけでね。じゃないと俺がただの変なヤツだからさ。

それからは頼まれもしないのに、舞の手が止まるたびノートと黒板をチェックした。俺ってめちゃくちゃ親切だな。きっと彼女も俺に感謝してるだろう。

一瞬、弟のことが思い出された。

――見てろよ。俺だって……

これから起こるはずの楽しいことを想像して、ひとり悦に入りながら、俺はいつになく充実した一日を過ごしたのだった。

## 15

翌日も舞は朝からそっけない態度で、俺はさすがに傷ついていた。

勿論俺は昨日と全く同じように舞の板書を取る手が止まるたびに、見えないところを読み上げている。だが、どうも舞の態度がおかしい。

俺が舞のほうへ身を寄せようとする気配だけで、彼女はピクリと反応しすぐさま退ける。その反応の速さと来たら俺の心を読んでいるかのような俊敏さだ。意外と反射神経いいんだな、と感心するほどに、ね。

普段は彼女の周りだけまるで別世界のような空気だというのに、今はその空気は全く感じられない。むしろ俺をよけるためにピリピリとした空気を漂わせていた。

ずっと舞は俺に対して無関心なのだと思い込んでいたが、もしかするとそれは勘違いだったのかもしれない。

ならば、考えられる可能性は二つ。

――俺のことが好きか……嫌いか……。

俺は思わず頭を抱えた。

たぶん、いや、間違いなく後者だ。どう考えてもこれは好意的な態度には見えない。

だけど他のクラスメイトのように存在すらも認識されていないよりはマシかもしれない。少なくとも俺のことは意識しているわけだし。

――だとしても傷つくって……。

まさかいきなりこんなふうに嫌われるとは思わなかったので、正直なところムカついた。

俺、何か嫌がられるようなことした？　むしろ黒板の字を読んであげたり、めちゃくちゃ親切にしてると思うけど。

チラッと横目で見ると舞はノートを取るのに夢中になっていた。

――本当に俺のことが嫌い？　でも、どうして？

それは、ほんのちょっとした悪戯心だったんだ。

俺は彼女の肩先に顔を近づけた。

次の瞬間、彼女が視界から消える。

ガッターン！！

――……え？

俺は床に尻餅をついた舞と目が合った瞬間、つい噴き出してしまった。

笑ってはいけないが、その無様な姿が意外すぎて笑いが止まらない。だって普通椅子から落ちるか？

でも舞の顔が一瞬歪んだのを見て我に返った。すぐに笑いを引っ込めるのは難しかったけれど、あんなに勢いよく椅子から落ちたら相当痛いはずだ。

それに避ける舞が悪いとはいえ、俺が悪戯したせいでこんな事件に発展してしまったのだ。

「ごめん、立てる？」

俺は手を差し出したが無言で拒否された。そして俺を見ないよう

にして立ち上がって座る。

「高橋、どうした？」

先生が近づいてきたので俺は慌てて言い訳した。

「先生、すみません。僕がからかったせいです。高橋さん、ごめんね」

俺がそう言うと先生は納得したのか、すぐに教壇へ戻った。こういうとき、優等生の看板はとても有効だ。先生からすれば真面目で努力家でおとなしい舞は非の打ちどころがない生徒だしね。

舞を見ると無表情だが、むしろ眼鏡の奥の目は据わっているようだ。

これは……さすがにヤバい。

「……怒った？」

「……」

――あー、これはかなり怒ってますね。こういう人が怒ると本当に怖いよね。

そう思いながらも、俺の軽い口から軽い言葉がつい滑り出る。無視されててもフォローしなきゃダメでしょ、一応。

「ごめん。本当は忠告しようと思ったんだ、『落ちるよ』って」

舞は俺をキッと睨んでまた視線を背けた。

さすがに胸がズキッと痛んだが、それと同時に彼女が感情を表してくれたことが嬉しかった。このチャンスを逃す手はないって思わない？

「だって高橋さんが俺のこと避けるから」

舞の表情の変化を見逃すまいと俺は彼女を見つめ続けた。彼女は俺が視界に入るのを頑なに拒んでいる。

「ちょっと傷ついたな。そんなに俺のこと嫌いなわけ？」

「嫌いです」

舞は間髪入れずきっぱりと答えた。

「即答かよ」

ため息が漏れる。ここまではっきり言われると俺の心もさすがにへコむというものだ。いきなり嫌いじゃどうしようもない。

――やっぱりさっきのは、やりすぎだったな。

俺は珍しく出来心からしてしまった悪戯を激しく後悔していた。

「あの……」

――え？

舞がおどおどと口を開く。なぜか俺を気遣うような視線を送ってきた。

「それ、香水？」

「あ、これ、嫌いかな？　クサい？」

そういえば父親にも匂うって注意されたな。最近少しつけ過ぎてるのかも。

舞は戸惑ったような表情をした。

――ん？

「えっと、そうじゃなくて……、嫌いじゃなくて、むしろ……」

――もしかして……照れてる？

「そう。それならよかった」

思わず笑みがこぼれる。それが嫌味な顔にならないよう気を遣った。

――なんだ、そうか。……そうなんだ。

俺は納得した。そして心の奥底から安堵した。

「ごめん、痛かったよね」

「別に、もういいです」

――優しいね、舞ちゃん。

そう強がって言う舞がどうしようもなくかわいいと思ってしまった。さっきはもう二度と悪戯するのはやめようと思ったが、やっぱり、と考え直す。

「そんなに近寄らなくても見えるでしょ」

「うん、気がついてた？」

「私に近寄っても何もいいことありませんよ。いい匂いがするわけでもないし」

舞は自嘲的な笑みを浮かべている。自分を過小評価しすぎだが、それも仕方ないか、と分厚いレンズの奥を覗き込んだ。

「わかってないね、高橋さんは」

――本当にわかってない。……何も、ね。

「でもそういうところが……」

――舞のいいところだよね。……今はこれ以上は言わないけど。だっていきなりそんなこと言って、また避けられても嫌だからさ。まぁ、俺は結構気が長いほうだからのんびりやらせてもらうとするか。

というわけで、じっくりともう逃げ場のないところまで追い詰めたら、嫌と言うほどわかってもらうので、そのときを楽しみに待っててよね。舞ちゃん！

――……って、俺、やっぱりタチ悪い？

# 16

土曜の朝、俺は目覚まし時計ではなく騒音に起こされた。

隣の部屋から突然、人気アーティストの楽曲が大音量で流れてくる。いくら朝に弱い俺でもこの爆音の中で寝ていられるわけがない。俺は飛び起きて、隣の部屋のドアをノックもせずいきなり乱暴に開けた。

「うるせーぞ！」

部屋の主であり俺の弟の寛人は机の前に座ってノートパソコンに向かっていた。チラッと振り返って俺の顔を見ると、またノートパソコンに目を戻す。

「兄貴、今日も学校だろ？　起こしてやったんだから感謝しろよ」

「はぁ！？　こっちは聴きたくもない音楽を聞かされて迷惑なんだよ！　つか、朝からゲームすんな！」

パソコンの画面を覗き見るとオンラインゲームをやっているようだ。昔から寛人はゲーム好きで、今は無料でできるネットゲームにはまっているらしい。

そういえばヤツの学校は土曜は休みなのだ。普段はS市まで電車で通学しているので寛人は早朝に出かけてしまう。ヤツが家を出るとき、俺はまだ夢の中ということだ。

ふと壁の時計を見て俺は一瞬目を疑った。

「え！？　その時計進んでる？」

「5分遅れてる」

「マジかよ！」

俺は慌てて寛人の部屋を出て、朝食もそこそこに準備をし自転車に飛び乗った。

何とかギリギリで学校に到着したが、駐輪場は既に満車であるのと、玄関から遠いとういう理由で玄関の脇に自転車を停めた。俺と同じ考えの持ち主は案外多く、ざっと見て二十台近く違反駐車していた。これだけ同志がいれば怖いものなしだと安心して、俺は教室へと走った。

「おはよう」

舞は読んでいた本から目を離し俺を見た。

「おはようございます」

どうしていつも丁寧語なんだよ、と不満に思うが、挨拶をしてくれるだけマシかと思い直す。舞は基本的にこういうキャラなんだよな、たぶん。

授業中はまだぎこちないが、それでも昨日に比べれば舞の態度はずいぶん落ち着いたようだ。昨日の事件はいわゆるショック療法になったとも言える。

よかった。これで安心して悪戯ができるというものだ。……いや、さすがに今日はしないけどね。

休み時間、教室の後ろのドアからイトコの神崎英理子がつかつかと入ってきた。俺と英理子がイトコだというのは、この学年では割と有名な話だ。なのでクラスメイトも大して気にしていない。

英理子は俺の隣を見て「あら？」とすぐに声を上げた。

――やっぱり気がついたか。

「あなた、高橋さん……よね？」

「は、はい！」

舞は慌てた様子で本から顔を上げてこちらを見る。その様子が可笑しくて、ついからかいたくなるんだよな。

「英理子、いきなり呼んだら高橋さんびっくりして椅子から落ちちゃうよ」

「なにそれ？」

英理子は俺に一瞬軽蔑するような視線をよこし、舞にはニコニコしながら舞の姉の話題を振った。だが、舞は英理子が誰だかわかっ

ていないようだ。

「英理子、高橋さんに自己紹介しないと」

俺は助け舟を出した。二人のやり取りを観察する限り、舞は本当に英理子と俺のことを忘れてしまっているようだ。

俺が舞と会ったのは一度きりだったが、英理子とはたぶん何度か会っているはず。舞のお姉さんのピアノのレッスン日に一緒に来ていたみたいだからね。でもその英理子ですら忘れられているのだから、俺のことなど覚えていないのも当然か。

知らず知らずため息が漏れる。

――英理子はこの分厚い眼鏡姿でも舞のことにすぐに気がついたな……。

何となく俺のプライドが傷ついた。正直なところ、俺は記憶力には人一倍自信があった。他の人間の忘却力に呆れるくらいね。

それが英理子のほうがウワテだったというのが何とも腹立たしい。特にこの件に関しては、だ。

英理子が去った後、舞の様子を見ると何だか考えるような顔をして、ボーっとしていた。

――……珍しいな。何を考えてるんだろう？

少し憂いを帯びた表情に俺はしばし見とれていた。

だが、舞はその俺の視線にも気がつくことなく、自分の世界に閉じこもってしまったようだった。

授業が終わると俺はクラスメイトの田中と一緒に教室を出た。他愛もない話をしながら靴を履き替え玄関を出た俺は一瞬言葉を失った。

「……ありゃ、今日も陣内さんの鎖に何台もひっかかったな」

田中が他人事のように（実際他人事だが）そう言った。陣内とは書道の先生で、怒ると烈火のように激しい。その怒る様子を瞬間湯沸かし器に例えてそのメーカー名があだ名になっているくらいだ。

「おい、清水？」

玄関から一歩も動かない俺に田中が不審な顔で振り返った。

「……やべぇ。俺の自転車もそこにある」

「マジかよ。今日は大漁だから噴火してるかもな」

田中は心底可笑しそうに「じゃ、がんばれ」と俺に手を挙げて見せ、自転車置き場へ消えた。

――くっそー！

陣内先生自体は悪い人ではないと思うが、自転車の違法駐車取り締まりに過剰な情熱を傾けているのがいただけない。そしてもっといただけないのが、罰金ならぬ罰ゲームが待ち構えていることだ。

俺は仕方なくまた靴を履き替え書道準備室へ向かう。他にも鎖に繋がれてしまった自転車の持ち主が集まってきていた。

そこへ陣内先生がお出ましになった。小柄で白髪が多いがシャキシャキと姿勢良くやって来る。

「あそこは人が通る通路で、自転車を停めると邪魔になることくらい、見てわからんのかぁ！　このボケナスどもがぁ！」

独特の節回しで陣内先生は全体に怒鳴った。そしてついに今日の罰ゲームの発表だ。

「お前ら、これから書道教室の雑巾がけだ！」

――……って、もうピカピカだろうが！

彼の逆鱗に触れた者はもれなく書道教室の掃除をさせられているので、教室内は他の教室に比べると驚くほど綺麗なのだ。

だが、逆らう者はいない。過去に逆らった生徒が「反省」の文字を半紙に百枚書くまで帰らせてもらえなかったという話は既に伝説と化して、この学校の生徒なら誰もが知っている。

俺は仕方なく雑巾がけを始めた。今日は違反者が多いので案外早く終わった。陣内先生は教室内を点検し渋々ＯＫを出す。ようやく俺の自転車も先生のゴツイ鎖から解放された。

ケータイを見ると母親からメールが来ていた。

――「昼ご飯はありません」……って、どういうことだよ！？

たぶんあの母親のことだから友達とランチに行っているのだろう。親父もよく何も言わないよな。言っても無駄だというのもあるけど。

俺はそれなら本屋に寄って帰ろうと思い、駅のほうへ向かって自転車を漕いだ。

もうウチの学校の生徒はほとんどいない。土曜なんて用事がなければさっさと下校するものだ。

そう思って角を曲がると思いがけずウチの学校の女子の制服が見えた。しかも白い車が低速で車線を無視して彼女の横にぴったりとつけている。なんだ？

――あれ？　もしかして……

近づいていくとその女子が知っている人に見えてきた。そう思っている間に開いている運転席の窓から手が伸びて、その女子の腕をつかんだ。

――おいおい！　何してるんだ？

俺は胸騒ぎがして自転車のスピードを上げた。

彼女はつかまれた腕を何とか振りほどこうともがいている。その横顔は紛れもなく舞だった。

「高橋さん」

確信すると同時に俺は彼女の名前を呼んでいた。

すると突然、運転手の男が高橋さんの腕を放し、彼女は勢い余って倒れそうになる。車が急発進した。

「危ない！」

何とか間に合って、藁にも縋る思いで手を伸ばした舞を俺は受け止めた。

「うぎゃっ！　……ご、ごめんなさい！！」

俺に密着してしまったことに気がついた舞は気が動転しているのに、更にパニックに陥ったようだ。俺から飛び退るように離れて、鞄を拾った。

「大丈夫？　ていうか、何あれ？」

「ひ、ひ、ひっ……」

「……？」

「人さらいっ！！！！！」

一瞬、俺は舞をまじまじと見つめた。

――……人さらい？

「ぶはっ！」

ちょっと、舞ちゃん！　可笑しすぎて腹が痛いんだけど！！

俺は我慢できずに思い切り爆笑してしまった。こんなに可笑しくて笑ったのは久しぶりのような気がする。

ひとしきり笑って舞を見ると珍獣を見るような目で俺を見ていた。サーッと血の気が引く。まずい、笑いすぎた。

「いや、ごめん。高橋さんが『人さらい』なんていうから可笑しくて……。でも危ないところだった。怖かったよね？」

「えと……声も出なくて……」

そりゃそうだよな。それが普通の反応だと思う。

「大声って咄嗟には出ないらしいよ。普段から練習しておくといいみたい……って今は練習しなくていいけど。俺が疑われるから」

「そうなんだ」

ようやく舞は落ち着きを取り戻したようだ。本当によかったと思った次の瞬間だった。

「あ？　……あーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

「だから、今練習しなくても！」

――おい！　俺はまだ何もしてませんが。

「ち、違う！　電車が……」

「ああ。もう行っちゃった？」

「……もう間に合わないわ」

舞は相当がっかりしたらしく切ないため息をついた。

すぐに俺はいいことを思いついた。母親に感謝しなきゃな。

「じゃあさ、お昼一緒に食べない？」

「へ？」

「駅の近くに美味しい定食屋さんがあるんだけど、どう？」

「定食……」

そういうのは好みじゃないか。でもファーストフードとかファミレスだと学生が多いからいろいろと面倒だしね。俺はどこでも全然かまわないんだけど。

「どうせ電車しばらくないんでしょ？」

「よくご存知で」

ま、それくらい当然予備知識として既にリサーチ済みだから。

「じゃなきゃ、あんな大声で電車に乗り遅れるのをがっかりしないんじゃ？」

「さすが、学年一番」

――へぇ。舞も言うね。

彼女のちょっとした嫌味が不思議と嬉しかった。だってそれって俺に少し慣れてきたってことだし。

「で、どうする？」

「でも私なんかと一緒だと迷惑じゃ……」

――ふーん。やっぱりそうか。

「高橋さんって、俺のことそんなに嫌いなわけ？」

俺は舞が気後れしなきゃいけないような人間じゃない。むしろ……。

「……嫌い」

一瞬、その言葉がグサリと胸に突き刺さった。

「……とかじゃない……けど」

――焦ったーーー！

俺はホッと胸を撫で下ろす。

「じゃあ……」

「どうして私のことを構うのかわからない！」

それまで小さな声で口ごもりながら話していた舞が突然はっきりと大きな声で言った。

その勢いにのまれて俺は次の言葉を発することができなくなってしまった。

「私をからかうと楽しいから？　どうせ面白い玩具か何かだと思ってるんでしょ？　そして……み、みんなで私を笑って……た、楽しいですか？」

――……違う、違うよ。

だけど、即座に否定できなかった。彼女がそう思うのも無理はない。

実際、俺の行動は舞の気持ちを考えてのものじゃなかった。ただ静かにひっそりとあの教室の隅にいることに満足していた舞にとって、俺が隣の席だというだけでもきっと迷惑な話なのだ。

「楽しいのは、当たってるかな」

――ごめん。ガキっぽいことしちゃって。

「でもちょっと違うな」

――これだけはわかってほしい。

「気になるんだ、高橋さんのこと」

俺はかなり思い切って告白した……つもりだった。

が、次の瞬間、顔を上げた舞の瞳からポロポロと大粒の涙が零れ落ちる。

「うわぁ、俺が泣かせちゃったんだよね……ごめん」

――ていうか、俺の話、全然聞いてないだろ！？

「からかったわけじゃなくて……あーでも今更何言っても遅いか」

渡したティッシュペーパーで鼻をすする舞を見て、俺は確信する。

――完璧に流された……。

仕方ない。まだ早すぎる。俺はがっかりしながらも舞のスピードにあわせようと思い直した。

「高橋さんをついからかいたくなったのは確かです。ごめんなさい。でも、高橋さんって他の人と違うから楽しい……っていうか、嬉しかったんだよね」

もし隣が舞じゃなかったら俺は居眠り三昧の毎日に決まってる。あんな特等席にいて居眠りするな、というほうが無茶な話だ。

それに舞は悪戯し甲斐があるってわかったし。

不思議そうな顔をしている舞に俺はもう少し噛み砕いて説明した。

「思ったことがストレートに言動に現れるでしょ？　なんていうか……他のヤツらはワンクッションあるんだよね、俺に対して」

「それは清水くんが学年一番でカッコいいからじゃ？」

誰がそんなこと言い出したのか知らないけど、それは決して俺が

努力して手に入れたものじゃない。
その評判のせいで舞が俺を敬遠するなら、こんな外見なんかほしいヤツにくれてやる。
「俺は、そんないいもんじゃないよ」

――わかるかな、君に。……俺の気持ちが。

舞は少し表情を曇らせた。もうすっかり涙は乾いていた。
――優しいね。さっき自分を泣かした人間に同情なんかしなくていいのに。
「さて、駅に着いたけどどうする？」
俺は駅の入り口前で立ち止まり改めて舞を見た。
思案顔の舞が時計を見る。まだ時間はかなりあるはずだ。当惑して俺に視線を投げかけたその時……

グウゥゥゥゥ……

慌てて舞はお腹を押さえる。聞くまでもないが、一応ダメ押しで質問した。

「……行くよね？　定食屋」

舞は恥ずかしそうに下を向いてかすかに頷いた。俺は密かにニヤリとし、自転車置き場へと急いだ。

# 17

日曜の夜、自宅のリビングは宴会場になっていた。

一応、名目は俺の誕生会らしい。そういえば三週間前に誕生日が来た。だけど誕生会というのは単に大人が酒を飲む口実がほしいだけで、ぶっちゃけ主役のはずの俺をそっちのけで両親や叔父、叔母たちがビール瓶を次々と空にし、今はワインの講評で盛り上がっている。

そして、若いグループは酔っ払いどもを尻目にテーブルの上の料理を平らげ、リビングの一角で情報交換を始めたところだ。

こういう場合の中心人物はいとこの英理子だ。英理子を見ているといつも思うが、女ってホントよく喋るよな。

「ひろくん、彼女できたんだって？」

英理子が突然寛人に向かって問いかけた。

もう英理子まで伝わっていることに驚きながら弟の寛人を見ると、照れたように顔を紅くしてニヤニヤと笑ってやがる。母親の勘は当たっていたらしい。俺は寛人から目をそらして大きくため息をついた。

「ね、どんな人？　どこで知り合ったの？」

「同じクラスの人？」

妹の笑佳も英理子の隣で寛人の尋問に加わる。俺は何だか悔しくて鶏のから揚げに箸を突き刺した。

「違うよ」

寛人ははにかみながら答えた。

「じゃあ、どうやって知り合ったのー？」

「ちょっと言いにくいんだけど……」

モジモジしている寛人に無性に腹が立って、俺はから揚げを飲み込むとからかい半分で話に割り込んだ。

「コイツの場合、ネットゲームで知り合ったとかじゃねぇの？」

寛人が驚いた顔で俺を見つめてくる。……冗談で言ったつもりだったが、まさかビンゴ？

「えー！？　ホントに？」

英理子が手を口に当てて信じられないものを見るような目で寛人を見た。寛人は一同の視線を浴びて小さくなる。

「だ……ダメかな？　でもすごく性格がよくて、写メ送ってもらったけど顔もけっこうかわいいし」

寛人の説明によるとたまたま同じギルド（ゲーム内のグループのようなものだそうだ）で仲良くなった女の子が、偶然にもＳ市に住んでいてそれがきっかけで更に親密になり、ゲーム内で付き合って

いるらしい。

「それってゲームの中だけでリアルは別なんじゃないの？」

「そんなことはない……と俺は思ってるけど」

なんだよ、焦ったじゃないか。だいたい俺に彼女がいないのに、コイツに彼女ができるなんておかしい話だ。

英理子もがっかりしたようで寛人への尋問はそこで終わった。そして急に意味ありげな笑顔を浮かべて俺の向かい側に移動してきた。

「はるくん、何か良からぬことを企んでるでしょ？」

「良からぬこと？　何のことやらさっぱり」

俺はとぼけてウーロン茶を飲んだ。英理子の顔を見ていると心の中を見透かされそうな気がして怖い。

「何かあったの？」

今まで黙って聞き役に徹していた遠藤さんが口を開いた。遠藤さんは英理子の彼氏だ。彼は既にこの宴会の常連なのだ。

彼がこの宴会に初登場したのは二人が付き合い始めてすぐの頃だった。特に俺の母親が「皆に紹介して」と英理子にしつこく頼み込み実現したのだ。それ以来、遠藤さんは特に用事がない限り、必ず宴会に参加するようになった。

他の家庭の親戚付き合いを見たことがないから自信はないが、そ

れにしても我が家は異常だと思う。

こんなふうに親戚公認の付き合いだと英理子も遠藤さんも簡単に別れるわけにはいかないだろう。たまたま遠藤さんはウチの親戚にアレルギー反応が出なかったからよかったが、この雰囲気についていけないと思う人間は少なくないと俺は思う。

「英理子が何のことを言ってるのかわかんない」

「あら、そんなこと言う？　私、月曜日に学校でうっかり口を滑らせちゃうかもしれないけど悪く思わないでね。『清水暖人の初恋の人が……』」

ツンと澄ました顔でそう言うと、英理子は立ち上がろうとした。

「ちょっと待て！」

俺は慌てて引き止めた。

「俺は今更誰に何を言われても平気だけど、隣の席の人はそういうことに免疫ないからやめれ」

英理子がニヤリとして腰を下ろした。

「私『隣の席の人』のことだって言ったかしら？」

ブーッ！

「お兄ちゃん、汚い！」

思わず飲んでいたウーロン茶を噴いてしまった。妹が慌ててティッシュペーパーを探す。英理子の得意げな微笑を忌々しく見返した。

「でもちょっと安心した。あんな真面目な人だし、また本気じゃなかったらかわいそうだと思ってたの」

「それにしても彼女はなんであんなふうになっちゃったんだろう」

俺は密かに疑問だったことを口にした。少なくとも小学生のときは眼鏡はかけていなかったし、あそこまで人を寄せ付けない印象はなかった。

英理子は少し首を傾げる。

「もともと内気なタイプだと感じてたけど、人付き合いが苦手なんじゃない？」

「苦手っていうかほとんどしてない」

「そうなんだ。なんかあったのかな？」

こればかりは想像してもわかるものでもない。俺たちが一瞬黙った隙に遠藤さんが口を開いた。

「はるくんの隣の席の人が初恋の人なんだ？」

俺が返答をためらっていると、頼んでもいないのに英理子が代わりに答える。

「そうなの。最初に会ったのは小学一年のときだったかな。お姉さんがウチのお母さんのところにピアノを習いに来ていて、夏休みだったから舞ちゃんも一緒に来てたんだよね。そこにはるくんもやって来て、仲良く三人で遊んだんだけど、なぜか舞ちゃんだけ綺麗さっぱりそのときのことを忘れているみたいなのよね」

ホント、なんで忘れるかな？　俺たちと遊んだ記憶はあまり楽しいものじゃなかったってことだろうか。

「それで、昨日はるくんのクラスに行ったら、その舞ちゃんがはるくんの隣の席だったの！　でもすっごく分厚い眼鏡をかけていて、休み時間中ずっと一人で読書してるみたいで、昔と少し印象が違うっていうか……。その舞ちゃんをはるくんがちょっかいかけてるんだよね？」

「まぁ、否定はできないな」

遠藤さんがクスッと笑った。

「はるくんって案外子どもっぽいところあるんだ」

――俺が子どもっぽい？

「いや、違うんです」

慌てて反論する。

「からかうと反応が面白くて」

「それ、酷いじゃない！」

英理子の俺を見る目が冷たいものに変化した。更に俺は慌てる。

「いや、だって普通に話しかけても必要最低限のことしか返事してくれないし、どっちかっていうと、俺、避けられてるし。でも、なんかついからかいたくなるんだよね。昨日の帰りなんかすっげーおかしくて、久しぶりに爆笑したし」

それから俺は昨日の下校時に起こった人攫い事件について、かいつまんで英理子と遠藤さんに話して聞かせた。まぁ、当然自分に都合の悪いところは端折ったけれども……。

「舞ちゃんってそんなにかわいいの？」

遠藤さんがぶしつけにそう言った。

「たぶんかわいいっていうより、男からするとおとなしくて言うこと聞きそうに見えるんじゃ」

「いや、普通にかわいいでしょ」

英理子が自信満々に俺の発言を否定した。

「眼鏡なければね」

「いや、眼鏡しててもかわいいでしょ。それに世の中には眼鏡ッコ好きだっているんだし、舞ちゃん一人で帰るのは危険すぎるわ。そ

うだ、決めた！　明日から哲史さんのお迎えついでに私が舞ちゃんと一緒に帰るわ」

おいおい、英理子。なんでそうなる？

「確かに、英理子と一緒なら安心だよね」

おいおい、遠藤さん。そりゃ、英理子は見た目からは想像もつかない怪力で、空手なんか習っちゃってるけど。

「というわけで、明日はるくんのクラスに迎えに行くから、舞ちゃんに伝えておいてね」

「待てよ、勝手に決めんな」

「あら、はるくんこそ何よ。彼氏でもなんでもない、ただの隣の席の人のくせに」

――言ってくれるじゃないか。

「そうだよ。ただの隣の席の人だけど、何か？」

「私、舞ちゃんの親友になることに決めたわ」

とびきりいいことを思いついたというように、英理子が顔を輝かせて宣言した。英理子は言い出したら最後、他人の話を聞く耳は持

っていない。

明日からの舞の運命を思い、俺は舞に心底同情した。

「私たち、きっといい友達になれると思うの」

思い込みが激しいのも英理子の欠点だと思うが、英理子が俺のイトコである以上、遅かれ早かれこういうことになる宿命なのかもしれない。

それに、と俺は遠藤さんを見て改めて思う。

もし俺に彼女ができたら、この宴会にも連れて来なければならないのだろうか。できればそれだけは避けたい。この一癖も二癖もある酔っ払いの大人どもに絡まれることを想像すると、いくらなんでもかわいそうだ。

それを考えると英理子と舞が友達になるのは、あながち悪いことではないかもしれないと思った。

俺はその晩、布団に入ってもすぐに眠れずとりとめもなく考え事をしていた。

もしかすると俺は舞に対する認識を誤っていたのか、と思い始める。そう考え始めるとおかしなもので、誰もが舞の魅力に気が付い

ているのではないかと急に不安な気持ちに襲われた。

――こりゃ、のんびりしてられないかもな……。

もう一つ、焦る理由に心当たりがある。

ハプニングとはいえ、舞を抱きとめてしまったことだ。自分よりも小さくて柔らかくて頼りない不思議な感覚。

ガッツクつもりはないけど俺も男だからね。困ったことにあまり長くは我慢できない仕様だったりする。

でもホント、通りかかったのが俺でよかった。きっと舞もそろそろ俺を意識し始めただろう。そう思うと、ニヤニヤと笑いがこみ上げてくる。

それにしても俺の勇気ある告白（もどき）を全く聞いていないとは舞もどういう神経をしているんだか。

こうして俺は明日からの計画を練り直しながら、いつの間にか眠りについたのだった。

## 18

月曜の朝はいつもと少し違う朝だった。

「おはよう」

俺は舞のそっけない返事を覚悟して声を掛ける。実はこれが結構心臓に悪い。

「おはようございます」

普段となんら変わりのない返事だが、俺はその舞の表情に数秒間釘付けになった。眼鏡の奥の瞳に答えを探すような気持ちだ。

ほんの少しだけ微笑んだように見えたのは錯覚だったのだろうか？

瞬時に舞は無表情に戻り、無関心の空気を纏い直したようだ。

でも、俺は微妙に変化した舞の態度に敏感だった。授業中、わざと腕がぶつかるくらいに近付いても、舞はもうあからさまに避けたりはしない。それは明らかに進歩だからもろ手を挙げて喜ぶべきところなのに、俺は心の片隅でなぜかほんの少し彼女の変化を寂しく感じていた。

そして、昼休みに事件が起こった。

「あの……私と付き合ってください」

俺は田中から借りた漫画に読みふけっていた。仕方なく傍らに立つ女子を見る。確か一年生でかわいいと評判の子だ。

「俺、今気になる人がいて、キミとは付き合えないよ。ごめんね」

自分にしては優しく丁寧に断ったほうだと思う。何しろ、無関心を装ってはいるが、隣には舞が座っている。聞こえていないフリをするだろうが、絶対彼女は聞いているはずだ。

だから俺からするとこのセリフは、むしろ舞に対して告白しているようなものだった。

――まぁ、全然気がついてないと思うけど。

諦め半分でちらりと舞の様子を窺うと、本を開いてはいるものの、何やら眉に皺を寄せて難しい顔をして瞬きを繰り返している。

思わず笑い出したくなるのをこらえて、改めて俺の席の横に突っ立っている訪問客を見た。

「その気になる人って、私よりもかわいい人なんですか？」

彼女は挑むような視線をよこしてそう言った。

よくそんな自信満々な発言ができるな、と感心しながら彼女をまじまじと見つめた。確かに容姿はそれなりのレベルだが、周りがちやほやしすぎるのか全身から「私はかわいい」という傲慢さが滲み

出ているようだ。

そういうツンツンしたところが好きだという男もいるだろうが、はっきり言って俺のタイプじゃない。

できればその天狗の鼻をへし折ってやりたいという意地悪な気持ちが俺の中で大きくなる。

「うん」

彼女は不愉快だとばかりに鋭い目つきで睨んできた。まだ納得が行かないらしい。

この際、そういうところが苦手なんだとはっきり言ってやりたいが、この人目の多い場所であまり過激な発言はしないほうがいいような気がして、結局無難な路線で彼女を退けることにする。

「あそこにいるサッカー部のヤツ、知ってる？」

俺はクラスメイトの菅原（すがわら）を指差した。

「はい。人気ある人ですよね」

そうなのだ。菅原は身長も低めで足も短めだが、いわゆるサッカー馬鹿で、少し垂れ目気味のところが一部の女子に絶大な人気があった。

それをいいことに菅原は二股をかけるくらいのことは日常茶飯事で、俺と同じくらい悪評高くもある。ちなみに俺は菅原のことはあまり好きじゃない。

「そう。例えばさ、キミがもし今、アイツに『付き合って』って言われたら、キミはどうする？」

「お断りします。私は清水先輩が好きなんです」

――菅原、ご愁傷様。

「つまり、そういうこと」

「……わかりました。でも私、諦めませんから」

そう高飛車に言い捨てると彼女は回れ右をして教室を出て行った。

俺はとりあえず面倒を回避したことに満足して、また漫画を読み始めた。

すると誰かが前の席に座る気配がした。それが田中なのは見なくてもわかる。

「おい、清水。あれ、1年で一番かわいいって子だろ？　フっちゃって勿体ねぇな。いいのかよ？」

田中は深刻そうな声を出した。

「いいも何も、興味ない」

「珍しいな。1年のときはかわいい子なら即オッケーだったろうが」

確かにそういうこともあった。それは否定できないが、今、ここ

で言われたくはない。

「人聞き悪いこと言うなよ」

「本当のことだろ？　とっかえひっかえ……」

――余計なことを言うな！

俺は漫画の雑誌を机に叩き付けた。田中と舞が驚いて肩を震わせる。

一つ深呼吸をしてから、口の軽い田中にとてつもなく寛大な気持ちで話しかけた。

「これ、ありがとう。面白かった」

「お、おう」

田中はわけがわからないらしくきょとんとしたままだ。当然、説明してやる気もないが。

「俺、高橋さんと話がしたいから、どこか行ってくれる？」

一瞬だけ「え、なんで？」という顔をしたが、俺が笑顔のまま目

つきを少しだけ鋭くすると、素直に退場してくれた。

今更、清純派を気取るつもりはないが、それでも俺は舞と話をしなければならないと思ったのだ。

――さて、と。

「高橋さん、全部聞いてたよね？」

気が進まないが、舞への尋問を開始する。

「い、いえ、何も聞いてないよ。私、本読んでたし」

舞はあくまで白（しら）を切るつもりらしい。

「さっきから同じページを行ったり来たりしてるみたいだけど」

「私、カタカナの名前ってなかなか覚えられなくて『この人誰だったかなぁ』と思ってね」

「それ、カタカナの名前の人出てこないでしょ。夏目漱石の『明暗』って表紙に書いてあるように思うんだけど」

諦めたのか、舞はようやく俺を見た。腫物に触るような態度が癪に障るが仕方がない。

「さっきアイツが言ったみたいに、女の子をとっかえひっかえするような男って最低……だよね？」

俺は言いながら、激しく気分が滅入っていくのを感じた。この回

答次第で俺は、自分がかなり厳しい立場にいることを嫌でも自覚しなければならない。

「……別にいいんじゃない？」

意外にも俺を励ますような力強い語調だった。

「それはどういう意味？」

「どうって……それは人それぞれだと思うから。私が好む好まないは関係ないことだと思っただけ」

――なるほど。

俺は頬杖をついた。考えてみればそれは至極当然の答えだった。

だが、俺の立場は厳しいどころではない。そもそも眼中にもないと言われたのだ。

「つまり、高橋さんは俺に興味がないということ？」

ここで引き下がらないのが、俺。

今まではそうかもしれないけど、今日からは俺に興味を持ってもらいます。

「きょ、興味って……」

――困ってる、困ってる。

内心、俺はほくそ笑んだ。

「答えにくいでしょ？　じゃあ、好きな人がもしそういうヤツだったら？」

「別に……」

――強がっちゃって。

「気にしないの？」

「まぁ……」

「浮気されるかもしれないよ？」

「それは、そういう人を好きになったんだったら仕方ないんじゃない？」

――仕方ない？

かなり意外な言葉だった。それは相手の嫌な部分も受け入れるということだろうか。俺なら無理だ、と思う。

「高橋さんってやっぱり変わってるね。あ、悪い意味じゃなくて。普通は『そんな男はイヤ』って思うからさ。俺だって自分の好きな人がそんなだったらやっぱり嫌だし」

舞も少し驚いた様子で俺を見た。ホント、俺はどういう風に見られているんだろう。

「今、意外だと思ったでしょ？　俺は独占欲が強いよ」

「そうなんだ。私は……経験がないから、本当はよくわからない」

「でも好きな人くらいいたでしょ？」

「……考えてみれば、いない……かも」

舞は本気で過去を振り返って考えたようだった。

「ええ！？」

――……って、今まで好きになった男なんか一人もいないってこと？

「……変、かな？」

「変じゃないよ。恋はしようと思ってできるものじゃないからね」

そうは言ったものの、俺の心中は穏やかではなかった。

少なくとも今まで舞が出会った異性の中には心を動かされるようなヤツはいなかった、と言っているわけだ。そしてその中には勿論俺も含まれている。

ものすごく悔しいし、納得が行かない。

――それに、あのとき……。

俺は初めて会ったときの驚いた舞の顔を思い出した。確かにあのとき、舞は俺を意識していると感じたのに。

心のどこかでずっと自惚れていた自分がまるでピエロのようだと思う。

――バカだ……。

自分をあざ笑うと、さっさと気持ちを切り替えた。くよくよ考えても仕方がない。

「あ、そうだ。昨日英理子がうちに来てて、土曜日の話をしたら今日から高橋さんと一緒に帰るって言い出してさ。たぶん放課後迎えに来ると思う」

昨夜のことを思い出して苦笑しながら舞を見ると、なぜか彼女は突然表情を硬くしていた。

「本当は英理子じゃなくて俺のほうがいいと思うんだけど、アイツ言い出したら絶対引き下がらないからさ」

訝しく思いながらも言葉を続けたが、舞は凍りついたように冷たい顔のままだ。どうも彼女の意識は別の次元にあるらしい。

「って、高橋さん、聞いてる？」

「は？」

「いきなり自分の世界に入ってるし……」

「ご、ごめん」

「とにかく今日だけでも英理子と一緒に帰ってやってほしいんだ」

「はぁ……」

心もとない返事に俺も釈然としない気分になったが、そこで昼休みは終わってしまった。

昼休み以降、舞の様子はますますおかしくなってしまった。今朝のほんの少しだけ打ち解けた態度は、夢か幻かと思うような豹変ぶりだ。あれから数時間しか経っていないのに、今朝が懐かしくなる。

考えてみると英理子の名前を出したあたりから舞は別世界にトリップしてしまったように思う。何かまずいことでも言っただろうかと思い返すが、全く心当たりがない。

もしかして、と舞を盗み見る。

――体調が悪いとか？

そう思って見るといつもより顔色が悪いようだ。そうだ、女子にはいろいろと体調不良の日があるからな、などと勝手に決めつけて

舞の体調を密かに見守った。

放課後になった途端、本当に英理子が教室にやって来て、周囲の注目をよそに有無を言わさず舞を連行して行った。

後れを取った俺は慌てて二人を追いかけようとしたが、予想外に田中が俺の進路に立ちはだかった。焦る俺は少しイラッとしながら仕方なく問う。

「何？」

「清水、俺に隠し事してるだろ？」

険しい表情の田中がにじり寄ってきた。俺は思わず一歩後退りする。

「はぁ？」

とぼけてみるが、田中は全く動じない。

「親友の俺にも言えないのか」

「何のことかわかんないけど、とにかく俺は急いでる」

そう言って田中を振り切って歩き出そうとすると、突然両肩をつかまれた。

「安心しろ。俺はどんなことがあってもお前の味方だからな！」

田中は真剣な眼差しで俺を見つめると、何かを納得したように頷

いてから俺を解放した。

「あ、りがとう？」

半信半疑で礼を言って俺は先を急いだ。チラッと振り返ってみると、田中は俺にもう一度頷いて見せる。

――なんなんだ！？

もしかしたら田中は俺の気持ちに気がついたのかもしれない。

自転車を漕ぎながら、ふと俺はそう思った。だが、それにしては何か腑に落ちない態度だとも思う。もしそうだとしたら、いつもの田中ならもっと茶化したように言ってくるに違いない。

――もしかして、アイツ、妙な勘違いをしてるんじゃ……

嫌な予感がした。背筋が寒くなる。

そう感じたとき、視界に舞と英理子の姿が入ってきた。

## 19

雲が風にのって気ままに空を流れていく。

ふわふわと綿菓子のようで美味しそうだと思い、教室の壁時計を見るともうすぐ正午だ。

――暇だ。ついでに腹が減った……。

今日何度目かわからないため息をつく。そして恨めしげに隣の席を見た。

――やっぱり昨日体調悪かったのかな。

また窓の外に目をやった。

授業は最高につまらない。古文の先生が『源氏物語』について解説しているが、当時の帝の夜の生活について、冗談交じりにきわどい発言をして生徒の笑いをとっている。

正直、俺にはどうでもいい。ハーレムは楽しそうだが、帝の寵愛を受けた桐壺の更衣が他の女性たちから嫉妬され、廊下を歩けば着物が汚れるようにわざと汚物を撒き散らしてあったりするくだりを読むと、男女それぞれの性（さが）に嫌悪感すら覚える。

愛情が、場合によっては、悪意に発展していくのが人間の怖い部分だと思う。

しかもそれが大昔から何も変わっていないというのが、気が滅入

る原因だ。

――愛……ね。

しかし考えようによっては『源氏物語』はよい教訓話だとも言える。現代風に言うなら、イケメン御曹司が愛した女性は必ずしも幸せにはなれないのだ。人生、ほどほどがよいということか。

つーか、イケメン御曹司なんてどこにいるんだ？　と、俺は思う。

しかも御曹司というのは生まれてみたら家が金持ちで超ラッキー！　……といった具合で、本人の努力は皆無。

イケメンだって同じだ。まぁ、現代では整形という裏技もあるが、それは努力とは言えまい。

――それにしても、進路どうするかな……。

担任から呼び出されて言われた言葉を思い出した。

「そろそろどっちに進むのか、ご両親とよく相談して決めたほうがいいぞ」

――なぜ俺の進路を両親と相談しないといけないんだ？

知らないうちにまたため息が漏れた。

欠席している舞の席をぼんやりと眺めて、先週聞いた彼女の進路について思いをめぐらす。

舞の志望大学は見当がついたが、たぶん今の彼女の成績だとかなり厳しいだろう。その場合、ランクを落として地元私大の文学部を受験させるというのが、進路指導のいわばセオリーだった。

どちらにしろ、舞は地元の大学を志望するようだ。それがわかってから、俺の心はかなり揺れている。

数学をやるなら地元では無理だ、というのが俺の結論だった。

そして一般論としては、歯科医になるなら舞が志望している地元の国立大学に進学するのがベストの選択と見なされていた。

――俺は……どうすれば？

考えがまとまらないうちにチャイムが鳴った。

頬杖をついたままもう一度ため息をつく。すると「おい、清水」と言いながら前の席に田中が腰掛けた。

「浮かない顔してどうした？　今日はお隣さん、休みなのに……」

田中の発言の意図がよくわからず、首を捻る。

「高橋さんが休んで、俺が嬉しくならないといけない理由は？」

「だってよ、お前……」

急に口の横に手を当てて声を潜めた。

「強請られてるんだろ？」

「はぁ？」

突飛な発言に俺は思わず大声を上げる。

「いくらだ？」

「お前、何言ってんの？」

「いや、だから、お前さ、高橋に何か弱み握られてるんだろ？　あ、そうか！　この前高橋が居眠りして椅子から落ちたのを庇ってやったのも……」

「違う。田中、勘違いしてる」

俺は田中の暴走を慌てて止めた。どこでどうなったらそういうことになるんだ？

「何が勘違いなんだよ」

田中は自分の思い込みに絶対的な自信があるらしい。コイツがそう思い込むに至った経緯が知りたいが、とりあえず舞のあらぬ嫌疑を解くのが先だ。

「まず俺は高橋さんに金を請求されていない。それに弱みを握られてもいない」

「あ？」

間抜けな返事だ。口をだらしなく開けたまま田中は固まった。ダメ押しに俺は付け足した。

「あと、高橋さんが休みでつまらないな、と思っていたところ」

田中はぱちぱちと細い目を何度か瞬きさせる。

「清水、お前……それって、あの高橋と仲良くしてるってこと？」

信じられないものを見るように田中は俺から少し遠ざかった。俺はその言い方にムッとしてすぐに言い返す。

「『あの高橋』って、そんな言い方は高橋さんに失礼だろ」

「だってアイツ暗いじゃん。友達もいないし。でも実は裏で危ないことしてるんじゃないかって噂だぞ？」

「危ないこと？　……噂？」

「そうだよ。あの分厚い眼鏡もダテで、実はアイツ結構綺麗な顔してるから、ほら、怖い人たちと仲がいいらしいとか……」

俺はムカつくのを通り越して呆れた。

「誰だよ、そんなこと言ってるヤツ」

「うちのクラスのヤツ、みんなそう思ってるよ」

「バッカじゃねぇの！？」

教室内がシンと静まり返った。

いつの間にか俺は立ち上がっていて、田中を見下す格好になっていた。

クラス内の全視線を一身に受けて、更に俺の怒りは膨れ上がる。

――なんて低俗なヤツらだ！

一人ひとりの顔を睨みつけると俺は椅子を乱暴に戻して教室を出た。

制服のズボンのポケットに手を突っ込んで、廊下の真ん中をズカズカと歩いて行き、ある教室の前で立ち止まった。

教室の中を覗くと、英理子の顔が見える。

「神崎」

呼び捨てて、顎でこっちに来いと示す。英理子は一瞬嫌そうに顔を歪めたが、すぐに廊下まで出てきた。

「何の用？　ストーカー男」

「つか、今日高橋さん休んでるから」
「えー？」
英理子は驚いて手で口を覆った。舞の体調不良に気がついたのは俺だけか。
「どうしたんだろう。あ、もしかして……」
「何？」
英理子はムフフと気色悪い笑みを漏らした。
「なんでもない。それより何か用？」
笑いを無理に収めて澄ました顔で言う。訝しく思うが、まずはこのイライラをぶつけることにした。
「英理子、高橋さんの噂、知ってる？」
「ウワサ？　知らない。そんなの聞いたことないけど」
学校内の噂に詳しい英理子が知らないのは変だと思いながら、田中の言ったことを話すと、英理子は難しい顔で頷いた。
「それ、きっと最近クラスの中で広まった噂なのよ」
「どういうことだ？」

「はるくんが舞ちゃんと仲良くするのを不愉快に思う人がいるんじゃない」

思わず腕を組んで廊下の壁に寄りかかった。

――なるほど。そういうことか。

納得したくはないが、それが一番妥当な線だと認めざるを得ない。

「バッカじゃねぇの？」

俺はもう一度同じセリフを、今度は心底呆れて言った。

「そう言いたくなるのもわかるけど、仕方ないわよ。それよりはるくんは自分の行動の結果が相手に及ぼす影響を考えたほうがいいと思う。女の嫉妬は怖いわよぉ」

「……ご忠告どうも」

まだ何か言いたげな英理子にさっさと背を向けて売店へ向かった。腹が減っていたのを急に思い出したからだ。

パンを買って教室へ戻ろうと階段を昇っていると、上から同じクラスの高梨まゆみが軽やかに降りてきた。

「高梨さん、ちょっといい？」

トレードマークの三つ編を両手で掴んで「うん」と、俺の三段上で立ち止まる。

俺は辺りに人影がないのを確認してから小声で言った。

「俺の隣の席の人の悪い噂って聞いたことある？」

高梨はすぐにピンと来たらしく、ニヤリと笑顔を見せた。

「清水くんも気にしてたんだ。高橋さんがそんなヤバい人たちと友達なわけないよねー。みんな高橋さんと話したことないから勝手なこと言ってるけど、清水くんは最近仲良くしてるからわかるでしょ？」

一瞬、反応をためらう。この高梨という女子はどこまでが天然で、どこまでが計算ずくなのかがわかりにくい。

「じゃあ高梨さんは噂を信じていないんだ」

「うん。どうせ言い出したのはメアリーだろうし」

メアリーというのは勿論あだ名で、同じクラスの西こずえのことだ。西が英語の教科書に出てくるメアリーという女の子の挿絵にそっくりだということで、このあだ名がついたらしい。

「西さんが？」

俺は面白いように外跳ねしている西の髪型を思い出して、笑いをこらえるのに苦労した。

それを見透かしたように高梨はニヤッと笑う。

「メアリーはきっと軽い気持ちで言ったと思うよ。悪気はあったと思うけど」

――悪気あるのかよ！

小さくため息をつくと、高梨は階段をスキップするように降りてきて、すれ違いざまに俺の腕を二回叩いた。そして階下で振り向くと大声で言った。

「モテる男はつらいのぉ」

俺が睨むと高梨は肩をすくめて逃げるように走り去った。

――何がメアリーだ！

これまで特に何の感情も持っていなかった西こずえに対して、今の俺は嫌悪感でいっぱいだった。

――こんなことして何になるんだよ？

西を恨むのと同時に、自分自身に嫌気が差してくる。

中学生のときにも同じようなことがあった。クラスのある女子と

仲良く話していただけで、その子がクラスの女子全員からシカトされてしまったのだ。

明るくて話しやすかったその子は急に俺を避けるようになった。それどころかクラスの誰にも心を開かなくなってしまった。

彼女に謝ってどうにかなるわけでもないし、クラスの女子全員を問い詰めても事態が改善するはずがない。むしろ悪化することが簡単に予期された。

結局、俺は何も出来なかった。そして自分のことが嫌いになった。

教室に戻ってパンを頬張ったが、ほとんど味を感じない。ただ胃に詰め込んでいるだけだった。

それでも空腹よりはマシだ。腹が減っていると思考回路が働かない。

教室内できゃあきゃあ言っている女子のグループを忌々しく見る。その中心には西がいた。

――直接言うか？

俺としては、舞が登校してくるまでに何か手を打っておきたいが、英理子のありがたい忠告を思い出し、早まった真似はよそうと結論を下す。

だが、結局のところこれでは中学生のときと同じだ。
卑怯な連中の報復を恐れて、身動きが取れなくなるのは嫌だ。
それに、だ。

――俺は何も悪いことをしていない。

……よな？

しかも舞にとって俺はまだ、ただの「隣の席の人」だぞ？
腹がこなれて気分も落ち着いてきたので、まず俺が一番最初にしなくてはいけないことは何かを考えた。

――つーか、考えるまでもないし。

ゆっくりとか、舞のスピードに合わせてとか、そんなのん気なことは言ってられない。

とにかく伝えなくてはならない、と思う。……俺の気持ちを。

昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴り、高梨が超ゴキゲンな顔で教室に戻ってきた。一瞬目が合うと、意味ありげにニッコリする。俺も同じように嫌味な笑顔を返した。

舞にとって救いは、このクラスの女子の中に少なくとも一人は中立の人間がいるということだ。高梨が完全に舞の味方だとは言えないが、アイツは思ったよりもフェアな精神の持ち主らしい。

ついでに英理子もいるし、それほど悲観すべき状況でもないような気がしてきた。

――まずは田中を改心させなきゃな。

それから舞とどこで話をつけるか、だろ？

進路？　そんなものは後でいい。だいたい受験するのは来年なのに、何で今から決めておかなきゃならないのか、意味がわからない。

生きる目標を見つけて、俄然やる気が湧いてきた。まずは午後の授業中に十分に休息を取っておこう。

授業が始まると、俺は頬杖をつきながら目を閉じて、先生の声をＢＧＭにして夢の世界へと旅立った。

放課後、帰ろうとする田中を呼び止めた。それから有無を言わさ

ず自転車置き場へ連行する。

「話ってなんだよ？」

田中は不満そうに口を尖らせて言った。

「俺は高橋さんの噂は信じないし、これからも高橋さんと仲良くするわ」

「は？」

怪訝な顔で田中は聞き返してくる。コイツにはもっとはっきり言わないとわからないだろうな、とその顔を見て思った。

「だから、俺は高橋さんと仲良くするから。友達以上になれるように」

「ま、待てよ、清水。お前、それって……す、す、す」

田中は壊れたＣＤのように「す」を繰り返す。

ため息をついてから、次の言葉を教えてやった。

「好きなんだよ、彼女のことが」

「……！！」

言葉にならない声を上げて、田中は一歩後退りした。

「なんか文句ある？」

「な、ない。ないです」

俺は二歩前進し、田中の顔を覗きこんだ。

「勿論、協力するだろ？　なんつっても俺とお前はダチだもんな」

「も、も、も、勿論！」

「つーことで、田中。あの高橋さんの噂は根も葉もないデタラメだから、他のヤツにもそう言えよ」

田中は急に俺の肩をガシッと掴んだ。そしてキリッとした目で俺の視線をとらえると力強く言った。

「任せておけ！　言っただろ？　俺はどんなことがあってもお前の味方だからな！」

――田中。お前、サイコー！

あまりにも単純すぎる親友に内心ではほくそ笑みながら、清々しい気持ちで親友と自転車を並べて走らせた。

男の友情もたまには役に立つな、と思いながら……。

## 20

翌朝、珍しく学校に早く着いた。本当に朝が苦手だったのを克服したのかもしれない。

何となくそわそわしながら教室でマンガを読んでいると、舞がいつもと変わらない様子で登校してきた。いつもながら、空気のように存在感が薄い。

顔を上げてできる限り自然な態度を心がけて挨拶をすると、舞は仕方ないというように俺を見た。

「おはようございます。もう元気です」

元気だという割に、舞の返事はか細い声だった。本当に大丈夫なのか？

しかし会話のきっかけがあるというのはいいことだ。俺は調子に乗って更に話しかける。

「滅多に休まないのにどうしたのかなって心配だった」

途端に舞が俺をじろっと見た。

――え？　俺、なんか変なこと言った？

一瞬不安になるが、別に変なことは言っていない……ハズだ。

なのに、なぜか舞の顔が急にぼーっと赤くなる。

「ちょっと、大丈夫？　まだ熱あるんじゃない？」

舞は大丈夫だと言うが、明らかに顔が上気し、何やら辛そうだ。

――いや、これ、熱あるでしょ。

俺は心配になって舞の額に手を伸ばした。

「……！！」

「ごめん」

俺は慌てて手を戻す。舞の顔が不自然に歪んで、また泣かせてしまったのかと焦る。

とても悲しそうな表情だったが、舞は泣いているわけではなかった。どちらかというと困惑……いや、迷惑しているような様子だ。

というのも、その後あからさまに俺を避けるように隣の席に腰を下ろして、これでもか、というくらい背を向けて窓の外を見ている。

俺は正面の黒板を向いて座り直し、しばし考える。

――触った感じ、熱があるわけではなさそうだ。

――……ってことは何？　俺、避けられてる？

――でも、どうして急に顔が真っ赤になったんだろう？

――もしかして、俺のことを好きになっちゃった、とか。

人間の脳は常に何ごとも自分に都合よく解釈しようとする傾向にあるようだ。

自分自身の思い上がりを戒めつつ、それでも俺は訳もなくほぼ確信していた。

いろいろなものを差し引きしても、たぶんあの態度は俺のことを特別に意識しているに違いない。絶対そうだ。

そう思うと自然に頬が緩む。

――……ヤバい。俺の顔まで赤くなりそうなんだけど！

心がふわふわと浮上して、見るもの全てが明るい春の色に染まったようだ。本当に人間の脳はおめでたい。

恋なんてどうやってするのか忘れたと思っていたが、そうじゃない。

「恋はしようと思ってできるものじゃない」

先日舞に言った自分の言葉を思い出して、本当に恋というヤツは不思議なものだ、と軽く幸せなため息をついた。

そして、それからの俺の行動は今考えても凄まじく一直線だったと思う。

舞の苦手な数学を教えてあげるという計画は俺の思惑通りとんとん拍子に進み、かなり強引だったが土曜日に約束を取り付けた。

一つ問題があるとすれば、舞がケータイを持っていないので直に連絡を取る方法がないということだが、ケータイを持っていないと恥ずかしそうに言う舞がかわいくて、とりあえずそんなことはどうでもいいと思ってしまった。

ダテに場数を踏んできたわけじゃないので、俺はそれくらいのことで動じたりはしない。

良くも悪くも経験は自信になるものだと実感する。あまり自慢できる経験ではないということが少しばかり胸が痛む原因だと思うが、全く経験がないよりはマシだろう。

――いや、どうなんだろう……。

女子の考えることはわからない。

俺はしゃがんで下駄箱に背中を預け、ぼんやりと考えていた。

あまり期待しないほうがいいと自分自身を宥めてみるが、既に胸は期待でパンパンに膨らんでいて、その程度ではしぼみそうにない。

――だけど、もしふられたら……。

一応、最悪のことも考えておかなくてはと思うが、思っただけで黙って腰を下ろしていられないほどにズキズキと心臓が痛くなった。

――ヤメ、ヤメ。悪いことは考えない。

それにしても舞はいつまで掃除をやっている気だろうか。遅すぎる。

そう思っているところにひたひたと静かな足音が聞こえた。

――来た、来た。

顔がニヤけそうになるのを何とかこらえて、俺はしゃがんだままじっとしていた。

上靴を脱いで靴箱にしまう音に続いて外靴を下に置く丁寧な音が聞こえた。

横目で見ると少し屈んだ舞が靴に足を入れている。

ギリギリ見えそうで見えない。

誤解されると困るが、俺は別にスカートの中が見たくてしゃがんでいたわけではなくて、たまたま横目で見たら惜しい角度だったというだけの話だ。

そんな言い訳がましいことを考えている俺には全く気がつかずに、舞は玄関のドアを開けようとした。

俺はしゃがんだまま不躾に声を掛けた。

「ねぇ」

「ひぃ！？」

なるべく気配を消しているつもりだったが、そんなに驚いてもらうとつい嬉しくなる。

「『ひぃ』って何？」

「人がいると思わなかったんで」

ホントあっさりしてるな、と立ち上がりながら少しガッカリしてしまう。

約束して、待ち合わせの場所も決めていなかったら、普通、俺を探さないか？

「俺、自転車取ってくるから先歩いてて」

本当は舞を軽く問い詰めたいところだが、その時間がもったいないので急いで自転車を取りに向かった。

――あの言葉と態度は絶対素直じゃないな。

自転車を走らせながら思う。

――……っていうか、舞が見えませんが！

先に歩いてろ、と言ったのは確かに俺だが、どれだけ先まで歩いているんだ？

力を込めてペダルを漕いでいると、やっと舞の背中が見えてきた。

そのむきになって早足で歩く後ろ姿は何だか勇ましく、俺は思わず笑ってしまった。

しばらくすると信号で立ち止まる。ようやくホッと肩の力を抜いたように見えた。

――ああ……。

ふと舞の気持ちが垣間見えた気がして、胸の奥がぎゅっと鷲掴みされたような感覚に襲われた。

「ずいぶん歩くの早いね」
背後から声を掛けると、舞は肩をビクッとさせて振り返り、まだ苦しそうな呼吸の間に「まぁ」と答えた。
本当は途中走ったくせに、と思いながら笑いを懸命にこらえる。
――それって恥ずかしいから？　変な気を回して？
相変わらずポーカーフェイスの舞だが、舞は舞いなりにいろいろ考えてるんだろうなと思うとますます愛しさがこみ上げてきた。
「そんなに早く図書館に行きたい？」
でも、ついからかいたくなるんだよね。
「は！？」
だって、楽しいから。
「じゃ、後ろに乗って」
「だ、だめ！　二人乗りは違反だもん」
――確かに……。
いやいや、俺がそれで納得して引き下がるわけがない。クスッと笑いながら挑発する。
「本当は後ろに乗るのが怖いんでしょ？」

「違います！」

舞は怒ったような口調でむきになって言い返してきた。

「じゃあ、どうぞ」

「それでは失礼しますっ」

本当に素直じゃない。でもそこが面白くて好きなんだけど、ね。

舞の手から鞄を奪い取って前のカゴに突っ込むと、彼女はおそるおそる自転車の後ろに横座りした。

「ちゃんとつかまっててね」

後ろで一瞬舞が動揺する気配がする。

笑い出したくなるのを前を向いて一生懸命こらえていると、舞はキョロキョロした後でなぜか荷台をガシッと掴んだ。

――そこじゃないだろ！？

振り返って低い声で親切に助言しておく。

「落ちても知らないから」

そして重くなった自転車を漕ぎ始める。

勿論、わざと危険な運転をして俺に掴まらせようとすることは忘

れない。

カーブで振り落とされそうになった舞は慌てて俺のシャツを掴んだ。

――まぁ、今日はそれで許すけど。

背中に舞の緊張した指がシャツ越しに触れる感覚をくすぐったく思いながら、図書館までの道のりを急ぐ。

後ろに人がいるというのは不思議な感覚だ。これが親友の田中だったら、俺はまた別の感覚になるのだろう。

後ろにいるのが舞だというだけで、胸がドキドキして幸せな気分になれる。

頭の中は人を好きになる喜びでいっぱいのまま、俺の思惑通りの図書館デートが始まった。

学校でもいつも隣に座っているが、こうして机のスペースがない隣の席というのはまた違った緊張感があっていい。

問題を考えている間、舞はうつむいたり、意味なく眉間に皺を寄せたり、思ったより目まぐるしく表情を変えるので見ていると暇しない。

眼鏡の間から見える切れ長の目が、恐ろしく綺麗だった。睫毛も長くてそれが上向きにカールしている。

たぶん睫毛が長いせいでフレームの形を選ぶのだろう。今でも睫毛がレンズにぶつかりそうだ。

それにしてももう少しマシなデザインのフレームだってあるだろうに、とお節介にも思う。

だが、これはこれで舞らしいとも思う。自分をかわいく見せようとか、男子にアピールしようとか、そんな気は全くないのだろう。

――でも小学生のときはそこまででもなかった気がするな……。

いくら記憶力に自信のある俺とはいえ、小学生の頃のことはかなりおぼろげにしか覚えていない。

それでも今ここにいる舞と幼い頃の舞が同一人物だと信じるには、違和感がありすぎる。

――どうしてだろう？

思い切って聞いてみたい気持ちもあるのだが、それはなぜか強く躊躇われた。

それにまず、俺自身が舞のことをほとんど何も知らないのだ。

――物事は順番に進めていかないとな。

キリのいいところで勉強は切り上げて、昼食に誘った。勉強はいわば前菜だから、早くメインディッシュに行かないと舞にも悪いからね。

向かい合って座るのは先週の定食屋以来だな、と思いながらラーメンを待つ。

「人に勉強を教えるなんて、高橋さんで二人目だよ」

舞の表情をチラリと窺う。思ったとおり、微妙に硬直した。

「意外と少ないね」

――そう来たか……。

どういう変化球が飛んでくるのかと構えて待つのが、俺にとってはなかなか楽しい時間になっていた。

「高橋さんはやっぱりもともと出来がいいよね。きっと苦手意識が強すぎるんだよ。数学的思考はちゃんと出来てるのにな。それに比べてアイツは……」

勿論、俺も真っ直ぐ投げ返さない。

ここで言葉を一旦切ると、眼鏡の奥の大きな目がますます大きく開かれた。

――気になる？

わざと舞から視線を外して早口で続ける。

「酷いんだよね。考え方が性格と同じでひねくれててさ。教えたくないけど仕方ないよね、妹じゃ……」

「妹……サン？」

「あ、そうそう。俺、妹もいるんだ」

そう言うと、舞は心底安心したように大きく息を吐いた。

こういうときの舞は無防備で、本当にかわいい。

正直に言えば俺はそんなに親切な人間じゃない。他人に勉強を教えるなんて面倒なことは極力したくない。

だから、舞は本当に特別なんだ。……このありがた味を舞が正確に理解してるとは思えないのが悲しいところだけど。

すぐに取り繕った舞を見て、俺は腹を決めた。

「あんまりからかって嫌われたくないからな」

うつむき加減だった舞はパッと顔を上げる。

その表情を確認してから、俺は自分の記憶の映像を脳内で再生した。

「前にものすごく泣き顔がきれいな女の子を見たことがあって、ずっと忘れられないんだ」

舞は何かを問うように眉をひそめて見せた。

「いろんな女の子と付き合ったりしたけど、俺、泣かれると冷めちゃってダメなんだよね。でも、その人の涙は特別だったな。全然知らない他人のために泣いててさ。……まだわかんない？」

「全然」

――だよな。

「高橋さん、中学生のとき、お姉さんのピアノの発表会を見に来たでしょ？」

俺はそのときの様子を舞に話して聞かせた。俺の目をじっと見つめる舞の目が徐々に見開かれる。

どうしてあんなたった一瞬の出来事が今でも忘れられないのだろう。

ただそれが知りたかったんだと思う。

俺は思い切って向かい側に座る舞の眼鏡を取り上げた。

「ちょっ……と！」

「その人が涙を拭くのに眼鏡を取ったんだ」

俺の言葉で舞は金縛りにあったように動きを止め、ただその大きな目を何度かぱちくりとさせた。

「どう？　思い出した？」

信じられない、というように舞は無言で俺を穴が開くほど見つめてくる。

――うわーっ！　目が落っこちる！

俺は珍しく緊張していた。そのせいか、脳内はわざと緊張感のないことを考えようと躍起になっている。

「それが俺の『気になる人』だったりするんだけど」

今度は舞がきちんと聞いてることを確認しながら、俺は一気に言った。

「でもさ、この前も高橋さんに言ったよね？」

「何を？」

――何を、じゃないだろ！？

少しばかり憤慨しながら俺はもう一度繰り返す。

「高橋さんのこと気になるんだ、って」

舞は右上の宙を睨みながら思い返しているようだが、怪訝な表情は変わらない。

「あーやっぱり！　俺、結構勇気出して言ったのにな。聞き流されたような気がしてたけど、その後どうも様子が変だし、もしかしたら……」

「ちょ、ちょっと待って！」

――ん？

慌てた様子の舞は俺のほうへ右の手のひらを差し出してきた。

「眼鏡返して」

――そんなにかわいい顔を見せられて、簡単に返すと思う？

それに俺は今、相当意地悪な顔をしてるだろうと思うので、余計に返したくないのだ。

「教えてくれたら返してあげる」

舞の表情が不安で青ざめた。

それじゃあ、まずは優しい問題から……

「俺のこと、そんなに嫌い？」

「ち、違う！」

即答だった。出来の良い生徒の解答に俺は非常に満足する。

次はもうちょっと難しい問題だけど……

「じゃあ……」

と、言いかけたところに

「はい、お待たせ。野菜ラーメン！」

注文していたことをすっかり忘れていたラーメンが湯気を立てて目の前に現れた。

「あ、そちらです」

――なんつー、ナイスなタイミング……

ラーメンを運んできたオバさんに愛想良く答えながら、実は俺たちの話を聞いていて「今だ！」とばかりに割り込んできたのではないかと心の中で軽く疑った。

さすがにラーメンを前に愛を語るのはないな、と思うのでしばらくは食べることに専念する。

それにのびたラーメンほどまずいものもない。

しかし舞の野菜ラーメンのこんもりと盛られた野菜の迫力にはかなり驚いた。俺からするとヘルシーなラーメンなんて邪道だけど。

今度はちゃんとしたラーメン店に連れて行こうと思いながら舞を盗み見ると、案外普通にズルズルと音を立てて啜っていたので微笑ましく思った。

ラーメンを食べ終わると、そそくさと勉強していたテーブルへ戻

ってきた。

せっかくの二人きりの時間なのだから、なるべく周囲に人がいないところでゆっくりと話したい。

それじゃあ早速さっきの続きを、と思ったときだった。

「眼鏡返して」

思い掛けないことに舞のほうから話しかけてきた。ものすごく嬉しい。

「まださっきの続きを聞いてないからダメ」

焦点が合わず、ぼんやりと俺を見る目が少し怯えている。めちゃくちゃかわいい。

もっと焦らしていじめたくなるのは俺だけじゃないはず。

「俺のこと、嫌いじゃないんだよね？」

困ったような顔をして俺の視線から逃げようと横を向いた舞は、ぎゅっと目を閉じてそれから頷いた。

「じゃあ、……好き？」

俺は舞がこちらを向いていないことをいいことに、遠慮なく舞の顔を見つめる。

やがて観念したように舞はゆっくりともう一度頷いた。

――よっしゃーっ！

テーブルの下で小さくガッツポーズを作ってグッと手を引く。

願いが叶ったので眼鏡を返した。それを大慌てで掛ける姿を見ると、少しかわいそうなことをしたかな、と後悔が胸をよぎる。

「眼鏡取ったほうがかわいいけど」

そう言うと、舞はいつものように眼鏡の奥から冷ややかな視線を投げつけてきた。

「無理しなくていいよ。そんなお世辞」

――本気で言ってるんだけどな。

俺はお世辞を言って他人の機嫌を取るような面倒なことはしない。

舞の悪いところは卑屈になって自分を過小評価するところだ。
「高橋さん、知らないの？　自分の顔」
「嫌っていうくらい知ってるつもりだけど」
「すごくかわいいよ」
「からかわないでよ」
「本当だって。目がきれいでかわいい」
「清水くんにそんなこと言われても嬉しくない」
会話の調子がいい感じに上がってきて、もっと喋らせたい、と思った矢先にこの一言が舞の口からこぼれた。
「なんで？」
嫌な言われ方だった。俺は無意識に身構えていた。
「誰にでもそういうこと言うんでしょ？」
――誰にでも……

「……やっぱり、高橋さんも俺のこと、そういうふうに見てたんだね」

男というのは都合の良い生き物で、自分の好きな人をどこまでも神聖視したがる傾向がある。

世俗から離れた世界で生きているかのように思っていたが、舞だって俺の噂の一つや二つは当然耳にしているだろう。

舞が悪いわけじゃない。それは理解しているつもりだった。

……それでも、俺はどこかで舞だけは違うと信じていた。

「だって、清水くんみたいな人からかわいいと言われるような容姿じゃないってことくらい、自分でもよくわかってるから……」

――俺みたいな人って、どんな人？

どうして舞がそこまで卑屈になるのか、よくわからない。どうすれば俺の言うことに素直に耳を傾けてくれるんだろう。

舞と俺の間にある訳のわからない垣根のようなものがもどかしいので、この際強硬手段に出ることにした。

苛立ちながら、まずは軽く揺さぶる。

「俺が思ってもいないことを言うと思ってる？」

「そんなことは……ないけど」

手応えを感じながら、今度はもっと強く揺さぶった。

「じゃあ、俺の言うこと、信じる？」

舞はおどおどしながらも俺の目を真っ直ぐに見る。その目を見るとふと優しい気持ちになった。

「高橋さんのことが好きなんだ」

見つめたまま、心を込めて俺の気持ちを伝えた。

その瞬間、隣でカチンと凍りついた音がした気がする。

「……ウソ？」

――はぁ！？

「あーもう！　やっぱり信じてない」

俺は大げさに椅子にぐったりとのけぞった。

舞を見るとまさに鳩が豆鉄砲を食ったように意識を遠くに飛ばしている。

だが、垣根の一部を破壊することはできたような気がした。

本当はもっと華麗に飛び越えて行きたかったが、今の俺と舞では着地に失敗して俺が無様な姿になりかねない。

「まぁいいや。これからゆっくりじっくり俺のこと知ってもらうから」

伝えたいことを無事に言い終えたので、俺はやけにすっきりとして良い気分だった。

まだ夢の中にいるような舞の顔を見て、いいことを思いついた。

「あ、そうだ。これから高橋さんのことは舞って呼ぶから」

「え？」

――ていうか、もうずっと前から勝手に舞って呼んでたんだけどね。

内心でほくそ笑みながら、俺は絶好調のまま更に続ける。

「でもさ、舞っていい名前だよね。俺、大好き」

「は？」

舞は怪訝な顔で問い返してきたが、どう思われようと気にならない。

「だって『舞』って呼ぶたび、『俺の』って意味でしょ？」

――ヤバっ……ハズした？

舞の白い目を見てさすがに一瞬ヒヤッとしたが、特に嫌ともダメとも言わないのだからＯＫだろうと俺はまた勝手に解釈した。

そう、男っていうのは何でも自分に都合よく解釈したがるものなんだ。

好きな人のことは特に、ね。

さて、ともかく心を確かめ合うところまでは進んで一安心……なのだが、問題はその次だ。

学校にはメアリーを筆頭に強敵が潜んでいる。

ここから先が二人にとっての試練といっても過言ではないだろう。

だけど隣で恥ずかしそうに俺を見る舞の様子があまりにもかわいいので、そういうつまらないことを考えるのはやめた。

二人きりの時間くらい、穏やかな甘いときを過ごしていたいから――。

〈「涙色の彼女」ＥＮＤ〉

## 21

――大変なことになっちゃったな……。

それが私の実感だ。

今、私は学校の玄関にいる。何気なく靴を履いて普通の顔で玄関を出る。

しばらく住宅地が続くのでとぼとぼと歩く。

この学校の悪いところは住宅地の外れにあることかもしれない。なぜなら生徒のほとんどがこの道を歩くから、今の私がこんな目に遭っているのだ。

でも、別に嫌々やっているわけじゃない。むしろ気持ちは空を飛べそうなくらいふわふわしている。

――ホント、飛んでいけたらいいのに。

いやいや、ダメだ。飛んだら目立ちすぎる。目立たないようにとぼとぼ歩いているのだ。勿論、私は普通の人間だから飛べるはずもないんだけど……。

そんなおバカなことを考えていると、ようやく片側三車線のやけに太い国道に出た。

私は周囲を見渡した。勿論、何気なく、だ。

――よし。大丈夫そう！

信号を渡ると、右へ曲がる。なぜだか急ぎ足になっている。まだここは生徒の大半が通る通学路だから、焦ってはいけない。

そう思うものの、身体が言うことを聞かない。勝手に動き出すのだ。

走り出したい気持ちを何とか堪え、小さな路地を曲がる。

すると、自転車に跨って空を見上げてる男子の背中が目に飛び込んできた。白いシャツが眩しい。

――い、いた！　ホントにいた！

心臓の音がドクンドクンと大きくなり、胸が破裂しそうだ。

こんな展開はティーン向けの小説みたいで、本当に自分の身に起きていることだとは、今この瞬間ですら信じがたい。

しかも、相手が彼だというのがありえない度数を跳ね上げている気がする。

そう思った途端、何気なく彼が振り向いた。

目が合って、呼吸が止まる。彼が笑顔を見せたからだ。

「今日はのんびり歩いてきたんだ？」

清水くんは自転車から降りて、ひょいと私の鞄を奪い取った。すぐに荷台に乗せる。

――あ、今日は二人乗りはしないんだ。

少しホッとして、かなりがっかりした。自分でも気がつかないうちに、私は何かを期待していたらしい。

「……舞？」

「ひっ！」

突然名前を呼ばれて、驚愕のあまり変な声を出してしまった。

手で口を押さえて清水くんを見ると、怪訝な顔で見返される。

「もう学校じゃないし誰もいないんだから、そんなにビクビクしなくていいよ」

私はその言葉に素直に頷いた。でも、ビクビクしているのは誰かに見られると困るからではない。

ドキドキしながら思っていることを口にした。

「あの……私、こういうの初めてで……」

「こういうの？」

「うん」

「こういうのって、どういうこと？」

え？　それを聞き返しますか？

困惑してうつむいた私の顔を覗きこむように清水くんが背を丸めた。

「えっと、その、つ、付き合う……とか」

「ああ」

清水くんはニッコリと笑い、自転車を押して歩き始めた。私も遅れないように慌てて歩き出す。

「それで？」

――だから、付き合うとか初めてだから困ってるって言ってるじゃない！

と言えるわけもなく、とぼとぼと下を向いて歩く。

「一緒に帰るのも嫌だってこと？」

少し悲しげなトーンの声が聞こえてきて、私は思わず清水くんを見上げた。

「そうじゃないんだけど……」

――あ、アレ！？

機嫌を損ねたのかと思ったら、彼は思いのほか機嫌の良さそうな顔で笑っていた。

「俺は学校の中でも普通に話したり、舞って呼んだり、付き合ってるって言いふらしても全然かまわないし」

「ダメ！　それは困る」

私は焦って首をぶんぶん横に振った。そもそも話が違う。約束は守ってもらわないと困るのだ。

「学校の中では今までと同じようにただのクラスメイトとして『高橋』と呼ぶって約束したので、それを破ったら一緒に帰るのもやめる」

「マジ？」

清水くんの笑顔が少し引きつったような気がして、私はほくそ笑んだ。彼より優位な立場にいるというのは気分がいい。

「勿論マジです」

「でも別れるとか言わないよね」

急に彼の顔に凄みが加わった気がした。その目に吸い込まれるように見入ってしまった私の頭の中には「別れる」という言葉だけがぐるぐると回る。

好きだと自覚して間もなく清水くんも私のことを好きだと言ってくれたのは、奇跡としか言いようのない出来事だった。

だから正直なところ、それからの私は嬉しいを通り越してパニックに陥ったままでいる。

そんな私が付き合い始めて数日しか経っていないのに、別れることなんて考えているはずもない。

だが、考えてみれば付き合うということは、同時に別れるという結末がついて回るのだ。

そう思った瞬間、重量挙げのバーベルがドスンと落ちてきたような衝撃が胸の中に走った。

「……清水くんのほうこそ、そう考えてるんじゃない？」

激しく動揺する気持ちを宥めながら、ようやくそう言った。言いながらズキズキと胸が痛むが、皮肉を言うほうが気持ちが落ち着くのだ。

根っからのひねくれ者なんだよね、私。

ところが、清水くんは微笑を浮かべて、少しだけ首を傾げた。その姿に一瞬だけ心臓が跳ね上がる。

「全然。俺、こう見えても結構一途なところあるし、舞とは簡単に別れたくないし」

「どこら辺が一途？」

彼の言葉で顔がぼっと赤くなってしまったので、照れ隠しに揚げ足を取る。

「どこからどう見ても一途でしょ。ていうか、説明するようなことじゃないから」

確かにそうだ。私は自分の靴先を見て、それからふと疑問に思ったことを口にした。

「それで、これからどこに行こうとしてるの？」

隣でクスッと笑う声が聞こえたので、厳しい視線をぶつける。笑う意味がわからない。

訝しく思っていると、清水くんは笑いを噛み殺しながら言った。

「いいところ」

「……はぁ！？」

私は大声を上げて清水くんから横に一歩ずれる。そして改めて彼を非難の目で見た。

「え、舞は何を想像してるわけ？」

またクスッと笑われる。

――べ、別に、変なことを想像しているわけではないですが、彼の言い方が変なんです！

心の中で誰ともなしに言い訳する私……。

そこに彼の明るい声が聞こえてきた。

「Yデンキに行こうと思ってるんだけど」

「え？　何しに？」
「ケータイを見に」
「ああ……」
相槌を打つのに開いた口が徐々に笑いの形になり、同時に腹の底からふつふつと笑いがこみ上げてくる。
清水くんは開いた二人の距離を一気に詰めて、私の耳元で囁いた。
「期待外れだった？」
「何も期待してませんっ！」
私がキッと睨み返すと、彼はまた懸命に笑いを噛み殺している。本当にこの人は悪趣味だ。私をからかって何が楽しいんだろう。
「舞の家は厳しいほうなの？」
ようやく笑いをおさめた清水くんはそう聞いてきた。
「普通……だと思う」

「じゃあケータイはどうかな？　ダメって言われそう？」

「わからない。今まで相談したこともないし、そういう話題が出たこともないし」

「そっか。でも電車で通学してたら持っていたほうが便利だよね。最近、公衆電話もほとんどないし」

そうなんです！

今やケータイを持っていない人のほうが少数派という時代。小中学生だって持っている時代なのだ。

「やっぱりケータイを持ったほうがいいのかな」

「そのほうが連絡取りやすいってだけで、別にどうしてもってわけじゃないんだけど、でもメールとかやっぱり便利……」

「メール」

私は思わず彼の言葉を遮った。メールという言葉で急に思い出したことがある。

「パソコンなら持ってる」

「ん？　自分の？」

「うん。高校生になったときに買ってもらった」

途端に清水くんの顔が輝いた。

「それを早く言ってよ！　じゃあ、後で俺のメアド教えるから、メールちょうだい」

「なんで？」

反射的にそう答えていた。

「舞って本当に素直じゃないよね」

冷ややかな声が返ってくる。それは自分でもわかっているんだけど……。

「だって、何を書けばいいのかわからないもの」

「何でもいいじゃん。あ、そうだ。今読んでる本のことを教えてよ」

「毎日隣で見てるから知ってるでしょ」

「じゃあ、感想を」

「感想文、苦手」

「舞のケチ」

「……」

まるで小学生の会話のようだと思いながら大きくため息をつくと、隣から「しようがない」という声がした。

「この際『あ』だけでもいいや。とにかくメールちょうだい」

「……まぁ、それなら……」

ここで妥協する自分もどうかと思いながら、チラッと隣を見上げると本当に嬉しそうな顔をした清水くんと目が合って、また顔が赤くなってしまう。

そんな会話をしていたらあっという間にYデンキに到着してしまった。

店内を我が物顔でスタスタと歩く清水くんの後ろからキョロキョロしながらついて行くと、目指すケータイ売り場が見えてきた。

到着する前から何だかまぶしい空間だ。

父と姉は以前から持っているので、ケータイは私にとって珍しいものではない。でも、自分用となると話は別だ。

清水くんのケータイは何度か見たことがある。シンプルな黒のケータイで、ストラップなども付けていない。

逆に私の姉は、ケータイとストラップとどちらが主体なのかわからなくなるくらい、いろいろなストラップを重ね付けしている。おそらく本人が気に入ったものを無節操に取り付けていったのだろう。

――もし私がケータイを持つとしたら……

「これ、かわいいな」

思考中に突然清水くんの声が聞こえた。かわいいと言う声が妙な響きを帯びていて、背中がぞくっとする。

彼が手に持っているのは女子専用としか思えないピンク色のケータイで、それを見た途端、私はギョッとした。

「そう？」

「舞の趣味じゃないか」

そう言ってケータイを戻した清水くんはふらりと別の陳列棚へ移動する。

私は彼に握られていたピンク色のケータイを少し離れたところからじっと見つめた。

――ピンクか。……嫌いじゃないけど、何だか抵抗感があるな。

でも確かにかわいい。隣に白と黒の色違いが置いてあるが、やはりピンク色が抜群にかわいかった。

そして値札を見て目が点になる。

――結構なお値段で。

どうしたものかと思いながら一応売り場を一回りすると、電車の時間が近づいてきたので店を後にした。

「気に入ったの、あった？」

自転車を押しながら清水くんが訊ねてくる。

「うん、まぁ……」

「気のない返事だね」

「だってお金のこと考えたら、親に言い出しにくいなって思っちゃった」

まずケータイを購入するのにまとまったお金が必要で、その上使用料を毎月支払わなければならないことを考えると、自分のお小遣いで全部まかなうのはたぶん不可能だ。

そうなるとやはり金銭的な面でも両親に頼らなければならない。我が家が取り立てて貧乏なわけではないが、どうも親に甘えるのが苦手な私は、相談すること自体が億劫になっていた。

「そっか」

清水くんは一言そう言ったきり、しばらく黙ってしまった。

――あれ、もしかして怒ってる？

私は沈黙した彼の隣を歩きながら困り果てていた。この展開は初めてのパターンだ。

どうしようかと悩んでいるうちに駅に着く。Ｙデンキから駅までは目と鼻の先なのだ。

「あの……ここでいいよ」

自転車置き場に自転車を停めようとした清水くんの背中に呼び掛けた。

彼は無言で振り向くと形のよい眉をきゅっと中央へ寄せた。

「他のヤツにいろいろ言われるのは、やっぱり嫌？」

清水くんが静かに言った。

私はただその場に立ち尽くして、彼の真剣な眼差しを受け止めるだけしかできない。

「俺に関わって後悔してる？」

続く問い掛けには首を横に振った。

彼がどうして急にそんなことを言い出したのかわからなくて、惨めな気持ちがあふれ出そうだった。

数秒じっと私の目を見ていた清水くんはフウッと大きく息を吐いた。それから自転車を停めて鞄を二つ持つと「行くよ」と私を促す。

でも私はその場に根が生えてしまったように動けないでいた。

行かなきゃいけない。電車に乗り遅れてしまう。この電車に乗り遅れたら、次は二時間以上待たなければならないのだ。

それでも私は清水くんを見つめたまま、同じ場所に突っ立っている。

動こうとしない私に業を煮やしたのか、彼はつかつかと私の目の前までやって来た。

そして同じ目線まで屈むと、いきなりニッと笑ってみせる。

「……！」

眼鏡の奥の奥まで見透かされたような感覚に驚いてひるんだ瞬間、彼は私の手を掴んで走り出した。

「ちょっと、待って！」

「乗り遅れてもいいの？」

「それは、困る、けどっ」

足が長くてしかも早い清水くんに引っ張られて、私は息を切らしながら答える。

――でもこのまま改札口まで行って誰かに見られたら……

そんな不安が胸の中で爆発しそうなほどに膨らんだときだった。

清水くんが掴んだ私の手にぎゅっと力を込めてきた。

「いくらバレないようにこそこそしたって、遅かれ早かれバレるよ」

私の考えはすっかり読まれていた。それでさっきから怒っていたのだろうか。

「だけど、そしたら、困る、でしょ」

だって私なんかと付き合ってることがみんなに知れたら、清水くんにはダメージが大きすぎるもの。

「誰が？」

階段を駆け上がったところで清水くんが振り向いて言った。手は繋いだままだ。そのことに気がついた私は急に恥ずかしくなり、耳までカッと熱くなるのを感じた。

そっと振りほどこうとしたが、それどころか逆に指を絡められてしまう。

清水くんは全てお見通しというように鋭い目つきで口の端を笑みの形に吊り上げた。

「俺は困らない。何も悪いことしてないから。誰に何を言われてもかまわない」

力強い口調に圧倒されて、私は絶句した。

「でも舞は違うよね。それにきっとこれから周りからの風当たりも強くなると思う。だから、学校やこういう知り合いの目に付く場所では今までどおりにしてほしいっていう舞の気持ちはできるだけ尊重したい」

――困るのは……私？

――私の気持ちを……尊重……

清水くんを見上げて、その顔を食い入るように見つめる。

――それ、本気で言ってる？

冗談を言うような状況ではないことはわかっているが、それでも確認せずにはいられない。

私の分厚い眼鏡の奥の目を真っ直ぐに捉える彼の視線には、そんな疑問を挟む余地もなかった。

突然、繋いでいた手がはなされて、所在のなくなった私の手の前に鞄が差し出される。

「だから今日はここまで。ほら、早く行かないと乗り遅れるよ」

鞄を受け取った私の背を空いた手でポンポンと叩くと、後ろに一歩下がる。そして彼はその手をひらひらと振った。

つられてぎこちなく手を振りながら前を向いて改札口へ通じる長い通路を歩き出す。

一人で歩くことが不安で泣きたくなるくらい寂しく感じた。それくらい清水くんの存在が私の中で大きくなっていたのだ。

十歩くらい歩いたときだった。

後ろから誰かが走ってくる足音がした。すぐに肩をつかまれる。

「忘れもの。手を出して」

「え？」

言うが早いか私の手を乱暴につかんで手のひらを上に向けさせる。

「ちょっと、何？」

「メアド」

黒のボールペンでアルファベットを次々と書き込んでいく。手のひらがくすぐったいが我慢した。手のひらなんて書きにくいはずな

のに、やっぱり読みやすい綺麗な文字が並んでいる。

書き終わると彼は満足そうな顔でもう一度私の背を押す。

「じゃあ、メール待ってるから」

「期待はしないでね」

「めちゃくちゃ期待してるから、よろしく！」

何ですか、その「よろしく」って……。

突っ込みたいけれどもそんな時間はない。どうしようもなく笑いがこみ上げてきて、頬を緩ませながら走った。

改札口に近づいてからチラッと振り返ると、長い通路の向こうで清水くんが軽く手を上げたのが見えた。近くに同じ電車の学生がいないことを確かめてから、私も小さく手を振り返す。

見送ってくれる彼の姿をずっと見ていたい――そんな気持ちを振り払うように勢いよく前を向くと、私は小走りで改札口を通り抜けた。

## 22

舞を見送って自転車置き場に戻ったら、いつの間にか空はどんよりとした雲に覆われ、露出した肌に霧雨が冷たく当たった。

天気の急な変化は珍しくないことだが、自転車通学の俺にはとにかく迷惑な話だ。霧雨くらい大したことはないと侮ってはいけない。家に帰る頃にはワイシャツもズボンもしっとりと濡れて、肌に張り付いてくるから気持ちが悪い。

しかも太平洋に面しているT市はこういう曇天の日が圧倒的に多かった。そして一年を通して気温は低めだ。雪が少ないというのがウリの一つだったが、最近は温暖化のせいか、それも大きな声では言えなくなってきている。

この街はパッとしない、というのが俺の印象だ。

生まれ育った街だから勿論愛着はあるのだけど、将来ずっとこの地に住み続けたいとまでは思わない。もともと俺自身、こだわりの薄い性格だからそう思うのかもしれないけど……。

霧雨にうんざりしながら帰宅すると、玄関を開けただけで夕飯のいい香りがした。

母が大声で歌を歌っている。確か今、母が大いにはまっているドラマの主題歌だ。少し音程が外れているのに全然気にしないところがこの人らしい。

「ただいま。ずいぶんご機嫌だね」

「はるちゃん、お帰り。あらー！　雨？　びしょ濡れじゃない」

母は俺の姿を一瞥してすぐに洗面所からタオルを持ってきた。

「霧雨だけど結構濡れた」

「今週テストでしょ？　風邪なんか引いたら大変！」

そういえば一学期の期末考査が今週の半ばから始まる。テスト期間中は学校が早く終わるからいい。

――でもあのくそ真面目な舞のことだから、さっさと帰っちゃうんだろうな……。

タオルで頭をゴシゴシと拭きながら自分の部屋に向かった。時計を見ると17時少し前。舞はまだ電車に乗っている時間だ。

現在帰宅部の俺だけど、実は一年生の頃、バドミントン部に所属していたことがある。でも部長と反りが合わないのでやめた。腰痛にも悩まされたし、自分が一番上手いと思っている部長には腰痛以上に悩まされたので、バドミントン部には何の未練もない。

でも、こんな早い時間に帰宅すると健全な高校生がこれでいいのか、とも思う。

とは言っても、今、部活動を始めてしまうと舞を駅まで送っていけなくなるので、それは困る。何しろ下校時の約一時間が舞とまともに会話できる唯一の時間なのだ。

――どうして隣の席なのにわざとよそよそしくして、帰りも他人に見られないようこそこそしないといけないんだ？

制服を脱いで着替えを済ませると、ベッドの上に仰向けに倒れこんだ。

考えることと言えば、当然だが舞のことばかりだ。

今日一日を振り返って「あーあ」と独り言をつぶやく。

まともに会話できる唯一の時間に、あんな八つ当たりをしてしまったことは後悔しているが、それでもやはり舞の態度には納得が行かなかった。

――それに舞は俺のこと……どう思ってるんだ？

本当のことを言えば、そればかり気になって仕方がない。

ケータイを持つことを親が反対しているなら仕方がないと諦めもつくが、それ以前に舞自身が積極的でないのはどういうことなんだろう。俺とは連絡を取りたくないのか、と不貞腐れたくもなる。

舞の気持ちを尊重したいという物分かりのいい自分と、舞を俺の思うとおりにしたいというわがままな自分が、心の中で二手に分かれて対立していた。

どちらかというと普段はわがままな自分が優勢だ。

なのに、最後は絶対に物分かりのいい自分が勝つ。

結局俺は見栄っ張りなんだと思う。嫌われたくない。そしていいところを見せたい。

それが突然あんなふうに舞を問い詰めたり、いきなりわかったようなことを言ったりした原因なんだろう。

――カッコ悪すぎ。全然余裕ない……。

昔、サヤカさんと付き合っていた頃はここまで切迫した気持ちにはならなかったな、と天井をぼんやりと眺める。そう考えるとあれは恋愛のうちには入らないのかもしれない。

自分自身にガッカリしながら大きなため息をついた。

そこにケータイが鳴る。メールを着信した音だ。

俺は飛び起きて机の上のケータイを手に取り、逸る気持ちを抑えてメールを開く。

＜　今日はいろいろとごめんなさい。これからもどうぞ宜しくお願いします。

……舞。

なんだ、このよそよそしい硬い文章は？

メールを読んだ俺は瞬時にツッこんだ。

――あー、ダメだ！

一度ケータイをベッドの上に放り投げて髪の毛をぐちゃぐちゃと掻き回す。

深呼吸をして気を落ち着けると、またケータイを手に取って画面を凝視した。

短い文章を何度も読み直し、これが舞なんだ、と自分に言い聞かせる。彼女の頑丈な垣根は、一部を破壊したくらいではすぐに修復

されてしまうらしい。

それにいきなり馴れ馴れしいメールが来たら、それはそれで驚いて引くかもしれない、と自分自身をものすごい勢いで慰めた。

――とりあえず返信しよう。

この際、俺だけでもテンション上げていかないと、二人の関係はすぐに行き詰まりそうだ。

＜　メールありがとう。もしかして帰ってすぐに書いてくれた？

一応机の上の時計を見て確認するが、たぶん間違いない。しかも疑問形で終わる文章でさりげなく返信を要求しておく。

送信ボタンを押すと自然と口に笑みが浮かんだ。そしてまた机の上にケータイを戻し、ベッドに寝転がる。

天井を見上げた瞬間、ケータイが鳴った。

――返信、早すぎ！

と、思いながら慌てて飛び起き、ケータイをつかむと急いでメールを開く。操作する時間すらもどかしい。

そして新着メールを見た俺は一瞬頭の中がパニックになった。

――なんだ、これ？

差出人を確認して、浮かれていた気分がいきなりしぼむ。

――菅原か……。何の用？

同じクラスでサッカー部の菅原からのメールだった。ヤツは一部の女子に絶大な人気がある。確かに顔は甘いマスクと言えるし、サッカーをやっていて一見爽やかそうに見えるのがモテる理由だと思われる。

仕方なく本文を読んだ。読む前から嫌な予感がしたが、最後まで読み終わる頃には身体の中にムカムカと不快感が充満していた。

内容はいたってシンプルなもので、テスト期間が終わった後、男女三人ずつで遊ぼう、という誘いのメールだった。

それだけなら吐き気がするほど不愉快な気分にはならないのだが、文章中にとある女子の名前を見つけた途端、俺の心拍数がぐんとあがり、血流は音を立てんばかりの勢いで脳になだれ込む。

――メアリー……。

冗談じゃない。誰があんなヤツと遊ぶっていうんだ？

フンと忌々しく思いながら鼻息を荒くした。そして返信ボタンを押す。

――行きたくないから行かない。他の男誘えば？

はい、終了。

送信されたことを確認して大きく息を吐いた。

そもそも菅原はメアリー率いる女子グループに狙っている女がいて、最初は俺をダシにグループ交際を装って爽やかに接近しようというわけだ。魂胆が見え見えで呆れてしまう。

グループで遊ぶのはいいが、そこに恋愛感情が混ざると絶対に面倒なことになる。いい思いをするヤツがいれば、必ず誰かが貧乏くじを引くはめになるのだ。現代に生きる者にとって、全員の平等な幸せを実現することは何よりも難しい命題の一つと言えるだろう。

俺は菅原のために貧乏くじを引いてやるほど、ヤツに友情を感じてはいない。それに時間がもったいない。ヤツらと遊ぶくらいなら何とかして舞と一緒に過ごしたい。

カレンダーを見てテスト期間が早く終わればいいのに、とため息をついた。

またケータイが鳴る。今度こそ舞からであってほしい。祈るような気持ちでメールを開く。

＜　私の態度で怒らせてしまったのかなと気になっていたので、早く謝りたかっただけです。でも、まだどうしたらいいのかよくわからなくて、また嫌な気持ちにさせてしまうかもしれません。だから宜しくお願いします、ということで……。

――ぶっ！

舞のメールを読んでいるうちに、俺の顔はふにゃふにゃに緩んだ。

さっきまでのムカムカはどこかに吹き飛んで、心の中にはお花畑が広がっていく。蝶がひらひらと舞う姿すら見えるから、俺の脳はもうイカれてるかもしれない。

――そっか。気にしてたんだ。

何故、舞が俺のことを気にかけていたとわかったくらいでこんな

に嬉しいのか、自分自身でもよくわからないが、とにかく胸の中は幸せな気持ちで満たされた。

同時にホッとする。実はかなり不安になっていたのだ。

もう一度、今度は舞の声を想像してメールを読んでみる。

文章も舞らしさが出てて、気に入った。やっぱり舞は他の女子とは一味違うな、と思う。ちょっとばかり過大評価かもしれないけど、好きな人のことになるとどこまでも褒めちぎれそうな勢いだ。

十分に鑑賞したところで返信を打つ。

＜　こっちこそごめん。でもこういう性格なので舞も早く慣れて。じゃまた明日ね。

本当はもっとメールでのやり取りを続けたいけど、舞には舞の時間があるだろうと思い、こっちから切り上げた。

しかし、ノートパソコンは持っているのにケータイはナシって、どういうことなんだ？

舞の家の基準がよくわからない。

両親にちゃんと相談すれば買ってもらえるんじゃないのか、と余計なお節介だが思ってしまう。

……というか、俺の心の中では舞にケータイを持って欲しいと思う気持ちがエスカレートしていた。だって、メールもいいけどやっぱり声を聞きたいし。

階下から母親が呼ぶ声がした。夕飯のようだ。

部屋を出る前にカレンダーを再度眺め、テストが終わったら絶対に舞とデートしよう、と浮かれた頭であれこれと計画を練り始めた。

翌朝、登校して席に着くなり田中が俺の前の席に座り込んだ。妙に思い詰めた顔つきで、俺の顔を真剣な目つきで見つめてくる。

田中には悪いが、男に見つめられても全然嬉しくない。むしろ暑苦しい。

どうしたのかと思いながら眉をひそめると、田中はようやく意を決したように口を開いた。

「清水、なんで断った？」
「は？」
「昨日、菅原からメール行っただろ？」
「着たけど、そりゃ当然断るだろ」
そう言うと、田中は俺を恨めしそうに睨んだ。
「まぁ……お前はそうかもしれないけど」
やっと俺から視線を外して大げさにため息をつく。それからチラッと舞を見て、また俺を凝視した。
ちなみに舞は文庫本を開き、小説を読んでいるふりをしているが、俺たちの会話を盗み聞きしていることは間違いない。
「ぶっちゃけ、この際誰でもいい。俺は女子と遊びたい」
「ゴホッ、ゲホッ……」
突然舞が咳込んだ。俺たちに背を向けて肩を震わせている。だが俺には、笑いをこらえて苦しんでいる姿にしか見えない。
田中のあまりにも正直過ぎる本音の吐露に、俺も思わず苦笑した。

「お前は行けばいいじゃん」

「ダメだ。清水が来るって言わないと女子も来ない」

田中はまるでこの世の終わりが訪れたかのような絶望的な声を出した。

「他のヤツを誘えよ」

「他のヤツじゃダメなんだよ！　とにかくお前が来ないと意味がないんだ」

「俺は行かない」

そう言って舞を見ると、表情を強張らせて本を見つめていた。心の中で心配すんな、と呼び掛けてみるが、残念ながら俺にテレパシーはない。

それにしても、いきなりこんなやっかいなことを吹っかけてきた菅原が憎かった。

「じゃあさ……」

背を丸めた田中は小声で言った。

「とりあえずお前も参加ってことにしておいて、当日他のヤツ連れて行くっていう案は？」

「ドタキャンか」

「だって、そうでもしないとお前抜きじゃこの計画、絶対フェイドアウトする……」

「そうまでして遊びたいか？」

「お前にはわからんだろうが、俺は女の子と遊ぶチャンスなんて滅多にないんだ。これを逃すと次はいつになることか……」

舞が顔を不自然に窓のほうへ捻る。たぶん笑いを噛み殺しているんだろう。

――ありがとう、田中。お前のおかげで舞が深刻にならずに済んでいるよ。

やはり持つべきものは少しおバカな親友だな、と再確認し、俺は田中の腕を叩いた。

「わかった。そこまで言うならドタキャン計画に乗ってやるよ。でも、俺は絶対行かないからな」

「助かるよ、清水！　いや、清水様！　愛してる」

「キモッ！」

田中は細い目を更に細くして茶目っ気たっぷりの笑顔を見せたかと思うと、投げキッスの動作をして軽い足取りで去った。

それを見送ると深呼吸をして少しだけ舞のほうに肩を寄せた。

「ねぇ、心配した？」

囁くような声で訊く。舞がチラッとこっちを見た。

「何を？」

――うわぁ……、冷たい声。

俺の心は一気に震え上がった。テンションは急降下する。

舞は……怒ってる？

「他の女子と遊んでもいいの？」

「私には関係ないことですから」

――……関係……ない？

レンチか何かで思い切り頭を殴られたような感覚が俺を襲った。

目の前がくらくらする。

舞の顔をまともに見ることができない。

これ以上彼女に冷たい態度を取られると俺はどうなってしまうの

か、自分でも自信がない。そういう危機的な状況だと脳のどこかが警告を発していた。

「そっか。そうだったね。……なんか、俺、一人で勝手に勘違いしてたみたい」

酷く冷めた声が、遠くで聞こえる。自分が発した声とは思えないほどだ。

胸中は煮えくり返るような興奮と、凍土のような冷静さの両方が不思議と同居して、目の前に差し出されたものを瞬時にズタズタにしてしまいそうな残酷な気持ちが俺を支配していた。

舞を見ないように机に肘をついて頭を乗せる。

――つーか、なんでこうなる……。素直じゃないのにも程があるだろ。

口を尖らせたまま目を瞑った。自分では気が長いほうだと思っていたが、今日の俺はダメだ。もしかすると本性は短気だったのかもしれない。

しばらくそのままの姿勢で苛立つ心を宥めていると、隣からか細い声が聞こえてきた。

「……だって、嫌だって言ったら……わがままになっちゃうもん」

ズキッと、心臓に矢が刺さったような痛みが走る。でもそれは甘くて痺れそうな痛みだった。

思わず俺は胸に手を当て、隣に向かって心の中で叫ぶ。

――舞、先にそれを言ってくれ！

姿勢を正して改めて舞を横目で見ると、肩をすぼめてかわいそうなくらい小さくなっていた。さっきの冷たい言葉はたぶん舞なりに精一杯虚勢を張っていたのだろう。

――ヤッベー！　マジでかわいいんだけど。

たぶん周囲に人がいなければ舞を抱き締めていたと思う。むしろ抱き締めただけで済んだら奇跡かもしれない。

俺はまた少し舞のほうへにじり寄った。

「嫌だって思ったんだ？」

わざとゆっくり言う。

舞は完全に顔を伏せて答えない。思わず笑みがこぼれる。これは絶対ＹＥＳだな。

「嬉しいな。でも俺は好きな人の嫌がることはしたくない」

ようやく舞が顔を上げてこちらを見た。俺の言葉を確かめるような視線だ。

更に「それに俺は……」と続けようとしたところ、担任がやって来て慌しく朝の会が始まってしまった。

まぁ、言いたかったことは伝わったと思う。だから満足して今日も一日、舞とはできる限りよそよそしくして過ごした。

その日の午後最初の授業は体育だった。体育は男女それぞれ担当の先生が違う。勿論、授業も別々に行われる。マットや鉄棒などの器械体操系の授業だと体育館を一緒に使うこともあるが、今は男子が屋外のトラック競技で、女子は体育館でバレーボールをやっていた。

女子が体育館の更衣室へ移動してしまうと、教室内は男子専用更

衣室になる。女子がいる前で堂々と着替え始めるヤツもいるが、俺は最低でも下だけは女子がいなくなってから着替えることにしていた。

ちょうどシャツを脱いだとき、既に着替え終わっていた菅原が近づいてきた。

ヤツの顔を見て俺はハッとした。

昨日「行かない」とメールしたきり、菅原とはまだ話をしていなかったのだ。田中に頼まれたドタキャン計画に乗るということは、つまり「やっぱり行く」と前言を翻さなければならない。

菅原に先んじようと口を開きかけたが、ヤツのほうが一瞬早かった。

「清水さぁ、彼女できた？」

「えっ？」

先を越された上、意外な第一声に言葉を失う。

俺の動揺を見逃さなかった菅原は、何かを納得したように「へぇ」と言いながら、隣の舞の机に半分だけ腰掛けた。

――そこに腰掛けるなっ！

垂れている目尻を更に下げてニヤける菅原に、俺はあからさまに嫌そうな顔をした。まぁ、コイツは俺の彼女が舞だということまでは気がつかないだろう。

それにしても、菅原の態度はいつでも俺の神経を逆撫でする。たぶん徹底的に気が合わないのだろう。合わない者同士が無理に仲良くしようとしても、どうせ上手く行かないのだ。だから菅原とつるむ気は毛頭ない。

「じゃあ、彼女連れて来いよ」

ニヤけたまま菅原は簡単に言った。俺は唖然とする。

「はぁ？　何のために？」

「いいじゃん。人数多いほうが楽しいし、みんなに紹介しろよ」

「嫌だね」

俺は下をジャージに履き替えながら突っ撥ねた。なぜ俺の彼女をみんなに紹介しなくてはならないのか、意味がわからない。

「なんだよ、秘密かよ。お前、しばらく彼女いなかったじゃん。今度はどんなかわいい子か、すげー気になるんだけど」

「悪いけど、めちゃくちゃかわいいよ」

「じゃあ、連れて来いって」

「嫌だ」

「……お前、ホントは彼女なんていないんじゃね？　だから嫌だとか言うんだろ」

菅原は挑発するような視線をよこした。

――ダメだ。こんなヤツ、まともに相手にしたら……

しかし、次に俺の口から滑り出た言葉は俺の想いとはまるで正反対のものだった。

「うるせぇ。連れて行けばいいんだろ！？　お前らの前でイチャイチャしてやるから覚悟してろよ！」

言ってからしまったと思ったが、もう遅い。

菅原が勝ち誇ったように隣でニヤリと笑った。

## 23

――た、大変なことになっちゃったな……、じゃなくて！

その話を聞き終わった私の心の叫びを聞いてください。

「勝手になんてこと、言っちゃったんですか！」

いや、もう心の叫びどころか、気がつけばほぼ絶叫していた。今までこんなに大声を出したことがあるか、と自分でも驚くような声量だった。

勿論、隣にいた清水くんはビクリと肩を震わせて、私から一歩横にずれる。反対側の隣を歩いている英理子さんも大きい目を更に見開いて私を凝視した。

「舞ちゃんが怒るのも無理ないよ」

英理子さんがため息混じりに言った。私に肩入れしてくれるのは嬉しくて心強い。

「俺だって最初はそういうつもりじゃなかったし、嫌だって断ったんだ。だけど……」

清水くんの声は尻すぼみになり、最後は口の中で何かぶつぶつと

呟いていた。

「で、どうする？」

面倒な議論をすっ飛ばして、英理子さんは私に結論を要求してくる。

でも、いきなり「どうする？」と聞かれても返事が出来ない。正直なところ、私自身がこの展開に追いついていなかったのだ。

午後の体育の時間が終わった後、隣の席の清水くんの様子があからさまにおかしくなっていた。さすがに気になって小声で何かあったのかと訊ねてみた。

「帰りに話したいことがある」

何だか怖い顔でそう言うので、嫌な予感が胸の中いっぱいに広がった。

――話したいことって何だろう？　もしかして……わ、別れ話？

不安な気持ちのときはどう足掻いても思考がマイナスの方向へと突進していってしまう。それを自分自身で止める手段がないのだから、どうしようもない。

隣の席からは常にピリピリしたオーラが感じられ、私の不安な心

はますます暗く救いのない小道へと迷い込んでいった。

長く深いため息をつく。

楽しみだったはずの放課後が来ても私は暗い気持ちのままで、昨日とは打って変わって重い足を引き摺るように玄関を出た。そこで英理子さんが私に声を掛けてきたのだ。

清水くんとの待ち合わせの場所へ到着すると、まず英理子さんが清水くんを問いただした。

「えーと、二人は付き合っているんだよね？」

「うん」

「なのに、なんで二人ともそんな暗い顔してるのよ。今が一番ラブラブハッピーな時期じゃない？」

「ラブラブハッピーってなんだよ？」

いかにも面倒そうに清水くんは言った。私の心に何か鋭利なものがグサリと刺さり、密かに息を呑む。

英理子さんは首を傾げて清水くんを睨んだ。

「はるくん、なんかしたでしょ？」

「俺はまだ何もしていませんが？」

ため息混じりの彼の返事に、私の胸は更にズキズキと痛む。

こういう蛇の生殺しのような状態はとても辛い。喉元まで圧迫されるような苦しい気持ちに苛まれるのは初めてのことだった。

これが恋だというなら、恋はあまり身体にいいものではない気がする。

こんな気持ちで何日も過ごしたらきっと死んでしまう。大げさだと他人は笑うかもしれないが、今の私は真剣にそう考えていた。

――ピリオドを打つならさっさと打ってくれ！

思わずそう叫びたくなるが、結局ふうっと息を吐き出すだけしかできない。その言葉にならない声を聞いたのか、清水くんが私を見て突然言った。

「舞、ごめん！」

ショックで一瞬目の前が真っ白になった。

――やっぱり……。

――そうだよね、やっぱり私が清水くんの彼女なんて、釣り合ってないもの。

こういうときは笑ったほうがいいのだろうか。どういう顔をしようかと迷っていると頬がピクピクと引き攣る。

私の様子を心配した英理子さんが「ちょっと！」と声を上げた。

それを制するように彼は次の言葉を発したのだ。

「今度、菅原たちと遊ぶときに、俺の彼女を連れて行くって言っちゃった」

――な、な、な……なんですとーーー！！

「勝手になんてこと、言っちゃったんですか！」

気がつけば叫んでいた。

どうしてそういうことになるのか、全く理解できない。

朝、私が聞いた限りでは、親友を助けるためにちょっとした嘘をつくと約束しただけで、菅原くんたちとは遊ばないと清水くんは明言していた。

確かにあの田中くんの発言は酷く切羽詰っていて、笑いを噛み殺しながらも同情を禁じえなかった。だから清水くんが協力すると言ってよかったな、と思ったのだ。

それがいつの間にか全く正反対の事態になっている。

わけがわからない。

憤慨しているところに冷静な英理子さんの「で、どうする？」という声が聞こえてきたのだった。

別れ話じゃなくてよかったと胸を撫で下ろしている暇もない。

清水くんは私の顔を覗きこむように背を丸めた。

「昨日も言ったけど、どうせ遅かれ早かれバレるんだから、この際堂々とみんなに宣言しない？」

「……遅ければ遅いほどいいので、絶対に嫌です」

隣で英理子さんが吹き出す。

「舞ちゃん、案外はっきりしてるね」

「なんでそんなに嫌なのか、俺には全然わかんない。俺と付き合ってるのがバレると何か困ることでもあるの？」

清水くんは不満そうに言った。昨日もそれで怒っていたのだ。

唇を噛んでうつむくと、英理子さんが私の腕をそっと触る。
「はるくんにはわかんないだろうな。乙女心をもっと研究しなさい」
「なんだよ、それ」
ますます不満そうに彼は言う。私にかける言葉より、英理子さんへ投げつける言葉は乱暴だ。私のイトコはみんな歳が離れているので、同い年のイトコを少し羨ましく思う。
でも清水くんとはイトコじゃなくてよかったと思うんだけどね。
黙って物思いに耽る私を挟んで、清水くんと英理子さんは会話を続けていた。
「はるくんの彼女を志願してくる女の子と、舞ちゃんを一緒にしちゃダメだってことよ」
「そんなことわかってる。だけど、舞が卑屈になることないだろ」
うっ、と私は思わず声を上げてしまった。それを指摘されると立場が急に弱くなる。
「だって、私なんかが彼女だとみんなが知ったら……」
「なに、その『私なんか』って？　舞はすっごくかわいいよ」
途端にボッと頬が紅くなった。隣に英理子さんもいるのに、よくそんなことを平気で言うな、と恥ずかしくなる。

「舞ちゃん、イメチェンしてみたら？」

顔を上げると英理子さんはキラキラと目を輝かせて私を見つめてきた。

「イメチェン……？」

「そうよ。コンタクトにしてみるとか、髪型を変えてみるとか」

私の視線は徐々に下降していく。私も一応は女性だ。全く興味がないわけではない。確かにこの眼鏡をやめたら違う自分になれそうな気もする。

――でも……。

「できません」

英理子さんの表情が悲しそうに翳った。

それを見て私の胸もズキッと痛むが、これだけはどうしても譲れない。

自分を変えたいと思う気持ちもあるが、それよりも変えてしまったら自分が自分でなくなりそうで、それが怖いのだ。

――だって、これが私だから。

イメチェンしたところで、結局私は私なのだと思う。こんなふうにちょっと冴えなくて、人間付き合いが下手くそで、勉強だって頑張ってるけど中の上か上の下くらいで、なんかもう全てが微妙。

こうして自分のことを考えていると、思考はどんどん悪い方向に流れていく。私の両隣に、人が羨むものを全て持ち合わせているような男女が存在しているから尚更だった。

「じゃ、いいよ。俺、一人で行くから」

気まずく張り詰めた空気を追い払ったのは、清水くんの一言だった。明るい口調で更に続ける。

「朝と話が違うって舞が怒るのは当然だよね。大丈夫、『彼女いるっていうのは嘘』って言えばいいだけだし」

それを聞いた私は胸の辺りがもやもやとして目をしばたたかせた。

なんだ、この変な感じ。

こういう感覚はあまり身に覚えがなく、私は心の声を聞こうと自分自身に耳を澄ませてみた。

――だって清水くん、絶対行かないって言ってたよね？　……なのに行くの？　結局他の女の子と遊びたいんじゃないの？

――それに「彼女いるっていうのは嘘」って……じゃあ私はなん

なの！？

私のもやもやした気持ちは次第にムカムカとした怒りに変化していった。

「そうだよ。悪いのははるくんなんだから自分で何とかしなさいよ」

英理子さんが彼を責めるように言うと、私の中でいきなり何かがプツッと切れた。

「ちょっと待った。それ、なんか違う！」

両脇の二人がハッとして同時に私を見た。

私は軽い興奮状態にあり、今なら何でも言えそうな気分だった。

そうだ、この際思い切って言ってやる。

「ちょっとモテるからって、何でも自分の思い通りになると思っていたら大間違いですからね！」

言いながらブルブルと身体が震えた。これが武者震いというヤツか。

しかも言ってることがバカバカしくて、言いながらまた自己嫌悪に陥りそうになる。だが、勢いが勝った。

「私、行かないなんて言ってませんから」

「……え？」

「舞ちゃん！？」

まずは清水くんをじろっと睨み、次に反対側の英理子さんに真剣な顔を見せる。

「ってことは、舞も来てくれるんだ？」

なぜか嬉しそうな声を出す清水くんに冷たい視線を送った。

「誰ですか、『絶対行かない』って言ってたのは」

「……ごめん」

突然、横からフッフッフッと低い不気味な笑い声がした。

「舞ちゃんってさ、なにげに負けず嫌いなんだね」

言いながら英理子さんが私の背中をビシッと叩いた。飛び上がるほど痛い。というか、実際あまりの痛さにのけぞって飛び上がってしまいました。

いつも思うけど、英理子さん、少しは手加減とかできないんでしょうか。

「へぇ、それはいい性格だよね」

清水くんの顔を見ると私の背中の痛みのことなど念頭にないのか、顔全体が蕩けそうなニコニコ顔になっていて、その笑顔を見た私も頭が一瞬ぼうっとなった。この人の笑顔には魅力じゃなくて、何か悪い魔力がこもっているに違いない。

コホン、と英理子さんがわざとらしい咳払いをした。

「……私、お邪魔虫だったわね。ごめんなさい。ああ、熱い熱い！」

手で喉元をせわしなく扇ぎながら、英理子さんは急ぎ足で私たちの前に出る。

「ま、待って！」

慌てて呼び止めた。

だって、その菅原くんたちと遊ぶのに同行すると言ったのはいいけど、私、どうしたらいいんですか！？

縋るような気持ちで、振り返った英理子さんの視線をとらえる。

「あ、あの……イメチェンってどうすればいい？」

途端に英理子さんの目に妖しい光が輝いた。

「女の子だもん、そう来なくっちゃね！」

いきなり私の腕を掴むと英理子さんは自分の腕を巻きつけてきた。この気軽さが私にはないものだな、と思う。きっとこうやって英理子さんはいつでも私の心にすうっと入ってきてくれるのだ。

英理子さんが私に寄っ掛かってきた。彼女のぬくもりが嬉しい。……いや、勿論私はそっちの方向の趣味はありませんよ？

苦笑いして清水くんを見ると、これ以上ないくらい優しい目をした彼がほんの少し首を傾げて私に微笑んでくれた。

しかし、容赦なくその日はやって来た。一学期の期末考査だ。

このテストは、実は結構大切なテストなのではないかと思う。担任も「進路に影響するので頑張れ」などと、ぼそぼそとした声で言っていた気がする。

だというのに、私の頭の中は半分がその菅原くんたちとの遊ぶ約束のことで占められていた。

清水くんからの情報によると、男子はサッカー部の菅原くんと清水くんの親友田中くんと、追加でクラスメイトの沖野くんがメンバーで、女子は西こずえさんと藤谷(ふじや)さんと山辺(やまべ)さんの三人らしい。

テスト期間中は出席番号順に着席しているので、密かにメンバーの名前と顔を覚えた。

クラスメイトの顔と名前が一致していないなんて、恥ずかしいことだなと今更ながら思う。さすがに女子はほぼわかるのだけど、それも名字に限る。

藤谷さんの名前が悠香だというのは初めて知ったが、読み方がわからない。「ゆうか」、それとも「はるか」？

読み方がわからない場合、あだ名でわかることもあるけど、残念なことに藤谷さんは「ふじやん」と呼ばれていた。「ふじやん」ってちょっとかわいいあだ名で羨ましいな、なんて思ってしまう。

もう一人の女子、山辺さんは小柄な西さんと藤谷さんに比べるとかなり大柄な人だ。バレー部の主力メンバーで、この三人の中で唯一私が会話を交わしたことのある人だった。

というのも、山辺さんは私と同じく電車通学をしている。途中で乗ってくる人だけど、地方出身者は仲間意識なのかお互い何となく通じるものがあるし、無言でいたわりあうような部分がある気がしていた。

私の印象では、山辺さんは体型とは裏腹にとても女性らしい優しく繊細な性格の人だった。だからなのか、男女問わず人気がある人だ。

高梨さんも男女問わず人気者という点では似ているが、山辺さんとは違ってどこか相手の心の中まで見透かしてしまうような鋭さがある。それが時折恐ろしく感じるけれども、山辺さんはもっとおおらかな視線の持ち主だと思う。

一方、男子のほうは本当にやっと名前を覚えたところだったりする。

菅原くんは我がクラスの中でも清水くんに続いて有名人だ。サッカー部で女子に人気があるのは噂に疎い私でも知っていた。

清水くんが言うには、菅原くんは藤谷さんのことが好きらしい。確かに彼女は男子の庇護心を煽るような可憐な笑顔を振りまいていた。私なんかとは違ってかわいげのある人だから、菅原くんが彼女のことを好きだというのも素直に頷けた。

そして沖野くんも名前は知っていた。だって、彼は授業中でも積極的に喋る人だから。しかも笑い声がサルのような高いキャッキャッという音なので、いくらクラス内のことに無関心の私でもその笑い声は耳につくというものだ。

かなりの揚げ足取りなので発言には十分気をつけるように、と清水くんから忠告を受けた。更に、もし何か言われても気にしなくていいとも言ってくれた。

「サルが日本語を覚えたのか、やるじゃん！　……くらいに寛大な気持ちで接してやるといいよ」

さすが、清水くん。上から目線も半端じゃなく高みから見下ろし

てるらしい。でも彼にそう言われたら本当に誰も言い返せなくなる。だからこの人は悪魔だと思うんだけどね。

そして、清水くんの親友田中くん。

彼の後ろ姿を見て、思わずこみ上げてくる笑いを唇を噛んでこらえた。

田中くんの一番のポイントはお人よしということだ。更に彼の至って真面目な言動はどこか滑稽で可笑しい。ウケを狙っていないのにウケる人なのだ。

テスト前日、気難しい数学の先生がやってくる前に彼は教壇の上に自らの水筒を準備していた。これには数学の先生も驚いたようで顔をほころばせて言った。

「長い教員生活の中でも授業の前にお茶が用意されていたのは初めてだよ」

すかさず田中くんは言う。

「先生、ちゃんと蓋は洗っておいたから、心置きなく一杯どうぞ」

そして、社交辞令的にお茶に口をつけた先生に、少し甘えた声で言ったのだ。

「ねぇ先生。一つだけでいいからテストに出るところ、教えて！」

クラスメイトの期待を一身に集めた先生は渋々といった感じで、それでもいつもより幾分丁寧にテストに出そうな部分に関する説明

に時間を割いてくれたのだった。

こうしてクラスメイトの動向にも目を向けると、授業は生きているということに気がつく。もし田中くんが先生にお茶を出さなければ、あの先生のことだから淡々とテスト範囲より先の部分へ授業を勧めていたに違いない。

そう考えると、田中くんはただ何となく思いついて実行したことなのかもしれないが、何の関係もない私も同じクラスに存在しているだけで、その恩恵に与ったのだから彼には感謝しなくてはならない。

それに先生にお茶を出すなんて、私には逆立ちしても真似できそうにないことだ。本当に世の中にはいろんな人がいるな、と思う。

そんな田中くんだが、本人も認めるようにかわいそうなくらいモテないらしい。

菅原くんと同じサッカー部だが、練習もそれほど真面目に出ていないようだし、顔も目が細く顎がしゃくれ気味で、髪も剛毛の天然パーマなのか、短いのにくるくると地肌にしがみつくようにカールしていた。

「アイツ、根はいいヤツなんだけど、女の子への接し方が下手くそなんだよね。あと、人に流されやすい。他人の話を真に受けやすいんだ。疑うということをしないらしい」

というのが、清水くんの評価だ。親友という割にはあっさりとした口ぶりで、男子同士の友達付き合いというのは女子のそれよりかなりドライなのだな、と私は思う。

それなのに田中くんの清水くんへの傾倒っぷりは忠犬のような性質で、見ていると可笑しくて仕方がない。

更に主人ならぬ清水くんも心得たもので、冷たくあしらったかと思うと後できちんとフォローしていたりする。二人のやり取りを隣の席で聞いていると本を開いていても全然進まないが、本の内容より面白くて、田中くんが清水くんの席にやってくるとつい耳をダンボにしてしまう私がいた。

そうしてテスト期間はあっという間に終わってしまった。

これは、かつてないほど悲惨な状況だ……。

今回のテストも私なりに頑張ったが、最後の答案用紙を提出した途端、早くも惨憺たる結果を想像して両手で顔を覆った。

頑張っているつもりだったが、気持ちが別のところにあるせいか、テスト勉強に全く身が入らなかったのだ。

しかしある意味、これが私の真の実力なのかもしれない。

憂鬱な気持ちを引き摺ったまま、私は期末テストの打ち上げと称したグループデートの日を迎えることとなった。

前の晩から何を着て行こうかと悩みに悩みまくったが、私の持っ

ている服の中から選ぶとなるとパターンは限られる。実は悩むまでもないことだった。

自分のクローゼットを目の前にして、その現実に肩を落とす。

まさか、いきなりこんなことになるとは思いも寄らないわけで、私は仕方なく唯一のよそ行き（それも姉のお下がり）に袖を通し、母からクリスマスプレゼントでもらった鞄を持ち、何か言いたげな母を一睨みして出かけた。

通学するのと同じように電車に乗り、駅で停車するたびにT市が近づいていることを実感し、お尻のあたりがむずむずとして黙って座っているのが辛い気分になる。このままだと当然のことだが、もうすぐ到着してしまう。

ドキドキと不安で胸が爆発しそうだった。

自分の格好をもう一度上から下まで確認する。

レモンイエローのTシャツの上に、切り替えの入ったオフホワイトのワンピース。胸を覆う部分にはギャザーが入っていて、飾りボタンが三つついている。丈は長めで膝が十分に隠れる長さだ。それにシンプルな茶色の鞄。靴は通学にも履いているいつもの靴。

――び、微妙？

そう思っても他にないのだからどうしようもない。後は英理子さん頼みなのだ。

駅に着いた後、約束の時間まで三十分ほど余裕があるので、その

間に英理子さんがイメチェンの手伝いをしてくれることになっている。

ところが、T市まで残り二駅のところで車両の中に見覚えのある顔を発見した。

――山辺さん！

考えてみれば当然のことだ。この路線は2時間に1本しか走っていないのだから、同じ路線を利用する山辺さんがこの電車に乗らないはずがない。

しかも妙なことに電車通学の掟なのか、学年ごとに乗る車両が決まっていた。だから彼女が同じ車両に乗ってくるのは必然的なことだった。

私は咄嗟に顔を伏せる。山辺さんが空席を探してキョロキョロしていた。

――こうなりゃ、寝たフリしかない！

見つからなければいい、と祈るように思いながら目を閉じた。

しばらくしてそっと目を薄く開けてみると、山辺さんはかなり離れたところに座っていた。ホッとしてまた目を閉じる。

終点のアナウンスが車内に流れた。

また一瞬だけスッと目を開けてみると、山辺さんは早々と立ち上がり、私の席からは離れた出口へと向かっている。私は「上手くい

った」と内心ほくそ笑んだ。

電車が停車して、彼女が降りたのを確認してから私もゆっくりと立ち上がった。電車の中からこそこそしている時点で何だか惨めだったが、改札口では英理子さんが待っていてくれるはずだ。くよくよしている暇はない。

ホームに降り立ち、人影がまばらになったところで大きく深呼吸をした。

――よしっ！

ここまで来たら後には引けない。行くしかないんだ。

そうは思うものの、どうして私がこんな目に遭わなければならないんだろう、と改札口へ向かう階段をのぼりながら心の中で盛大にぼやいていた。

でもこうなったのは、半分は清水くんのせいだけど、残り半分は私のつまらない意地のせいだという自覚はある。何だかよくわからないけど、清水くんが「一人で行く」と言い出した途端に「それだけは絶対許せない」と思ってしまったのだ。

そのくせここまで来てもやはり、付き合っていることがみんなにバレるのは嫌だと思う。

――なんかもう、頭の中がごちゃごちゃ！

今まで経験したことのない数多の感情が私の中に渦巻いて、奇妙なマーブル模様を描き出していた。

階段をのぼりきって目を上げると、不安な表情で待つ英理子さんの姿があった。

私を見るなり英理子さんの頬にパーッと明るい色が差す。それを見た瞬間、はち切れそうな胸の奥の不安な気持ちは大きな吐息とともに辺りへ霧散していった。

## 24

ジーンズのポケットの中でケータイが鳴る。メールの音だ。自転車を漕ぎながら片手をポケットに突っ込んだ。

案の定、英理子からだった。もう準備ができたらしい。早いな、と思いながらチラッと前を見て、返信を打ち込む。

駅に到着すると階段を段飛ばしで駆け上がり、改札口の前を素通りする。

「清水くん！？」

不意に女子の声がした。声のほうを見ると、女子のクセにやたらとビッグな山辺さんがいた。バレーボールをやっている人らしい体型だ。

「そんなに慌ててどこに行くの？　待ち合わせ場所、ここだよね？」

近づいてきた山辺さんの私服姿はカジュアルで意外とオシャレな感じだった。意外と、なんて言ったら怒られそうだが。ちなみに俺は怖くて彼女を呼び捨てにできない。

なにしろ、初めて山辺さんのスパイクの破壊力を目の当たりにした男子一同、本気で震え上がったことは不名誉だが本当のことだった。あれが脳天に炸裂したら、と想像するだけでも目の前に星が飛びそうだ。

「彼女を迎えに行って来る。約束時間までもう少しあるし」

「そっかぁ。彼女さんに会うの、楽しみ。早く連れておいでよ」

俺よりよっぽど筋肉質なのに、会話していると山辺さんは他の女子よりもよっぽど女子らしいと思う。……って、この表現もかなり失礼か？

ともかく舞を迎えに行かなければならないので、返事もそこそこにその場を去った。

それにしても、舞が突然やる気を出して菅原たちの誘いに乗ってくれたのは、予想外の嬉しい驚きだった。

更に「できません」と断言していたイメチェンにまでチャレンジするというから、本当はかなり無理をしているのではないかと心配になる。だが実際、俺の胸の内は心配以上に期待のほうが大きかった。

駅に直結しているショッピングセンターへの通路を渡ると、出入口に英理子の姿が見えた。その場をウロウロして落ち着きがない。それを見ると俺まで不安な気持ちになってくる。

――どうしたんだ？　舞はどこに……？

「遅いですよ！　五分前行動を心がけてください」

俺の姿を見つけるなり、英理子は甲高い声を出して言った。英理子は怒ると言葉が更に丁寧語になる。咄嗟に俺は申し訳ないというように腰を低くした。

「ごめん。これでも急いで来たんだけど。……それで舞は？」

「もう、ずっと待ってたんだよ！」

「なんだよ、五分くらい遅れたうちに入らな……」

英理子の視線の先に白いスカートが見えて、一瞬ドキッとした。更に目が合って胸の鼓動が激しくなる。

舞は壁際で、壁に溶け込もうとするかのように息を潜めてひっそりと立っていた。

「ね、どう？　舞ちゃん、すっごくかわいいよね？」

「……いや」

英理子が満面の笑みをたたえて、俺の顔を覗きこむようにするので、思わず顔を背けた。

その途端に英理子は俺を思い切りど突く。

「なによ、その『いや』って。今、絶対かわいいって思ったでしょ？　顔が赤くなってるわよ」

「いや、『イメチェン』っていうから、もっと大々的に変化しているのかと……」

なぜか俺の返事はしどろもどろになってしまった。

「大々的？　一体どんなものを想像してたのよ？」

「いや、ほら……鼻眼鏡とか？」

「それ『イメチェン』じゃなくて変装です」

すかさず舞からツッコミが入った。嬉しくなって舞のほうを見ると、またドキッとする。眼鏡はいつもと同じなのに、何かが違う。胸のドキドキを何とかやり過ごし、俺は覚悟を決めて真っ直ぐに舞を見た。

――えっと、なんて言うんだ？

「……ヘアバンド？」

「カチューシャ？」

自信なさげに言うと英理子も疑問形で返してきた。

「ああ、それそれ。……って、英理子が手伝ったイメチェンってカチューシャつけただけじゃん」

「そうよ」

開き直るつもりか、自信満々な返事だ。俺が更にツッコミを入れようとしたら、それを制するように英理子は俺の鼻先に人差し指を向けた。

「でもそれだけじゃないわよ。ほら、よーく見てよ。舞ちゃんの髪の毛、ツヤツヤ！」

そう言って英理子は舞の肩先から髪の毛を掬い上げてうっとりする。思わず俺も舞の傍に行き、英理子とは反対側から舞の髪に触れた。

「うわー、ホントにツヤツヤで触り心地いい」

それによく見るといつものおかっぱが、ただのおかっぱじゃなくなっている。

「え？　カットとかしてないよね？」

俺の驚き混じりの声に英理子は即座に反応した。

「ウフフ、これぞエリコマジック！」

その間も両脇から髪の毛を弄ばれている舞。かわいそうになるくらい見事に固まっていた。

――だけど本当に大変なのはこれからだよ？

と、俺は思う。その大変な目に遭わせているのは他でもない俺なんだけど。

英理子は有頂天でエリコマジックについて語り始めた。かいつまんで言えば、テレビで観たカリスマの技を真似してドライヤーでブローし、艶の出るワックスをつけたのだそうだ。そして仕上げにカ

チューシャ。

「さすが英理子、よくやった。じゃ！」

「ちょっと『じゃ！』ってなによ。もうちょっと労ってくれてもよくない？」

「わかった。今度ジュース買ってやる。じゃ！」

「ぶっ」

いきなり舞が吹き出した。

「ジュースって……」

「ホント、はるくんは……って、ちょっと！」

英理子の声を背中に聞きながら、俺は舞の腕を取ってショッピングセンターの通路を戻る。もう菅原たちとの約束の時間なのだ。

「あの……英理子さんを置いてきちゃっていいの？」

俺の顔をこわごわと覗き込む舞の仕草がかわいい。あまりにもかわいいので、一旦掴んでいた腕を離し、改めて手を繋いだ。

「いいの、いいの。だって時間だし。五分前行動って英理子が言ってたんだよ」

「あの……手は繋がないほうがいいかと」

遠慮がちに引っ込めようとする舞の手を、反発して力強く前に引っ張った。

「嫌だ」

――ここまで来て今更……。

わざと大きくため息をつく。舞は困ったようにうつむいて、立ち止まってしまった。

――どうする？　二人ですっぽかす？

その選択肢も有りだと思うが、それでは英理子が浮かばれない。握っている手の力を緩めて、俺は舞を試した。

もし舞が俺の手を振りほどくのなら、菅原たちを放っておいて舞ともう一度話し合おうと思う。

だが、舞は軽く重ねただけの手を自ら離そうとはしなかった。

――よしよし。

気分を良くした俺はもう一度手に力を込めて繋ぎ直し、舞の耳元に顔を寄せて言った。

「その格好、舞に似合ってるし、かわいいよ」

眼鏡の奥でパチパチと瞬きを繰り返す舞の顔が徐々に赤くなってきて、見ている俺まで恥ずかしくなってくる。慌てて前を向き、強引に舞の手を引っ張って待ち合わせ場所へと向かった。

駅の改札口の前には、ひと目見ればすぐにそれとわかる賑やかな集団がいた。中でも田中はいつにもましてテンションが高い。最初から飛ばすと後で息切れするぞ、と思いながら冷めた目で見ていると、その田中がいち早く俺と舞に気がついた。

「よぉ、待ってました！」

その呼びかけはなんだ？　と思うが、仕方なく手を上げて応える。横を歩く舞の足取りが急に重くなったようだ。

「え、ちょっと……あれ高橋さんじゃない？　マジで？」

たぶん俺たちにも聞こえるように、わざとらしい大声を上げたのは西こずえだ。田中以外のメンバーで驚いていないのは沖野くらいだった。沖野は色恋沙汰に無頓着な男だから、これは正常な反応と言える。

「おい清水、いくらなんでも高橋さんにかわいそうだろ？」

騒々しいグループの輪に混ざった俺と舞に、いきなり菅原がそう話しかけてきた。いつもの癪に障るへらへら顔だったからカチンと

くる。

「菅原、それ以上舞を侮辱するようなことを言ったら、容赦なくぶっ飛ばすから覚悟しとけ」

「なにコイツ、むきになっちゃって。しかも『舞』だって」

菅原は少しビビったらしく、他のメンバーに助けを求めるような視線を送った。そういう態度が本気でムカつく。俺は一歩踏み出して菅原に顔を近づけて言ってやった。

「ふざけんな。わかったのかよ？」

「わ、わかったよ。ごめんね、高橋さん。……って、マジで付き合ってんの？」

人差し指をメトロノームのように動かしながら俺と舞を交互に差す。

「冗談でこんなところに連れてくるわけないだろ」

一瞬、場がシンとなった。メンバー同士が無言で視線を交わす。舞が俺の斜め後ろで更に小さくなっていた。

――こうなったらもう、アノ手しかないな。

いや、今のままでも十分だし、俺はむしろこれはあったほうがいいとさえ思っている。でもこういう場合、やはりこれはないほうがいいのだろう。

おもむろに舞を振り返って、顔の半分くらいを占領している分厚い眼鏡を外し、素早く畳んで俺のシャツのポケットにしまった。

舞は小さく声を上げたが、俺の動作の素早さに唖然としてほとんど無抵抗だった。

他のメンバーの視線は一斉に裸眼の舞に注がれる。教室内でも眼鏡を外すことは珍しくはないし、おそらくクラスメイトの誰もが一度くらいは彼女の眼鏡を外した素顔を見ているはずだ。

それなのに、この驚きようはエリコマジックのおかげなのか？

特に菅原と西が愕然としているのを見て、この作戦が予想以上の効果を発揮したことに俺は大いに満足する。

なんだかんだ言っても、外見で他人を判断する輩は多い。それくらい視覚情報というのは強烈なのだろう。

特に今日の私服姿は薄い黄色のTシャツに白いスカートで、いつもの制服姿に比べれば格段に爽やかな感じがする。更に細い黒のカチューシャが舞の女の子らしさを適度に強調していて、男子からの好感度はかなり高いと思う。

それに普段目立たない分、インパクトが強い。しかも、大きな目で不安そうに俺を見上げる表情が何とも言えずそそる。

「で、まず何するんだ？」

内心勝ち誇って天狗になった俺は、まだ茫然としている菅原に話しかけた。菅原はハッとして、まず余裕を取り戻すためか、腰ではいているジーンズのポケットに手を突っ込んで意味もなくのけぞって見せる。

「ボウリングやろうぜ。男女二組ずつで勝負する」

「お、いいじゃん！　じゃあ、とりあえず移動するよー」

なぜか田中が引率係になってメンバーの先頭に立ち、後から一同がぞろぞろと続いた。

西は俺のほうをちらちらと見て、おとなしい藤谷に何か耳打ちしている。俺は何を言われても気にしないが、それでも女二人がこそこそするのは胸がムカムカする光景だった。

ボウリング場に到着すると、エントリーシートを囲んでチーム分けをした。ここでは菅原が陣頭に立ち、自分に都合のいいチームを作る。俺は舞と一緒なら異論はないのですんなりと決まった。

そして各自準備に入る。

舞がトイレに行くというので眼鏡を返し、俺は舞を待つついでに自動販売機で飲み物を買うことにした。

何を買おうかと迷っていると、すぐ隣に人の気配を感じた。

「ねぇ、君って高校生？」

知らないお姉さんが俺の腕に触れるか触れないかくらいの位置に立っていた。結構かわいい人だがかなり派手なメイクで、それを至近距離で見てしまった俺は一瞬ぎょっとなる。

「そうですけど、何か？」

「お姉さんとメル友にならない？」

これが最近よく聞く肉食系女子だろうか、と思いながら笑顔を作った。

「メル友なら間に合ってます」

途端にお姉さんはきつい目をして俺を睨む。

「彼女いるんだ」

「いますよ」

「ふーん。でも友達は何人いてもいいじゃん」

お姉さんは俺に軽く体当たりしながら「ね？」と首を傾げてかわいらしく微笑んだ。

俺はどうもこの手のケバいお姉さんは苦手だ。何度見てもメイク

に気合が入りすぎてて少し怖い。

「俺の友達を紹介しますよ」

丁寧な口調で提案すると、お姉さんはあからさまに落胆し「はぁ」とわざとらしいため息をついた。

「いや、友達には興味ない。突然ごめんね。これ、あげるわ」

お姉さんは俺の胸のポケットにチケットのようなものを入れて去っていった。案外あっさりとした性格の人だったらしい。

見てみると「ボウリング1ゲーム無料券」だった。有効期限を見ると来週から1ヶ月の日付になっている。今日使えない券なら俺もいらないが、とりあえずしまっておいた。

今のは一体何だったんだ、と思いながらお茶とグレープフルーツジュースの缶を買って振り返ると、ちょうど舞がトイレから出てきたところだった。

「清水の番だぞ！」

舞と二人でボールを選んでレーンに向かうと、同じチームの沖野が待ちきれない様子で大声を上げる。

急いでアプローチに立つと右側のレーンに母親より少し年上と思われる女性が既にボールを構えていたので、すぐにアプローチから降りた。

こう見えても俺はボウリングには少しうるさい。何しろ母親がアマチュアの大会で優勝するような腕の持ち主で、小さい頃からマナーに始まり投球フォーム、果ては理論まで叩き込まれてきたのだ。

腕にリスタイをつけた右隣の婦人が美しいフォームで投球し終わると、俺は再度アプローチに立った。

――見てろよ。

ボールを抱えてピンを睨みながら立ち位置を確認する。呼吸を整えて腰を落として助走を始め、一球目なので慎重に、そして丁寧にリリースした。

リリースした瞬間に、これはいったな、と思った。ピンはパカーンといい音を立てて左右に転がる。ストライクだった。背後で歓声が上がった。

「清水くん、プロ級じゃない？」

同じチームの山辺さんが興奮して立ち上がっていた。一球目で褒めすぎだろ、と思いながら苦笑すると、目の端に舞がボールを持ってふらりとアプローチに立つのが見えた。

なぜか自分の番より緊張しながら、その挙動を見守る。

よいしょ、という感じでボールを抱えるとゆっくり歩き出し、そっとボールを送り出した。よろよろと転がっていく様子が舞の印象と重なって、笑いがこみ上げてきたが何とかこらえる。

後ろで見ている俺と沖野と山辺さんはきっと同じ気持ちだっただろう。三人とも息を止めてボールの行く末を案じる。

「ああ……」

レーンの上の長旅を終えたボールは優しく撫でるようにピンを転がして消えた。

「おお！」

俺を含め見学者三名は異口同音に感嘆の声を上げた。

威力がないのでストライクは無理だったが、あの投球スピードで八本も倒れたことに俺はかなり感動していた。

「これはうちのチームの勝ちかもね」

山辺さんは隣の菅原・田中・西・藤谷チームのスコア表を見て満足げに言う。まだ1フレーム目なのにいくらなんでもそれは早計だと思うが、誰も否定はしなかった。

だが、田中が突然立ち上がって勢いよく言う。

「今のは練習だから！」

山辺さんの言葉に触発されたのか、急に投球フォームの研究を始めた。スコア表を見ると田中は一投目ガター、二投目は三本だけ倒れたようだ。

「田中、真っ直ぐ転がせばいいだけだぞ」

俺は一心不乱に投球練習をする田中に親切心からアドバイスしてやったが、ヤツの耳には誰の言葉も届いていない様子だ。というか、女子と遊んでいることも忘れている気がする。あんなの楽しみにしていたのに、勝負がかかると女子はどうでもよくなってしまったようだ。

レーンのほうに目を戻すと、西が投げ終わったところで「フォー！」などと意味不明な高い声を上げて、藤谷ときゃあきゃあ言っている。ちなみに西は器用にも1本だけ倒した。

――まぁ、俺の敵はいないな。

2フレーム目以降も基本に忠実に平常心で投げる。点を稼ぐコツがあるとすれば、これに尽きると思う。ともかくピンを倒さなければ点数にならないのだから。

そうこうしているうちに1ゲーム目は終わった。

菅原が尻上がりに調子が良くなり後半スコアが伸びたくらいで、他のメンバーはほぼどんぐりの背比べだった。

勿論、俺は２００越えで余裕の一位だ。こうなると、俺と菅原の一騎打ちの様相を呈してきたと言っても過言ではないだろう。

ふと隣を見ると舞は暗い表情をしている。心配になってうつむき加減の顔を覗きこむようにすると、舞は閉じたままの唇をニッと真一文字に伸ばした。

――え？　なに、その表情……。

面食らった俺は渋い表情を作って問う。

これはマンガに出てきそうな顔だなと思った。どう見ても笑い顔ではないので、怒っているのかとやや不安になる。

いや、悪いのは俺だということは重々承知している。この状況で舞が楽しいわけがない。特に菅原と西は、意図的に舞を無視した言動を取っていた。

西も許しがたいが、俺としては菅原のほうが許せない。男のクセに男らしくない態度だ。だから2ゲーム目は更に格の違いを見せ付けてやろうと密かに思っていたのだ。

舞はその不思議な表情のまま、少し首を傾げて俺に身体を寄せた。

「後ろのプロっぽいおば様たちが、こっちを怖い目で見ているのだけど」

小声でそう言って舞は困ったように口を尖らせた。今度はアヒルのような口だ。これはちょっとかわいい……っと、舞の百面相を楽しんでいる場合じゃない。

何気なく振り返ってみると、俺の背後には貫禄のある女性が腰に手を当てて仁王立ちでこちらに睨みをきかせていた。

――うわ、これマジギレしてるよ。

「次、清水だぞ」

沖野から声を掛けられて、俺は立ち上がる。舞がアヒル口のまま見上げてきたので、ポンポンと頭を撫でておいた。

隣のおば様が怒るのも仕方ない。何しろ菅原・西のチームは常に意味もなく騒がしいし、こっちのチームはこっちのチームで、沖野は性格上ボールを持ったらすぐに投球しないと気が済まないらしく、右隣優先のマナーなど無視してズカズカとアプローチに上がっていた。

こんなうるさいガキどもが隣にいたら、真面目に練習している人がペースを乱されて怒るのは当然だと思う。

でも、今日は日曜日だ。俺たちの他にも高校生や大学生らの若者やファミリーなど多様なグループが気軽にボウリングを楽しんでいる。こんな日に若者の行動に関していちいち目くじらを立てていたらキリがない。

そんなことを考えていたせいか、一投目はピンが残ってしまった。やはり雑念があるとよくない。気持ちを切り替えて二投目はしっかりとスペアを取る。

ガッツポーズを作りながら席に戻ると、舞が右の手首をぶらぶらさせながらため息をついていた。

「手が痛い？」

「うん。変なところに力が入ってるみたいで……」

「ああ、コースを狙うと変に力んで手首痛めるよ。真っ直ぐ振り子のようにボールを送り出してみなよ」

「はい」

いつも思うが舞は素直な生徒だ。こうしてアドバイスをすんなりと受け入れてもらえると気持ちがいいし、もっといいところを伸ばしてあげたいと思う。

舞がボールを持ってアプローチに立つと、西は少し離れた場所から冷ややかな視線を舞に送った。

――しかし、西はなぜ舞を目の敵にするんだ？

今日も見事に外跳ねしている西の髪の毛を眺めて思う。英理子や高梨からの助言によると、西は俺に気があるらしいが、俺自身そういう気配は全然感じない。

だからこそ厄介だ。現状だと単に西が舞のことをいじめているようにしか見えない。

舞が俺とのことを隠していたい気持ちもわかるが、そうなるといつまでも俺が西の陰湿なやり方に口出しできなくなってしまう。そういうのはもう嫌だ。特に相手が舞だからこそ、俺はこのまま黙っていたくない。自分の手で舞を護りたいと思う。

そんな決意を秘めて舞を見る俺の目に、いきなり衝撃的な映像が飛び込んできた。

助走に入った舞は、俺のアドバイスどおりにボールを振り子のように勢いよく後ろへ振り上げた。なかなかいいフォームだ、と思った瞬間――

ゴン！　……ゴロゴロゴロ……。

前方のレーンを転がるはずのボールが、右斜め後方で仁王立ち中のおば様の座席のほうへすっ飛んでいった。

途端に耳を覆いたくなるような怒号が響き渡る。

「ちょっと何やってんのよ！？　危ないじゃない！　どういうつもり！？」

「ごめんなさい」

顔をこわばらせた舞がその場ですぐに頭を下げる。だが、おば様の怒りはここぞとばかりに炸裂した。

「アンタたち、さっきから見てればマナー悪すぎる。高校生でしょ？　どこの学校の生徒？　一体どういう教育されてるの。他人に迷惑をかけないって当たり前のこともできないわけ？」

「本当にごめんなさい」

舞が小さくなってボールを拾いながら更に謝った。唾を飛ばしながら激しい口調で抗議するおば様の前に、身を低くしながらも進んでいける舞の勇気には感動する。

「私が怒っているのはアンタだけじゃない。アンタたち全員やかましいし、私が投げようとしているのも確認せず投球するし、さんざん迷惑掛けておきながら少しもすまなさそうな態度はしないし、黙っていればどんどんエスカレートして、もう我慢できないわ！　周りをよく見てご覧なさい！　ここはアンタたちだけがボウリングをしているわけじゃないんだから」

腰に手を当てたまま息もつかずにまくし立てたおば様が、フンと鼻息荒く言葉を区切った頃合いを見計らって、俺は立ち上がった。

## 25

清水くんがモテるということは知っていた。高校に入学したとき既に彼は超有名人だったし、同じクラスだからその容姿は嫌でも目に入る。それなりに長身でしかもこんな整った顔立ちの男子であれば、モテないほうがおかしいとさすがの私も思ったのだ。

でもそれはテレビで人気アイドルを眺めて「かっこいいな」と思うのと同じ気持ちで、彼が女の子にどれだけモテようと私自身には何の関係もないことだった。

そう、ほんの少し前までは――。

しかし立場が変わった今、その事実を目の当たりにして私はかなり複雑な気持ちになっている。

例えば西さんのあからさまに私を敵対視した態度。彼女とはこれまでほとんど話をしたことがなかったが、清水くんと話をしていると彼女の突き刺さるような視線を感じる。いくら鈍感な私でもそれがどういう意味かはわかる。

西さんはクラスメイトだから、私だって全然想定していなかったわけではない。田中くんの口ぶりからして、今日の女子メンバーの中に清水くんを好きな人がいるのだと勘づいてはいた。

でも、あれは……なんだろう？

ボーリング場に着いて、まずトイレに行った私は用を済ませて出た途端、その現場を目にしたのだ。

清水くんの隣に、一応彼女である私なんかよりも親しげにぴったりと寄り添っている見たことのないお姉さん……。最初は知り合いなのかと思ってしまった。だって清水くんは普段と寸分も違わぬ様子なんだもの。

でもどうやら違ったみたいで、最後にお姉さんは清水くんのシャツの胸ポケットに何かを押し込んで去って行った。なんだろう、アレ。電話番号とかメールアドレスとか？

――清水暖人……ヤツは絶対アヤシイ。

私が傍にいなければ知らないお姉さんに密着されても平気、いやむしろ喜んでいたりするんじゃないか、と思ってしまう。それに私のことをかわいいとか言っておきながら、実はああいう派手なお姉さんが好きなのか、とか。他にも電話とかメールしてる女子がいるんじゃないか、とか。

――ぐわあああ！

私は何を考えているんだろう。バカバカしい。しかも驚きのあまり、ケバ目のお姉さんが立ち去るまでトイレの入り口でこっそりと一部始終を盗み見ていた私の姿は、傍から見たらただの変な人じゃないか！？

嫌だ。アイツのせいで自分が変な人になってしまうのは、絶対に嫌だ。

もやもやする気持ちをねじ伏せ、何事もなかったようにトイレから出た。さも「今出てきました」と言わんばかりにハンカチで手を拭いたりしながら。

清水くんのほうも、ほんの一分前までお姉さんが傍にいた気配など露ほども見せない。この男も相当面の皮が厚いな、と自分のことは棚に上げて感心する。それからは彼のことをあまり考えないようにしてボーリングに専念した。

ところが、二ゲーム目に入ったあたりから西さん以外にもこちらに強烈な視線を送ってくる人がいることに気がついた。隣のレーンのおば様だ。三人組のおば様チームはウェアからして気合の入り方が違う。

中でもリーダー格のおば様が腕を腰に当てた仁王立ちでこっちを監視し始めたからたまらない。

正直に言って私はボーリングが下手だ。それなのにプロ級のおば様の監視下で投げることになってしまい、緊張で身体はガチガチになってしまう。ボールを投げた瞬間、手首がグキッと嫌な音を立てた。

――はあぁ……。

やっぱりこんなところに来るんじゃなかった。

西さんも嫌な感じな上、なぜか菅原くんまで感じが悪い。二人ともチームが別なのがせめてもの救いだが、菅原くんのいかにもカッコつけた投球フォームとか、笑えない話題振りとか、見ていると肌が粟立ちそうだ。黙って近くにいるだけなのに、私は激しく疲労を感じていた。

早く終わらないかな、と思ったとき、隣に座っていた清水くんが思い出したように私を見た。男の人というのは勝負事になると熱くなってしまうらしい。しかも嫌味なことに清水くんはボーリングも大の得意だった。

まぁ、このメンバーの中で一番冷静なのはコイツだろう、と思う。私を除けば、の話だが。

それで隣のおば様のことと手首が痛いことを話したのだ。本当はあまり口を利きたくない気分だったんだけどね。

私の番が回ってきたので、清水くんのアドバイスに従って手首に力を入れず真っ直ぐに投げることをイメージした。

――力を入れない。真っ直ぐ。力を入れない。真っ直ぐ。

頭の中で呪文のように繰り返しながら助走を始め、ボールを持った手を後ろに引いたその瞬間……。

ボールがすぽっと指から抜け落ちた。

――ウソ！？

振り返った私の目には、さほど近くに落ちたわけでもないのに、怖がって大げさに避けるおば様の姿が映る。そのしぐさは仁王立ちの勇ましいポーズからは想像もつかないようなわざとらしい可憐さがあった。

――いやいやいや、そんなに避けなくていいし？

すっ飛ばした張本人だというのに、私はそのおば様の姿を見た瞬間罪の意識も忘れ、心の中でツッコんでしまった。

それがおば様に伝わったのだろうか。ブツッと彼女の堪忍袋の緒が切れた音が聞こえた気がした。

「ちょっと何やってんのよ！？　危ないじゃない！　どういうつもり！？」

「ごめんなさい」

どうもこうもない。手首に力を入れないようにと気をつけていたら、力加減を間違えたのか指が滑ったのだ。これは危険行為だけれども、わざとやったわけではない。

おば様は今まで堰き止めていた我慢ならない思い丈を一気にぶちまける。私はひたすら頭を下げて、とにかくボールを拾いに行った。

でも、と彼女の演説を聞きながら思う。

――あまりヒステリックに叫ぶと、正論を述べていても快く受け入れてもらえませんよ？

実は年配の女性教師にも同じことを思うことがある。その先生は普段から不機嫌そうな顔で挨拶をしてもニコリともしない。まぁ、私の挨拶も愛想がないから仕方がないのかもしれないけれども。

――私も気をつけないとなぁ……。

こんなときに思うことではないのだけど、私は小さくなってボー

ルを拾いながら自分の態度を反省していた。

西さんや菅原くんを「感じ悪い」と思ったけど、考えてみれば普段の私はその何十倍も「感じ悪い」のかもしれない。今まで他人に無関心を通してきたのはただの自分のエゴでしかないのだ。

――あれ、私……？

そういえば、どうして私は友達と交わらない生活を好むようになったんだろう。いつから？　昔は違ったような気がする。

何か変な感じがした。自分が自分でないような……？

しゃがんだまま首を傾げた私の隣に誰かが立った。見るまでもなく清水くんだ。それでも私は足から順に彼の顔までを見上げる。下から見ても本当に端整な顔立ちだった。

ほんの一瞬、彼は私を見下ろしてクスッと笑う。それから表情を引き締めて口を開いた。

「お騒がせして申し訳ありませんでした。お詫びにもなりませんが、よかったらこれ使ってください」

彼の真剣で優しい声がその場の空気を弛緩させる。思わず私はぼーっと見とれてしまった。

清水くんはおば様の目の前まで歩いていって、ほんの少し首を傾げるとニコッと笑った。悪魔が微笑んだのだ。おば様は目をパチクリとさせ、一瞬ためらった後、差し出された紙切れをおそるおそる受け取った。

――あれって、さっきのお姉さんがポケットに入れていった紙？

硬直したままその紙片を眺めていたおば様は、清水くんの顔と手にしている紙を見比べる。

「ど、どうもありがとう」

おば様の激情は嘘のように消え失せてしまい、今はただイケメンを目の前にして頬を赤く染める一人の乙女になっていた。

「いいえ、こちらこそご迷惑をお掛けしてすみませんでした」

最後にまたあの悪魔の微笑みを見せ、彼は堂々とこちらへ戻ってくる。立ち上がった私の背中を軽く押して、再びレーンに向かう私に言った。

「舞、手首の角度が甘いんだ。ボールを片手で下から支えるように持って」

ふむふむ。……ああ、なるほど。

右手の上にボールを乗せる。さっきおば様のほうへぶっ飛ばしてしまったのは、ちゃんと手でボールを支えていなかったのだ。

――……って、もしかして私を助けてくれたの？

助走を始めた私の脳裏に突然その考えがひらめいた。今度は真っ直ぐ前に転がすことができたが、意識が逸れたのが原因なのか、途中からボールも横に逸れて溝に転落……。

結局、清水くんはずるい。頭も良くて運動神経も良くて、背も高くて顔もカッコいいなんて反則だと思う。神様は彼一人にいろいろ与えすぎだ。

それにあの笑顔を見せられたら、ほとんどの女性は彼に全てを許してしまうんじゃないかと思う。あの背後で仁王立ちしていたおば様だって、今はもう恋する少女みたいに清水くんのことばかり見つめているのだから。

――ぐわあああ！

考えるのはやめよう。だんだん自分が嫌な人間になってしまう。

そうだ、ヤツは悪魔だった。悪魔のことを羨む人はいない。私、どうかしてました。

何とか立ち直った私は、清水くんに買ってもらったジュースを飲んだ。しかし、どうしてグレープフルーツジュースなのかはよくわからない。オレンジとかアップルとかオーソドックスな選択肢もあるのに、と思う。

「グレープフルーツ好きなの？」

「好きだよ。甘くてちょっと苦いところとか、誰かに似てるなって思って」

さっきまで派手に盛り上がっていた向かい側の菅原・西チームも急におとなしくなり、清水くんと話す声も内緒話のようにひそひそとした小声だ。それをいいことにヤツはまた変なことを言い出した。

「……誰か？」

「うん。舞に」

「どこが？」

「だから、甘くてちょっと苦い」

「意味がわかりません」

「それは教えられないな」

珍しく彼は自嘲気味に笑う。苦いというのはわかるけど、私のどこが甘いのだろう？　彼の考えていることはさっぱりわからない。それが原因なのか胸の中のもやもやが膨張してきて、大声でわめきたいような気分になった。

そこにタイミングよくこんな声が聞こえてくる。

「次、カラオケ行かない？」

菅原くんが現代の若者らしく余計な言葉をできる限り省いて提案してきた。その得意げな言い方からすると、菅原くんは歌に自信があるようだ。私としては彼の歌声はどうでもいいが、清水くんの歌うところは見てみたい。

それに私もカラオケはボーリングほど苦手ではない。溜まったストレスを発散してやるぞ、と密かにやる気十分だった。

「カラオケねぇ……」

隣からため息混じりの声がする。横を見ると清水くんが気だるげに長い足を投げ出してのけぞっていた。

「もしかして音痴とか？」

一応小声で訊いてみる。言いながらこみ上げてくる笑いを堪えるのに苦労した。これが彼の弱点だとしたら絶対に見たいし、聴きたい。

別な意味で私は嫌な人間だな、と思っていると、突然身を起こした清水くんが険しい顔で私の耳元に囁いた。

「誰が音痴だって？」

――ひぃ！

低い声に総毛だつ。失言だったと思う私の耳に、田中くんの陽気な声が聞こえてきた。

「じゃあ、カラオケに移動しまーす！」

ボーリングを終えた一同はぞろぞろと大移動し始めた。

総勢八名のグループが一室に入ると、広く感じたカラオケルームも案外息苦しくなってしまう。入室するなり、長椅子にどうやって座るかで菅原くんと清水くんが対立し、結局また菅原くんの意見が通った。

そして菅原くんはちゃっかりと藤谷さんの隣に座り、そのカップルの隣に西さんと清水くん、向かい側に田中くん、山辺さん、沖野くん、私という席順になった。

隅っこに腰掛けてほうっとため息をつくと、真正面から怖い顔をした清水くんが私をじっと見つめてくる。こうなったのは私のせいではないけど、何となく首を縮めて小さくなっていた。

他の人は選曲やドリンクの注文で忙しくしていた。山辺さんがみんなの注文をまとめて電話してくれる。彼女は気が利くし面倒見がいい。電話も自分の役割のように率先して掛けてくれたので、私は感謝しながら尊敬の眼差しで見ていた。

予告なしに一曲目のイントロが室内に響きわたる。全員の注目を集めながらマイクを手にして立ち上がったのは、やはり菅原くんだった。

カラオケへ行こうと誘い、頼んでもいないのに一番手を引き受け

るくらいなので、さすがに上手い。へぇ、と思っていると隣の沖野くんから早見本が回ってきた。パラパラとめくっていると次は西さんがマイクを取る。

座ったまま西さんが歌いだした。今、とても人気のある女性アーティストの曲で、実は私もすごく好きな曲だった。透明感のある歌声が素人には真似できそうにないと思っていたが、西さんは声量こそないものの声質が似ている。

「メアリー、上手いじゃん！」

沖野くんが驚きの声を上げた。田中くんと山辺さんも大いに頷く。藤谷さんは笑顔で小さく拍手を送り、その姿がまた愛らしい。

――ど、どうしよう……。

ボーリングよりは自信があると思っていたカラオケだが、急に心細くなってきた。何を歌おうかとあれこれ考えるが、元からレパートリーが少ないので私の心は軽くパニック状態になる。

次は清水くんの番だった。

本をめくる手を止めて向かい側でマイクを持つ彼を見た。歌い終わった西さんがさっきよりも清水くんに接近しているような気がして、眉がピクッと反応する。彼は一瞬だけ私に目を合わせると、ふいっと首を動かしモニターに集中する。

何だかさっきから彼の態度が冷たい。何か怒ってるのだろうか？

清水くんはアニメの主題歌で最近人気が出たヴィジュアルバンド

の曲を選んでいた。私は彼の彼女だというのに彼の好きなものをほとんど知らないことに気がつく。

——付き合い始めてから日が浅いのもあるけど……。

そして、彼の歌声も初めてだ。

「……ちょっ！　マジウマ！！」

フレーズの区切りで沖野くんがヒュウと口笛を鳴らす。感嘆の声を上げたのは山辺さんだ。メアリーこと西さんを見ると、隣で歌う清水くんを見上げる目が少女マンガに出てくる女の子のようにキラキラしていた。

——ていうか、ヤツに弱点はないんですか！？

しかもみんなが彼の歌声に酔いしれている中、モニターの歌詞を読んでいた私はこれが失恋の歌だということに気がつき、複雑な気分になる。

——いきなり別れる曲とか……どういう意味！？

まぁ、意味などないと思うけど、それでも変に勘繰ってしまうのは、やはり私が彼のことを好きだからなのか。じっと見つめていたモニターが急にぼやける。慌てて目を逸らして涙が引っ込むのを待った。

それから向かい側は見ないようにして、また選曲に戻る。突然いいことを思いついたのだ。

――これこれ、これだ！

清水くんの歌が終わると、田中くん、山辺さん、沖野くんと順にマイクが回り、ついに私の番になる。

慌てずに番号を押すとモニターに曲名が表示された。途端に隣から耳につく甲高い声が上がった。

「キターーーーー！！」

――何か文句ありますか？　清水くんだってアニソンだったのに。

そう。私は幼少の頃に大ヒットしたアニメの主題歌を選曲したのだ。テーブルの上のマイクを掴むと私は立ち上がった。

印象的な歌いだしのサビを、溜まった鬱憤を晴らすように歌い上げると、沖野くんと田中くんが腹を抱えて笑い出す。他の人は度肝を抜かれたような顔で私を眺めていた。少し、いやかなりいい気分だ。

だが、一人だけ冷たい視線を送ってくるヤツがいた。真正面から。

気がついてはいたが敢えて無視する。始めてしまったものは最後までやり遂げるのみだ。

笑いたければ笑えばいい。私らしくない思うかもしれないが、これも紛れもなく私なのだ。

――ええい、私のソウルを聴け――！

歌い終わった私は魂が抜けたようにストンと椅子に腰を下ろし、ふうと大きく息をついた。

「高橋、ナイスファイト！　よし、俺もアニソンで行くぜ！」

「え、沖野も？　俺も歌っていい！？」

沖野くんと田中くんが目の色を変えて本をめくり、競うようにリモコンに番号を入力する。それを菅原くんが茫然と見つめている。

一気に室内の雰囲気が変わってしまった。

「ぶっ……！」

怖い顔をしていた真向かいの清水くんが、突然堪え切れないように吹き出す。隣の西さんは驚いて彼から身を離した。

「カラオケは舞の優勝だね」

悔しそうに菅原くんが顔を背ける。それは負けを認めたということだろうか。感じの悪い菅原くんの鼻明かしたようで更に気分が晴れ晴れとした。

「舞の歌も終わったんでトイレ」

そう言い残して清水くんは部屋を出て行った。ドアが閉まると西さんが突然立ち上がり、テーブルの上に投げ出されていたリモコンを手にする。

「おい、何するんだよ！」

マイクを握った沖野くんの反論も聞かず、演奏が始まった曲を中止し、予約も全てキャンセルする。

それから腰に手を当てて私の真正面に立った。マンガに出てきそうな場面だと彼女の姿を見て私は思う。

大きく息を吸った西さんは、ついに腹に据えかねていた想いを吐き出した。

「いい気にならないでよ。ちょっと清水くんに気に入られてるからって、調子に乗りすぎ。今は物珍しいから構われてるだけで、そんなの一時的なものよ。アンタみたいに根暗な人間を清水くんが本気で好きになるわけないもの！」

――根暗……か。

とりあえず瞬きを繰り返した。胸の鼓動が大きくなり身体中に響き渡る。目を吊り上げた真剣な顔の西さんとしばらくの間見つめ合った。

「……そうですよ」

西さんから目を逸らして自分の膝頭の辺りに視線を落とす。彼女はさぞかしすっきりしただろうな、と思っていた。たぶん、さっき歌い終えた私と同じような気持ちじゃないか、と。

「清水くんが私なんかのことを好きになるわけないんです。……皆さん、本気で騙されたんですか？」

声がどうしようもなく震えた。でも、心の中は優しい気持ちで溢れていた。西さんにあんなことを言わせたのは私なのだ。私が逆の立場だったら、やっぱり同じように思うはずだ。さっきあの見知らぬお姉さんに「彼に近寄らないで」と思ったのと同じように……。

もうダメだ。やっぱり私はこんなところに来ちゃいけなかったんだ。

ドアに駆け寄りドアノブに手を掛けた瞬間、予告なしにドアが開いた。勢い余って前のめりになった私は、顔面から懐かしい香りのする柔らかいシャツに飛び込む。

慌てて離れようとしたが、そのまま頭を押さえつけられた。

「お待たせ。もう帰ろう」

頭上から心のこもった温かい声が降ってきた。清水くんは私の顔を覗き込むようにするので、仕方なく上目遣いで見上げるが、ぶつかった拍子に眼鏡がずり落ちてしまい彼の顔がぼやけて見える。

「泣いてるし……」

「泣いてない！」

清水くんがクスッと笑う。頭を押さえつけていた手が、いつの間にか背中に回されて私は彼に抱き締められていた。

「涙目になってる」

「なってない！」

――っていうか、は、は、は、ハグ！？　しかもみんなが見てる

前で！？

恥ずかしさで顔が真っ赤になる。背中に田中くんの声が聞こえてきた。

「おいおい、見せつけるなって。そういうことはよそでやってよ」

「では、お言葉に甘えて」

凄みさえ感じる笑顔を見せて彼はカラオケ部屋のドアを閉じる。それから私の肩を優しく抱いたままカラオケ店を出た。

「舞の意外な一面を見てしまった」

可笑しくて仕方ないというように笑いを噛み殺しながら、清水くんは言った。私は肩に回された彼の手が気になって仕方がない。

「喜んでいいのかわかりませんが……。それよりこのままでずっと歩くんでしょうか？」

「ん？」

清水くんはわかっているくせに気がつかないふりをする。街行くカップルだってこんな恥ずかしい状態で歩いてはいない。私の頬は真っ赤になったままだった。

「実は舞って目立ちたがりだったりして」

「否定できない部分はありますね。成績だってできれば一番がいいですし」

クスッと笑われる。普通ならカチンと来るところだが、私の頭の中はほとんど沸騰していて何も考えられない。彼の腕に包まれている部分に異常なほど意識が集中していた。

「ねぇ、どうしてさっきからずっと丁寧語なの？」

「そ、それはですね……ど、どうしてなんでしょうね」

何を言ってるのかもわからなくなってきた。硬いアスファルトの上を歩いているはずなのに、足元はふわふわと宙に浮いているような感覚だ。

気がつけば駅に到着していた。ようやく清水くんの手が私の肩から離れてホッとするのと同時に、自分の身体から彼のぬくもりが消え去ってしまうのを残念に思う。

そういえば、と私は急に思い出す。

「あのおば様にあげた紙は何だったの？」

「ああ、来週から使えるボーリング1ゲーム無料券」

「そうなんだ」

無意識に笑いがこみ上げてきた。それを不審そうに見つめてくる清水くんに「何でもない」と首を横に振って見せた。

電車の時間まで駅ビルに入っている店をぶらぶらと見てまわり、ギリギリの時間に電車に乗った。ここに降り立ったときは不安で不満な気持ちばかりだったのに、今は全てが彼への想いに塗りつぶされてしまっている。

最高に幸せな気分で電車に乗り込んだ私は、すぐに山辺さんの姿を見つけた。

「高橋さん、ここ空いてるよ」

山辺さんも私に気がついて声を掛けてくれた。礼を言いながら彼女の隣に腰を下ろす。

「今日は楽しかったね。高橋さんの歌う姿、めちゃウケたし！」

「アハハ……」

楽しんでいただけて幸いです、と思っていると、山辺さんは急に表情を翳らせた。

「でも、メアリーが急にあんなこと言い出しちゃって……ごめんね」

「私は気にしてませんから」

友達のこととは言え山辺さんに謝ってもらうのは恐れ多かった。彼女は責任感も強くて本当に優しい人だ。

彼女の心遣いにひどく感じ入っていた私の耳に、次の言葉が届く。

「だけどメアリーの気持ちもよくわかるんだ。私も清水くんのこと

好きだから」

うんうん私もです、としきりに頷いて同意する。

――ん？　待てよ。

――山辺さんも……清水くんのことが好き！？

ひょえええーーーー！？

驚いて真横に座る山辺さんの顔を凝視する。彼女は小さく笑いながら私の顔を見返して、「それじゃあまたね」と言い残して颯爽と電車を降りていった。

## 26

月曜の朝、不覚にも寝坊してしまった。

菅原・西グループと一緒に遊んだのは結局時間の無駄だったように思うが、カラオケでの舞はいろいろな意味で強烈でいいものを見たな、などと回想していたら目が冴えて眠れなくなってしまったのだ。

おそらく西はあのまま引き下がらないだろう。だから月曜の朝は早く行かなきゃいけない。……と思っていたのに、結局学校に到着したのは朝のホームルームが始まる五分前だった。

何かおかしなことになっていないかと内心ひやひやしながら教室に向かうが、特にいつもと変わったところはない。教室に入ってみても変な視線を感じるようなことはなかった。

しかし、真っ先に俺の目に飛び込んできたのは、舞と男が会話している姿だ。途端に自分の顔が険しくなるのを感じたが、わざとゆっくり呼吸をして平常心を保とうとする。

自分の席にたどり着くと、鞄をドサッと乱暴に下ろして机の横に掛けた。それから横を見る。

「読んだことないなら、まずこれがお勧めだけど、読む？　貸してやるよ。俺、もう何回も読んだから返すのいつでもいいし」

「えっと、今読んでいる本もあるので……」

「それ読み終わってから読めば？　夏休み中持っててていいから」

舞と話しているのは声だけでなく容姿までもがサルっぽい沖野だった。机の上には煌びやかなカラー印刷で太腿がやたらと強調された猫耳の少女が真ん中に描かれた文庫が載せられている。いわゆるラノベの文庫だ。

沖野は舞に自分の好きな本を押し売りしているようだ。困惑した舞は助けを求めるように俺にチラッと視線をよこす。

仕方なく舞に「おはよう」と声を掛けた。

「おはようございます」

「おう、清水」

――何が「おう」だ。お前に言ったわけじゃないっつーの。

ムカつきながら「ああ」と適当な返事をする。

「まぁ騙されたと思って読んでみろって。この作家は他のラノベ作家とは一線を画してる本格派だから」

――何を基準に本格派とか言ってんだ？　だいたいお前は漱石とか芥川とか太宰とか、日本におけるメジャーな作家ですらまともに読んだことないだろうが。

沖野の言葉にいちいちツッコむあたり、俺は相当イラついていると思う。余裕がないのはみっともないがこればかりはどうしようもない。

もう一度舞の机の上を見た。

ラノベと呼ばれる作品を初めて読んだのは中学生のときだった。弟の本棚にある日突然それらは現れたのだ。俺も一応は興味が合ったので読んでみた。

だがそれがどんな内容だったかと問われると正直全く思い出せない。最後まで読んだのだから面白かったはずだが、要は俺の趣味に合わなかったということだ。誰が悪いわけでもない。ちなみに弟の本棚では今もラノベが増殖中だ。

「じゃあ読んでみて」

沖野がそう言い残して立ち上がろうとした。それを見て俺は咄嗟に口を開く。

「それ、俺が先に借りるわ」

「あ？」

中腰の沖野が俺を睨む。やっぱりそうか、と思うがそれはおくびにも出さず、舞の机の上に積み上げられた本を自分の机の上に移動した。

「俺が読んでから舞に貸すよ。夏休み中貸してくれるんだろ？　これくらいなら俺も舞も一冊一時間もあれば読める」

「マジかよ？　これマンガじゃねぇぞ。それともお前ら速読とかできんの？」

「普通に読んでも一時間くらいしかかからない」

「……ったく、嫌味なヤツ。ま、好きにしてくれ」

チャイムが鳴ってすぐに担任がやって来たので、沖野はそれ以上何も言わず自分の席に戻っていった。

俺はそのやけにカラフルな表紙の本を鞄に無造作に詰め込んで、改めて舞を見る。彼女は俺の態度を息を詰めて見守っていた。

「沖野と仲いいんだ？」

そうじゃないことはわかっているけど、なぜかこういう言い方しかできない。俺は今、ものすごく嫌な人間になっているという自覚はあるのだが、自分の感情を制御できない状態にあった。

「まともに話をしたのは今日が初めてでも仲がいいって言うのならそうなのかも」

ため息混じりの呆れたような声が隣から聞こえてきた。

俺は大きく息を吸って負の感情が爆発しそうになるのを何とか抑えた。因縁をつけたのは俺のほうだから舞が怒るのも無理はない。

それっきり舞はこちらのほうを見ようもしない。仕方なく俺も担任の話に耳を傾けた。

昨日のカラオケあたりから嫌な予感はあった。舞の隣に沖野が座って、何となく沖野が舞を意識しているように感じたのだ。マイク

を渡す動作さえも沖野にしては珍しく緊張気味で、それが俺の神経を大いに逆撫でする。いちいち目くじらを立てていたらキリがないのはよくわかっているが、一度気にし始めるとそういうところばかりが目に入ってきて、俺はどんどん不愉快になっていった。

沖野には悪いが、舞が俺からヤツに乗り換える可能性は限りなくゼロに近いと思う。

そうは思っても、やはり気に入らない。

しかし、沖野がこういう行動に出たのは少し意外だった。僅かな時間でも隣に座った女子を強く意識してしまうことは誰にでもあると思う。だからあれはその場だけのことだろうと高を括っていたのだ。

それにしても俺と舞が付き合っていることを知っていながら、舞と仲良くなりたいがために唯一の接点と思われる小説をネタに話しかけてくるのだ。俺もずいぶん見くびられたものだと思う。

というか恋愛沙汰に疎い沖野の場合、俺と舞のことをどう認識しているのか不明だ。そこが怖い。

そんなことを考えているとあっという間に朝のホームルームは終わり、一時間目の授業が始まる。舞も他のクラスメイトも特に変わったところはない。沖野のことは少し気にかかるが、それ以外はあまりにも平穏すぎて不気味なくらいだ。

まぁ、何もないのが一番いい。それほど心配することもなかったな、と思いながら入ってきた教科担当の教師の動作をぼんやりと見ていた。

「ではお待ちかねのテストを返します」

「えー、もう！？」

教師の声が聞こえなくなるほどのざわめきがクラス中に広がった。一番後ろの席だから先生の言葉が俺には断片的にしか聞こえてこない。何となくわかったのは全体的に出来があまりよくなかったということだ。

舞は珍しく頬杖をついていた。両方の手のひらに顎を乗せて考え事をしているようだった。あれから全く俺を見ようとしない。舞の頑固なところは嫌いではないが、場合によっては面倒だったりもする。

テストは出席番号順に返却されるので、俺のほうが先に戻ってきた。現代文は特にひねった問題もなく、先生が説明したとおりの解答を書けばよいものだった。文章題で少し減点されたが、特に大きな間違いはなく妥当な点数だ。

「うっわー、清水は９８点！？　人間じゃねぇ……」

田中がわざわざ後ろまでやって来て、俺の答案用紙を手に取った。隣で舞がピクッと反応する。

「田中は何点だった？」

「バカ、俺の点数はトップシークレットなんだよ」

田中の答案用紙を取り上げようとしたら、軽快に身を翻して自分の席に帰っていった。他人の点数を大々的に公表しておきながら自分の点数は秘密なんて卑怯だが、実は俺も田中の点数はどうでもいい。

壇上で教師が女子の名前を読み上げ始めた。舞は大きくため息をつく。名前が呼ばれるとトボトボと歩いて先生の前に進んだ。

先生が笑顔で舞に語りかけている。舞はうつむいて唇を噛み、すぐに回れ右をして足早に教室の後方へと戻ってきた。

「どうだった？」

「聞かないでください」

冷たい声の後、答案用紙は手早く折り畳まれ、舞の鞄の中に消える。そして本人は何もなかったようにせわしなく教科書をめくった。放っておいたほうがいいのだろうけど、何も言わずに黙っているのは俺が辛い。

「現代文は得意だよね？」

途端にキッと睨まれた。眼鏡の奥の目は完全に座っている。やはりこういうときは放っておくべきだな、と声を掛けたことをほんの少し後悔した。

「現代文は好きですが、得意とは言えない点数でした」

現代文は舞の一番得意な科目のはずなのに、得意とは言えない点数だったというのはどういうことだ。そりゃ先生も平均点は低めだったと言っていたので難易度は高かったのだろう。でも答案用紙をさっさと片付けたところを見ると、点数はそれ以上に悪かったようだ。

――ということは。

俺はスッと舞に身を寄せた。

「俺のことばっかり考えていて勉強に身が入らなかった？」

「違います！」

突然、俺の腕はものすごい力で押し戻される。舞の眉間には深い皺が刻まれていた。

「正直に言ってもいいのに」

「断じて違います！」

むきになってそう言った舞の顔が真っ赤だ。ほとんど冗談で言ったのだが図星だったらしい。こみ上げてくる笑いを何とか堪えて、もう一度舞の腕に触れる手前まで急接近する。

「ホント素直じゃないな」

「違うって言ってるでしょ！？」

「じゃあ何点だったか教えてよ」

「絶対嫌です。９８点の人に私の気持ちなんかわかるわけない」

さすがの俺も少し傷ついた。

でも舞の言うとおりだ。もし立場が逆だったら俺だって同じように言うだろう。

「ごめん」

ちょっとやりすぎたと反省しながら背筋を伸ばして椅子に座り直す。実際、高校二年生というのは大事な時期だ。それに小テストとは違って、期末考査の点数は今後に大きく影響する。

舞は顔を背けてため息をついた。そのため息ときたら、やるせなさが溢れていて、俺まで切ない気持ちになる。

――なーんかいい方法ないか？

俺と付き合うことで舞の成績が下がっていくというのは非常によろしくない。舞の成績が下がり、それが俺のせいだとなると、結論として俺と別れるという話が持ち上がるはずだ。これは絶対に避けなければならない。

それに俺と付き合って成績が下がるなんて、俺のプライドが断固許さない。俺と付き合うことで成績も上がり、学校生活も楽しくなり、これ以上ないくらい幸せになるというのが高校生カップルとして本来あるべき姿じゃないか。

――そういえばもうすぐ夏休みだな。

突然、いいことを思いついた。俺は舞のシャツを軽く引っ張る。
「ねぇ、俺、めちゃくちゃいいこと思いついたんだけど」
隣から冷ややかな視線が槍のように飛んできて俺に突き刺さった。だが、かまわず続ける。
「夏休み、一緒に予備校行かない？」
舞の目が眼鏡の奥で大きく見開かれた。
「予備校？」
「うん。現役生用の講座あるから、どう？」
これには興味を示したらしく、舞は難しい顔で考え込んでいる。しばらくして首を傾げながら口を開いた。
「行ってみたいような気もするけど、予備校ってことはS市まで通うんでしょ？」
「うん。そうだよ」
「ちょっと大変だし、お金もかかるから、親に相談してみないと……」
まぁ、それはそうだ。でも興味を示してくれたのはいい傾向だと思う。

「じゃあ調べておくね」

「あ、あの、でも私、今まで塾とか予備校とか一度も行ったことないんだけど……」

舞は急におどおどし始めた。その様子がかわいいので、ここはどうにかして予備校に連れて行ってやりたいと思う。

「俺と一緒なら大丈夫」

「うん……」

心もとない返事だが、舞もその気になってきたようだ。うんうん、と頷いていると急に先生が俺の名前を呼んだ。

「清水、それに高橋。お前たち二人はずっと喋っていたな。次はきちんと話を聞くように。じゃあ終わります」

日直が「起立、礼」とやる気のなさそうな声で言うと、机と椅子がガタガタとうるさく鳴り、チャイムと同時にクラスメイトが一斉に動き出した。

「注意されちゃった」

二人一緒に注意されたのが嬉しくておどけて言うと、舞は呆れたようにため息をつく。

「誰のせいですか」

「……俺？」

「私じゃないことは確かです」

「いや、舞が悪い」

「なんで私が……」

舞が俺を睨みつけたそのとき、廊下から派手な音が聞こえてきた。人と人がぶつかり合う鈍い嫌な音だ。すぐに女子の悲鳴のような声や男子の太い声が飛び交う。

「おい、こんなところでやめろ！」

「うるせぇ！　コイツ、ムカつくんだよっ！」

「……んだ？　やんのか、コラァ！」

野次馬根性丸出しで田中が廊下に飛び出していった。声から推察すると隣のクラスの野球部の男子と別のクラスのラグビー部の男子がケンカを始めたようだ。この二人は以前から顔を突き合わせるたび険悪なムードを漂わせていたが、何かの弾みでついに取っ組み合いになったらしい。

二人ともスポーツマンとしては体格に恵まれていた。特にラグビー部のほうは胸板の厚みが尋常じゃない。鎧でもつけているのかと思うような分厚い胸で、彼に本気で抱き締められたらきっと窒息するだろう。腕の筋肉だって相当なものだ。俺は女じゃないが、生まれ変わってもヤツの彼女にだけはなりたくないと思う。

「なんでしょう？」

「ケンカしてるみたい。田中が見に行ってるから後で報告してくれるよ」

舞は眉をひそめて廊下のほうを見た。

途端に意味不明な罵声が廊下に響き、ゴツッという音とともに女子らの金切り声が耳をつんざく。そして二人が揉み合ってウチのクラスのほうへ勢いよく移動して来た。

「うわっ！」

口に手を当てて舞が目を背ける。野球部の男子の口からだらだらと血が流れていた。口内が切れたか、歯が折れたか、だ。俺は小さく嘆息を漏らす。見たいわけじゃないのに、ガラスの向こうでケンカしている男同士の姿に目が釘付けだった。

「お前ら、いい加減にしろ！」

野球部とラグビー部の数人が二人の間に割って入ったが、凶暴なラグビー部の男は仲間たちに羽交い絞めにされても足をバタつかせ、仲裁に入った連中を払い飛ばす。そして最後に憤怒の形相で持て余している残虐性を手近なものに爆発させた。

ダンッ！

金属が凹む音がした。

「おい、お前、ふざけんな！」

田中や菅原らが凄んでラグビー部の男に詰め寄った。そこにようやく体育教師が数人駆けつけ、殴り合った二人は別々に職員室へと連行されて行った。

「清水、ちょっと来い」

教室の戸口から田中が顔を覗かせて俺を手招きした。悪い予感がして慌てて廊下に出ると、案の定ウチのクラスのあるロッカーの扉がぐにゃりと凹んでいた。

「ここ、高橋さんのロッカーだろ」

田中が指を差すまでもなく、そこは舞のロッカーで、鍵をしてあるせいか奇妙な形に歪み、ひしゃげた扉の隙間からロッカーの中身が半分近く見えている。あまりにもむごいやり方に顔をしかめた。

「なんてことしやがるんだ」

「とりあえず鍵を開けてもらおう。完全に元通りは無理でも、裏から叩けば何とかなりそうじゃね？」

「そうだな」

舞を呼びに行こうとして目を上げると、戸口に彼女の姿があった。酷く傷ついた表情だ。そりゃそうだろう。狙ったように舞のロッカーだけが壊されたのだ。

「高橋さん、ロッカーの鍵貸して」

一応約束なので「高橋さん」と呼ぶ。菅原たちに知られた今となってはあまり意味もないと思うが。

舞がおずおずと近づいてきて制服のポケットから鍵を取り出した。クラスメイトたちが次々にやって来て舞のロッカーの惨状に同情の声を上げた。

「ちょっと酷くない？　全然関係ないのに、高橋さん、かわいそう」

「壊すなら自分のロッカーにしろっつーの！」

「今度やったらアイツのロッカーを皆で壊してやろうぜ」

そんな中、遠巻きにしているグループからこの場にふさわしくない甲高い笑い声が上がった。振り返るとその発信源である女子と目が合う。

――西こずえ。

俺のほうを見たまま、西は笑顔で隣にいる藤谷にひそひそと話しかけている。本当にムカつく女だ。軽蔑するような眼差しを投げつけてから前を向くと、田中が舞のロッカーの扉を外し、菅原がどこからか金槌を持ってきたところだった。

無情にもチャイムが鳴った。もう二時間目が始まる。クラスメイトはぱらぱらと教室へ戻っていった。

「休み時間終わっちまったな」

菅原が言いながら扉の凹みを金槌で叩いて直し始めた。

「貸せよ。俺がやる」

「おう。……ったく許せねぇな」

珍しく菅原と意見が合った。金槌を差し出した菅原が、ニヤッと笑って空いている手で俺の腕を軽く叩く。

「清水、お前本気なんだな」

「昨日そう言っただろ」

床の上に置いた舞のロッカーの扉を叩きながらそっけなく言った。菅原は鼻で笑う。

「そういえば言ってたな。……悪い、疑ってた」

「お前、感じ悪すぎ」

「マジでごめん。……高橋さんもごめんね」

顔を上げた菅原は真っ直ぐに舞を見た。俺も舞を振り返る。

ぽつんと廊下に立っている舞は、俺と菅原を交互に見て、頭を小さく横に振った。

「あの、もう十分です。今日一日くらい鍵できなくても平気だし、二人とも先生が来る前に教室に入って」

俺と菅原は素直に舞の言葉に従い、立ち上がる。

とりあえずロッカーに扉を取り付けてみると、まだ少し隙間は残るものの、何とか閉まるようにはなった。だが、鍵穴の部分が微妙にずれてしまい、肝心の鍵ができない。

「後は昼休みにやろうぜ」

「そうだな。舞、不便だけどちょっと我慢して」

「はい、大丈夫です」

既に廊下は静まり返っていて、遠くから階段を昇る足音が聞こえてくる。先生が来たようだ。俺たち三人は急いで教室に戻った。

## 27

実は結構動揺していたと思う。

そもそも、男子同士のケンカなんて滅多に起こるものではない。というか、入学以来初めて見た気がする。校内で、休み時間中に、流血事件！

そして田中くんからの報告によると、口から多量の血を流していた男子は前歯が一本折れていたらしい。勿論殴ったほうの拳も負傷。

これは校内で起きた事件なので先生たちの寛大な計らいにより謹慎等は免れたようだけど、相手を負傷させるようなケンカというのは下手をすると犯罪になるとか……。

どうしてそこまで見境なく攻撃的になれるのか、私には不思議でしようがない出来事だった。これは私が女性だからそう思うのだろうか。

しかも最後に私のロッカーを破壊していくという全く意味不明の行為で、私の気持ちは大いに乱れていた。

本当なら菅原くんや田中くんにもっとたくさん感謝の気持ちを伝えなければいけなかったのだと思う。仲がいい訳でもないただのクラスメイトのロッカーが壊されただけなのに、暴力男子に抗議してくれて、更にロッカーの扉も直そうとしてくれて、よく考えてみると彼らの善意はありがたいを通り越して、ありえない出来事だった。

そして菅原くんと清水くんが廊下で話す姿を茫然と見ていた私は、

男子ってこんなに頼もしい存在だったのかと、大げさかもしれないが確かに感動していた。

同時に自分がとてもちっぽけで弱い生き物のような気がして、急に心細くなる。

今まで私はどんなことだって自分一人でやってのける、自分一人で生きていけると信じて実行してきたつもりだった。少なくともこの学園生活は一人でも大丈夫だったのだ、……今までは。

それにしても、これはまさに天災としか言いようがないな、と凹んだロッカーの扉を見て思った。

一体、どうやったらここまで凹ませることができるんだろう。ロッカーの扉もかなりぶ厚く並の力ではびくともしないはずだ。まさか上靴にスパイクがついているはずはないし。

本当に高校生ともなると、男子はあらゆる意味で私たち女子とは全く別の生き物だと実感する。

次の授業が始まったので小さくため息をついて教壇を見た。またテストが返却されるらしい。今度は日本史だ。返ってくる前から憂鬱だった。

昨日といい、今日といい、最近の毎日はそれまでの日常に比べるといろんな出来事がてんこ盛りで、正直なところ私はひどく疲れていた。

しかもテストの結果が案の定悪い。家に帰って両親に報告することを考えると気が遠くなりそうだ。怒った母親の様子が目に浮かぶ。

そして我が家では「なぜこんな点数を取ってしまったのか」検証会議が盛大に行われるのだ。間違った問題一つ一つを「どうしてこれがわからないの？」と尋問されると自信喪失、顔面蒼白、しまいに自暴自棄になること間違いなしだ。

――予備校か。行ってみたいような気もするけど。

母親はたぶん賛成してくれると思うが結局「パパに聞いてみなさい」と言われ、父親から「それで成果が上がるのか？」と問い詰められながらくどくどとお説教をいただく流れを想像すると、自然と大きなため息が出る。

――なんか、ウチって面倒なんだよね。

両親のことが嫌いなわけではない。ものすごく好きなんだけど、融通の利かないところが多いのだ。もう少し緩くてもいいんじゃないかと思う部分はたくさんある。

――友達付き合いを避けたくなるのは、あの二人の影響も多少あるかな。

外泊は絶対禁止だし、友達だけでの遠出も理由がしっかりしていないとダメ。あの風変わりな姉が高校生時代に数度トライしたがことごとく却下。姉のしょんぼりした顔が今でも忘れられない。

――清水くんと一緒に通うって知ったら……反対されるかな？

というか、付き合っていることを両親にはまだ報告していないけど、やっぱり言っておいたほうがいいのか、言わないほうがいいの

か……。

悩みは尽きないが、先生から名前を呼ばれて仕方なくテストを受け取りに行った。日本史は今回のテストの中で割と手応えのあった科目だ。

席に戻るとまた隣のヤツが話しかけてくる。

「どう……だった？」

気を遣われるとますます傷ついた気分になるのはなぜなんだろう。でも先ほどのあんな場面を見せられてしまっては突っ撥ねることもできない。

「さっきよりはマシな点数です」

実際、現代文が酷すぎた。この教科で６０点台というのは自己最低点だった。日本史はかろうじて７０点台をキープしたので、まだ気持ちにゆとりがある。

「そっか。よかった」

何気なく隣を見ると、ニッコリと笑う清水くんと目が合ってドキッとした。廊下で私のロッカーの扉を直してくれた姿が頭をよぎる。

思えば彼にもまだ「ありがとう」と言っていない気がする。菅原くんや田中くんには無理でも、せめて清水くんにはちゃんとお礼を言っておきたいと思った。

「あの、さっきはありがとう」

隣の清水くんはニコニコしたまま小さく頷く。

「どういたしまして。でもあれくらい当たり前だけど」

「当たり前？」

どうして当たり前なのかよくわからず、私は一瞬怪訝な顔をした。すると清水くんが自分のシャープペンシルを手に取って、私の日本史のノートを自分の机の上に引き寄せる。

――舞の悲しむ顔は見たくないから。

さらさらとシャープペンシルが紙の上を走り、綺麗な文字でその言葉は綴られていた。

私は戻ってきた自分のノートを黙って見つめる。何か言いたいけど胸がいっぱいで言葉にならない。

ずっとその愛しい文字を見ていたいと思っていると、ノートがまたズズッと隣の机の上に移動した。

――さっき私語で怒られたから、授業中に話しかけるのは自粛する。

――その代わり、たまにノートにいたずら書きするけどいい？

見た途端、思わず笑みがこぼれてしまい、それを隠すように慌ててうつむく。

少し考えてから彼の綺麗な文字の下に返事を書き込んだ。

――勉強の邪魔にならない程度なら。

それを隣から盗み見た清水くんは頬杖をついてクスッと笑うと、囁くような声で言った。

「ラジャー」

私はまた笑いを噛み殺すのにひどく苦労するが、彼の優しさが嬉しくて、テストの点数が悪いことなどすっかり忘れて、幸せに胸を熱くしていた。

その日、帰宅した私は戻ってきたテストを無言で母親の前に並べ

た。

答案用紙を見る母の顔色がどんどん青ざめていく。

「舞。一体どうしたのよ？」

「これが私の実力なのかも」

母親は険しい顔で私と答案用紙をしきりに見比べた。

「そんなわけないわ。舞は努力家だもの。今回の点数は頑張ってもこれだったって言うなら仕方ない。でも……」

「ママ、私ね、夏休み中予備校に通ってみたいと思うんだけど」

母親の言葉を遮って、思い切って言ってみた。母は眉間の皺を消し、今度は私の顔を穴が開くほど見つめてくる。

「そうね。今まで塾にも行ったことがなかったし、いい経験かもね」

「あと、もう一つお願いがあるの」

私は慌てて付け足した。このタイミングを逃すと言い出しにくくなりそうな気がする。

「なに？」

「ケータイがほしい。……ダメかな？」

「ケータイ……」

母はしばらく複雑な表情で考え込んでいたが、大きく息を吐くと意を決したように言った。

「舞にもそろそろ必要かなと思っていたけど、ママの一存では決めかねるわ。舞からパパに言ってみなさい」

――やっぱり……。

思った通りの返事だった。仕方なく頷いて部屋に上がる。

すぐにノートパソコンの電源ボタンを押すあたり、私は重症だ。でもパソコンのメールじゃもどかしくてもう我慢できない。

彼の姿が見えている間はこんなに不安な気持ちにはならないのに、離れていると心がキリキリと痛み、磨り減っていくような感覚に陥ってしまう。

人を好きになるって、意外と重労働だと思う。特に心がしんどい。

でもやめられない気持ちもわかる。好きな人から愛される。これほど幸せなことが他にあるだろうか。

――そのためなら私は何だってできる。何だって耐えられる。

昂った気持ちのまま、根拠もないのにそんなことを考えたりした。

予備校とケータイの件を父に掛け合ってみたところ、三十分ほどお小言を頂戴したが、案外あっさりと承諾を得ることができた。ものすごく勇気を出して口にしたのだが、父にきちんと理解してもらえてホッとした。何より「舞ももう自分で考えて行動できる年齢だと思っている」と私自身を認めてもらえたのが嬉しい。

しかし翌日、あまりの嬉しさに鼻歌が出そうなウキウキした気分で登校した私を待ち受けていたのは、かなり残酷な現実だった。

学校に到着し、教室へ向かう階段を上っていると、部活動の朝練習を終えたサッカー部の男子が私を追い越して駆け上がっていった。運動部独特の汗のにおいがして一瞬顔をしかめたが、彼らが通り過ぎると何もなかったように階段はシンと静まり返った。

でも階段を上りきった私の耳にこんな声が聞こえてきて、また顔をしかめる。

「おい、なんかこのへん、におわない？」

「そう言われると、なんか臭いな。なんだ、このにおい？」

「何かが腐ったようなにおい？」

ウチのクラスの前でサッカー部の田中くんと菅原くんが二人してしきりに鼻をクンクンさせながら話していた。その様子を遠くから見るとかなり笑えるのだが、私は表情を変えないようにして教室へと向かう。

「ロッカーの中か？」

「……かもな」

近づいていくと二人はますます鼻をひくひくさせてにおいの元を探索していた。その場所を見て私は「あれ？」と思う。

昨日破壊された私のロッカーの扉は、清水くんが昼休みに再度直してくれて、鍵はかかるようになったのだけど、下端に少しだけ隙間が残ってしまった。でもどうにか指が入る程度の隙間なので、ロッカー内のものを盗むことは不可能なはずだ。

ここまで直してもらえたら私は何の文句もない。そう思って昨日は大満足で下校したのだ。

しかし、田中くんと菅原くんは明らかに私のロッカーの前で鼻を寄せ合っている。

「……近いな」

「間違いない。このへんだ」

私が廊下にいることに先に気がついたのは菅原くんだった。

「おはよう、高橋さん」

「お、高橋さん。ちょっとこっち来てよ。なんかここにおわない？」

田中くんはそこが私のロッカー前だと気がついていないような気軽さで、私を手招きした。私が気まずい顔で硬直しているのを、菅原くんは眉をひそめて観察している。

「おはよー。どうしたの、みんな？　私のロッカー、開けたいんだけど」

そこに教室からひょいと顔を覗かせたのは高梨さんだった。ロッカーの順序は出席番号順なので、私の上は高梨さんのロッカーなのだ。

「高梨。お前もちょっとこっち来て、においを嗅いでみろよ」

「におい？」

三つ編みにしたおさげを揺らして高梨さんは廊下にやって来た。今度は三人で鼻をクンクンさせる。

すぐに高梨さんは鼻を指でつまみ、顔を思い切り歪めた。

「うっ……。アニキ、これはにおいますぜ」

「ふざけてる場合じゃねぇよ。お前のロッカーじゃねぇの？」

菅原くんが高梨さんの頭を小突きながら言うと、高梨さんは慌てて自分のロッカーを開ける。

「見たところ、何もない。あるとすれば……最近ジャージを洗っていない、とか」

「お前、持って帰って洗え！　女のクセにどういう神経してるんだ！」

「そんなこと言ったって荷物になるし面倒なんだもん。それに持って帰ったら家に忘れてくるかもしれないしー」

菅原くんと高梨さんが言い合っている間、田中くんはまだ自身の鼻探知機でにおいの元を探っていた。

「いや、高梨じゃねぇな」

やけにきっぱりとした田中くんの声に、私は立ちすくんだまま自分の顔が青ざめていくのがはっきりとわかった。

「私のロッカー、かな？」

言いながら私は三人のもとへ近づいた。そして注目を集める中、鍵を取り出して自分のロッカーを開けてみる。手が震えてすんなりとはいかないが、ガチャリと音がして鍵が外れた。

ポトッ。

扉を手前に引っ張った途端、小さなポリ袋が床に落ちる。

「な、なんだこれ？」

田中くんが真っ先に声を上げた。私たちはポリ袋をじっと見つめる。周囲には刺激的な腐敗臭がかなりの勢いで漂い始めた。

「くっせぇー！　何かが腐ってる！」

私を含めたポリ袋を囲む四人は一斉に鼻をつまんだ。そしてじりじりと後退りする。

登校してきて廊下を通りかかった人だけでなく、騒ぎを聞きつけた野次馬たちが集まり始めた。

「え、イタズラなの？　なにこれ、くっさーい！」

同じクラスの女子グループが教室の戸口でこちらを見ながら冷やかすように大声で言う。

そちらに視線をやると、一瞬、西さんと目が合った。彼女は何食わぬ顔ですぐに教室内に消える。

「どうする？　このままにはしておけないよな」

菅原くんが田中くんに話しかけた。その間にも思わず顔をしかめたくなる腐敗臭は空気を汚染し、クラスの前には人だかりが増え続けている。

私は意を決して片手で鼻をつまんだまま、空いている手でそのポリ袋を拾おうと屈んだ。

だが、つかもうと思った瞬間、別の手がポリ袋に伸びる。

「これ、刺身だな」

私は自分と同じように屈んでいる隣の人物の顔をおそるおそる見た。その間も彼は口が開いたままのポリ袋の中身を探っている。

「昨日の昼に寿司を買って、放課後にでも高橋さんのロッカーにできた隙間から忍び込ませておいたってところか？　わざわざ手の込んだことを……」

呆れたようにも、感心しているようにも受け取れる嘆息を漏らして、彼は身を起こした。拾い上げたポリ袋の口をくるくると捻り、最後にギュッと縛る。

そして周りを見渡した。

「それで何がしたいわけ？」

シーンとなった廊下で誰かが堪え切れないように「プッ」と笑う。

「清水、誰に向かって言ってるんだよ。こんな姑息な手を使うヤツが答えるわけねぇだろ！」

菅原くんだった。

廊下にはまたざわざわとした空気が戻ってきて、清水くんは小さ

くため息をついた。

「ま、そうだけど。でもこんなことしかできないってことは、最初から高橋さんに勝てないと自ら証明しているわけだ」

――え？

私は清水くんを見上げる。彼はこちらを見ると、口角をきゅっと上げて微笑んだ。

「そうだね！　そうだよ！　清水くん、たまにはいいこと言うね！　キミ、実は頭いいんじゃない？」

突然隣から明るい声がして、高梨さんが「ぎゃはは！」と笑う。そして笑っていたかと思うと急に真剣な顔で言った。

「ホント、こんなことするなんてバカみたい！　どんな頭悪いヤツだ、隠れてないで出て来いっつーの！」

彼女は本気で怒っていた。胸に何かがこみ上げてきて、唇を噛んでそれをグッとこらえる。うつむいた私を庇うように、両隣から清水くんと高梨さんがそれぞれ私の肩に手を置いた。

それを契機に野次馬は散り、清水くんはポリ袋を持って立ち去ろうとした。ぼーっとしていた私は慌てて後を追う。

「外のゴミ箱に行くんでしょ？　私が捨ててくる」

チラッと振り返った清水くんは、そのまま何も言わずに前を向き階段を下りる。私もその後をついて行ったが、清水くんの足が速く

て急がなくてはならない。

「あっ！」

足がもつれて、身体が宙に浮いた。何が起こったのかわからない。

空白の時間の後、気がつけば清水くんの腕に抱きとめられていた。

遠くで朝のホームルームが始まるチャイムの音が聞こえる。

「危なかった」

「……うん」

それでも私の頭の中はぼんやりとしていた。これは現実の出来事なのだろうか、と頭の片隅で疑問が湧き起こる。

「少し保健室で休んだら？」

私の顔を覗き込む清水くんの顔が近すぎるが、なぜかドキドキしない。彼がガラス一枚を隔てた向こうの世界にいる人みたいに見えた。

「どこも痛くない」

「無理しなくていいのに」

――無理？　……してないのにな。

そんなふうに見えるのかなと思いながら首を横に振った。今の自分がどんな顔をしているのか、よくわからない。ただ顔の筋肉が強張って笑うのは難しい気がする。

清水くんは私をきちんと立たせると階段の踊り場に落ちているポリ袋を拾い上げ、また階段を下り始めた。今度は私に合わせているのか、ゆっくりと。

「これで完璧にバレたね。たぶん学校中に……」

清水くんの後ろ姿を見ながら、小さくため息をつく。

「なんかもう、どうでもいい。どうせ遅かれ早かれ大変なことになるっていう気はしてたから」

階段を下りきった清水くんは私を振り返った。真面目な顔だ。

「舞、本当に大変なのはこれからだよ」

――これから……。

私の足が勝手に止まる。

「ここで待ってて。走って捨ててくるから。すぐ戻る」

小さく頷いたが、それを見もせずに清水くんは玄関へ走り去った。

何かを考えようと思うが頭が全然働かない。現実に起こっている出来事が、まるで本に描かれている出来事のように実感がないのだ。

もしさっき階段から落ちて、彼が受け止めてくれなかったとしても、痛みなんか感じなかったんじゃないだろうか。

そう思うと突然胸がドキドキした。清水くんの顔が接近しても無反応だったのに、だ。

――試してみようか。

私は階段を踏みしめて上る。

踊り場にたどり着き、振り向いて下を見た。結構な高さがある。

――どうやって落ちてみようか。

――今なら飛び込みみたいに大きくジャンプして頭から落下できるんじゃないだろうか。

そうしたら私はどうなるのだろう。心臓の音が大きくなる。唾を飲むと喉がゴクッと鳴った。

目を閉じて大きく深呼吸する。

思い切って飛び込むポーズを取ったその瞬間、タッタッタッと足

音が聞こえたかと思うと、止まった。

――え……！？

「なに……してるの？」

目を開けると階段の下には、もう我慢できないという様子で盛大に吹き出している清水くんがいた。

「そんなところで、そのポーズ？」

気がつけば、私は中腰でお尻を突き出し、両手を後ろに振り上げ、スキージャンプ競技の踏み切り直前のようなスタイルで踊り場の上に佇んでいたのだ。

「こ、これは……ですね」

「うん」

「め、め、瞑想……？」

「ぶーーーっ！！」

清水くんは本気で笑い転げ、しばらくして目尻の涙を拭いながら階段を上がってきた。

「瞑想ってそんなバリエーションがあったんだ」

「そうですよ。何事も極めると奥が深いんです」

意地になって言い張るが、微妙に語尾が丁寧語になってしまい、口から出まかせを言っていることはバレバレだった。その証拠に清水くんは可笑しくて仕方がないという目をしている。

「……っていうか、危ないよ」

「はい。でも急に母の言葉を思い出しました」

私は階段を上りながら、目を閉じた瞬間頭に浮かんだ言葉を復唱する。

「『人間、死ぬ気になればなんでもできる』って」

「へぇ」

隣の清水くんは感心したように頷いた。それから急に私の腕をつかむ。

「俺の見ていないところで変なこと考えない」

「何も考えてないって！」

瞬間的に突っ撥ねる。清水くんは少し考えるような顔をして、私の腕を解放した。

「そっか。舞は瞑想してたんだっけ？」

私は口を尖らせてしきりに首を縦に振る。だけど心の中ではヒヤッとし、話題を変えようと慌てて思考を巡らしていた。……いや、本気で落ちてみようなんて思ってたわけじゃないんだけど。

でもこの悪魔を騙すのは容易ではない。何か言えば言うほどボロが出そうで怖かった。

そんな私を見越したのか、先に清水くんが口を開く。

「ま、幸いもうすぐ夏休みだし、少しは落ち着くと思うけど」

夏休みという言葉で私は急に思い出した。

「あ、あの、私も予備校に行く！」

隣を歩く人の表情が突然ほころんだ。その笑顔を見た途端、身体中がボッと熱くなる。今まで切れていた電源がいきなりＯＮになったような感覚だ。

「楽しみだなぁ」
「うん。あと、ケータイも買う！」
「え、マジ！？」
「マジです」
ちょうど二階と三階の間にある踊り場に差しかかったところだった。上のほうから、朝のホームルームを終え、一時間目の準備をする生徒たちのざわめきが聞こえてくる。
清水くんは素早く周りを確認して、ギュッと私の両肩を掴んだ。
――え、何する……？
そう思った瞬間、額に何か暖かいものが触れた。慌てておでこを手で押さえ、そのまま彼から数歩離れる。
「なっ……！？」
清水くんはニッコリと微笑むと、何もなかったように先に階段を

上り始めた。

「さすがに校内ではここまでが限度だな」

「え、ちょっ、だっ！」

意味不明の言葉を口走る私を、清水くんは上から見下ろす。いや、ちょっと、だって、校内でもここまでしちゃダメじゃない！？

「大丈夫。誰も見てない」

「そ、そりゃそうだけど。いや、そうじゃなくて！」

彼に近づきながらパニくる頭の中を何とか整理しようと思うが、全然上手くいかない。それどころかふと見上げた清水くんの顔に、私は思わず釘付けになった。

「このことは誰にも内緒」

唇に人差し指を立てて「シーッ」のポーズをすると、ニッと笑う。その蠱惑的な表情に、私の脳は全ての思考活動の放棄を高らかに宣言したのだった。

こうして「腐敗刺身異臭事件」は皮肉にも清水くんと私の距離をほんの少し縮めるきっかけとなったのだが、犯人はそうとも知らずに今もどこかでほくそ笑んでいるかもしれない。

それはそれでかわいそうなことだと思った。

勿論私だって全然ショックを受けなかったというわけではない。

ただ剥き出しの悪意は見るものに憐憫の情を催させる痛々しいものだけど、それ以上でもそれ以下でもない。

それが私を不思議にも悲しくて虚しい気分にさせるのだろう。

しかし、ロッカーが壊されたことも、腐った刺身を入れられたことも、清水くんのおでこにちゅーで全て吹っ飛び、どうでもよくなってしまった。

おそろしや、おでこにちゅー……。

……ってことは、他のところにちゅーなんかしたら大変なことになるよね？　そういえば清水くんも言ってたな、「大変なのはこれからだよ」って……。

あ、あれはそういう意味じゃないか。そうだよね。あはは、何考えているんだろう、私。

いかんいかん。こんな調子で清水くんと一緒に予備校に通ったりして大丈夫なんだろうか？

しっかりしろ、高橋舞！　恋にうつつを抜かしていたら将来を棒に振ってしまうぞ！

でも、もう一回おでこにちゅーしてほしいな、なんて……密かに思っていたりする自分が、ちょっとかわいいなと思ったりして。

そして、はじめて恋をした私の、はじめての夏が始まった――。

〈「ないしょの関係」ＥＮＤ〉

## 28

人生にはいくつかの衝撃的瞬間がある。

私のまだそれほど長いとも言えない人生の中にも既にいくつか、忘れたくても忘れられない瞬間というのはあって、折に触れて思い出し、その衝撃を胸に刻みつけてきた。

それにしても、だ。

目の中にレンズを入れてしまうという、無茶苦茶な視力矯正方法を編み出したのは一体誰なんだろう。確かに眼鏡はフレームがずれるし、視界全部をカバーしてくれないから不便な部分もある。でもコンタクトレンズに比べればはるかに眼球そのものには優しい道具だ。

私は今、このふにゃふにゃのレンズを人差し指に乗せ、鏡の前で躊躇していた。

隣では母が心配そうに私の横顔を見つめている。早くやらなければと思うが、やはり目の中にモノを入れるのが怖い。ものすごく怖いのだ。

私がためらっているのを見かねたのか、優しそうな若い女性店員が装着してくれることになった。

彼女は手馴れたもので、私の目の下をグッと押し下げ、あっという間にレンズを眼球に貼り付けた。その素早さに私は感動する。

コンタクトレンズ入りの両目で自分の顔をまじまじと見つめた。当然だが店内は明るく光に満ち溢れた空間だ。それなのに鏡の前には更にライトがついている。

――わ、私って、こんな顔だった！？

勿論、毎日自分の顔は鏡で見ているのだが、ここまで肌のきめがはっきりと見えるのは久しぶりだった。裸眼だと鏡に激突するくらい近づかないと、肌の表面なんか見えないのだ。

「ずいぶん明るい感じになったわ」

一緒に鏡を覗き込む母の顔も嬉しそうで、私もわがままを言ってよかったと思う。

その後、コンタクトレンズを装用したままケータイを買いに行った。清水くんと一緒に見に行ったあのYデンキだ。

優柔不断な私なのでしばらく迷い、結局清水くんがかわいいと言ったピンクのケータイに決める。私にピンクは似合わないのはよくわかっているが、他のどれもがピンと来なかったのだ。

ついにコンタクトレンズとケータイの同時デビューを果たし、私はずいぶん普通の女子高生に近づいた気がしていた。

「どう？　眼鏡より楽でしょ」

T市の駅前通りを歩きながら母が話しかけてきた。

「うん」

眼鏡とは違って視界を遮るものがないのが、逆に不安なくらいだ。

しかし、私の胸中にはもっと別の、深刻な不安が渦巻いている。

「でも、さっきからみんなが私を見ている気がして……なんか怖い！」

実はコンタクトレンズ店を出てから、すれ違う人全員と目が合う気がして、自分の顔に何かついているのではないかと心配になっていた。

「ずいぶん自意識過剰なのね。大丈夫、誰もアンタを見てない」

母はまともに取り合ってくれなかったが、私は急に全世界の注目を浴びてしまったかのような錯覚さえ起こしている。タレントの皆さんはさぞかし大変な毎日だろうな、と勘違いもいいところの同情さえするほどに。

――眼鏡が合っていなかったのか。

まだバカにしたように笑っている母の隣で、私は突然クリアになった世界を新鮮に思いながら眺めた。

――だから、一番後ろの席になって黒板が見えなかったんだ。

先生の字が小さいのではなく、私の目が悪くなっていたのだ。それで清水くんに板書を読んでもらうようになって、それで……。

席替えをしてから起こった様々な事件を思い出しながら、これから始まる夏休みを小学生みたいな無邪気さで待ち焦がれていた。

一学期の期末考査は散々な結果だったため、それは通知表にも反映されていた。

高校二年の最初からいきなり躓いてしまいショックは大きいけれども、逆に追い込まれたことで私の全身にはやる気がみなぎっている。

予備校に通うのも、密かにわくわくしていた。

よく「勉強が好きな人間はいない」みたいなことを言う先生がいるが、それはちょっと違うと思う。そういうときに使う「勉強」はたぶん嫌々やらなければならない「勉強」で、本来の勉強は嫌々やるものではないはずだ。

しかし今学校で学んでいることの中には、どうやっても興味がわかないものもある。興味のあることだけ勉強できたら、嫌々やるなんてことはなくなって、成績もどんどんよくなるのではないか？

――とはいえ、やっぱり「興味のあることだけ」っていうのはよくないのかな。

私は膝の上の鞄から、そっと夏期講習のテキストを取り出した。数学と表紙に大きく書いてある。それを見ただけで「うっ」と何かが喉に詰まるような感覚に襲われた。

パラパラとめくってみると、不安な気持ちがどんどん広がっていく。

しかも不安なのは講義を理解できるかということだけじゃない。なんと、数学は二人別々の講座を受講するのだ。

――はぁ……。

予備校に誘ってくれたのは嬉しかったけど、これは全く計算外だった。いや、考えてみれば当然だ。私と清水くんではレベルが違う。数学はそれが顕著だから仕方のないことなのだ。

電車が乗り換え駅に到着し、ホームを移動する。

私の住む小さな田舎町は鉄道路線の分岐点で、昔は鉄道の町として栄えていた。なぜ今は栄えていないのかというと、エネルギー資源需要が石炭から石油に取って代わったことが一番の原因らしい。

炭鉱から石炭を各地に運ぶため、昔は長い貨物列車が踏み切りを塞いでいたそうだが、今は貨物列車を見かけることが稀なくらいだ。

私自身はその「昔」のことは知らない。

ただ昔の名残でこの小さな駅に特急列車が停まり、意外と交通の便がいい。県内最大のS市にも近いのだ。これがちょっとした自慢だったりする。

ホームに立っていると、T市始発の電車がやって来て、たくさんの乗客が降りた。ほとんどがS市への快速列車へ乗り換える人だ。

「舞！」

突然狭いホームは多くの人でごった返し、焦ってキョロキョロする私を清水くんが先に見つけてくれた。

「こんなところで眼鏡もしないで突っ立っていたら、俺を見つけられるわけないって！」

清水くんは非難するような声を出す。

私は黙って彼の顔を見つめた。

「……何？」

業を煮やしたのか、清水くんは怪訝な顔で私に問いかける。

「見えてるよ」

「はい？」

「よく見えてます。清水くんの顔も、向こう側のホームにある看板の文字も……」

途端に目の前の彼は驚いた顔で私を見下ろした。

「それって、もしかしてコンタクト？」

「正確に言うなら、一日で使い捨てるコンタクトレンズを装用しています」

清水くんの驚き顔が、納得顔に変わり、「へぇ」という感嘆が漏れた。

「じゃあもう眼鏡はかけないの？」

「そういうわけじゃないけど」

それはまだ迷っていることだった。

予備校に通う間は眼鏡をやめてみようと思っているのだけど、学校にもコンタクトで通う勇気が実はまだない。眼鏡の自分は居心地がいいのだ。コンタクトはとても楽だけど、どうも気持ちが落ち着かない。

清水くんは私の横に並んだ。Tシャツとジーンズ姿なのだが、制服以外の私服は見慣れないこともあってちょっとドキッとした。

「俺は最近、眼鏡の舞がいいなって思ってた」

「え！？」

さすがに私は驚いた。

「どこが？」

「うーん、説明はできない」

隣で清水くんは首を傾げていた。

コンタクトレンズ姿を褒めてもらえなかった私は、こっそり口を尖らせる。同時に喜んでもらえると思って、ウキウキしていた自分がバカみたいで恥ずかしくなった。

「そうですか」

肩を落として背を小さく丸めた。やはり、自分に似合わないことはすべきじゃない。悲しい気持ちのまま、ホームに滑り込んできた快速列車に乗り込んだ。

初めて予備校の中に足を踏み入れた私は、見るもの見るもの全てが新鮮で、しばらく目を見開いたままだった。レンズが乾いてしまい、慌てて瞬きすると目が痛む。

教室の前で清水くんと別れた。

さっきの「眼鏡の舞がいい」発言で、私は自然に彼を避けるような態度を取ってしまっていた。

だけどいざ一人になると心細い気持ちが胸を占め、すっかり反省モードになる。

「隣、いい？」

急にテーブルの上にドサッと鞄が置かれた。見ると隣に眼鏡をかけた背の低い男子がいた。

「は、はい」

周りを見ると、もうほとんどの席が埋まっている。座席数に余裕がないらしく、その男子は仕方なく私の隣に決めた、という感じだった。

彼が席に座って落ち着いた頃に数学の講師がやって来た。ちょっと神経質そうな細身の先生だったが、話し始めると急に印象が変わる。学校の先生とは一味違う話し方に、私はどんどん引き込まれていった。

学校の授業とは違い、一講座は９０分と長い。にもかかわらず、講師の巧みな話術であっという間の９０分だった。

予備校は問題の解き方をメインに授業が進む。しかも講師の話が面白い。そして受講生は皆真剣だ。

私には何もかもが刺激的で、とにかく一生懸命先生の話を聞き、ノートを取った。

終わった途端、受講生はみんな出口へと殺到する。私はのろのろとテキストや筆記道具を鞄にしまい、教室を後にした。

キョロキョロしながら玄関に向かうが清水くんの姿が見当たらない。

仕方がないのでとりあえずトイレで用を済ませて、もう一度玄関のほうへと戻ろうとした。

「ねぇねぇ、一緒にご飯食べに行かなーい？」

近くで、甘ったるい鼻にかかった声がした。トイレは人通りの少ない廊下の先にあるので、廊下の話し声が反響してよく聞こえるのだろう。

「いや、連れがいるから無理」

返事を聞いて私は思わず立ち止まった。

――清水くん！？

背中に氷が滑り込んだかのように心の中がヒヤッとした。

「えー友達？　ユウも一緒に行きたーい」

「彼女と一緒だから無理」

胸焼けを起こしそうな猫なで声に心の中がムカムカしたが、清水くんのそっけない声が聞こえた途端、私の顔にひそかな笑みが浮かんだ。

――彼女！

この優越感は半端じゃない。それは私のことだ、と叫びたいほどだが、ここは我慢してこっそり廊下を窺った。

――な、なんじゃ！　あの女！！

目に飛び込んできたのは、清水くんの後ろ姿とその腕に巻きついたミニスカートの女子。

隙間なくぴったりとくっついた二人の影はすぐに廊下を曲がって見えなくなった。

私は慌てて廊下を走る。

ロビーの手前で速度を落とし、深呼吸してゆっくり歩き出した。

「舞、こっち」

清水くんが軽く手を上げて私を呼んだ。周りの視線が自分に集まっている気がして、緊張しながら彼の元へ近づいた。彼の隣にはミニスカートの女子が済ました顔で立っている。

私はその女子を見ないようにしていたが、彼女はわざわざ一歩前に出てきて私の視界に無理矢理入ってきた。

「はるくんの彼女？」

正確な発音は「かのじょお～？」と尻上がりに伸ばす。とても私には真似できない話し方だ。

仕方なくミニスカートの女子に向き合った。メイクを施した目元がキラキラと輝いて見え、私とは正反対の、いかにもおしゃれを頑張っている女の子だ。

「はるくんって、こういう子が好きなんだ？」

上から下までじろじろと遠慮なく私を見回すと、彼女はふぅとため息をついた。

「なんかがっかり～」

「お前、もうどっか行け。じゃあな」

「いやぁん！　ユウ、一人になっちゃうー。どうしたらいいのー？」

清水くんはそれに答えず私の腕を掴んでユウに背を向けた。
が、すぐに立ち止まる。私は目を上げて「あっ！」と短く叫んだ。

「舞の彼氏？」

スラリと背が高い男の人が玄関の前に立ちはだかっている。目鼻立ちの整った顔で、とりわけ男性にしては目が大きい。

「諒一兄ちゃん」

私がそう呼びかけると、私の従兄である高橋諒一（たかはしりょういち）は口元に笑みを浮かべた。

清水くんは驚いて立ちすくんだままだ。

諒一兄ちゃんは清水くんをじっと見つめて、またフッと笑う。

「なんかがっかり」

――ちょ、ちょっと、いきなり……どういうこと！？

動揺した私は、諒一兄ちゃんと清水くんを見比べるために、カッと見開いた眼球を三往復させた。

「そっちこそ、誰？」

清水くんの声はとげとげしい。なんだかわからないけどマズい展開になっている。

「あ、あのね、こちらは、えっと……」

慌てて説明しようとする私の頭上にポンと優しく大きな手が置かれた。

「舞の従兄の高橋諒一です。よろしく」

「清水暖人です」

よろしくとは言わないあたり、清水くんは絶対「よろしくしてもらう気はない」と思っているだろう、などとどうでもいいことを一瞬考えてしまって、プッと笑いたくなる。

しかし笑う暇はなかった。

「舞が予備校の夏期講習を受けるって聞いたから、お昼一緒に食べようかなと思って来たんだけど、友達が一緒だったんだね」

――今、「友達」をめっちゃ強調したよね？

心の中で密かに突っ込むのとほぼ同時に清水くんが口を開いた。

「友達じゃなくて、舞は俺の彼女ですから」

――うわあぁぁぁ！

――「俺の彼女」って……。

――ひぇーーー！！

チラッと隣に立つ清水くんの顔を見てみると、いつもより眼光が鋭く、頬はこれまで見たこともないくらいに緊張していた。途端に私の浮ついた心はぴしゃりと凹まされる。

「どっちでもいいよ」

諒一兄ちゃんは余裕の空気を漂わせて私たちに背を向けた。

「お昼、おごるよ。二人とも、ついて来て」

――え、え、えええええ！？

私と清水くんの反応など気にせず、さっさと玄関を出て行く諒一

兄ちゃんの背中を茫然と見つめる。「二人とも」ということは、私と清水くんと諒一兄ちゃんでお昼ご飯を食べるわけ？

――ひぃ！

最初から険悪としか言いようのない雰囲気なのに、まともにご飯なんか食べられるのだろうか。胸がドキドキして背中に嫌な汗をかいていた。

腕を引っ張られて我に返る。清水くんはしかめ面のまま諒一兄ちゃんの後を追った。私も引き摺られるように玄関を出た。

何気なく後ろを振り返ると、ミニスカートのユウがあっけに取られたのか、だらしなく口をポカンと開けてさっきと同じ場所に佇んでいた。

## 29

運命、なんてものが本当にあるとしたら、それを決めているのは誰なんだろう？

生きていると、いくらあがいても自分ではどうしようもない出来事は案外多発する。

そもそも俺たちがこの世に生まれてくる際、自分自身で親を選ぶことはできない。出発点からそうなのだから、運命としか言いようのない出来事が起きるのは仕方がないのかもしれない。

しかし、今、俺は運命というヤツをこれ以上ないくらい激しく恨んでいた。

俺の前を歩く目障りなでかい男。認めたくはないが、腰の位置が高くスタイルがいい。しかも短く刈り込んだ髪型で、これは頭の形がきれいでなければダサくなるスタイルだ。

――コイツ、絶対自分に自信持ってやがるな。

というのが、舞の従兄だとかいう高橋諒一の初見の印象。「何、カッコつけてんだ」と言ってやりたいが、負け犬の遠吠えに聞こえそうだから、心の中で毒づくだけに留めておく。

それにたぶんこの男は小さい頃から群を抜く容姿だったはずだ。それが無性に面白くない。

だが、今ここで何か言えば、その不愉快な感情が爆発しそうで、

俺は意地になって黙っていた。

舞の腕を少し乱暴に掴んだまま、諒一の背中を追った。舞は困ったようにおどおどしながら俺の後ろをとぼとぼと歩く。

それにしても、こんなところでこんなヤツが登場するとは全くの計算外だった。

それでなくても今朝、眼鏡をかけていない舞を見て、俺はかなり苛立っていた。正直に言うと、ぼんやりとした顔でホームに突っ立っている舞はものすごく心惹かれる姿で、たぶん男ならほとんどのヤツが目を留めてしまうだろう。

伏し目がちにしていても大きな目、形のよい顔のパーツ、そして全体的に色白なのに頬だけ少し赤い。

顔だけでも十分目立つと思うが、何より今は夏。彼女は意外にも胸が大きいのだ。……意外なんていうと失礼かもしれないけど。

そして今日のTシャツは身体にフィットするデザインなのか、どうもまずそこに目が行ってしまう。

――ま、男がみんな女性の胸に興味があるとは限らないけど。

いやいや、そんな悠長なことは言ってられない。実際予備校では舞を見る男の目が気になって仕方がなかった。「見るな！」と一喝

したいところだが、そんなことをする俺自身を想像してげんなりする。

だから市村由布（いちむらゆう）がまとわりついてきたのも、うるさいと思いつつ、実はほとんど上の空だった。

いいや、それは嘘かもしれない。

由布を無下に扱わないことでモテる俺を演出したかったというのが本音だろうか。目の前がよく見えていないというのはこういう状況だろう。

そんな俺の気持ちなど露ほども知らない舞が、青白い顔で玄関ロビーに姿を現したとき、愚かなことに俺はほんの少し満たされた気持ちになった。しかも面白いように由布が舞を挑発する。バカな俺はこのシチュエーションを観客のような気分で楽しんでいた。

そこにこの男が登場したというわけだ。

俺は諒一の背中を見て、もう何度目かもわからない嘆息を漏らす。

――こういうのを天罰っていうのか？

歩いているうちに苛立ちはだんだんと影を潜め、自分自身の浅はかな行動の痛々しさが胸に突き刺さる。自然と舞の腕を掴む手から力が抜けていった。

しばらく小道を歩き、駅前の大通りまで出ると、諒一はS市最大のデパートに入った。勿論俺と舞もその後を追う。

いくつかの香水が混じり合った独特な匂いの売り場を通り過ぎ、エレベーターの前に来てようやく諒一が足を止めた。

「ブッフェレストランでいい？」

「うん！」

俺たちを振り返った諒一は真っ先に舞を見た。舞も「待ってました」とばかりに普段の数倍愛想良く返事をする。俺は思わず目を背けた。

奢ってもらうのだから俺たちに文句を言う権利などあるわけもなく、ブッフェレストランにそれぞれが腰を落ち着けたのは、予備校を出てから約三十分後だった。

俺と舞が並んで座り、その向かい側に諒一が陣取っている。

「二人はいつから付き合ってるの？」

諒一は舞と俺を見比べて言った。

舞が急に肩をビクッと震わせて背筋を伸ばす。何かやましいことでもありそうな動作に、俺までビクッとした。

「えっと、一ヶ月前くらい……かな」

「ふーん」

その「ふーん」は「まだそんなもんか」というニュアンスがありありと感じられる嫌味な調子で、俺の眉が勝手にピクッと反応する。

「まだ一ヶ月ですが何か？」

俺は自虐的な笑みを浮かべて諒一に言い放った。向かい側の男は愉快そうな笑顔を見せる。

「別に。じゃあ、今が一番いいときだね」

「い、いや、そんなんじゃないよね？」

舞がおそるおそるこちらを見た。俺はじろりと睨み返す。それから諒一を正面から見据えた。

「諒一さん、でしたっけ？」

「はい？」

「それって恋愛は付き合い始めが一番楽しくて、後は惰性だって言いたいんですか？」

「一般的にはそうじゃない？　恋が終わるのは、自分の遺伝子を少しでも多くこの世に残すための本能的な作用だからね」

涼しい顔で諒一は言った。

この男のムカつくところは態度にゆとりを感じさせる部分だろう。ゆとりといっても「ゆとり教育」のゆとりではない。コイツは意図的に自分の知性を相手に知らしめるような喋り方をしている。

「なるほど。諒一さんは本能だから仕方ないと、多くの女性を泣か

せてきたわけですね」

「それは君のほうじゃないの？　さっきの状況は誰がどう見たって、一瞬でそう理解すると思うけど」

――うっ、コイツ……！

隣でガチャっと少し大きな音がした。舞が指を滑らせて大きくて重いスプーンを皿の上に落として慌てている。

「あ、ごめん。続きをどうぞ」

つらっとした顔で舞はそう言った。

俺はもう一度舞を睨む。

――ていうか、舞はどっちの味方？

助け舟かと思ったら、舞には全くそういう気はないらしく、俺はかなりがっかりしていた。

そんな俺たちの様子を見て、諒一がフッと笑い、水を飲む。本当に何もかもがムカつく男だ。

「あれは中学の同級生で、元カノでも何でもないですよ」

市村由布のことをこんなところで弁明しなければならなくなるとは、と思いながらため息混じりに言った。

舞の手が一瞬止まる。だが、何も言わずコップに手を伸ばした。

その様子を観察していた諒一が、少し首を傾げて口を開く。

「でも仲が良さそうだったよね。彼女の目の前で他の子と誤解されるような態度を取るのは、どうかと思うけど」

「説教ですか？」

つい我慢しきれず、俺は諒一から売られたケンカを買ってしまった。

「向こうが勝手に絡んできただけで、仲良くなんかないですし、俺と舞のことを諒一さんにとやかく言われたくないですね」

できる限り丁寧な言葉遣いを心がける。ここは冷静さを失ったほうが負けだ。

さすがに諒一の顔から笑みが消えた。笑みどころか感情の全てが消え、その顔の秀麗さだけが際立って、迂闊にも俺ですら諒一に見とれてしまった。

少しすると、向かい側から真っ直ぐな視線が俺に向かってくる。

「そうだね。でも舞のことなら黙ってはいられない」

「な、何言ってんの！？　何の話してるのか、私には全然わかんないんだけど！」

突然、舞がへらへらと笑いながら割り込んできた。俺と諒一の顔をわざとらしく覗き込んでくる。

――やっぱり、この男……。

俺も諒一も舞のことなど無視して、お互い睨み合ったままだ。

急に諒一が舞に微笑みかけた。それはもう愛しくてたまらないような優しい目つきだったから、見ていた俺は不愉快極まりない。

「舞、向こうに本屋があるよ。少し見てきたら？」

最高に穏やかな声音だ。気持ち悪い、と俺は心の中で毒づく。

舞はしばらく固まっていたが、俺と諒一を見比べて「でも」と小さな声で反論した。

「彼と少し話をしたいんだ。舞はいないほうがいい」

諒一はきっぱりとした口調で言い切った。

途端に舞は腰を浮かせて、「じゃ、じゃあ本屋にいるね」と逃げるようにレストランを出て行った。

その姿を名残惜しそうに眺めていた諒一は、レストランの出入り口を見たまま、つぶやくように言う。

「今日の舞を見て驚いたよ。あの子がコンタクトレンズをするなんて、舞は本当に君を好きなんだね」

――え……？

俺は空になった自分の皿を見つめていた。胸がズキッと痛む。

なんだろう、この嫌な感じは。ものすごく悪い予感がする。

諒一が俺に何を言い出そうとしているのかわからないが、とにかく胸がざわざわとして落ち着かない。

「まだ付き合って一ヶ月なら、舞のことは何も知らないんだろ？」

俺の気持ちを見透かしているのか、バカにしたような言い方だった。

「でも高校ではずっと同じクラスで……」

俺は精一杯食い下がる。そうまで言われて黙ってはいられなかったのだ。

「だけど舞は目立たない地味な暗い女の子だ。舞のほうから君のよ

うな男を好きになるとは、とても信じられない。からかっているなら、今すぐやめてくれないか」

諒一は真摯な態度で、俺を真っ直ぐに見つめる。すぐに言い返したいが、何かが喉の奥に引っかかって言葉が出てこない。

この男が舞の従兄でなければ「アンタに関係ない」と一蹴できるところだが、俺は諒一より舞のことを知らないという引け目のせいか、強い態度で反撃することができないでいた。

「君にはもっと君に合った相手がいるはずだ。軽い気持ちで舞を傷つけるのはやめてくれ」

「傷つけてなんか……」

「そうか？　舞は君のために変わろうとしている。それだけで十分舞に負担を強いているのに、君は何も気がついていない」

徐々に激しくなる諒一の口調に、俺は眉をひそめた。

「舞が変わろうとするのを、いけないことだと言うんですか？」

諒一は両肘をテーブルの上について手を組んだ。そして深いため息をつく。

「舞のことを何も知らないんだろ？」

先程と同じ言葉をまた繰り返した。

俺は迷ったが、このまま「何も知らない軽い男」と思われているのも癪だから、思い切って告白する。

「俺、小学生のとき、舞に会っているんです」

「いつ？」

諒一は急に身を乗り出した。俺は首を傾げながら少し身を引く。

「確か小学一年生。まだ眼鏡もかけていなくて……」

「舞はそのときのこと、覚えていた？」

心臓がドキッと飛び跳ねた気がした。口を開いたまま、答えに詰まる。教師に当てられても正解の見当がつかない場合、こんな気持ちになるのだろうか。

「覚えているわけがないよな」

冷酷な視線が俺に突き刺さった。

――この男は俺の知らない何かを知っている。

本能的にそう直感していた。とりあえず生ぬるい水を飲んで、乾いた喉を潤す。

「確認したことはないです。舞は覚えてなさそうだし、ぶっちゃけ俺だって何をして遊んだかなんて、ほとんど忘れているし」

諒一が俺に同情するような笑みを浮かべた。こっちは自然と目つきが鋭くなる。

「君は不思議に思わなかった？　小さい頃はもっとかわいかったのに、って」

「それは……」

――コイツ、何を知っているって言うんだ？

口ごもった俺を、諒一は憐れむような目で見つめてきた。正直なところ、喉から手が出るほどその謎の答えが知りたいと思う。

だが、俺のほうから「教えてくれ」とは口が裂けても言いたくなかった。

「だけど今の俺は、分厚い眼鏡をかけていて、目立たなくて地味な舞がいいって思ってます」

自分が軽い男に見えるのは嫌というほどわかっている。それにい

くら「舞のことは本気です」と言ったところで、それを証明するものは何もない。

結局俺に言えることは、これくらいしかないのだ。それだって軽くあしらわれて終わりだろうけど。

小さくため息をついて諒一を見ると、意外にも頬杖をついて難しい顔をしていた。

「その言葉を簡単に信じるのは無理だけど、君のために無理をする舞を見るのも辛い」

「無理？」

俺は思い切り眉をひそめた。

そういえばさっきも諒一は舞が変わろうとすることに対し「負担」だと言っていた。普通、人が努力して自分を変えようとすることをそんなふうには言わないものだ。

向かいに座る男は背もたれに寄りかかって、長い足を見せびらかすように組んだ。

「自己紹介が遅くなったけど、俺は大学生で、大学では自動車事故防止システムを研究している」

「へぇ」

なぜ急にそんなことを言い出したのかわからないが、俺はとりあえず相槌を打つ。

「自動車事故は日本中、いや世界中のどこでも起こりうるのに、それを防止しようとする取り組みは不十分だと思わないか？」

「そうですね」

真面目な顔の諒一を半信半疑で見返した。言っていることはもっともだと思うが、それと舞の変化がどうこうという話との間に共通点が見出せない。

諒一は目を伏せて眉根を寄せた。苦しそうな表情だった。

「今から五年前、ある家族が乗った車が、若い男の運転する車と正面衝突した。突っ込んで来た若い男の車は大破し、男は即死だった。一方、事故に巻き込まれた家族の乗った車もぐちゃぐちゃに潰れ、特に助手席は酷い有様だった。だが、奇跡的にその家族は全員一命を取り留めた」

ニュースの記事を読み上げるように淡々と語られる言葉たちが、俺の脳内で凄惨な事故現場の様子を想起させた。無意識に唾を飲み込む。その先を聞くのが怖かった。

「まさか……」

向かい側の諒一はどこか遠くを見ている。

「その家族の中で一番重症だったのは助手席に乗っていた母親だった。運転していたのは父親で、後部座席にはその娘が二人。母親は衝突した弾みに車外に投げ出され、特に頭部の損傷が酷かった。目撃した人によると、顔は誰か判別ができないくらい酷い状態だった

そうだ。そして家族の中で一番軽症だったのは運転席の後ろに座っていた下の娘だった」

俺は身動きすることもできず、ただ黙って諒一の言葉を聞いていた。まるで全身が時限爆弾になったかのように感じる。唯一規則正しい心臓の音が、不吉な出来事をカウントダウンしている気がするのだ。

諒一は俺の目を見て言った。

「事故に遭ったのは、舞の家族だよ」

――そんな……！

今、聞いたことは既に過去の出来事だというのに、俺の脳の中ではその内容をなかなか信じようとしなかった。信じられないというよりは、信じたくなかったのだ。

しかし、諒一の態度は作り話を語っているようには見えない。やはり本当のことなのだと、俺は渋々受け入れる。

諒一は小さくため息をついて、それから続けた。

「舞は事故の直後もはっきりと意識があったそうだ。酷く負傷した家族の姿を見て、正気を失ったように泣き叫び、到着した救急隊員に自分はいいから家族を助けてくれと懇願していたという。家族は

全員別々の病院に搬送され、まだ小学生だった舞の元には伯母である俺の母親が付き添った」

その後、諒一は独り言のように力ない声で付け足した。

「何しろ舞の家族は、俺の家に遊びに来た帰りに事故に遭ったんだ。あと五分引き止めていれば、と今でも思う」

なんというむごい運命だろうか。

そのときの舞の気持ちを考えると胸が張り裂けそうに痛む。

俺は一瞬だけ自分の家族が同じような目に遭うことを想像してみたが、すぐにギブアップした。

「それで舞は？」

「事故から数日後、小学校の担任が見舞いに来たが、舞の反応が鈍く、俺の母親が最初に『何かおかしい』と気がついた。担任が帰った後、舞は『あの人、誰？』と言ったそうだ。そして『何が大変だったの？』と不思議そうに聞いてきた。自分が事故に遭ったことは彼女の記憶から抜け落ち、なぜか親族以外の人間のことをすっかり忘れてしまっていた」

――記憶障害……

諒一が「覚えているわけがない」と断言するのは当然だ。

舞の場合、部分的な記憶喪失のようだが、単に忘れてしまったというレベルで考えていた俺には十分すぎるほどのショックだった。

それからの舞は、再び学校に通学できるようになったものの、友達と上手く交流することができず、ひたすら本を読んで過ごすようになったらしい。

おそらく友達の側も舞にどう接してよいのかわからなかったのだろう。小学六年生の頃であれば、既に多感な時期にさしかかっていて人間関係は難しくなっていたはずだ。転校生だってすんなり馴染むのは難しいというのに……。

それでも舞は真面目な性格のせいか、学校にはきちんと通い続けていたようだ。

「だけど舞は自分が交通事故に遭い、記憶障害があるということを今でも知らないんですよね？」

俺は一通り話し終えた諒一に問う。

「舞の家族は彼女が事故直後の記憶を失ったことには意味があると思っている。なかったこととして生活するほうが精神的な負担は少ないだろう。俺もよくわからないが、今まで舞の中で矛盾が生じて混乱するようなことはなかったみたいだな。だから無理に思い出させる必要はない、と彼女の両親は思っている」

勿論俺もだ、と諒一は付け足した。

――それでコイツは舞が変わることを負担だと言ったのか。

今、振り返ってみると、舞は自分の生活を変えることに抵抗感を持っていた。イメチェンしてみたら、という英理子の言葉に、きっぱり「できません」と反応した舞の声音が思い出される。あのときの舞は無意識のうちに自己防衛本能を働かせていたのかもしれない。

俺はうつむいて唇を噛んだ。

それ以外に何ができるというのか。

頭の中は落雷を受けたかのようなショック状態が続いていた。

「君のどこに魅力があるのか俺には全くわからないけど、君が舞を苦しめる存在だとわかったときには容赦しない。覚えておけ」

そう言い捨てて諒一は腰を浮かせた。俺は反射的に顔を上げる。

「ただの従兄にしてはずいぶん舞に入れ込んでいるんですね」

「悪いか？」

俺の嫌味など歯牙にもかけず、立ち上がった諒一は俺を見下すような目をして微笑んだ。

――コイツ、本気だ……。

去っていく諒一の背中が、先ほどより何倍も大きく見えた。

最後に見た彼の笑みが、俺の中の傲慢さを完膚なきまでに叩きのめし、つぶれた胸に錘(おもり)のようにのしかかってくる。

コップに手を伸ばすと、水はひと口分しか残っていなかった。それを喉に流し込むが、ぬるい水はただ不味いだけで、喉の渇きは癒えるどころかますます酷くなる。

心の中ではまだ何の結論も出ていないが、俺はとりあえず立ち上がり、舞が待つ本屋へ向かってのろのろと歩き始めた。

## 30

妙なことになった。

私の予備校デビューがこんな複雑なことになるとは思いも寄らなかったのだ。

顔を上げて正面を見ると、おしゃれな黒縁眼鏡をかけた美声の男性講師が英作文の講義を行っている。ジャケット、シャツ、ネクタイ、ズボン……そのセンスのよい組み合わせが大人の余裕を醸し出していた。

なんでも女子にものすごく人気のある講師らしい。私としては顎が少ししゃくれ気味なのが気になるけど。

しかし、低音の滑らかな声質で英文を話すとこんなに心地よく聞こえるものだろうか。

あの声だけで「ステキ！」と目がハートになってしまう女の子もいそうだ。

――はぁ……。

知らず知らずため息が漏れる。

これが壇上にいる松岡先生に恋焦がれるため息だったらよかったのだけど、そうではない。

自分の右隣にチラッと目線を走らせた。

隣には清水くん。この人は真面目な顔をしていても綺麗な顔だ。綺麗というか目立つというか。とにかく印象的な顔立ちだ。

この人の顔がほんの少しでも視界に入ると、私の意識はほぼ自動的に彼へと引きつけられてしまう。

――私、清水くんの顔が好きなのかな？

確かに彼の顔は好きだと思う。いつまでも見ていたいと思うのだから、好き以外の何物でもないはずだ。

――顔だけ好きなのかな？

正直なところ、よくわからない。いや、わからなくなった、と言うべきか。

清水くんの向こう側には女子が座っている。そう、あのミニスカートを履いた、やたらと目力を強調しているユウだ。

清水くんとは中学の同級生だというが、ただの同級生がこんなふうにべったりとくっついているものだろうか。

少なくとも私は、付き合っている男女以外でこれほどまでにベタベタしている二人組を見たことがない。

ユウはしきりに清水くんの耳元に何かを囁いている。私には聞こえないし、私自身も興味がない。でもとても嫌な光景だ。

――これってなんなんだろう。

もう一度、清水くんの顔を見る。

彼は微動だにせず、ただじっと黒板を眺めていた。たぶん午後の講義が始まってからずっと同じ姿勢で、ほとんど身動きしていない。

私は彼から目を逸らすと、板書に専念した。

コンタクトレンズを装用しよく見えるようになったから、清水くんに手伝ってもらう必要がなくなったのだ。

これで授業に集中できるというものだ。

それでも何か清水くんの態度にはひっかかるものがあって、私はノートに英文を書き込みながらまた小さくため息をついた。

清水くんの様子が変だと気がついたのは、諒一兄ちゃんとご飯を食べた後からだ。

本屋に現れたのは清水くん一人で、諒一兄ちゃんは先に帰ってしまったらしい。迎えに来てくれた清水くんも暗い顔をしていて、ほとんど喋らない。清水くんと諒一兄ちゃんが二人で何を話したのか、聞きたくても聞けない状態だった。

もしかすると、清水くんはユウの話など聞いていないのかもしれない。それくらい彼は深刻そうな顔で黙りこくっている。

――うーん……。

本当に妙なことになった。

それにしても諒一兄ちゃんは何をしに来たのだろう。母がチズ子伯母さんに電話していたので、伯母さんから頼まれて……？

いや、そんな感じはしなかった。伯母さんの話が全然出なかったし。

しかも諒一兄ちゃんは清水くんをよく思っていないみたいだ。

どうしてだろう。清水くんはモテるくせに、なぜか表面的には敵が少ない人だ。男子の友達も多い。初対面の諒一兄ちゃんが彼を嫌う理由が思いつかない。

――それに男二人で何を話していたんだろう？

この清水くんを黙らせるくらいだから、相当破壊力のある話だったに違いない。でも初対面の二人に共通する話題といったら、この私に関することくらいじゃないだろうか。

私を追い出して話すくらいだから私の悪口だったりして。

――でも諒一兄ちゃんはそういう人じゃないな。

私の知る限り、高橋諒一という人はユーモアもあるけれども基本的にはものすごく真面目だ。

高校時代から弓道部で活躍し、その腕前を買われてあのＫＯ大学の関係者からスカウトされたにもかかわらず、それを蹴って自分のやりたい研究のできる大学に入ったという逸話の持ち主でもある。

そして諒一兄ちゃんはいつも私のよき理解者だった。

親戚の中で大好きな本のことを語り合えるのは彼しかいない。不思議と好きな作家の傾向が似ていて、諒一兄ちゃんと物語についてあれこれと話すのが私の楽しみの一つでもあった。

先生の独特な喋り方に慣れてきて、ようやく授業にも集中できた頃、あっけなく終わりのベルが鳴った。やはり学校の授業と違って、エッセンスが凝縮されているのか９０分という長さがさほど苦にならない。

予備校に通うことにしてよかったな、と思いながら清水くんを見ると、ユウに思い切り睨まれた。

「はるくんの彼女さん」

へ？　……私のこと？

私はきょとんとしてユウの顔をまじまじと見つめる。

「高橋さん、だよ」

横から清水くんの面倒くさそうな声がした。

「ふーん、高橋さんね。はるくんと同じ学校なの？」

「そう……です」

「ふーん。サヤカさんのほうが断然おしゃれでかわいかったのに、ずいぶんレベル下げちゃったのね」

ユウは得意げに言った。

――サヤカ……さん？

――おしゃれで……かわいい……

いつのまにか教室の中は静かになっていた。ハッとして辺りを見回すと私たち三人しか残っていない。

「市村、余計なこと言うな」

清水くんの声は静かだが怒気を含んでいた。「市村」と呼ばれたユウは目を見張る。

「本当のことを言って何が悪いのよ」

「お前の友達いない理由はそれだ」

ため息混じりにそう言うと、清水くんは私の手を取った。

「言っていいことと悪いことがあるだろ。他人にモノを言うときは、

もっとよく考えてから口にしろよ」

「何よ、はるくんまで私が悪いって言うの？」

ユウは清水くんの背中に言葉を投げつけた。その苦し紛れのセリフに私は思わず立ち止まる。

「別に。これ以上お前の相手をしてる暇はない。じゃあな」

そっけなく言い放つと清水くんはユウを置いて教室を出た。ズンズンと廊下を進む。手を引っ張られて私も同じように廊下を小走りで過ぎる。

「あの、市村さんって友達いないの？」

予備校の玄関を出て、辺りに人がいないことを確かめてから清水くんに訊ねた。清水くんは少しだけ歩く速度を緩める。

「中学のときはいなかったね。今も、あれじゃあ無理だな」

「そうなんだ……」

いろいろと複雑な気持ちになった私は隣に歩調を合わせつつ、自分のつま先ばかりを見つめていた。

「舞？」

「いや、私も友達いないから……」

他人事には思えなかった、というのが本音だったりする。

清水くんは急に大げさに驚いて見せた。

「いやいや、舞とは全然違うよ！」

それまで無表情だった人が突然豹変してオーバーな身振り手振りをするので、私もびっくりした。

「そ、そうかな」

「そう。それにアイツが変なこと言い出して、気分悪くさせたよね。ごめん」

今度は萎れた花のように首をがくりと垂らして、清水くんは元気のない声で言った。

――サヤカさん？

たぶん清水くんの前の彼女なんだろう。私の前に何人くらい彼女がいたのかなんて想像もつかないが、やはり特定の人の名前が出てくるとどうしようもなく胸が痛んだ。

「何のこと？」

すっとぼけてみたが、逆に寒々しい空気が二人の間に漂い始める。

「あ、いや……」

ここまでたじろいだ清水くんの姿を見るのはある意味爽快だけど、やっぱり私には言いたくない何かがあるのだと思い知ってますます

暗い気持ちになった。

喉元まで「サヤカさんって誰？　どんな人？」と出かかっているのだが、それを聞いたら自分がどうなってしまうかわからなくて怖い。

――やっぱりやめておこう。

知らぬが仏、って言うよね。どうせ過去の出来事なんか私にはどうすることもできないのだから。

もやもやと、ぐるぐると、言いようもないもっさりとした嫌な感情が心の奥底でうごめいていた。

ここは何か話題を変えようと思い、とりあえず頭に浮かんだことを口にする。

「あ、そういえば諒一兄ちゃんと何を話していたの？」

言ってから清水くんの顔を見たのだが、その瞬間私の心は凍りついた。

「大したことじゃない」

「そう……なんだ」

私はいけないものを見てしまったような気がして、また自分のつま先に視線を落とした。

鋭く射るように私を一瞥したその視線は、彼から目を背けた後も私の胸に深く突き刺さり、じわじわと私の内部を侵食していく。

身体中の細胞が悲鳴を上げているような気がした。

「ごめんなさい」

わけがわからないまま許しを請う。結局私にはこれしか言う言葉が見つからなかったのだ。

清水くんが繋いでいた手を握り直した。二人とも酷く汗ばんでいる。

「どうして謝るの？　舞は何も悪くないのに」

おそるおそる顔を上げると、心配そうな目をした清水くんと目が合った。

「でも諒一兄ちゃんが予備校まで来たのは……私のせいだし」

「舞、一つ聞いていい？」

急に清水くんが改まった調子でそう言った。私はドキッとしたが、小さく頷く。

「諒一さんとはどういう関係？」

「へ？」

質問の意味がわからず、怪訝な表情で首を傾げたまま清水くんの顔を見返した。

「どうって……普通に従兄妹だけど」

「諒一さんが舞のことをどう思っているか、知ってる？」

「何……言ってるの？」

どんなに鈍い私でもさすがに清水くんの言いたいことは察せられた。しかしどうしてそういう話になるのだろう。

「従兄妹だから全くの他人よりは親しいかもしれないけど、それは当然じゃない？」

「当然……か」

揚げ足を取るように私の言葉をおうむ返しすると、清水くんは酷薄な笑みを口元に浮かべた。途端に背筋がぞくっとする。今まで見た中で一番冷たい笑みだった。

それでも私は勇気を奮い起こして言った。

「清水くんと英理子さんだってそうでしょ。イトコ同士で仲がいい

よね？　でもそれをいちいち『どういう関係』なんて訊く人はいないよ」

「そうかもしれない。実際、俺も英理子もお互いただのイトコとしか思っていないから」

フッと鼻で笑うと清水くんは私に厳しい視線をよこした。

頭ではわかっているくせに、それでも彼は私に対する疑念を捨てられないらしい。

その頑なな態度に私はだんだん腹が立ってきた。なぜ私が責められなければならないのか！？

そもそも私より、アンタの女子への対応のほうがよほど問題があると思うけど！

大きく息を吸い込むと、心に積もり積もった鬱憤を一気に吐き出した。

「そういう子どもっぽい態度、やめてくれない！？」

「はぁ！？」

清水くんの態度は更に硬化した。たぶんお互い引くに引けないところまで来てしまったのだ。

しかも妙なやり取りを続けているうちに、私たちは駅にたどり着いていた。

帰りも途中までは彼と同じ電車に乗るのだけど、今はそれが苦痛でしかない。駅の構内を無言で歩き、時間も確かめずにホームへ向かう。

隣にいるのは間違いなく私の好きな人だというのに、どうしてこんな惨めな気持ちになってしまうのだろう。

後ろに並んでいる大学生っぽい男女が楽しそうに会話をしている。

「そのドクロすごいじゃん。どこに売ってるの？　私、そういうの結構好きだな」

「マジで？　俺、言っとくけどドクロ歴長いよー」

「『ドクロ歴』って何！？」

キャハハと笑う女性の声が本当に愉快そうで、私は密かに唇を噛んだ。ドクロには興味がないけど、そんな普通の会話ができる関係が羨ましくて仕方なかったのだ。

ドクロの話題が普通の会話かどうかはわからないけど……。

でも「従兄とどういう関係？」なんてバカバカしい質問をされるよりは全然平和だ。痛くもない腹を探られる私の身にもなってくれ、

と心の中で隣の男に毒づいた。

電車の中でも結局黙ったままだった。清水くんはずっとケータイを見ながら何かしている。

――女の子にメールしてるのかも。

そんなことを思う私もかなり嫌な人間だ。でもそう思ってしまうのだからどうしようもない。

私のことを彼女と言いながら、絡んでくる他の女子を拒まないのはどういう了見なのか？

自分のことを棚にあげて私を責めるなんて、ホントどうかしてる。

乗換駅で電車を降りると、ようやく清水くんが口を開いた。

「舞の電車は３０分後に来るから、それまでここで待っていよう」

改札口の手前に広い待合スペースがあった。隅にはベンチもある。清水くんは当然のようにベンチへ向かった。

いかにもやる気のなさそうな動作で彼は腰を下ろした。私はベンチの前でしばし突っ立っていたが、清水くんが隣に座れと言わんばかりにポンポンとベンチを叩く。

仕方ない。私はわざと少し離れた場所に浅く腰掛けた。いつでも逃げ出せる体勢とも言う。

「今の俺ってすごく嫌なヤツだよね」

清水くんは顎を天井に向けた。

自覚があるのならどうにかしてくれ、と言いたかったが、彼の切なげな表情を見たら何も言えなくなってしまった。

「やっぱり諒一さんと比べたら、俺なんか全然ガキだし」

「さっきのはそういう意味じゃないよ」

「どういう意味でも関係ない。俺自身がそう思うって話だから」

――うーん、これは重症だ。

諒一兄ちゃんに対して異様にライバル意識を燃やしていることは間違いない。どうしてそんなことになったんだろう。訝しく思いながら私は言った。

「何を話したのか知らないけど、清水くんは誤解していると思う。諒一兄ちゃんが私のことを従妹以上に思うわけないもの」

「どうして？」

「昔、諒一兄ちゃんは私の姉が好きだったから」

「ふーん」

――あ、あれ？　「ふーん」だけ？

これはかなり強力な切り札だろうと思っていた私は内心派手にコ

ケた。

清水くんは腕組みをして嘆息を漏らす。その挙動は私の心をひりひりさせた。

「舞は自覚が足りないよ」

「え？」

急に彼は私を見た。上から下まで眺め回す視線は普段のものと全然違う、男の目線だった。まるで裸を見られているような恥ずかしさがこみ上げてくる。

「眼鏡をしていないだけで印象が全然違う。すごくかわいいし、すごく目立つ」

「へ？　だけど市村さんは私のことをダサくてかわいくないって言ってたよ」

私は身を縮めながら茶化すように言った。清水くんの視線だけで身体の内部が沸騰するように熱くなってしまい、この状況は危険だと本能が察知したのだ。

――わ、私……ど、どうしちゃったんだろう。

身を硬くしながらも、頭の片隅では前に清水くんに抱きとめられたときのことや、おでこにちゅーされたことなどがぐるぐると回っている。

――だあっ！　散れ！　散れ！

突然湧いた邪な感情を慌てて追い払う。しかし清水くんの顔を見て、私の脳内の思考は全て吹っ飛んだ。

怒ったように鋭い目をした綺麗な顔が私の眼前にあった。

――近すぎっ！

驚いて飛び退いた途端、腕をぐいと掴まれる。

「落ちるよ」

「は、はい！」

「逃げないでよ」

「は、はい！」

硬直した私は何とかベンチの端を反対の手で押さえて座り直した。しかし、この隙に清水くんが私との距離をあっさりと詰めてしまい、彼に腕をつかまれたままの私は逃げ道を失った。

「ちゃんと俺の話、聞いてくれる？」

「う、うん」

頷いたものの、いきなりベンチに密着した状態で座ることになり、心は全く落ち着く気配がない。

「サヤカさんっていうのは、中学のとき俺が初めて付き合った人。二つ年上で英理子のおばさんのピアノ教室に通っていた」

「サヤカ……って、和田（わだ）さやかさん？　ウィーンに留学した？」

私は母と姉の話を思い出していた。彼女は神崎ピアノ教室では誰もが一目置く才能の持ち主だったと聞いている。

「そう。発表会で見たことあるでしょ？」

「うん。さやかさんの演奏で先生……英理子さんのお母さんがステージの袖で泣いたって、姉が言ってた」

毎年、ピアノの発表会で彼女が弾く曲は先生が聴きたいからという理由で選曲されていたそうだ。確かに音楽の道に詳しくはない私でも、彼女の演奏の表現力には圧倒されるものがあった。

――初めて付き合った人、か……。

私は何となく気まずくて清水くんから視線を逸らす。

「でも付き合っていたと言っても、恋人らしいことは何もできなかった。すぐにウィーンに留学することが決まって会えなくなったから」

「……」

唇をぎゅっと結んだまま、かなり離れた向かい側の壁に貼ってある大きな温泉のポスターを見ていた。さっきまで発火しそうだった私の身体は、汗が冷えて急速に体温が奪われていく。

「それに向こうから好きだと言われて付き合うことになったから、俺自身は常に受身だった。別れてからやっと『やっぱりもう一度会いたい』ってことに気がついたけど、時は既に遅し。今考えれば、あまりにも俺がガキで何もできずに終わったってこと」

「何もできずに……」

いろいろと含みのありそうなセリフだな、と思う。そこを聞き逃さない私は、たぶんものすごくさやかさんに嫉妬しているのだ。

「そう。何もしなかった」

「何も？」

「うん。こんなふうに隣に座ることすらもない」

「え？」

私はおそるおそる隣を見た。

清水くんは私の腕を放し、足を組んでまた少しだらしない姿勢になる。それが何だか様になっているから、この男は得だなと思う。

「こうして半径一メートル以内にいる時間は、舞のほうが長い」

「ウソ……」

即座に隣でフッと笑う声が聞こえた。

「ウソじゃない。しかもあまり言いたくないけど……」

そこで清水くんは大きくため息をついた。そして私の顔を見る。

「その後付き合った彼女っていうのはみんな、相手から告られて断る理由がないから付き合ってみただけで、結局俺の気持ちがついていかないっていうか……」

「……それは、酷い……」

思わずそう口走っていた。これまで異性と付き合った経験のない私だって、自分に気持ちがない彼氏なんてゾッとする。

清水くんは私から顔を背けた。

「だよね。俺も最低だと思う」

そこで私はハッとした。

――え、……ってことは何？　私のこともそうなの！？

胸がズキンズキンと痛み始める。酸欠になったよう息苦しさだ。

「今日が初めてかも」

その言葉の意味がわからず、悔しそうな表情の清水くんをじっと見つめた。

「舞をとられたくないって思った」

彼がゆっくりとこちらを向いた。柔らかい微笑が眩しい。今日はずっと冷たい表情ばかりだったから、その笑顔に懐かしさすら覚えた。

ずっと見ていたいと思う私の気持ちをよそに、清水くんはケータイを取り出して「そろそろ時間だ」とつぶやいた。仕方なくホームへと向かう。

「清水くんの電車は？」

「俺は大丈夫。一時間に最低二本走ってるから。舞はこれを逃したら特急に乗らないといけなくなるでしょ」

――ぐっ……。そうなんです。家が田舎ですみません。

でも考えてみれば、清水くんは私の電車の時間に合わせて待っていてくれたことになる。

「あの、ありがとう」

私は言葉を端折った。察しのいい彼のことだから全部を言わなくてもきっとわかってくれるはず。

「いいよ、お礼なんて。ほっぺにちゅーとかで」

そう言った清水くんの笑顔はいつもと違って少し翳りがあるように見えた。ホームへ向かう階段が暗いからそう見えただけかもしれない。

――でも……！

階段を昇る清水くんのTシャツを鷲掴みして振り向かせると、私は数段駆け上がって彼の一段上に立ち、「えいっ」と彼の頬に自分の唇を押し付けた。

それから「じゃあまた明日」と言い捨てると、彼の顔も見ずに一目散に走って逃げた。

――うわーっ！　やっちゃった！

冗談を本気にするなんて寒すぎる。でも清水くんのあんな顔を見て、何もせずに彼から離れることが我慢ならなかったのだ。

――いや、でも、いきなり私から……とか！

自分のやってしまったことを思い返し、誰が見ているわけでもないのにうつむいて真っ赤になった頬を押さえた。

明日、どんな顔をしたらいいのだろう。だあっ！　もうっ！

でも不思議と後悔する気持ちはない。むしろこみ上げてくる笑いをこらえるのが辛くて、電車の利用客が少ない田舎に住んでいることを心からラッキーだと思う能天気な私だった。

## 31

普段、電車に乗る機会は滅多にない。通学は自転車だし、休日に家族と出かけるのは自家用車だ。だから電車という乗り物の融通の利かない部分があまり好きではない。

でも舞と付き合うようになって、それがほんの少し変わった。むしろ融通の利かない部分が、俺にとって好都合になったのだ。

今日も電車の時間に救われたな、と思う。そうでなければ舞ときちんと話すこともなかったかもしれない。彼氏、彼女という関係において、互いに話をしないうやむやな状態が一番よくないのだ。自然消滅への第一歩と言ってもいい。

電車の心地よい揺れ具合に、本来なら睡魔が喜んで飛びついてくるところだが、今日はさしもの睡魔様も俺から距離を置いているらしい。

――疲れた。

疲労が極限に達している。それも肉体的なものではなく、精神的な疲労だ。

でも眠くはなかった。T市に着くまで一瞬でも眠ったほうが頭の回転もよくなるとは思うものの、眠くないのだからどうしようもない。仕方がないので、ただひたすら車窓の外の景色を眺めていた。

家に帰り着き、夕食と風呂を済ませると俺はさっさと自室に引きこもった。そしてパソコンの前に座る。

――記憶障害……か。

検索窓に「記憶障害」と打ち込む。

こうしてインターネットが普及したおかげで、今は一瞬にして最新の情報を得ることができる。しかし情報が多くなりすぎてその取捨選択が難しいという難点もある。

実際、検索結果の上位に現れるページに書かれていることが信頼できる情報かどうかはわからない。情報の出所も作成者も不明の場合がほとんどだ。それでも俺は検索結果の上から順番にページを開き、記憶障害に関する記事に目を通していった。

そして何となくわかってきたことは、まず記憶障害を起こす原因は大きく分けて二つあるということだ。

一つは心因性記憶障害。強いストレスなどの心の問題に起因する記憶障害ということか。

もう一つは器質的記憶障害。つまり脳内の病変等に起因する記憶障害ということになるだろうか。具体的な例としては頭部外傷で起こる記憶障害などが上げられる。

舞の場合は厄介なことにどちらの可能性も捨てきれない。そもそも俺自身が持っている情報が少なすぎて正しい判断ができるとは到底思えなかった。

――それにあの従兄の言うことを鵜呑みにしていいのか？

おそらく諒一は自分の知っていることを俺に語ったのだろう。だが、それが全て正確な情報かどうかはわからない。諒一は目撃者ではないからだ。

――わからないことだらけだな。

結局、小六だった舞が家族とともに交通事故に遭い、一番軽症だった舞に記憶障害があるが、本人はそれを全く知らない、というのが今のところ事実と考えられることだった。

――それで、それを知った俺はどうするのか？

たぶん今の俺が考えなくてはいけないことはそれなのだ。

――どうって言っても……

俺はパソコンをそのまま放置し、ベッドの上に仰向けになって横たわる。そして今日何度目かわからないため息をついた。

天井をぼうっと見つめているうちに、身近に舞の過去と接点のある人物がいたことに気がつき、勢いよく身を起こすとケータイでメールを送る。用件しか書かなくても文句を言わない相手だから、気兼ねなく用件を打ち込んで送信した。

しばらくすると返信が届く。

「そういえば舞ちゃん一家が交通事故に遭ったと聞いたことがあるような気がする。でもそれがどうしたの？」

英理子からのメールも用件のみの短いものだった。

――そうだよな。「それがどうしたの？」……だよな。

俺はケータイをベッドの上に放り投げて、また寝そべった。

――それがどうした！

心の中で明るくそうつぶやいてみるが、胸の内側に広がる重苦しい黒い雲は晴れる気配がない。むしろ光の差し込む隙間を全て埋め尽くして、いつ墨汁の雨が降ってもおかしくない様子だった。

こうしていても埒が明かないと思い、パソコンの前に戻る。

検索した記憶障害に関するページにもう一度目を通した。記憶と呼ばれるものが人間の脳内ではどのように形成され、処理されるのかということを簡単に説明した部分がある。そこに目がいった。

更に記憶について調べてみると面白い。とりわけ俺が面白いと思ったのは、記憶についての研究が比較的新しい分野であるという点だ。俺は夢中になって記憶に関する記述を読んだ。

――これは……

久しぶりに俺は興奮していたと思う。といっても、変な意味ではないので誤解しないでほしい。知的興奮というヤツだ。

しかも人間の脳は科学が進歩した現代においても未知の領域が多い。刺激に飢えていた俺が、少しどころではなく、大いに興味を持ったのは当然かもしれない。

急に気分が浮上して、部屋に一人でじっとしているのが辛くなってきた。誰かにこの思いつきを話したくてしようがない。とりあえず階下に行くと、母と妹はテレビドラマに釘付けで、リビングルームの奥にある書斎からは彼女たちに配慮しているのか、控えめなクラシック音楽の演奏が聴こえる。

ソファの横を素通りして、書斎の戸口から内部を覗き見ると、口内の写真が多数掲載されている冊子を片手にした父が、俺に気がついて目を上げた。

「珍しいな。どうした？」

父はいまいち掴みどころのない性格だ。激しく怒るようなこともなければ、腹を抱えて笑うなんてこともない。感情の起伏が乏しいというべきか、あるいは表現するのが下手くそというべきか……。

勿論、上機嫌のときもあるし、酔えば愉快そうな顔もする。だが非常にわかりにくい。もともといつも難しいことを考えているように見える顔のせいかもしれない。

「父さんはどうして歯医者になろうと思ったわけ？」

咄嗟に俺はそう言っていた。会話の糸口が見つからず、父が手にしている冊子が妙に目に付いただけだったのだが。

「簡単に言えば、俺の親父も歯医者だったからだろうな」

「あ、そう」

当たり前の答えが返ってきて拍子抜けした。俺は父の書斎に入っ

て行き、本棚に並ぶいろいろなジャンルの本の背表紙を眺める。経営関係の本があるかと思うと、その隣にはベストセラー作家のミステリーが並び、その次は酵素について書かれた本だ。

――酵素？

首を傾げたところで父の声がした。

「お前のじいさんが優秀な歯科医だったら、俺は違う道を選んだかもしれないな」

「え？　じいちゃんってヤブだったの？」

父は少し笑った。

「まぁ、近所では悪名高い歯医者だったことは間違いない。まだ使える歯を抜くのは日常茶飯事で、診断も不的確な上、処置も下手だった」

「それはひどい」

「そういう自分の父親が嫌いで、評判が悪い歯科医院である自分の家が嫌いだった。でも、あるとき思った。このまま親父の代で終わってしまうと、この辺りでは我が家が悪いイメージのままだ、と。そしてそのイメージはかなり長い間払拭できないだろう、と」

俺は頷いていた。確かに一度定着した悪い印象は簡単には消えない。特に近所の評判というのは目に見えない割に根強いものだ。

「そうなると迷惑を被るのは自分や自分の家族だということになる。

ま、親父に借金があって逃げることもできなかったんだが」

親父は鼻で笑ったが、じいちゃんを恨んでいる様子は感じられず、俺はしばし親父の顔をじっと見つめてしまった。

「そう決めたのはいつ頃？」

「ここで歯科をやろうと思ったのは大学を卒業する頃だな」

「じゃあ歯学部に行こうと思ったのはどうして？」

「歯学部以外には金を出さないと母親に言われていたからな」

俺はばあちゃんの顔を思い出した。父の少し気難しそうな顔はばあちゃん譲りだろう。目が細く切れ長で、その見た目だけでも冷たい感じがする人だ。実際は冗談も言う面白い部分もあるが、全体的な評価としては外見と中身が違わぬケチで我の強い老婦人なのだった。

「なるほどね」

そう考えると俺は恵まれているな、と思った。両親は「歯学部に進め」とは言わない。

――いや、聞いたことがないだけで、もしかしたら歯学部に進学してほしいと思っているかもしれないな。

顔を上げると、父と目が合った。

「進路のことか？」

「うん。先生には両親と話し合ってこいって言われてる」

父は持っていた冊子を机の上に置き、改めて俺に向き合う。そしてあっさりと言った。

「お前の人生だからお前のしたいことをすればいい。興味もないのに歯学部に進む必要はないな」

予想通りのセリフだったが、すぐに「うん」と返答することができない重い言葉だった。

「でも、そしたら、どうするんだ？」

――もし俺も寛人も笑佳も継がなかったら？

父は俺の顔を見たまま、フッと皮肉な笑みを浮かべた。今夜は機嫌がいいようだ、と思う。

「お前に心配されるようになるとはな。興味などないくせに」

「そういうわけじゃない」

――ぶっちゃけ、親父の言うとおりだけど。

それでも自分の家のことが気にならないわけがない。俺自身が歯医者になりたいとは思わなくても、自分の家が歯科医院じゃなくなったらどうなるのか、ということが心配なのだ。

「それよりもお前は自分のことをしっかり考えるんだな。お前には

お前にしかできないことがあるはずだ。時間はかかっても、それを見つけることが重要だと思うぞ」

「父さんってずいぶん楽天的だね」

俺は思わず苦笑した。進路を決めるこの大事な時期に、そんな悠長なことを言っていたら、数年後にはものの見事に路頭に迷っているはずだ。今からどんな社会人になりたいのかを考えて進路を選択しなければ、何もかもが手遅れになってしまう。

「お前には余計なアドバイスをする必要はないと思うからだよ」

「そう？」

「自分で自分の生き方くらい決められるだろう。それでお前は何に興味があるんだ？」

全面的に信頼されているのか、あるいは息子の将来に過度の期待をしていないのか、微妙にわかりにくい父の反応に戸惑いつつ、俺はようやくここに来た目的を思い出した。

「ずっと数学や哲学が面白いと思っていたんだけど、急に脳に興味が出てきたんだ」

「のう？」

「伝統芸術の能とかじゃなくて、頭脳の脳。それも人間の脳」

父は鼻の頭をかいた。どうもピンと来なかったらしい。そして腕組みをして言った。

「その研究は金になるのか？」

――金だぁ！？

顔が引きつった。すぐに回れ右をする。

「もう少し考えてくる」

俺はそのまま親父の書斎を出て、リビングルームを素通りし、自室に戻った。

――なんだ、あの親父は！？

自分にしかできないことを見つけろとか、ちょっとカッコいいことを言いながら、結局は金か！

そりゃ世の中、金だ。金がなければ生きていけない。

俺だって親父が稼ぐ金で今日まで養育してもらってきた。そんなことは嫌というほどわかっている。

だけど、金にならない研究は無駄なのか？

金になるか、ならないかが、俺の進路を決めるモノサシなのか？

――頭が痛い。

親父の最後の一言で、俺の清らかな心が穢されたような気分だった。やはりあの親父はあの祖母の息子だ。間違いない。

狐のような目をした吝嗇家の老婦人の姿を思い出して嘆息をつく。ちなみに俺のじいちゃんは俺が中学生のときに他界し、ばあちゃんは近所で一人暮らしをしている。

そして祖父の歯科医院を父が継いだおかげで、現在の祖母は肩身の狭い思いをするどころか、老人会で第二の青春を謳歌するかのごとく活躍中らしい。喜ばしいことだ。

だが、父のなすべきことは祖父母の老後の安寧を約束することだったのか、と思うと俺は急に失望を覚えた。

それは確かに父にしかできないことだし、これ以上ない親孝行だということは俺にもよく理解できる。でもそんな父が何だか寂しく思えた。

ベッドに横になる。

――夢とか希望ってなんだろうな。

諒一という舞の従兄の自信に満ちた態度が脳裏にちらついて心が落ち着かない。自動車事故防止システムを研究していると言ってい

たが、舞の家族の事故が引き金でその進路を選んだことは間違いない。そうでなければわざわざ大学で何を研究しているかなんて説明しないだろう。

認めたくはないが、そういう生き方はスマートに見えるし、それを堂々とできることが羨ましかった。

しかも自動車事故防止システムというのは、現在ものすごく期待度の高い研究分野だ。運転者が安全運転を心掛けるのは当然だが、それだけでは事故をなくすことは実際問題無理だろう。なぜなら車はそれなりのスピードで走り、それぞれが意志を持って進んでいるからだ。

しかし、いくらその研究が有用だとしても俺は諒一と同じ分野に進もうとは思わない。

――まさに父さんの言う「金になる研究」だろうけど。

父がやたらと現実的なことを言い出したせいで、俺の進路は一気に暗礁に乗り上げた気分だ。もともと方向性すら定まっていなかったのだが、あの一言で進路というものを根本から考え直さなければならないような気にさせられた。

気がつくと無意識に頬を触っている。舞の唇が触れた側の頬だ。

――「かわいい」って言えばよかった。

最近の俺はどうかしている。そんなことすら言うことをためらうなんて、全然俺らしくない。

でも舞に「子どもっぽい」と言われたときは、さすがに槍がグサッと胸に刺さったような衝撃があった。

舞は飛び抜けて気が強いほうではないが、不当な仕打ちを受けた場合、おとなしく泣き寝入りするタイプというわけでもないようだ。むしろ一矢報いてやろうという気概を持っていて、そういうときの舞は、男の俺でも一瞬怯んでしまうような強固な意志の片鱗を見せる。

クラスの中にいるときは凪いだ水面のような静かな佇まいなのに、時々、舞の中には皆と同じかそれ以上に熱い心があるんだと思い知らされた。

――あーあ。

相手がただかわいいだけの女の子なら、こんなふうに考えたり悩んだりせず、何となく付き合うこともできたのかもしれない、と俺のどこかで囁く声が聞こえてくる。面倒なことなど考えずに、今、このときだけ楽しければいいじゃないか、と。

確かに少し前まではそれでよかったのだ。

一緒にいても面白おかしく過ごすだけで、互いに傷つけることもなければ、何かに気がついたりもしない。嫌なところが見えてきたら、ためらいもせずにさようなら。

自分から相手の心の中に踏み込んでいくこともないし、自分の本心など見せることもない。むきになったりすることもなくて、いつも俺は安全なところにいることができる。

――でも、今の俺はどうだ？

正直、みっともない。諒一に対する嫉妬を垂れ流し、弱音を吐いて舞の同情を引いたり、全くいいところがないじゃないか。

諒一に今の俺が勝てるのは、若さ？　……それすら弱点になっている気がするが。

舞だって英理子のように「大学生のほうが大人で付き合いやすい」と、いつ言い出してもおかしくないのだ。

――ヤバいな、俺。

しかし、どう考えても従兄というポジションは反則だろう。舞のような事情があれば尚更だ。

それでも俺は舞の彼氏を返上しようとは思わない。

もう一度自分の頬を触った。照れて、振り返りもせず階段を駆け上がる舞の背中が思い出される。

消灯後もしばらく俺はベッドの中でひとりニヤニヤと笑っていた。

翌日も前日と同じように舞と一緒の電車に乗って予備校に向かった。夏期講習の間だけとはいえ電車通学はいい。俺の家もいっそ舞の町に引っ越せばいいのに、とさえ思う。

そして今日の舞は昨日ほど挑戦的な服装ではない。それを確認した途端、俺は酷く安堵し、顔が不自然に緩んだ。気持ちも大きくなる。

「今日もかわいいね」

ここで重要なのは「今日も」の「も」であることは言うまでもない。わざとらしく「も」を強調して言う。

舞は俺の顔を横目で見て、それから嬉しそうに笑った。

――ホントにかわいい。

舞の喜ぶ顔を見ると俺は更に幸せな気持ちになる。どうして昨日はこの一言が言えなかったのかと悔やまれた。昨日の惨めな敗北の原因はそこだ。間違いない。

そんな意味不明の確信を抱いて、俺は舞に話しかけた。

「コンタクトには慣れた？」

「とても見やすくなったけど、ここに何もないのがまだ落ち着かない」

舞は自分の手を目と鼻の前で左右に振る。そりゃそうだろう。長い間の習慣を変えたのに何の違和感も感じないほうがおかしい。

――長い間の習慣？

俺の脳裏に何かがひっかかった。

「そういえば舞はいつから眼鏡を使ってるの？」

「……いつから？」

舞の反応を注意深く見守る。俺の顔を見ながら首を傾げた舞は、考えるように視線だけを電車の天井方向へ放った。

「覚えてない？」

おそるおそる小声で訊く。やっちまったか、と心の中がひやりとした。

「確か……中学生になったとき」

舞は眼鏡をかけているときとあまり変わらない、感情を抑えた不機嫌そうな顔でそう言った。

俺は胸を撫で下ろしながらも、ほんの少し残念に思う。いきなり

核心に触れるようなことをするつもりはないが、諒一の話を自分自身で確認したいという欲求は、捨てても捨ててもどこからともなく湧いてくるのだ。

だがこれはとてもデリケートな問題だ。中途半端な気持ちで地雷を踏んだら、負傷するのは俺じゃなくて舞なのだ。

――焦るな、俺。

とりあえず話題を変えようと思う。

「それで数学はどう？」

できる限り優しい気持ちになって言ってみた。するとこちらを見た舞の目が驚きで見開かれ、すぐに視線を逸らされてしまう。その一瞬はひどく傷つくが、舞の頬が赤くなるのを見ると、俺は内心ほくそ笑んだ。

「難しいけど、先生の話が面白いから何とか頑張って聞いてる」

「それはよかった。でも俺よりできるようになるのは困るけど」

「そんなことありえない」

舞は苦笑して、本当に切なそうにため息をついた。

数学が苦手で困るのは大学入試時くらいなものだ。実は微分積分などできなくても何の問題もなく生きていくことはできるだろう。

むしろ生きていくのに必要なスキルは学問とは全然別のものだ。

市村由布を見ているとそれを嫌というほど実感できる。今日もアイツと同じ講義を受けるのかと思うと、軽く疲労を覚えた。

更に話題を変える。舞も苦手な数学の話を長々と続けても嬉しくないはずだ。

「そういえば沖野から借りた本、読む？」

実はもう読み終わっていたのだが、舞に貸すのをためらっていたのだ。だいたいラノベとはいえいきなり１０冊も貸すバカがどこにいるんだ、と思う。あまりにも重くて腹が立ち、もう少し相手の都合を考えて持ってこい、と沖野にはメールしておいたが、今日までヤツからの返事はない。

舞はすっかり忘れていた様子で「ああ」と言った。俺はまた内心ほくそ笑む。

「今は夏期講習のことで頭がいっぱいだから、終わってから読もうかな」

「え？　何？」

電車の騒音で聞き取れなかったふりをした。そして舞の腕に寄りかかってその耳元に小声で言う。

「今は俺のことで頭がいっぱい？」

「違います！」

「あやしいなぁ。『違う』じゃなくて『違います』って」

「揚げ足を取らないで」

「事実を言っただけだよ。どうして丁寧語になるの？」

舞がむきになってきたので俺もだんだん楽しくなる。どうして舞をからかうとこんなに楽しいんだろう。

「とにかく、私は夏期講習を頑張りたいの！」

「うん。でも俺のことを考えるのは別腹っていうか別脳？」

咄嗟に変な言葉を作ってしまった。別脳。他人には全く通じない言葉だ。

さすがに舞も顔を背けて笑い出す。

「そんな言葉、聞いたことない」

「うん。俺の造語。今年の流行語になるかもしれないから」

「絶対ならないと思う」

まずい。話が脱線している。

笑い続ける舞を一瞥して、俺は笑顔を作った。何しろ俺には今、とっておきの印籠があるのだ。気持ちもこれ以上ないほど寛大になるというものだ。

「ま、夏期講習中は勉強を頑張りなよ。俺もその間は我慢するから」

「が、我慢……？」

舞は大きく目を見開いて俺を見た。恐ろしいものを見るような目つきだ。俺は更に優しい笑顔になる。

「そう。偉いでしょ。本当は片方だけじゃなくて反対側にもしてほしいところだけど」

「ま、待って。何の話か、全くわからない」

身を縮めた舞は俺との間に隙間を作った。俺は一瞬眉をひそめる。

「昨日のことなのに忘れたの？　自分から俺にあんなことしておいて」

「ふぎゃーーーっ！」

猫が威嚇するときに出すような音がした。勿論、発信元は隣の舞だ。彼女は両耳に手を押し当てて塞ぎ、目をぎゅっと瞑っている。

「……っぶ！」

その姿と声にならない悲鳴に、不覚にも俺は吹き出してしまった。

――ほっぺにちゅーくらいでそんなに動揺して、この先どうする

の？

少し意地悪な気持ちで舞を見ると、早くも立ち直った彼女は俺をキッと見据えていた。おや、と思いながら表情を改めたところに、舞がぼそぼそとつぶやくのが聞こえてくる。

「でも私、ラノベも好きですよ。面白いし、挿絵もあってお得じゃないですか」

俺は笑いながら頷いた。

「早く夏期講習が終わるといいね」

「あ、あの……それって変な意味じゃない、よね？」

舞が俺をちらりと横目で見る。勿論、俺はとても優しい気持ちで頷いた。

「うん。でも、優しくしてね」

「……はい？」

これでもかと眉に皺を寄せ、これ以上ないほど険しい顔をした舞はそのまま俺を数秒睨んでいたが、俺もこれ以上ないほど優しい顔で舞を見つめ返した。

やがて根負けしたのか舞はフッと肩の力を抜いて項垂れた。

「やっぱり清水くんは悪魔だ」

「え？」

意外な言葉に驚いて聞き返すと、舞はおそろしく長いため息をついた。それから、少し肩をすくめると「なんでもない」と言ってクスクスと笑った。

――ねぇねぇ、それってＯＫってことなの？

俺は無言で舞を見る。

――嫌とかダメって言わないと俺の都合のいいほうに解釈するから。

舞は俺の視線に気がつくと、眩しそうに目を少し細める。

これが電車の中でなければ危ないところだったが、幸か不幸か俺の理性は正常に働き、舞を自分のほうに抱き寄せたい衝動を必死でこらえた。

そんな俺の中の葛藤ならぬ死闘など舞は知るはずもない。電車がＳ市に着くまでニコニコと無邪気に笑っていた。

まぁ、舞が笑っていれば俺も嬉しいんだけど、ね。

こうして俺たちの夏期講習は二日目以降、平穏に続いていった。
少なくとも、俺にとっては、の話だが――。

## 32

人間の目には限度がある。

目の悪い私ですら、視力を矯正すれば世界の全てが見えると思っていたが、それは全くの思い上がりで、人間の目に映るものはごく限られた光彩の情報でしかない。

なんて言いながらも、実は人間の目のしくみを正確に理解しているわけではなくて、単に清水くんの話の受け売りだったりする。

何気なく始まる清水くんの話はいつも面白い。話題は様々で、たぶんそのとき心に浮かんだことを思いつくままに喋っているのだと思うが、彼の守備範囲の広さには本当に驚かされる。

しかし今まで読書が友達のような生活をしていた私にとって、人と会話するということは少し面倒で億劫だったのに、最近この何気ない会話が楽しくて変な気分だった。

だって本は、いつどこで開いても同じことしか語りかけてこないけれども、清水くんとの会話は、そのときその場所でしか起こりえない、いわばライブなわけで、しかもそれは彼と私の限定ライブなわけだ。

清水くんと私にはほとんど共通点がないと思うのだけど、二人で話をしているとなぜか心地よい。だからつい私はもっと彼と話をしたいと思ってしまう。そう思う自分がやはり変だと思う。

変だと思うけどやめられない。

これでもし、急に清水くんと別れるようなことになったら、私はどうなってしまうのか。いや、どうにもならないだろうけど、また一人で本を読むだけの生活に戻ることなどできるのだろうか、と不安になるのだ。

読書は楽しい。でも読書をしているだけだと、たとえ百冊、いや千冊読もうが、どこまで行っても一人だ。

「ねぇ、どうしてここはこうなるの？」

と聞いても誰も答えてはくれないだろう。

――誰かと付き合うってこういうことか。

そんな重い実感を噛み締めながら、私は今日も夏期講習へと出かけた。

講習日程も残り少なくなってきた。始まる前は一週間の講習なんて長いな、と思っていたけど、講義内容に満足しているせいか、今は終わってしまうのが惜しい気がしている。

今日は土曜日。講習は日曜日で終わる。

いつものように電車で清水くんと一緒にS市までやって来たのだが、私の心の中はいつもとは少し違ってあたふたしていた。

さすがに清水くんは鋭い。電車を降りて駅の構内歩いていると、隣から「それで？」と唐突に問われた。

「さっきからそわそわして落ち着きないけど、どうした？」

私は清水くんの顔を見上げた。歩くスピードが落ちる。

「あの、今日は土曜日で」

「うん」

「講習が終わる頃、母が迎えに来るって」

「ああ、了解」

なんだそんなことか、という表情で清水くんは前を向こうとした。私は思わず彼の腕を引っ張る。

「それで、伯母の家に行って泊まることに……」

「え！？」

私の声は情けないくらいか細くなり、逆に清水くんの声は周囲の視線を集めるくらい大きかった。

――行きたいって言ったわけじゃないんだよ。私はやめておこうって言ったんだよ！

清水くんの顔が急に強張るのを見て、私は心の中で懸命に弁明す

る。

そもそも伯母の家は父方の繋がりだ。私の母も伯母も高橋家からすると嫁になるわけで、仲が悪いわけではないが特筆するほど親密ではない。それに車で一時間半くらいの距離だから、今まで遊びに行っても泊まるようなことはなかったのだ。

それがどういうわけか今回に限って「泊まる」という話になったらしい。まだ高校生の私には母の決めたことを完全に拒否できる権限はない。

清水くんはしばらく私の顔を見ていたが、急に視線を外すとため息をついた。

「お母さんと一緒なんだよね？」

「勿論！」

私は勢いよく答える。

「でも嫌だな」

清水くんの心境がはっきりと伝わってくる一言だった。これで講習初日に諒一兄ちゃんが現れなかったら清水くんにこんな想いをさせずに済んだのに、と思う。

「あの諒一ってヤツもいるんでしょ？」

「たぶん。今、大学も夏休みだし」

「そういえば、あの人、どこの大学？」

「確か……あれ、どこだっけ？」

私たちは改札をくぐり、駅を出て予備校へと近づいていた。

この話題になってからずっと不機嫌だった清水くんがクスッと笑う。

「舞も忘れちゃうような大学？」

「いや、大学の名前とかあまり興味なくて。N大だったかなぁ」

そう言った途端、清水くんは「ふーん」とわざとらしい相槌を打った。意外だと言いたげな顔をしている。

N大は私が受験したい大学より少しランクが高いはずだ。でも疎い私は上位校の偏差値などいちいち覚えてはいない。

ついでによく考えてみると、私は清水くんが志望する大学も知らないのだ。

――勝手に自分と同じ大学かと思い込んでいたけど、清水くんのレベルだったらもっと上……だよね。

そう思った途端、私の胸の中にはナイフで抉ったような鋭い痛みが走る。

しかも今更「志望大学は？」なんて聞きにくい。だけど彼女なのにそんな大事なことも知らないのは変じゃないか？

「まぁ、気をつけて」

清水くんは諦めたようにそう言うと、私の背中をポンと叩いた。

でも時間が止まったかのように私の頭の中はぼんやりしていた。じっと清水くんの顔を見てみるが、彼はただ不思議そうな顔をしているだけだった。

「ん？　どうかした？」

「……いや、気をつけます。……って何を！？」

「『何を！？』じゃないだろ。諒一だよ、諒一！」

「ああ」

一応、納得したように頷いたが、何を気をつけろというのだろう。私はほんの少し首を傾けた。

「何を気をつけなきゃいけないのか、よくわかんないけど」

「舞、それ本気で言ってる？」

予備校の手前まで来て、清水くんは立ち止まった。私も仕方なく足を止めた。

「だって諒一兄ちゃんは従兄だし、私は清水くんと付き合っていて、そのことは諒一兄ちゃんも知ってるんだし」

「だから？」

いかにも苛立たしいという口調だ。背中につめたい汗が垂れる。

「あの、何をそんなに心配……」

「心配するなっていうほうがおかしいよ」

清水くんはきっぱりと言い切って私を一瞥すると、その場に固まっている私を振り切るように予備校の玄関前の階段を駆け上がっていった。

――怒らせちゃった……。

何となくこんなことになるような気がして、母にやめようと懇願したのだが、結局全て最悪な方向に進んでいる。つくづく私は無力だと思う。

――でも心配するようなことなんか起こるわけないよ。

万が一、諒一兄ちゃんに清水くんが心配するような下心があったとしても、母も一緒に伯母の家にいる限り、絶対大丈夫だと断言してもいいと思うのだが。

何か釈然としない気分のまま、予備校の階段を一段ずつ踏みしめながら上がり、数学の授業を受けるためにとぼとぼと教室へ向かった。

一人ぼっちの数学の授業が終わり、お昼になった。

清水くんはまだ不機嫌だろうか。ため息をついて立ち上がる。気が重いと身体まで重く感じるものだな、と思いながら、とりあえずトイレに立ち寄った。

沈んだ気分のせいか視線までも下向きだ。しかし女子トイレに入り、さすがに目を上げる。何しろ狭い空間だ。下ばかり向いていたら他人に迷惑をかける可能性が高い。

それにトイレに入った瞬間、恋の悩みよりも、まずはお手洗いの任務を遂行するという本能のプログラムにスイッチが入ったと言うべきか。

しかし、顔を上げた私の目に飛び込んできたのは、洗面台のガラスに映る満面の笑みを浮かべたユウの姿だった。

鏡の中のユウと一瞬目が合い、頭の中でバチッと音がする。我に返った私は何も見なかったようにそそくさと彼女の後ろを通り過ぎ、個室へと駆け込んだ。

――な、なんなんだ！？

ドアの鍵をかけると、ユウが出て行ったと思われる足音がして、

すぐにトイレ内には静寂が訪れた。

首を傾げながら任務を遂行し個室を出ると、ユウが立っていた隣の洗面台で手を洗ってみた。それから鏡を見る。

ユウは片手を後頭部に当ててポーズを取り、歯を見せて爽やかな笑顔を作っていた。まるでファッション雑誌のモデル気取りだった。

――でも、どうしてこんなところであんなポーズ？

私は何の変哲もない四角い鏡を眺める。そこには不思議そうな顔をした自分が映っているだけだ。世の中にはいろんな人がいる。訳がわからないことだって一つや二つ存在するのは当然だ。

だがしかし、ユウは私と目が合ってもその表情を変えず、むしろこのタイミングでトイレに入った私が悪いと言わんばかりの態度だった。それがすごいと思う。

――すごすぎてついていけない。

S市の高校生はみんなあんなふうに自信満々でいるのだろうか。何だか妙な敗北感が私の胸の中に広がった。田舎出身者という心の底にある劣等感を笑われたような気がする。

――ま、いいや。

壁に備え付けのエアータオルに手を突っ込んで、トイレを出た。

田舎育ちで何が悪い、とも思う。どうせ都会育ちのお嬢様には自然の雄大さ、そして厳しさなどわからないでしょう、というひねく

れた感情が湧いてくる。
ロビーまで来て清水くんの姿が目に飛び込んでくると、私の心はまたしても鉛色に塗りつぶされた。深いため息をついて、自分を奮い立たせる。
「ねぇ、高橋さん」
重い足取りで清水くんの元へ向かう私を、背後から誰かが呼び止めた。
振り返るとユウがいた。一瞬、気まずくて目を逸らすが、ユウは全く動じていないので渋々視線を戻す。清水くんとユウに挟まれたこの状況はまさに四面楚歌だ。
「私もお昼、ご一緒してもいいかしら？」
この前とは言葉遣いが全然違うな、と思いながら清水くんのほうをチラッと見る。彼は無表情でこちらへ近づいてきた。
「何？」
やる気のなさそうな声だ。私に腹を立てているからか、ユウが絡んできたから機嫌が悪いのか、両方かもしれないが、とにかく面白くないという顔をしていた。
「私も一緒にご飯食べたいの。いいでしょ？」
「いいですよ。一緒に行きましょう！」

私は思い切って返事をした。向かい側で清水くんが目をむいたが、気にしない。ユウは私の腕を掴んで先ほどとは全然違う自然な笑みを浮かべた。

「嬉しい！　じゃあ食べに行こう！　お腹空いたー！」

明るい声を上げたユウは私の腕を掴んだまま歩き出した。清水くんも仕方なくついてくる。

それから私たちはS駅構内のファストフード店へ直行した。昼時ということもあって混雑していたが、ユウが持ち前の強引さを遺憾なく発揮し、三人が座るテーブルは何とか確保される。

「私、高橋さんと話がしたかったの」

――え！？

いきなり名指しされて胸がドキッとした。

それからすぐに先ほどのトイレの一件を口止めする気か、と勘繰るが、まさか清水くんの前で自らあの話をするとは思えない。私は注意深くユウの次の言葉を待った。

「高橋さんって文系？」

「そうですけど」

「志望大学はどこ？　H大？」

――いきなり核心をついてきたな……。

そう思うと同時に清水くんが「おい」とユウをたしなめるような声を上げた。

「そんなことお前に関係ないだろ」

「私は高橋さんに聞いてるんだけど」

ユウは強気だ。彼女に怖いものなどないのだろう。その性格が少し羨ましいと思いながら、私は「まぁそんなところです」と返事をする。

「へぇ、それではるくんは迷ってるわけだ」

――迷ってる？

私は清水くんの顔をチラッと見た。ちょうどサンドイッチにかじりつく瞬間で、小麦胚芽入りのパンの間から野菜やチキンがはみ出してくる。

「お前に関係ない」

口をもぐもぐさせながら清水くんはそっけなく言った。

彼の食べているサンドイッチのほうが美味しそうだな、と思いながら私もサンドイッチをほうばった。食べてみるとこれはこれで美味しい。

「関係なくはないでしょ。同じ医学部を目指してるんだから」

ユウはそう言ってドリンクのストローをくわえる。

――同じ医学部……？

ほんの一瞬だけパンをかじることを忘れて、私はあっけに取られていた。だが、すぐに平然と食事に専念するふりを努めた。頭の中のどこかが麻痺して脳の思考回路が働いていないのだが、自分でもどうにもできないのだ。

「医学部に決めたわけじゃない。それに俺がどこの大学を受験しようと、お前には関係ないって」

「それはそうかもしれないけど、気になるじゃない。ライバルとしては」

「いつから俺とお前がライバルになったんだよ」

「ていうか、どうしてS市の高校に進まなかったのよ！？」

――ホント、そうだよね。

かねてから疑問に思っていたことをユウが口にしたので、私の脳は少しだけやる気を出したようだ。

清水くんは相変わらずサンドイッチを食べる手を止めず、咀嚼する合間に面倒そうに答える。

「朝、早起きしたくないから」

――そんな理由ですか……。

ユウも私と同じように思ったのか、少し口を尖らせてため息をついた。

「ね、高橋さんからも言ってよ。もっと上を狙える成績なんだから、挑戦しなさいって！」

私はきょとんとしてユウを見返した。どうして私がそんなことを言わなければならないのだろう？

「挑戦？」

「だってはるくんが本気になれば最難関の大学だって狙えるのに、どうして迷うことなんかあるわけ？」

狭い店内で熱く語るユウの姿を見て、案外彼女は熱血だったのだな、と変な感慨に浸っていた。しかも彼女も医学部を目指しているというのが、正直に言うと私にとっては相当な衝撃的事実だった。

そもそも、最初に出会ったときの喋り方と、今ここで進路がどうこうと話しているユウの口調はほとんど別人だ。彼女は一体どういう人なんだ、と私の頭の中で混乱が起こっている。

清水くんの進路のことだけでも混乱しているというのに、ここまでくると脳がパンクしそうだった。

「市村は将来医者になりたいんだろ。だったら医学部を目指せばいい。俺はまだ将来の具体的な目標が定まってないんだよ。それなのに簡単にどこを目指すかなんて決められないだろ」

冷静で真っ当な答えがサンドイッチを食べ終えた清水くんの口から出た。思わず私は頷いてしまう。そしてその回答にホッとしていた。

――なーんだ、やっぱりまだ決まってなかったんだ。

彼女のクセに彼氏の志望大学を知らないという恥ずかしい事態は何とか免れたので、ユウとランチを共にしたことは大正解だったな、と自分の判断を自画自賛する。

「高橋さん！　それで満足なの！？」

「へ？」

急にユウは私に噛み付いてきた。慌てた私は残り少ないサンドイッチをトレーの上に落としてしまった。清水くんが隣で「あーあ」と呆れた声を上げる。

ユウは何かのスイッチが入ってしまったらしく、私と清水くんが空中分解したサンドイッチの残骸を処理している間も熱弁をふるう。

「彼氏が自分と一緒の大学に行きたいというだけでわざわざ志望大のランクを下げるなんて……私ならそんなの全然嬉しくないけどっ！」

「つーか、お前に彼氏いたことあるのかよ？」

「うるさいっ！　私は高橋さんに聞いてるのよ」

二人のやりとりが可笑しくて、失笑しそうになるのを懸命にこらえながら、私は質問の答えを考えた。

「もしそんな理由でランクを下げるなら失望するかもしれないけど、清水くんはそうは言ってないし、……それに自分の進路は自分にしか決められないから」

急にテーブルが静かになって、私は変なことを言ってしまったのかとドキドキする。誰かが何か言ってくれないと間が持たないのだが、誰も何も言わない。

ユウは少し考えるように宙を睨んでいたが、急にサンドイッチにかぶりついた。やけくそになったかのような豪快な食べっぷりだ。

そして食べ終わると紙ナプキンで口を拭いて、言った。

「私、いいこと思いついた」

私はユウの顔を見てギョッとした。先ほど予備校のトイレで見た満面の作り笑いが目の前に再現されたからだ。

「どうせお前のいいことは最悪のことだろ」

小声で清水くんが突っ込む。その声を無視してユウは続けた。

「この際、高橋さんも医学部を目指そうよ！」

「……はい！？」

私の頭の中はまたパニックになり、軽い眩暈のようなものまで感じた。ユウという人は一体何を考えているのか、全く理解不能だ。

「市村。舞の名言を聞いてなかったのか？」

清水くんが立ち上がってユウを見下ろした。

「お前、頭はいいんだから、他人のことにあれこれ口出しするより、自分のことをもっとよく考えたほうがいいぞ」

そう言うと私の腕を引っ張って、清水くんはファストフード店を後にした。

振り返ると店内に残されたユウの姿が小さく見えて、ほんの少し胸が痛む。

「アイツ、昔から成績はいいのにわがままで依存心が強くて、手に負えないタイプ。かまわないほうがいい」

清水くんが私の顔を見て、そう言った。

――……ん！？

さっき一瞬だけユウが気の毒に見えたのだが、そんな感傷は彼の一言で霧散し、間違って石を噛んでしまったような違和感が私の中に充満する。

そして、頭の中で何かがブツッと切れた。

「かまわないほうがいい？　かまってるのは清水くんじゃない？」

言ってから、自分のセリフに驚いた。清水くんも目を見開いて私を凝視する。

「だいたい数学をやりたいとか言ってたのは何？　医学部？　はぁ？　私、初耳ですけどっ！」

――え、ちょっと待って、私。どうしたんだ。

困ったことに止まらない。

「それに、私と諒一兄ちゃんのことをあれこれ言うけど、ご自分はどうなんですか！？　言い寄ってくる女の人みんなにいい顔して……」

土曜ということもあり、人がごった返すショッピングモールのど真ん中で、私は清水くんを責め立てていた。

「結局、女好きなんだ！」

――あっちゃー！　ついに言っちゃった……。

――いやいや、あースッキリした！　ていうか、これくらい言ってやらないとこの男にはわかんないのよ、女心なんて！

過度の興奮状態で心の中は達成感と後悔がぐちゃぐちゃに混ざり合い、呼吸も荒くなっていた。

そこへ背後からポンポンと優しく誰かが私の肩を叩く。

――ん？　あれ、清水くんは前にいるし、誰が……？

目の前にいる清水くんは私の背後に視線を移し、更に仰天した表情になっている。

肩で息をしながら、おそるおそる首を後ろに回す。

「舞？　こんなところで勇ましく仁王立ちして、何してるの？」

――ひ、ひゃーーーっ！

「しかも『女好き』とか大声で叫んでるし。恥ずかしいわよ」

――ま、ま、ま……

「ママ、どうしてここに！？」

情けないことに声が掠れる。

私の後ろには、いつもより濃い目のメイクで嫌味なほどニヤニヤと笑う母の姿があった。

## 33

「あら、舞と同じクラスの……えーと、なに君でしたっけ？」

母は私の問いを無視して清水くんに話しかけた。どうして清水くんが同じクラスの男子だとわかったんだろう。

清水くんもさすがに驚き顔のまま、ぎこちない返事をする。

「清水暖人です。こんにちは。いつもお世話になってます」

「ああ、清水くん！　そうだったわね！　こちらこそ、いつも舞がお世話になってます」

私は自分の母親を横目で見ながら首を傾げた。

――この人……。

そういえば高校の入学式の後、母は私にこう言ったのだ。

「どう？　いい男はいた？」

あのときの母の顔は最高にニヤけていた。一体どういう母親だ、と思ったが、もしかしたら母は本気でクラスメイトの男子をチェックしていたのかもしれない。

――この人なら十分ありうる。

何しろ、母は自他共に認める面食いなのだ。実際、父は未だに会社の同僚の奥さん連中から「カッコいい」と騒がれるような容姿だったりする。母は父のことを１００パーセント顔で選んだと思う。

しばし、母を白い目で見ていたが、今、この状況を考え直してみると、私は決して母をバカにはできないということに気がついた。急に背中が寒くなる。

――いや、あの、私は清水くんの顔だけを好きなわけじゃないんです！

心の中で慌てて言い訳しながら、母と清水くんを見比べた。

「二人の時間をお邪魔しちゃ悪いので、買い物してくるね。後で迎えに行くわ」

そう言うと、母はニヤニヤといやらしい笑いを浮かべてそそくさと立ち去った。

清水くんは「ふう」とため息をつく。

「あの、ごめんなさい。あんな母親で」

「いや、すごく美人なお母さんで緊張した」

「へ？」

私は拍子抜けして変な声を出してしまった。

「どこが？」

「なんか、まともに顔を見ることができなかった」

そう言った清水くんの顔は本当に少し赤らんでいて、私はものすごく複雑な気分になっていた。

――どうせ、私は両親のいいところをもらってきませんでしたよっ！

こういうことを思うのはひねくれていてバカなことだとわかってはいるのだが、私以外の家族は他人から容姿を褒められることが半端ではなく多いのだ。いじけたくもなる。

「やっぱり舞のお母さんだよね」

「どういう意味？」

清水くんは私の刺々しい言い方にビクッと肩を震わせた。

「だって、似てるよ。舞もきっとあんなふうに若いお母さんになるんだね」

なぜかとても感心したように清水くんはしみじみと言う。

――若いお母さん、ねぇ……。

来年のこともわからない私に、そんな先のことなど想像もできな

いけど、いつかは誰かと結婚して母親になるのかもしれない。

——誰と？

そう考えながら清水くんを見ると、彼も私を見てにっこりした。

「見てみたいな」

「え？」

「大人になっても、舞と……」

——ええーっ！？

清水くんは言葉の途中で視線を外してフッと笑う。それからジーンズのポケットに手を突っ込んでくるりと後ろを向いた。

——ちょ、ちょっと、その、言いかけてやめるのはナシで！

続きを聞きたくて仕方がないが、そんな私の気持ちなど知るはずもなく、清水くんはゆっくりと歩き始める。

——えっと、でも、あの、今のは、その、なんていうか……

――大人になっても私と、って……け、け、け、結婚！？

――いやいやいや、そこまで言ってない。落ち着け、私。

清水くんの後ろを歩きながら、私の頭の中は忙しくなっていた。

だけど、思えば清水くんがこんなにはっきりと将来のことを口にしたのは初めてだ。私との将来を考えてくれたりするのだろうか。

胸がドキドキして苦しい。

幸せと不安が入り混じって、胸の奥のほうに鈍い痛みが走る。清水くんと付き合うようになってから、この痛みをたびたび感じるようになっていた。

こんな痛みが本気で私の全身を襲ったら、私はどうなってしまうのだろう。

恋がまさかこんなに痛いものだとは思わなかった。しかも近頃の私は恋する幸せとか喜びよりも、痛みばかりを感じているような気がする。

それは相手が清水くんだからなのか。カッコいい男子なんか好きになったらいけないのかも。

でも今更そんなことを思っても、もう遅い。清水くん以外の人を好きになるなんて、今の私にはたぶん無理だ。

――やっぱり顔が好きなのかな。

自分の気持ちもよくわからない。

予備校に戻った私たちは午後の英語の授業を受けた。いつもは当然という顔で清水くんの隣に座るユウが、ひっそりと一番後ろの座席に腰掛けていて、なぜか私は始終居心地が悪かった。

英語の授業が終わり、清水くんと一緒に教室を出た。今日はこの予備校の玄関で別れなくてはいけないので、二人とも自然に歩くスピードが遅くなる。

「メールするよ」

「うん」

清水くんは明るく言ってくれたが、なぜか私のほうが暗く沈んだ気持ちになっていた。従兄の家に遊びに行くだけなのに気が重い。できれば今からでもキャンセルしたい気分だ。

しかし、ロビーには母が澄ました顔で立っていて、逃げることはできそうにない。

私が清水くんと一緒に出てくるのを見て、母はまた気味が悪いくらいニコニコと笑っていた。

「清水くん、よかったら今度家に遊びに来てね」
「はい。是非伺います」
――ひぇー！
母と清水くんのやり取りを複雑な気分で聞きながら、清水くんと玄関で別れた。母は鼻歌でも歌いだしそうなくらいご機嫌だった。
「舞ちゃんったら、やるわね」
「何のこと？」
「清水くん。超イケメンでしょ。どうやって仲良くなったの？」
自分の母親が「ちょー」とか言うのを聞くと、こっちが恥ずかしいのだけど、とりあえずその部分は無視した。
「たまたま隣の席になっただけ」
「ああ！　やっぱり隣の席の男の子だったわけね」
母は納得顔で頷いている。私もやっぱり母は覚えていたんだな、と思った。清水くんの隣の席になってすぐ、男性も香水をするのか、と聞いたら母は「好きな男の子ができたの？」なんて言ってきたのだ。
――いや、あのときはまだ好きとかそういう状態じゃないし。
心の中でぶつぶつ言いながら、しばらく母の隣を歩いた。地下鉄

の駅に到着して、階段を下りる。地下に向かっていく感じが自分の心とシンクロして、ますます暗い気分になった。

地下鉄を降りて、少し歩くと従兄の家が見えてきた。玄関には「猛犬注意」のステッカーが貼ってある。そういえばあの家には昔から大型犬がいるのだ。

私の家でも犬を飼っていたことがあるのだが、父が捨てられていた犬を拾ってきたとか、母が知人から子犬の引き取り手を頼まれたとかで、私は雑種の犬しか知らない。

「こんにちは、お邪魔します」

と、開いたドアの隙間から母は元気な声で挨拶する。私も後ろから「こんにちは」と声を出した。

「いらっしゃい。上がって、上がって」

諒一兄ちゃんの母親である伯母が、かわいらしいエプロン姿で出迎えてくれた。その足元では賢そうな顔をした大型犬が、興味津々という目で私と母を見ている。

ええと、なんだったかな、このワンコ。

猛犬なんて言ったら失礼なくらいよく躾けられた犬で、下手をすると私よりも身の程ををわきまえているかもしれない。

そのワンコの後からリビングルームへ入ると、二階から誰かが階段を降りてくる音がした。足音の大きさからして、諒一兄ちゃんのようだ。

「いらっしゃい」

――うわぁぁぁ！　やっぱりいたーーーっ！

私は頬を引き攣らせながら「お邪魔します」と小声で返事をする。

諒一兄ちゃんはにっこりと笑った。

諒一兄ちゃんも大学生だし、大学生ともなると帰省しているとはいえ、ずっと実家にこもっているようなことはないだろう、いや、むしろお友達と遊びに行っていてほしい、という私の甘い予測と切実な願望はあっさりと裏切られた。

――アレだ、きっと諒一兄ちゃんはマザコンに違いない。

ソファに腰を落ち着けた私は、伯母が目の前に置いてくれたお茶とお菓子を眺めながら密かに思う。

伯母と私の母が近況を報告し合っているのを静かに聞いていると、私の隣にワンコがやって来た。おそるおそる近づいてきて、くんくんと匂いを嗅ぐ。じっとしていると、ワンコは急に諒一兄ちゃんの足元へと去った。

それを目で追って、顔を上げたら、諒一兄ちゃんと目が合った。

何だか気まずい。

「舞、二階に行かない？」

「えっ！？」

諒一兄ちゃんは涼しい顔で言った。

私は慌てて目の前のお菓子を見る。

――まだこの美味しそうなお菓子をいただいてませんが！

そこに笑いを含んだ声が聞こえてきた。

「お菓子、持ってきてもいいよ」

私は激しく頭を左右に振った。それじゃあまるで私が子どもみたいだ。恥ずかしくて下を向いていると、伯母のとりなすような柔らかい声がした。

「オバさんたちの話はつまらないでしょ？　二階の真奈美の部屋にマンガがそのままいっぱい置いてあるから、見てきたら？」

真奈美（まなみ）姉ちゃんは諒一兄ちゃんの姉だ。彼女は結婚して実家にはいない。

諒一兄ちゃんが立ち上がる。ワンコもほぼ同時に立ち上がって尻尾を振った。

「舞、行くよ」

一瞬、諒一兄ちゃんとワンコを見比べて、それから伯母と母に視

線を移す。誰もが目で私に「二階に行け」と訴えていた。

「では、ちょっと行ってきます」

仕方なく私も立ち上がった。

――まずい。これは非常にまずい展開だ。

階段を上りながら、私はそわそわしていた。これが幼い頃なら探検みたいで楽しくてわくわくしていただろうが、今の私はつまらなくても伯母と母の話を聞いていたいと思う。

諒一兄ちゃんは真奈美姉ちゃんの部屋のドアを開けた。

「うわぁ！」

思わず声を上げる。

何しろ壁には隙間がないくらい本棚が並べられ、その棚には上から下までマンガ、マンガ、マンガ、更にマンガ！　それも真奈美姉ちゃんの時代のマンガだから、少し古いタイトルばかりだ。

「けっこうすごいでしょ」

「すごいっていうか、ここまでくるともうマンガの図書館だね」

諒一兄ちゃんはクスッと笑って「何か読む？」と聞いてきた。とりあえず部屋全体を眺め回して、どうしようかと考える。

「うーん、何が面白いかな」

「舞ってマンガ読むの？」

本棚に手を伸ばして、それから諒一兄ちゃんは振り返った。まともに見つめられると、私は急に息苦しくなる。

「今はあんまり読んでない」

「そっか。マンガもいろいろあるよ。文学作品に近いものもある」

「うん。……って、諒一兄ちゃんもマンガ読むの？」

どう見ても少女マンガの比率が高い真奈美姉ちゃんの本棚をきょろきょろと見渡して言うと、諒一兄ちゃんはさらりと言った。

「俺の部屋にもあるけど、見る？」

――ひぇーーーっ！

――失敗！　失敗でした、今の質問。もう一回やり直しさせてください。

というわけにもいかないので、私は「アハハ」と不気味な乾いた笑いで誤魔化しつつ、適当に近くのマンガを手に取ってみた。

すると私のそばにワンコが寄って来た。

「あの、このワンちゃん、なんて名前だっけ？」

「ミッキー」

「あ、そういえばミッキーでした」

ミッキーは私に対する警戒心を解いたのか、しきりに私の足に鼻をくっつけたり、私の周りをぐるぐる回ったり、かまってほしい様子だ。私もおそるおそるミッキーの頭を撫でてみた。

毛が意外と硬い。でもミッキーは気持ち良さそうに少し目を細めた。

この愛嬌のある顔はなんていう種類だったかな、と私は首を捻る。それこそマンガで有名になった犬のはず。

「ミッキーは何犬って言うの？」

「シベリアン・ハスキーだよ」

そうだ！　私の頭の中で電球がパッと明るくなった。とても賢い犬なんだよね。実際ミッキーは私の顔の表情をじっと観察して、何かを考えているようだ。

「ミッキー、おいで」

諒一兄ちゃんが私に一歩近づいて、そこに腰を落ち着けた。ドキッとしたが、避けることもできず、ミッキーが尻尾を振って諒一兄ちゃんに飛び掛っていくのを茫然と見る。

ひとしきり諒一兄ちゃんにかまってもらうとミッキーは満足したのか、彼の隣にうずくまった。頭を撫でてもらいながら気持ち良さそうに目を細くする。

「舞はどこの大学を志望してるの？」

一人だけ突っ立っているのも変なので、私はゆっくりとその場に座った。

「一応H大だけど、今のままだとちょっと厳しいかな、というところ」

「へぇ。それで予備校通い？」

「うん。諒一兄ちゃんみたいに頭良くないから」

「彼もH大なの？」

私はハッとして諒一兄ちゃんの顔を見る。穏やかに微笑んだままで、特別な感情は見られない。安心して私も笑った。

「まだ悩んでるみたい」

「へぇ。悩むようなタイプには見えなかったけど」

皮肉っぽく言うので、私はヒヤッとしたけど、清水くんのためにもここは聞き流すべきだろうと思う。黙っていると諒一兄ちゃんがまた口を開いた。

「彼も文学部？」

私は首を横に振った。

「彼は理系だよ。最初聞いたときは数学をやりたいって言ってたけど、今はなんか急に医学部も考えてるとか、よくわかんないけど迷ってるらしくて。彼のお父さんが歯医者さんだから歯学部っていうならまだ納得するんだけど、なんで医学部なのかは不明」

相手が諒一兄ちゃんなのに、不満たらたらな言い方をしてしまう。だって清水くんの悩みが私にとっては唐突で不可解すぎるから、それを言い始めるとどうしても愚痴っぽくなってしまうのだ。

「医学部ねぇ」

諒一兄ちゃんは寝入ってしまったミッキーを眺める。

「彼は舞より偏差値が高いんだ？　ちょっと意外だったな」

「清水くんは私なんかとはレベルが違うの」

「へぇ」

その返事はどうでもいいといった感じに聞こえた。実際、諒一兄ちゃんは興味がないという顔で本棚のマンガ本の背表紙を見ている。

嫌な間が訪れた。

困った私は手に持っていたマンガをパラパラとめくる。読もうと思っても、全く集中できない。ただ手持ち無沙汰にページをめくるという動作をしているだけだ。

「舞。N大を目指さない？」

私の手がピタリと止まった。同時にパラパラという音も止む。

「N大？　無理だよ。H大だって厳しいのに」

諒一兄ちゃんは不思議そうに首を傾げた。

「まだ二年生なのに、無理だと決めつけるのは早いよ。それに目標があれば頑張れるだろ？」

「目標？」

「そう。例えば……」

不意に諒一兄ちゃんが動いた。私は驚いてその場に固まってしまう。

「い……やっ！」

気がついたときには諒一兄ちゃんの顔が私の真正面に、前髪が触れそうなくらい接近していた。左肩を強く掴まれていて逃げることができない。

反射的に私は身体を後ろにのけぞらせて、口に手をあてがった。
真奈美姉ちゃんの部屋はドアが開けっ放しだ。一応、階下の母と伯母を気にして声は潜めたつもりだが、もしかしたら聞こえたかもしれない。
諒一兄ちゃんはそのまま私を非難するような目つきをした。
「傷つくな。アイツはよくて、俺はダメなんだ？」
「だ、だって、な、何をする気？」
この状況でこんなことを聞く私はかなり間抜けだと思ったが、とにかく時間を稼いで話を逸らさなければならない。
それにしてはまた質問を間違えた、と思ったが、頭が真っ白で他に何も考えられなかった。
諒一兄ちゃんの顔がフッと優しくなった。
「キス」
私は口に手を当てたまま、小刻みに首を振る。
今度は悲しそうな目で見つめられる。

「俺とはできない？」

「だって、私、清水くんともまだ……」

目の前の諒一兄ちゃんの大きな目は更に大きく見開かれた。

「してない？」

「うん……」

急に諒一兄ちゃんは私を解放してミッキーの隣に座り直した。そして腕組みをすると、ふぅと大きく息をつく。

「まいったな」

体勢を立て直した私は、諒一兄ちゃんを見つめたまま、少しだけ首を傾げた。

「ごめん。びっくりしたよね。怖かった？」

そう言う諒一兄ちゃんはいつもの「従兄」の顔をしていた。私はまだ直前の出来事がよく理解できなくて目をパチクリとさせる。

「怖いっていうか驚いた」

「まさかまだ……とはね」

からかうような調子さえ感じられる声に、私の胸には杭のような太いものがドスッと突き刺さる錯覚が起きた。

――「まだ」ですみませんね！　おでことかほっぺとかだったら、あるんですけどね！

そんなことを言ったところでどうにもならないので、諒一兄ちゃんを軽く睨むだけにしておいた。

でも、諒一兄ちゃんは私の顔を見ようとはせず、自嘲気味に微笑んだだけだった。

気がつくとミッキーの寝息が部屋の中に一際大きく響いている。それを聞いていると、私まで吸い込まれそうな気がして笑いたくなったが、そういう雰囲気でもなく、必死になって笑いを噛み殺していた。

それからしばらくして、急に諒一兄ちゃんが立ち上がった。ビクッと肩が震えたが、そんな私を諒一兄ちゃんは優しく見下ろす。

「『少し見直した』って、アイツに言っておいて」

私は部屋を出て行く従兄の背中を黙って見送った。

清水くんの心配が現実になったことに気がついたのは、諒一兄ち

ゃんが出て行ってからのことだ。私は今更だが、自分の認識が甘すぎたことを反省していた。

――だけど、まさか諒一兄ちゃんが私を？

正直なところ、こんなことが起こってもまだ信じられないでいる。

本当なら喜ぶべき場面なのかもしれない。従兄というひいき目を差し引いても、諒一兄ちゃんはカッコいいし、頭も良くて、優しくて、憧れの人だ。

だけど、それが恋愛感情かと訊かれると、果てしなく否といわざるを得ない。

そもそもそんな対象として考えたことがなかったのだ。従兄は従兄。それは諒一兄ちゃんも同じだと、ほんのさっきまで信じて疑わなかったのだから。

――ど、どうするの、私？

――どうしたらいいの？　助けて、清水くん！

その晩、私は母の布団に自分の布団をこれでもかというくらい密着させて寝た。母は変な顔をしたけれども、特に気にする様子もなかったので、私は安心して身を横たえた。

勿論、これ以上諒一兄ちゃんがおかしなことを考えるはずはないし、母と一緒なのだから絶対大丈夫なのだけど、それでもこうしなければ私の気が済まなかったのだ。

夏期講習の終わりにこんな落とし穴があると、誰が予想できただろう。

なかなか寝付けないので、母が眠っているのを確かめてから、そっと布団から這い出してケータイを見る。

清水くんからメールが来ていた。今日はまた親戚が集まって宴会をしている、と書いてある。私は彼の迷惑そうな顔を思い浮かべて、心の底からホッとした。

「女好きなんて言ってごめんね」

メールを送信すると、母が寝返りをうった。私は慌ててケータイをしまい、布団に戻る。

――早く会いたいよ。

清水くん、清水くん、清水くん……。呪文のように胸の中でつぶやいた。

これがざわざわと落ち着かない心を宥める唯一の方法のような気がした。

皮肉なことに私は、他の人のことなど考えられないくらい、清水くんのことを好きになっていた自分に今、気がついたのだった。

## 34

お盆を過ぎると北国の夏は終わったも同然だ。朝晩はひんやりとした秋の風が吹く。

俺の住むT市は太平洋に面して広がる街だ。漁港だけでなくフェリーターミナルもある。しかし街の基幹産業は漁業ではない。市街地に隣接する形で製紙工場が異様な存在感をアピールしているのだが、実際はこの企業の恩恵で我が街は成り立っている。

その製紙工場の巨大な煙突から吐き出される煙は、真上に伸び、空の雲と同化していくように見えた。

実は幼い頃、まだ純粋な心をもった少年だった俺は、あの赤白のボーダーにペイントされた煙突が雲を生産しているのだと信じていた。だから工場が休みの日は空に雲がないと勝手に思い込み、雲が空全体を覆うような日は工場に「作りすぎですよ」と電話したほうがいいのではないかと真剣に悩んだ。

そんな純粋な少年も順調に育ち、今では高校二年生だ。

そして純粋な少年だった俺らしく、とても純粋な恋愛中。

俺は思い切り首を傾ける。

――これでいいのか？

首を捻ったまま、世界を横から眺めるが、何の変化もない。

しかも教室の壁にかかっている時計はちょうど8時。少なくとも、あと20分経たないと舞は登校してこない。

仕方なく作業を再開する。

柱になる材木に釘を打ち、玄関を作っているのだ。

横を見ると、親友の田中弘樹はタオルを捻り鉢巻にし、口に釘をくわえて金槌を振るっている。当然、制服のYシャツは脱いでランニング姿だ。

――うん、将来は立派な大工になれそうだな。

「これ、屋根をつけるんだろ？　そしたら下のほうに支えるものがないと倒れるんじゃねぇの？」

田中が口にくわえていた釘を打ちつけながら、俺に向かって口を開く。

「お前、ちゃんと設計図見たのか？」

やはり田中は大工に向いていない、と思いながら設計図を田中のほうへ放った。

「ああ、そっか。それにしても、清水って5教科だけじゃなく、技術とかも得意だよなぁ。すげぇな。お前、将来絶対いい旦那さんになるって」

「いい旦那さん？　どこからそういう発想が？」

「いやほら、『ダーリン、この植木鉢を載せる花台作って』『よし、俺に任せておけ』……そして３０分後、『できたぞ、ハニー』『まぁ、ダーリンったら、ス・テ・キ！　チュッ』って感じ？」

――ダーリン？　……ハニー？

両腕に鳥肌が立つ。田中の脳内はハニーからキスをしてもらう妄想のところで止まったままのようだ。斜め上の天井付近を溶けそうな目で見つめている。

バカバカしいにもほどがある。

俺は別世界へ旅立った田中を放置して、今度は材木を切る作業に移った。

何を隠そう、我が学園の学園祭が二週間後に迫っているのだ。

夏休み明けの二週間後に学園祭というのは、スケジュール的にはギリギリで、クオリティを重視すると完成しない場合がある。ここはいかに手を抜き、それでいてゴージャスに仕上げることができるか、というのが各クラス、腕の見せ所なのだ。

まぁ、そんなことはどうでもいい。

……と言いたいところだが、実は我が学園の学園祭は市内で一番面白いと評判があり、毎年断トツの来客数を誇っていた。

だから絶対に手を抜くわけにはいかない。他のヤツはどうだか知らないが、とにかく俺のプライドが手抜きを許さないのだ。

ウチの学園祭が面白い理由の一つは、学園祭の出しものは全て生徒たちの手で立案・企画されているということだろうか。

学園祭実行委員会には当然顧問の教員もついているが、我が学園は歴史も古く、自主自立の精神に基づいて、代々生徒会や部活動、そして学内の行事は全て生徒主体で運営されている。

そして5月のゴールデンウィークが終わると、この学園祭実行委員会より各クラスへ学園祭に関する議題がおろされ、内容検討がスタートするのだ。

6月には各クラスより企画書を提出し、実行委員会にて審査が行われる。これがかなり本格的で、もし「フランクフルト屋」を希望するクラスが競合した場合、より具体的で独創性のある企画を提出したクラスが権利を得るといった具合だ。

大抵の場合、3学年が人気のある企画を勝ち得るものだが、企画力のある人間が揃っていると2学年のほうが強いことがある。1・2学年の間はクラス替えがない。つまり団結力は2学年が一番勝っているということだ。

そういう事情もあり、我がクラスは毎年学内で人気の高い「お化け屋敷」を希望し、強敵の3学年を綿密な企画書で退け、権利を勝ち取っていた。勿論、企画書のほとんどを俺が書いたのだから、当然の結果と言える。

しかし、企画の内容を考えたのが例の菅原や沖野ら男子グループだ。俺はそれを企画書として見栄えよくまとめただけ。

このお化け屋敷には、一つだけ立案者のモラルを疑いたくなる箇

所がある。最初に言っておくが、俺の発案ではない。でも、お化け屋敷に入った客は、間違いなく全員「考えたヤツは男だ」と断定するはずだ。

その点だけが企画書を作成した者としては不本意だが、仕掛けとしてはまぁ悪くない。

――ま、いいや。どうせ舞が自分のクラスのお化け屋敷に客として入ることはないだろうし。

気を取り直して、材木をのこぎりで裁断した。そして田中のほうを何気なく見る。

「あーっ！　田中、それ違う！」

「ん？　何が？」

「つける場所が逆だ」

「あ？　逆……？　うおぉぉぉ！　清水、もっと早く言ってくれよ！」

田中は設計図をろくに確認せず、自分の思い込みで釘を打っているらしい。

「俺のせいじゃない」

「なんだよ、親友のクセに冷たいなぁ」

「お前がちゃんと設計図を見て作れば……」

と、俺が田中に苦言を呈している最中に、いつもと変わらぬ無表情の舞が静かに教室へ入ってきた。それを横目で眺めていると、舞の後ろをスキップでもしそうな足取りで沖野がついていく。

「高橋、どうだった？」

――どう、だった？　なんだ、それは。

「うーん。これは、設定が面白いけど、出会いが強引というか、もっと自然な流れでそれぞれが出会う形のほうが私は好きですね」

「えー、俺、全然気にならなかったなぁ」

どうやら沖野が舞にラノベの感想を訊ねているようだ。少しホッとして、いやいや、とすぐに思い直す。

「あの、私は一応女子なので、男の子向けっぽいお話の萌えがいまいち理解できないんですが」

困惑気味に話す舞を見ていると、俺の足が勝手に二人のほうへ動き出した。

「沖野、しつこい男は嫌われるぞ？」

俺は舞と沖野の間に割り込み、沖野の肩に手を置いてから、ヤツの顔をわざとらしく覗き込んだ。沖野はクラスの男子の中で一番背が低い。小柄で、顔つきはわんぱく坊主そのものだ。

「別に、清水に関係ないじゃん」

沖野は迷惑そうに顎を上げる。その隙に舞が自分の鞄からカラフルな表紙の文庫本を取り出し、俺の机の上にすうっと移動させた。

「貸してくれてどうもありがとう。テスト勉強頑張りたいので、もういいです」

「あ、ああ」

あっけに取られている沖野のことなど構わず、舞は鞄を机の横にかけて、数学の教科書と参考書を開いた。

沖野は俺の机の上からラノベの文庫本をひったくるようにしてつかむと、スタスタと自分の席へ戻っていく。かわいそうな後ろ姿だ。……同情はしないけど。

そして学園祭の準備に奔走するクラスメイトを尻目に、数学の勉強に勤しむ舞を見た。

「テストの前に学園祭だけど、舞は手伝わないの？」

舞の動作がピタリと止まった。

「……私、器用じゃないので」

「器用じゃなくても仕事はあるよ。もう片付けに入るから、掃除手伝って」

舞が不安げに俺の顔を見上げる。

それを黙って見つめ返すと、観念したように舞が椅子を引いて立ち上がった。

どうもこの数日間、舞の様子がおかしい。いや、夏期講習が終わってから、急に舞の態度が変になった。

理由は考えなくても明らかだ。

――ったく、諒一の家で何があったんだ？

俺は掃除箱を開け、舞に箒とちりとりを預けた。それから材木を教室の後ろに片付け、工具をしまう。

舞が無表情で木屑を集めている。表情がないのはいつものことだが、眼鏡の奥では視線がぎこちなく揺らぎ、常に俺を窺うようにしていた。

この程度の変化は、ただのクラスメイトなら気がつかないだろうが、俺は違う。

当然、二人きりの時間に何度か問いただしてみたが、舞は困ったような顔をするだけで全く埒が明かないのだ。

俺のイライラは既に臨界点を越えていた。舞もそれには気がついているはずだ。しかし彼女の態度は頑なだった。

それに、と俺の脳内には嵐が吹き荒れる。

――放課後、学園祭の準備を手伝わないで、さっさと帰るってどういうことだ！？

これは非常にマズい傾向だと俺は思う。

そりゃ、世の中にはいろいろな主義主張の人がいるのは認めるし、「学内行事に振り回されず、勉学一筋で頑張りたい」という生徒も学園内に一人くらいはいるかもしれない。

昨年の舞なら俺も「まぁ、彼女は仕方ないか」と思っただろう。というか、舞は昨年もたぶん参加してなかっただろうし、俺もそれには全く無関心だった。

舞からすれば去年がそれで通ったのだから、今年も同様に参加しなくていいだろう、などと簡単に考えているのだろう。

だが今年は、それでクラスメイトが黙っているとは思えない。

現に女子グループがひそひそと陰口を叩き始めている。ヤツらも陰湿だが、この件に関しては、舞に非があることは否めない。

朝のチャイムが鳴る。

舞は掃除を終えて席に戻った。俺も隣に座る。

担任が教室に入ってきた。開けた戸をすぐには閉めず、後ろを気遣うような視線を送っている。

ほどなく、担任の後からもう一人、真新しいスーツを着た小柄な女性が教室の戸をくぐった。

「おおおおお！」

大声を上げたのは田中だ。ヤツは立ち上がり、他の男子も互いに顔を見合わせながら歓声を上げた。女子も「えー！」とか「わー！」とか言葉にならない声を出す。

俺も思わず息を呑んだ。

――……え！？

「今日から二週間、このクラスでホームルームの実習をすることになった小原綾香（おばらあやか）先生だ。彼女はこの学園の卒業生で、現在はH大生。そして妹さんがピアノで有名な小原沙耶香（おばらさやか）さんだ。お前たちにとっては素晴らしい先輩だから、特に進路や勉強方法なども相談に乗ってくれると思う……」

――ウソだろ……！？

途中から担任の声が遠ざかり、俺は壇の下で緊張しながらも微笑を浮かべている教育実習生を食い入るように見つめていた。

――サヤカさんの姉！

田中が俺を振り返った。

「おい、清水！　ちょっ、マジで！？」

俺はあからさまに騒ぎ立てる田中を睨む。何人かのクラスメイトが「なになに？」と興味津々の顔を向けてくるが、そんなものは完全に黙殺した。

そしてもう一度前方に目を戻すと、教育実習生が俺を見て、途端に目を見開いた。

「あ……」

彼女の口から小さな声が漏れた。

俺も彼女を信じられないものを見るような目で見つめていた。

――俺のこと、わかるんだ？

内心の呟きが彼女に届いたのか、驚いた顔が笑顔に変わる。俺だけに向けられたその表情に、俺の心臓は何を勘違いしたのか、勝手に忙しく動き始めた。

そして綾香さんは担任に促されて壇上に立った。

「今日から二週間お世話になります、小原綾香です。担当教科は英

語です。どうぞよろしくお願いします」

声が昔付き合っていたサヤカさんに似ていて、俺の心にヒヤリとした冷たいものが滑り込んできた。

ただ、ありがたいことに姉の綾香さんは、サヤカさんとタイプが違う。サヤカさんは見た目からして明るく、例えるならテレビのお天気お姉さんタイプなのだが、綾香さんは可憐な印象の美人だった。例えるなら将来は大女優というところか。

しかしさすがは姉妹だ。笑うとよく似ている。

気がつけば、彼女の挙動から目が離せなくなっていた。

サヤカさんと付き合っていた当時、姉の綾香さんは話に聞くだけの人だった。俺は勝手に冷たい表情をした近寄りがたい女性を思い浮かべていたのだ。

それが、実物を目の当たりにして、その思い込みがとんでもない勘違いだったことを痛感していた。

――めちゃくちゃかわいい人だ！

美人で頭もいいのに、サヤカさんよりもほっそりとして頼りない感じがある。サヤカさんは自分の姉を「言うことが厳しくて怖い」と評していたが、黒板の前に立つ綾香さんはひたすら笑顔のかわいいお姉さんだ。

男子は言うまでもないが、女子にも人気が出そうなタイプだと、緊張気味の綾香さんの頬を見て思う。

――これは大変なことになるぞ。

クラス中が熱狂していた。しかも担任まで、いつもよりデレッとした顔になっている。

俺の胸も不必要に高鳴っていた。

――いや、俺には舞というかわいい彼女がいるから……。

浮き足立つ心を静めようとして、ハッとした。

おそるおそる隣を見る。

途端に冷や水を浴びせられたような感覚が全身を走り、背筋を伸ばさずにはいられなかった。

舞がじっと俺を見ていた。

眼鏡の奥では、俺の心の真実を確かめようとするかのごとく、瞳をこらしている。

何もやましいことなどないはずの俺の心臓がドキッと音を立てた。

いつの間にかホームルームが終わり、田中が俺の横でうるさく喋っているが、ほとんど耳に入ってこない。

黒板の前にはもう綾香さんの姿はなく、隣の舞は授業の準備をするために鞄の中を探っている。

夏が終わっていく――。

開け放たれた窓から見える空はどこまでも高く、ひんやりとした風は秋の匂いがする。だが、季節の変わり目の爽やかな空気に、嵐がやってくる気配を感じた朝だった。

## 35

小説の中にはよく「美人」が登場する。

誰が決めたのかは知らないが、ヒロインが美人というのはほぼお約束で、ライバルも系統は違えど美人だったりして、物語の世界では美人しか生きることが許されていないんじゃないか、と思うことさえある。

でも不思議なことに物語を読み進めていくうち、そのヒロインにどっぷり感情移入し、素敵なヒーローに愛されるのが自分だとうっかり勘違いまでして、最後のページを読み終える頃にはすっかり「絶世の美女」気取りの私がいたりする。

――勿論、脳内での話ですよ？

本を閉じて、鏡を見た瞬間、あっけなく魔法は解けてしまう。

現実世界では魔法が解けてしまうから、また物語の世界へ旅立ちたいと思うのかもしれない。

そうして本の中に旅することをどれくらい繰り返してきたのだろう。おかげで私の頭の中には今まで蓄積してきた大好きな小説やマンガのヒロインたちがひしめいている。

物語のヒロインみたいな美人で性格もよい女の子が現実に存在するとは思わないけど、そんな人に憧れるくらいは許されるだろうと思うのだ。そう考えると、私も乙女なんだなと苦笑したくなる。

だけど物語のヒロインみたいな女性が、現実に存在したらどうなるのだろう。

きっとテレビの中のアイドルが目の前に現れた瞬間のように、周囲は騒然となるはずだ。

私は頬杖をついて窓の外を見る。

ついさっき、私たちはその現場をこの教室で目撃したのだ。

――「天は二物を与えず」が当てはまらない人もいるんだよね。

そういえば、私の隣の席に座っている人がそうだった。

清水くんは容姿が美しく整っているだけでなく、成績もよく、人付き合いまで上手くこなしている。

――ま、私くらい人付き合いが苦手な人間を探すほうが難しいかもしれないけど。

ふう、と大きなため息が出た。

自分のことはよくわかっているつもりだ。

このダサい眼鏡をやめて、夏休みのようにコンタクトレンズにすれば、人並みに見えるかもしれないのだし、自分から頑張って誰か

に話しかけたらクラスの中にも友達と呼べる人ができるかもしれない。

そうすれば学校に来るのも楽しくなって、勉強だって張り切って取り組めるようになるのではないか、と。

――そうなれば私の未来は明るくバラ色じゃないか。

でも思うのは簡単だけど、実行するのは難しい。いや、きっとやってみたところで実現不可能なことなのだ。

だいたい眼鏡を外し、コンタクトレンズにしてしまったら、落ち着かなくて挙動不審になる自分の姿がありありと目に浮かぶ。

もし前の席に座るクラスメイトに勇気を出して話しかけたとしても、業務連絡のみで終了してしまうだろう。

しかも、今の私はこの学園中の女子を敵にまわしていると言っても過言ではないのだ。これは由々しき事態だと思う。

――それなのに、この男は……。

確かに、さっきこの教室に現れた教育実習生の小原綾香さんは、女子の私もうっとりしてしまうような美人で、しかも私の憧れの大学に通っているという。

そして驚くべきことに、清水くんの元彼女であるサヤカさんのお姉さんなのだ。

なんと言うか「こんな偶然ってアリ？」と大声で叫びたいような気持ちだけど、度胸がないので今のところその想いはひっそりと私の中に閉じ込めておく。

――というか、ホント「女好き」としか言いようがない。男の人ってみんなそうなの！？

まぁ、清水くん以外の男性のことまで私にはわからないが、一般的に男性の性質としてそうだとしても、彼の場合は度が過ぎると思うのだ。

百歩譲って、綾香さんに見とれてしまうのは仕方がないとしよう。

しかし、必死でアイコンタクトまで取るとか……。

そこまで行くとどうかと思う私は了見が狭いのでしょうか？　誰か教えてほしい。

そして「どういうつもりですか」と訊くのもバカバカしくて、ここで窓の外に目をやりながら鬱憤を溜め込んでいるというのが、現在の私。

――なんかもう、どうでもよくなるよね。何もかも全部……。

ふーーーっ、とさっきよりも長い長いため息が漏れる。

それにしてもあの綾香さん、いや、綾香先生は、本当に仮想の世

界から飛び出してきた女性のように、どの角度から見ても完璧だった。というか、あまりにも美しいのでまともに見ることができなかったのだ。

あの「綺麗なお姉さんオーラ」はどんなに頑張ってメイクを施そうと、普通のお姉さんでは出せないものだと思う。

差別はよくないというけれども、生まれたときからこれほど差をつけられていたら、どう足掻いても敵うわけがない。平等なんて発想は所詮理想であって、理想イコール永遠に実現不可能ということなのだな、と再確認する。

――ああ、もう！　なんか私ってものすごく嫌な人間だ！

とりあえず頭の中にはびこる荒んだ思考を蹴散らして深呼吸した。

これは俗に言うひがみという感情だ。今までも清水くんにまとわりつく女子に対して嫌悪感はあったけれども、綾香先生の場合、彼にまとわりついてもいないのに私はすっかりいじけている。

しかも朝のホームルームが始まる前に、清水くんが学園祭の手伝いをしろと言い出したのが何だか気に入らなかった。

――だって苦手なんですよ、こういうの。

もう少し私の気持ちをわかってくれてもいいのに、と思ってしまうのはわがままなのだろうか。

チャイムが鳴り、授業が始まる。少しホッとして黒板のほうを見たら、隣から視線が突き刺さってきた。右側の腕にチクチクとした痛みを感じつつも、私は徹底的に無視を決め込んでやった。

午前の授業は清水くんの力を借りなくても板書をノートに写すことができた。心の中でニンマリとし、弁当をつついていると、売店からパンを購入して隣の席のソイツが帰ってきた。

「けど、綾香さんって確か、昔はどうしようもない男と付き合ってたって噂聞いたことある」

小声だが興奮気味に話しているのは田中くんだ。彼の情報網も侮れない、と私は密かに耳をそばだてた。

清水くんは着席するやいなやパンを頬張っている。今日は焼きそばパンとポテトサラダパンらしい。

「だから何？」

「いや、今はどうなのかなって、気になるじゃん！」

「別に。気にしたところでどうにもならないし。心配すんな。高校生なんか対象外だって」

親友の夢を打ち砕くように短い言葉がテンポよく飛び出した。田中くんは水筒のお茶を飲んで反論を開始する。

「お前は知らないだろうけど、綾香さんはな、俺らの地元じゃ超有名人なんだ。綾香さんと一言会話を交わせたら死んでもいいと思ってる男がうじゃうじゃしてるんだぞ！」

「そんなわけないだろ」

焼きそばパンを食べ終わった清水くんが、牛乳パックを手に持ち、氷のような冷たい声で言った。

「……確かに、今のはちょっと大げさだった」

田中くんは気まずそうにつぶやく。

噴き出しそうになるのをこらえながら私は焼き鮭を口に運んだ。

「だけどな、綾香さんは……」

「田中、『先生』って言えよ。失礼だぞ。それに俺が聞いた話だと、先生は相当キツい性格らしい。言葉には棘があって、冷たいことを言われたらその一言で死にたくなるヤツが続出するって」

「おまっ……、それサヤカさん情報？」

一瞬、妙な沈黙があったが、清水くんは「ああ」と認めた。

「美しいものには棘があるっていうのは本当らしいぞ。気をつけろ

よ」

――は……！？

思わずブロッコリーを丸飲みしてしまった。

――その言葉、そっくり返してやりたい。

喉の奥でブロッコリーが悲鳴を上げながら食道をおりていく。私も悲鳴を上げたいが、それすらもできない。

とりあえずペットボトルのお茶を口に含んだ。

実際清水くんに文句を言いたくても、言えない事情が私にもある。

「気をつけて」

夏休み、予備校へ向かう道の途中で、清水くんは私にそう言った。

だが私はその意味がよくわかっていなかったのだ。今なら彼の忠告の意味が嫌というほどよくわかる。

――でも、あれって結局未遂だし。それに私が後ろめたく思う必要なんて全然ないし。

そうは思うものの、清水くんにあの事件を説明することがどうし

てもできない。説明しながら「でも諒一兄ちゃんが急に……」などと言い訳してしまう自分と、すかさず「だから言っただろ」と突っ込んでくる清水くんの不機嫌な顔がたやすく想像できるからだ。

ぼんやりしていると、さっさと昼食を済ませた隣の男子二名は教室を出て行った。おそらくバスケをしにいったのだろう。彼らは昼休みになるとサッカー、バスケ、バレーボールの球技を日替わりで楽しんでいる。

勿論、それはウチのクラスの男子全員というわけではない。

男子も女子と同様にグループがいくつかあるらしく、いわゆるインドア派の男子は昼休みも教室内でたむろしていた。彼らは彼らで、体育会系の男子とは違う不思議な雰囲気を醸しだしている。

その危うい感じの男子グループを何気なく観察していると、見慣れないスーツ姿の集団が廊下を通った。

「あ、小原先生、ちょっとウチのクラスに寄ってよ！」

インドア派と言えば聞こえはいいが、実質オタクで構成されたグループの男子が、廊下へ顔を出して綾香先生を呼び止めた。クセのある口調だ。

彼はオタクグループの中でも目立つ存在で、耳にピアスをつけ、割とスタイルがいい。ソイツが「チャラ男」と呼ばれていることは私も知っていた。勿論名前は知らないが――。

チャラ男は綾香先生を強引に教室内へ引っ張ってきた。

「ねぇ、先生は彼氏いんの？」

――なぜ「いるの」と言えないのか！？

チャラ男の口調に過剰反応してしまうのは、生理的に受けつけないタイプだからかもしれない。前髪が長すぎてうっとうしい。教員という職業は大変だな、と綾香先生に少し同情する。

しかし無礼なチャラ男に、綾香先生は微笑んで見せた。

「ヒミツ」

「えー！　俺、すっげぇ気になるんだけど。じゃあ、どういう男がタイプなの？」

彼は一体どうしたんだろう。これほど活き活きと話すチャラ男を見たのは初めてだった。周囲のクラスメイトも驚いた目で彼を見つめている。

「どういう……？　うーん、綺麗な顔をした人かな。あとは優しい人でお願いします」

綾香先生は怯む様子もなく、楽しそうに返事をした。その返事に先生を取り囲んでいたクラスメイトがそれぞれ歓声を上げる。

「え、じゃあ、俺とか、どう？」

はにかみながら、チャラ男は言った。

「どうって、……何が？」

――うわっ、すっとぼけっぷりが尋常じゃない。

思わず私も綾香先生の笑顔に見入ってしまう。

「いや、だから……」

チャラ男の顔が急速に赤く染まった。そしてそれ以上言葉を続けることができなくなったらしい。

綾香先生の表情がほんの少し動いた。

「そうだなぁ。とりあえずそのピアスはわざわざ学校につけてくる必要はないと思うな。似合っていても、校則違反じゃカッコ悪いでしょ」

「あっ……」

チャラ男は慌てて自分の耳を手で覆う。

それを見て綾香先生はにっこりと笑った。

「あと、授業は寝ないでちゃんと聞いてね。ホームルームも、ね？」

――うわぁ！　……これは。

こくん、とチャラ男は首を縦に振った。彼のこれほど素直な反応は誰も見たことがないのではないか。

それを見届けると綾香先生は満足そうに笑った。それからクラス

の中を見渡して、スッと出て行った。

彼女は私のこともしっかりと見たと思う。目が合った瞬間、ドキッとした。

――で、出た！　悪魔……！

そうだ。あの微笑み、たぶん間違いない。

きっと綾香先生は清水くんと同じく、心に悪魔を棲まわせている人なんだ。ということは、二人は似たもの同士ということ――？

背筋がざわざわとして落ち着かなくなってしまった。

でも綾香先生の言ったことは、教師としてチャラ男に向き合った場合、当然注意すべき事柄だ。

チャラ男を見ると、ピアスを外して手鏡で前髪を整えていた。男のクセに自前の手鏡というところがナルシストっぽいと思ってしまう私は、ちょっと考え方が古いのだろうか。

食べ終えた弁当を片付けて、トイレに行く。

個室に入ったところでガヤガヤと女子グループご一行様がやって来た。

「やー、堀内(ホリウチ)くんがあの超キレーな教生にコクって、ソッコー爆死したって！　なんかいろいろショックなんだけどー」

――堀内くん？　爆死？

何のことかよくわからないが、教生が教育実習生の略だというのは察しがつく。

「え、エミって堀内とか好きなの？」

「うん。割と好きだった」

「あんなチャラ男！　どこがいいの？　……てゆーか、あの先生、レベル高すぎじゃん。かわいすぎる！　いきなりコクるとかありえねー！」

――チャラ男……ってことは堀内というのがチャラ男の名字か。

個室内でこっそり脳にインプットした。声からすると他のクラスの女子のようだが、私にとってはありがたい噂話だ。

「でも堀内くんって、ああいうの好きなコにはたまんない魅力があると思うな。キモカッコいいみたいな？」

「キモくてカッコいいって、どっちかにしろって思わない？」

「だねー。中途半端」

「あーいいよ、皆にはわかんなくて。競争率低いほうが狙いやすいし」

「じゃ、エミは堀内で決定。修学旅行で絶対コクること！　私は……」

「菅原くんでしょ。はい、じゃあノリコは？」

「私は絶対清水くん！」

――え！？

突然、雲行きが怪しくなってきた。個室の中が暑いのもあって、背中に冷や汗が噴き出す。

「えー、私も！」

「清水くん、マジカッコいいよね。彼女とか、いてもいいから……」

「何、その沈黙」

「アイちゃんは妄想の世界にイッちゃったんだよ。しばらく帰ってこないから放っておいてあげて」

「でもあのクラス、学年で人気の男子が集まってるよね。一人くらいウチのクラスに分けてほしい」

「ホント、ホント」

そこで予鈴がなった。

バタバタと複数の足音が遠ざかり、トイレの中は急に静かになる。私はようやく個室から脱出することができた。

――「彼女とか、いてもいいから」か。

洗面台の前でため息が漏れた。ここで他のクラスの女子グループが話していたことは、彼女たちだけでなく、この学園内女子の本音なのかもしれない。

突然、動悸が激しくなった。

――私……何やってるんだろう？

ますます「好き」という気持ちがわからなくなる。

彼女たちのように私は清水くんを「好き」だと、皆の前で断言することができない気がする。それが臆病だからなのか、自信がないからなのか、本当は好きではないからなのか、自分でもよくわからない。

――でも、私、清水くんのことが……好き……ですよ？

なんだ、この「？」は。誰に訊いているんだ、誰に。

いつまでも鏡の前でボーっとしているわけにもいかない。気を取り直してトイレを出ようとしたとき、バンッとトイレのドアが開い

て、駆け込んできた女子が私にぶつかった。

「あ、ごめん」

反射的に相手がそう言った。振り返るとおさげが跳ねている。

――高梨さん？

頑なに顔を伏せていた高梨さんは、見間違えているかもしれないが、たぶん目が真っ赤だった。泣いていたのかもしれない。

気にはなったが、チャイムの音に背中を押されて、トイレを後にした。

午後一番の授業は英語だ。教室の後ろのドアから綾香先生が入ってきて、授業見学をしている。そのためか、昼休み明けの授業なのに全員の背筋がピンと伸びていた。ちなみに普段は、起きている人を探すほうが早いだろう。

爆死と報じられているチャラ男こと堀内くんは、意外にも元気で、わざとらしく後ろを向いて綾香先生に自分の耳を見せている。先生もクスッと笑って頷くと、前を向くように手をちょいちょいと振った。

隣を盗み見ると、清水くんも堀内くんのことを見ていたようだ。堀内くんが綾香先生の言うことを素直に聞いて前を向くと、つまら

なさそうな顔で頬杖をついた。

――ジェラシー、ですかねぇ？

そう思いつつも、あまり腹は立たなかった。なんだか急に、どうでもよくなってしまったのだ。

綾香先生はたぶん教師として、いや人間として、とても優れた資質の持ち主なのだと思う。彼女の美しさとか成績が優秀だとか、表面的なものに気を取られていると、その本質を見誤ってしまいそうだ。

きっと清水くんの言うとおり、綾香先生は高校生なんか相手にしないだろう。

彼女は教育実習生とはいえ、自分が指導者であることを強く自覚しているのだ。教育実習生は若くて常勤の教員よりも身近に感じるが、決して友達ではない。

堀内くんはそれをわかっているのだろうか？

もう一度彼の座席のほうを見ると、ちょうど彼が顔を上げて首を小刻みに振っているところだった。チャラ男の象徴でもある、少し明るめに染めた長い前髪が揺れて、彼の横顔がはっきりと視界に入る。

――うわっ！

不覚にも、胸がドキッとした。

男子にしては肌が白くて綺麗だった。それだけでなく形よく整えられた眉毛や鋭い目つきが、私の心の中に真っ直ぐ飛び込んできた。

――え、チャラ男って……？

いやいや、と私は瞬きして自分の考えたことを力いっぱい否定した。

――ちょっとカッコいいかも……なーんてことがあるわけない。だって、ねぇ？

と、隣をチラッと見る。すると、視線がバチッと音を立ててぶつかった。

――ひ、ひえぇ！！

胸の内側がすり減るような感覚に苛まれるが、動揺をひた隠す。

頬杖をついたまま、清水くんはほんの少し眉を寄せた。更に私の胃の辺りが絞られるようにキリキリと痛んだ。

――ええと、……ど、どうしたんでしょう？

私は眼鏡の奥で目をこれ以上ないほど大きく見開いて、隣の人にお伺いを立てた。

頬杖をやめて、シャープペンシルを握ったかと思うと、清水くんは私のノートをぐいと自分の机上へ引き寄せる。

――高梨、いないけど？

彼が書いた文字を見て、私は高梨さんの席を見た。堀内くんの顔がよく見えると思ったら、隣の高梨さんがいない。

さっきトイレに入ったきり戻って来ていないということだろうか。

――チャイムが鳴る前にトイレですれ違った……。

そうシャープペンシルを走らせると、清水くんが小声で「ふーん」と答えた。

それから私の文字の下にまた何かを書き込む。

――堀内、綾香先生に何かした？

私は堀内くんの名前を見てギョッとした。でもそれを悟られないように清水くんの綺麗な文字を見つめたまま、待てよ、と慌てて脳を稼動させる。

少し考えてから次のような言葉をノートに書いた。

――昼休み、先生にタイプを聞いてたけど、高梨さんが授業さぼ

るのと関係ある？

清水くんが私の顔を覗き込んでくる。

うわっ！　近い、近すぎます！

いくら堀内くんがちょっと綺麗な顔立ちをしていても、この人は別格だと改めて思った。

有名なケーキ屋さんのガトーショコラが堀内くんだとしたら、清水くんは職人肌のパティシエが小麦粉やココアを一切使わずに最高級のチョコレートのみで焼き上げた極上スイーツなのだ。

そもそもカッコつける必要がないんだ、この人は。坊主頭にしても、長髪にしても、それ自体を自分の魅力にしてしまうような力がある。

ここまで来ると、これはもう魔力としか言いようがない。魅力っていうのは割とどんな人にも与えられているけど、魔力となると持っている人は限られると思う。

と、清水くんの顔に見とれていたら、彼の持つシャープペンシルがさらさらと音を立てた。

――あいつら、付き合ってる。

私は「へぇ」と心の中で思った。

そして三秒後、またしても目をまんまるにして清水くんを見つめることになる。

――ウソ！

これは私の心の叫びだったが、清水くんは肩をすくめただけで、あとは私のほうを見ることもなく、黒板を眺めて考え事に耽っているようだった。

## 36

正直に言おう。今、俺は猛烈に気分が悪い。

一日の最後の授業をこんなに不愉快な気分で終えることになるとは思わなかった。

その不愉快の原因は、言うまでもない。俺の隣に座っている眼鏡女子だ。

舞が少しずつクラスメイトに興味を持ち始めたことは、俺にとっても嬉しいことではあるが、いくら広い心の持ち主の俺でも、俺以外の男に見とれるなんてことを許すわけがない。

――俺、俺って、自己主張激しいのか、俺。

とにかく、非常に面白くない。

あれから何度目かわからないが、もう一度堀内のほうへ視線を放った。「チャラ男」と呼ばれている割にこのクラスでは口数の少ない男だ。それもそのはず、高梨と付き合っているから、自慢のフットワークの軽さを披露する場面がない。

――しかし高梨もよくあんなヤツと付き合ってるよな。

チャラ男こと堀内は、高梨と付き合い始めるまで、学年でちょっとかわいいと噂される女子に片っ端から声を掛けていた。俺の目算では、当時の勝率は五分というところか。細身で案外整った顔だから、女子に毛嫌いされるようなタイプではない。

だが、彼女がいてもかわいい女の子を見つけるとすぐにちょっかいを出すから、付き合いが長く続いたためしがない。……それも高梨と付き合い始めるまでは、の話だが。

俺が思うに、高梨はとんでもない女だ。

まず彼女はこのクラス内の女子グループの枠を超越した存在である。一応、西こずえたちとは別のグループに所属しているようだが、西グループのメンバーとも仲がいい。舞のようにグループからはみ出している女子とも交流を持っている。

結束の緩い男子のグループなら比較的高梨のような立場の人間は多いのだが、女子グループは基本的にそこまで融通の利かないものだ。グループ内におさまりきらず、あちこちでいい顔をしていれば爪弾きに合う。

しかし高梨のすごいところは、決して「いい顔」をして歩いているわけじゃないということに尽きる。彼女は誰かに気に入られようだとか、取り入ろうとは一切考えていないのだ。

――いや、「考えていないように見える」というべきか。実はアレが計算されたふるまいだとしたら、それはそれで怖いな。

そしておそらく高梨の頭の中では男女の性差に対する観念が、一般的なソレと比べて自由なのだと思われる。普通、思春期を迎えると異性に対して「恥ずかしい」という感情が芽生えるものだが、高梨はきっとその感情が薄いのだろう。

堀内と高梨が付き合いだしたのは何がきっかけだったのか、俺は

知らない。

気がつけば堀内が高梨に夢中になっていて、奔放すぎる高梨に堀内がいちいち嫉妬し、さすがのチャラ男もよそ見している暇なしに今日に至る、という感じか。

この場合、高梨の手綱さばきが絶賛されていいはずだ。ヤツらが付き合い始めて半年以上経つ。そろそろ堀内の「チャラ男」も返上していいんじゃないかと誰もが思い始めていたと思うから。

――しかし綾香さんも罪な人だな……。

俺は高梨に同情すると同時に、やっぱり高梨は堀内が好きなんだ、と変な実感を持っていた。

というのも傍観者の俺からすると、堀内の高梨に対する想いばかりが強くて、高梨が堀内を彼氏だと認識しているようには見えなかったのだ。

もしかしたら堀内の一方的な片想いなんじゃないか、と。

そのくらい高梨の態度はわかりにくかったと言える。

――まぁ、俺の隣に座っている人も高梨に匹敵するわかりにくさだけど。

だが彼氏彼女の内情ってヤツは他人には見えないものだ。当人ですら見えていない場合が多い。

結局、俺もそうなのだと思う。

夏期講習中に舞が俺を「女好き」と決めつけたのも、それまでに舞が腹の中に溜め込んでいた本音なんだろう。

――俺なんか全然マシだと思うけどな。

そもそも舞以外の女に対して誤解されるような態度をした覚えはない。

むしろ舞のほうが諒一と何かあったらしいのに、それを言わないばかりか、堀内に見とれるなんてとても許しがたい行為だ。

胸中には暴風が吹き荒れているが、表面上は何事もなかったように穏やかな態度を心がけている俺は、なんて物わかりのいい彼氏だろうか。

――しかも二人きりになったところで、舞の態度は今と全然変わらないっていうのが納得いかない。

あの高梨はどうなんだろう。堀内の前で特別に甘えたりするのだろうか。

隣の席に座る人を盗み見ると、普段と寸分違わぬ無表情を頬に貼り付けて、黒板を真っ直ぐに見つめていた。

「あのさ、今日は放課後残ってほしいんだけど」

帰りのホームルームが終わる寸前、俺は誰にも気づかれないように細心の注意を払いつつ、舞に囁いた。

「え、でも電車の時間が……」

「家に電話すれば大丈夫じゃない？　ケータイあるんだし」

舞は俺の提案に対して目をぱちくりとさせ、肯定とも否定ともつかない、斜めに首を振るという返答をした。

――なにそれ。

思わず俺も目を丸くした。

ガタガタと椅子や机が動く音がして、クラスメイトは一斉に立ち上がる。さようならの礼だ。俺も慌てて立ち上がった。黒板の前には綾香先生の姿も見える。

「清水！　掃除が終わり次第、職員室に来なさい。学校祭の企画書の件で修正してもらいたい部分がある」

礼が終わった後、担任は俺に向かって大声を張り上げた。仕方なく「はい」と返事をした。

すっかり企画書担当と見なされているのは納得行かないが、企画書の内容を熟知しているのは俺しかいない。たぶん他のヤツが担任から指示を受けたところで、内容を正確に理解できるとは思えなかった。

箒を動かしながら舞の動向を探る。

――鞄はあるけど、どこ行った！？

しばらくすると舞は高梨とともに教室へ戻って来た。

高梨は最後の授業には席に着いていたが、完全に机の上に突っ伏していた。先生に注意を受けると「具合が悪いけれども授業は聞いている」と堂々と言い訳をし、それがなぜか簡単に許された。確かに顔面蒼白な上、目の周りだけが激しく腫れ、彼女がついさっきまで泣いていたということは誰の目にも明らかだった。

その高梨も少しは元気が出たのだろうか。舞を引っ張るようにして廊下へ出て行った。

――おいおい、どこへ連れて行く。

掃除当番の任務を遂行しつつ、さりげなく二人の行き先を探ろうとしたが、廊下にはもう舞と高梨の姿は見当たらなかった。

舞が高梨と連れ立ってどこに消えたのか、そればかりを気にしながら俺は職員室に向かった。

常に開け放たれたままの職員室のドアを形式的にノックして「失礼します」と小声で言った。戸口付近には誰もいないし、大声を張り上げても返事をしてくれる人はいない。

スタスタと目的地へ向かって進んでいくと、担任の机がある島に綾香先生の姿が見えた。

綾香先生は背筋をピンと伸ばして、真剣な表情で指導教員の話を聞いている。どこから見ても隙のない美しさだな、と思った。

そこに教頭が近づいてきた。

黒縁眼鏡をかけて、いかにも堅物そうな教頭は、綾香先生の前で立ち止まる。そして不意ににこやかな顔で話しかけると、彼女にせんべいの小袋を差し出した。

――え？

俺は自分の目を疑った。

――なんなんだ。教頭って暇なのか！？

対する綾香先生は恐縮しながらそのせんべいを受け取った。

なんというか、見ている俺まで心が洗われるような光景だ。これがせんべいでなければもっと美しいのに。心の中で教頭に向かって「もっとシャレたお菓子を渡せ」と叫ぶ。

「おい、清水。聞いていたのか？」

突然至近距離で担任の声がした。

「聞いていましたよ。消防からのお達しで照明付近の装飾は禁止」

「ふむ」

二の句が告げなくなった担任を密かに見下ろした。聖徳太子とまでは行かなくても、綾香先生を眺めながら担任の話を聞くことなど、俺には造作のないこと。ついでに言えば、脳内では舞と高梨が行きそうな場所を考えている。

綾香先生の様子をもう少し見ていたい気分だったが、用が済んだので職員室を後にした。

教室に戻ると室内は学校祭準備で活気に満ちていた。授業中は精気を失った抜け殻状態のクラスメイトたちが、息を吹き返したように忙しく働いている。

俺はリーダー格の菅原たちを呼んで、担任からの指示を伝えた。それから田中の作業を手伝おうと机の間を歩いていると、いきなり後ろから制服が引っ張られた。

振り向くと、しかめ面の堀内が俺を見上げていた。

「悪いな。清水にも迷惑かけてるみたいで」

「お前、何やってんだよ」

「マジに受け取らなくてもいいのに。アイツ、最近ちょっと情緒不安定なんだ」

「ふーん」

俺は急に気恥ずかしくなった。堀内と高梨の間にのみ存在する何かがチラッと見えた気がしたのだ。

「それで高梨はどこに行った？」

「たぶん図書室。でも少し放っておいてやってよ。話が終わったら教室に帰ってくるからさ」

堀内は自分の前髪を弄る。俺よりも数倍落ち着かない様子だ。

「わかった」

俺がそう答えると堀内は細い目を更に細くして笑った。いつものへらへらした笑い方ではなく、どこか心もとない笑顔を一瞬だけ見せたのだ。そしてすぐに前髪で表情を隠す。

堀内の席から離れ、田中が企画書と睨み合っている場所に到着したが、そこで俺は金槌を持ったまましばらくぼんやりしていた。

「清水、なんかあった？」

田中が不思議そうにこちらを見ている。

「なんでもない」

「あ、そう」

何の疑問も持たずにあっさりと作業に戻る田中の様子を眺めていると、開け放たれた戸口に女子二名が現れた。俺は反射的にそっちを見る。

――舞……！？

予想通り舞と高梨が並んで戻って教室へ帰ってきた。驚いたことに、高梨が比較的元気になっているのに、今度は舞の顔が青白く精彩を欠いている。

――どうなってんだよ！？

これは何かあったな、と直感が訴えるものの、クラスメイトがほぼ全員揃っている教室内では尋問することもかなわない。

だから俺は仕方なく作業に専念するふりをしながら、密かに舞の様子を観察し続けることにした。

そしてようやく待ちに待った下校時間がやって来た。

ちなみに舞はその後高梨によって強制的に学校祭準備を手伝う羽目になった。

舞がおろおろしているうちに、ベニヤ板を刷毛でひたすら真っ黒に塗りつぶす仕事が割り当てられた。これはお化け屋敷の外壁にあたる廊下部分に貼り付ける予定で、一部には人魂が浮遊するイラストなんかが描かれている。

人影の少ない駅までの道のりで、舞は真っ黒になった自分の手に

驚き、それから恥ずかしそうに隠した。その仕草をかわいいと思いながら俺は自転車を押す。

「それで高梨とは何を話した？」

暗い夜道というのはそれだけでドキドキ感がアップする。やはりこれからは毎日学校祭準備を手伝わせよう。

「え……、何と言えばいいのかわからないのですが」

また舞の言葉が丁寧語になっている。俺は怪訝な面持ちで舞の表情を探った。

舞は俺と目が合うと、見てはいけないものを見たかのように、パッと目を逸らす。些細なことだが、俺は結構傷ついた。

「俺には言えないようなこと？」

「あ、あの……というか、実は私もよくわかっていないのですが」

まどろっこしいな。だが俺は次の言葉をじっと待った。

隣を歩いている舞が、大きく息を吸う。

次の瞬間、舞は縋るように俺を見た。

「アレが来ない、という場合のアレとは、やはりアレのことですよね？　それって……」

――は！？

「アレ……が、来ない？」

俺の脳にミサイルが投下された。舞が何を言っているのか一瞬わからなくなり、わかった後も再び脳内で過激な爆発があった。

逆に一度問題のセリフを口にして気が楽になったのか、舞は俺に同情するような目をしている。

――あ！

俺は我に返った。

「それは高梨の話？」

「あの……まだわからない、ということですし、私にだけ話してくれたことのようなので、絶対に口外しないでほしいのですが」

「誰にも言えるわけない」

「あ、あの……」

舞は俺に言ってしまったことを後悔しているのか、しきりに指で唇を擦り始めた。

非難するつもりはないのだが、事の重大さにさすがの俺も動揺していたのだ。

――俺を信用してくれたのは嬉しかったんだけどね。

しかし、なんということだ。

――堀内！　お前、何やってんだよ！

心の中でチャラ男を思い切り罵った。

そりゃ高梨が情緒不安定になるのは当然だろ。しかもそんなときに綾香先生にちょっかい出すとか、どうかしてる。

「もし、アレが来なかったら、……どうなるんですか？」

舞が泣きそうな表情で言った。

「まぁ、どうにもならないだろうね。まず産むか、産まないかを決めて、でもいずれにしろ高梨は今までどおり通学するのは無理だろうな」

「そ、そんな！　どうしよう……」

その答えを俺に求められても困るのだが、実際世の中にはそうい

う事例がないわけではない。一般的には妊娠・出産は慶事であるにもかかわらず、この国で高校以下の学生が妊娠するということは禁忌なのだ。

そして産むにしろ産まないにしろ、世間からは白い目で見られてしまう。残念ながら一度貼られたレッテルは簡単に剥がすことができない。それが現実というものだ。

考え込むように舞は唇をギュッと噛み締めて下を向いた。

俺までいたたまれない気持ちになる。堀内と高梨に同情するわけではないが、これって高校生カップルのほとんどがぶち当たる壁の一つじゃないだろうか。

――つーか、これがもし俺たちの問題だったら、どうする！？

考えたくはないが、考えずにはいられなかった。

この先も舞との付き合いが続いていけば、少なくとも俺は、この問題を無視できないだろうと思うのだ。

しかし高校生の俺たちにはとてつもなく重い問題だ。……それまでの行為が簡単にできてしまう割には。

そうだ。急にいいことを思いついた。

「綾香先生に相談してみたら？」

「え！？」

舞は上目遣いで俺を見る。あ、その顔、何か勘繰っているね？

「だって担任には無理でしょ。高梨は誰にも言えなくて悩んでる。でも舞じゃアドバイスは難しい。となれば綾香先生は適任だと思うけど。経験も豊富だろうし」

「け、経験も豊富……」

舞の顔が赤くなるのを苦笑しながら眺めた。

「舞が言えないなら、俺が綾香先生に聞いてみるよ。かなり恥ずかしいけど」

「……いいえ。それくらいのこと、私にだってできます！」

キッと厳しい視線で俺を見据えた舞は、何だか頼もしかった。さっき泣きそうな顔をしていたのは誰だよ。

――でも、それってジェラシー？

俺は急にしっかりとした足取りで歩き始めた舞を愛おしく思った。

諒一と何があったのかは気になるけど、今俺の隣を歩いているということは信じてもいいよね？　……舞が俺を好きだっていう気持ち。

とはいえ、近いうちに絶対聞き出すつもりだ。押してだめなら引いてみる。これが駆け引きの鉄則だろ？

それにしても、キスもまだだというのに、いきなり「アレが来ない」なんて事態を考えなければならなくなるとは、他人事とはいえ大変なことになってしまった、と暗い夜道に甘いムードのかけらもない現状を内心嘆きながら、自転車を押す俺だった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8990p/

---

HAPPY　CLOVER

2011年10月7日15時07分発行